

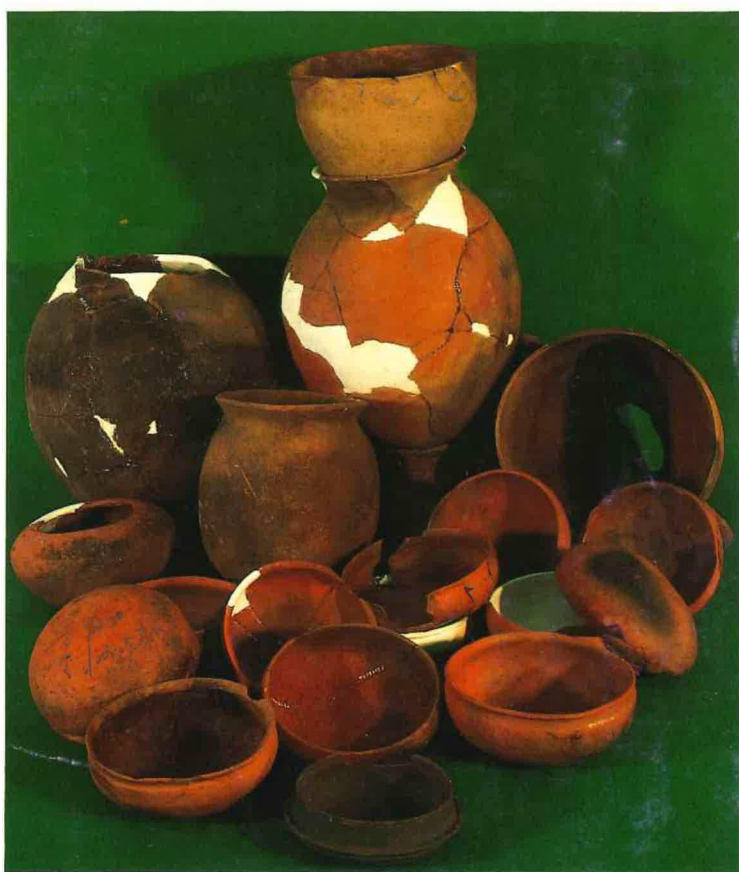
佐 知 遺 跡

一般国道212号佐知バイパス建設に伴う
埋 蔵 文 化 財 発 掘 調 査 報 告 書

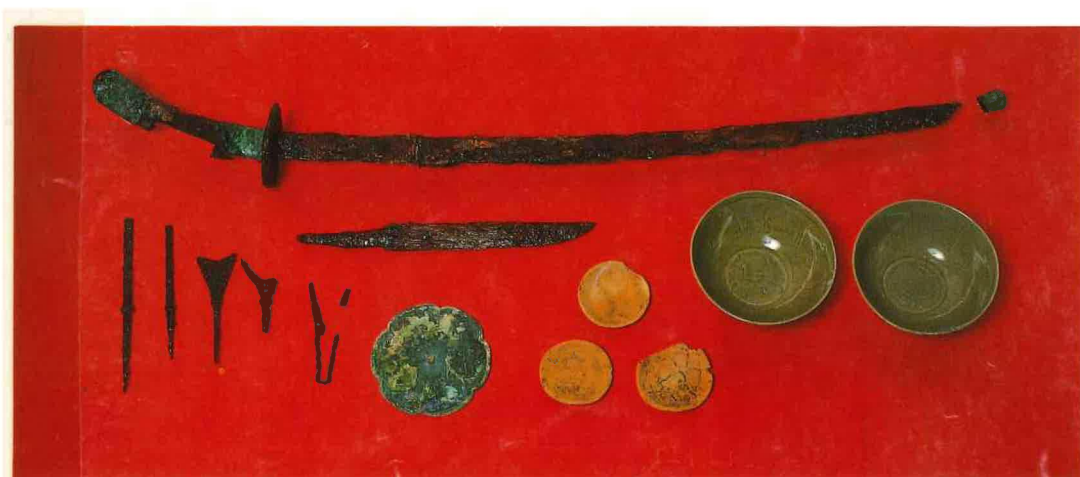
大分県文化財調査報告書
第 81 輯

1 9 8 9

大分県教育委員会



佐知遺跡11号遺構出土土器



佐知遺跡17号遺構出土遺物

序 文

佐知遺跡は大分県と福岡県の県境を流れる山国川の右岸、下毛郡三光村にあります。山国川は英彦山・一尺八吋山・日出生台に源を発し、中流域では耶馬溪や青の洞門などの景勝地を形成する県内有数の河川であります。この川の豊かな水量は周辺地域に多くの実りをもたらし、流域にはたくさんの先人の生活の跡が残されています。また山国川沿いの道路は九州内陸部と東九州海岸部を結ぶ主要路として古くから開かれ、現在は国道212号となっています。

このたびの発掘調査は、この国道212号の改良事業に伴うもので、遺跡は交通の要衝地に位置したことから、縄文時代から中世までの遺構や遺物を多量に検出し、多くの成果をあげることができました。

本調査報告書はこれらの成果を、記録としてまとめたものであります。本書が学術研究の資料として、また郷土の文化財や歴史の学習をする参考として多くの方々に活用いただければ幸いです。

最後に現地の発掘調査から報告書作成まで御指導・御協力いただいた調査関係者や土木建築部関係の方々に心から感謝申し上げます。

平成元年11月30日

大分県教育委員会

教育長 嶋 津 文 雄

例 言

- 1 本書は、一般国道212号バイパス工事（佐知地区）に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、大分県土木建築部の委託事業として昭和62・63・平成元年度に大分県教育委員会が実施した。
- 3 発掘調査は、大分県文化財保護審議会委員である賀川光夫（別府大学文学部）小田富士雄（福岡大学人文学部）両教授の指導のもと主として坂本嘉弘（県教育委員会文化課）がたった。
- 4 遺構の実測と写真撮影については調査担当者の坂本がたったほか、丸山啓子・猪薫（県教育委員会文化課）、藤本啓二・諸岡郁（別府大学）の協力を得た。
- 5 遺構・遺物の実測と製図については、石器を牧尾義則（県教育委員会文化課）が担当したほかは坂本がたった。また校正は吉武牧子（県教育委員会文化課）の手をわずらわせた。
- 6 本書の執筆と編集は坂本による。

目 次

第1章 はじめに	1
第1節 調査の経緯	1
1 調査の経過	1
(1) 調査に至る経過	1
(2) 試掘調査の方法と結果	2
(3) 本調査の経過	2
2 調査の体制	2
第2節 遺跡の立地と環境	4
1 地理的環境	5
2 歴史的環境	5
第2章 調査の成果	6
第1節 調査の概要	6
1 遺跡の広がり	6
2 調査した遺構と時代	6
第2節 縄文時代の調査	12
1 縄文時代後期	12
(1) 住居跡	12
1) 4号遺構	12
2) 16号遺構	30
3) 40号遺構	38
(2) 小竪穴遺構	53
1) J-1遺構	53
2) J-2遺構	53
3) J-3遺構	53
4) J-4遺構	53
5) J-5遺構	53
6) J-6遺構	54
7) J-7遺構	54
8) J-8遺構	54
(3) 各地区出土の縄文後期遺物	58

1) 土 器	58
2) 石 器	59
3) 土 偶	59
2 縄文時代晩期	85
(1) 土器片加工品	85
(2) 土 器	85
第3節 弥生時代の調査	89
1 弥生時代前期	89
(1) 土 器	89
(2) 細形銅剣	91
2 弥生時代中期	92
(1) 住居跡	92
1) 22号遺構	92
(2) 小竪穴遺構	94
1) Y-1 遺構	94
2) Y-2 遺構	94
3) Y-3 遺構	95
4) Y-4 遺構	98
5) Y-5 遺構	98
6) Y-6 遺構	99
7) Y-7 遺構	100
(3) 各地区出土の弥生中期土器	101
3 弥生時代後期	104
(1) 住居跡	104
1) 13号遺構	104
2) 18号遺構	105
3) 28号遺構	106
4) 29号遺構	108
5) 30号遺構	113
6) 39号遺構	114
(2) 小竪穴遺構	117
1) Y-8 遺構	117
(3) 各地区出土の弥生後期遺物	118

1) 土 器	118
2) 石 器	121
3) 鉄 器	122
第4節 古墳時代の調査	123
1 古墳時代前期	123
(1) 住居跡	123
1) 7号遺構	123
2) 8号遺構	123
3) 10号遺構	124
4) 14号遺構	125
5) 19号遺構	128
2 古墳時代後期	131
(1) 住居跡	131
1) 2号遺構	131
2) 11号遺構	134
3) 20号遺構	141
4) 21号遺構	143
5) 27号遺構	148
(2) 各地区出土の古墳時代後期土器	154
第5節 古代・中世の調査	157
1 遺 構	157
(1) 竪穴遺構	157
1) 1号遺構	157
2) 9号遺構	158
3) 12号遺構	160
4) 17号遺構	161
(2) 溝状遺構	167
1) 3号遺構	167
2) 5号遺構	168
3) 6号遺構	170
2 遺 物	171
(1) A-7区	171
1) 輸入陶磁器	171

2) 土師質土器	171
3) 瓦 器	171
4) 黒色土器	173
(2) 各地区出土の古代・中世遺物	173
1) 土 器	173
2) 輸入陶磁器	180
3) 土 錘	183
4) 鉄 器	184
第6節 近代の調査	185
1 遺 構	185
1) K-1 遺構	185
2) K-2 遺構	186
第3章 まとめ	187
第1節 各時代の遺構の時期	187
1 縄文時代	187
(1) 縄文時代後期	187
1) 4号遺構	187
2) 16号遺構	187
3) 40号遺構	187
4) 小竪穴遺構	188
2 弥生時代	188
(1) 弥生時代中期	188
1) 22号遺構	188
2) 小竪穴遺構	188
(2) 弥生時代後期	189
1) 13号遺構	189
2) 18号遺構	189
3) 28号遺構	189
4) 29号遺構	190
5) 30号遺構	190
6) 39号遺構	190
7) 小竪穴遺構	190
3 古墳時代	190

(1) 古墳時代前期	190
1) 7号遺構	190
2) 8号遺構	191
3) 10号遺構	191
4) 14号遺構	191
5) 19号遺構	191
(2) 古墳時代後期	191
1) 2号遺構	191
2) 11号遺構	191
3) 20号遺構	192
4) 21号遺構	192
5) 27号遺構	192
4 古代・中世	192
(1) 古代	192
1) 5号遺構	192
2) 6号遺構	192
(2) 中世	192
1) 1号遺構	192
2) 3号遺構	192
3) 9号遺構	192
4) 12号遺構	192
5) 17号遺構	193
6) A-7区遺物集中部	193
第2節 佐知遺跡をめぐる諸問題	195
1 縄文時代	195
(1) 後期	195
(2) 晩期	196
2 弥生時代	196
(1) 前期	196
(2) 中期	196
(3) 後期	197
3 古墳時代	197
(1) 前期	197

(2) 後 期	198
4 古 代	199
5 中 世	199
6 近 代	200

挿図目次

第1章 はじめに

第1図	佐知遺跡と周辺主要遺跡位置図	5
-----	----------------	---

第2章 調査の成果

第2図	佐知遺跡と周辺地形図	8
第3図	佐知遺跡遺構分布図	9～10
第4図	佐知遺跡表採遺物実測図	11
第5図	佐知遺跡4号遺構実測図	13
第6図	佐知遺跡4号遺構出土土器実測図(1)	14
第7図	佐知遺跡4号遺構出土土器実測図(2)	15
第8図	佐知遺跡4号遺構出土土器実測図(3)	16
第9図	佐知遺跡4号遺構出土土器実測図(4)	17
第10図	佐知遺跡4号遺構出土土器実測図(5)	18
第11図	佐知遺跡4号遺構出土土器実測図(6)	19
第12図	佐知遺跡4号遺構出土土器実測図(7)	20
第13図	佐知遺跡4号遺構出土土器実測図(8)	21
第14図	佐知遺跡4号遺構出土土器実測図(9)	22
第15図	佐知遺跡4号遺構出土土器実測図(10)	23
第16図	佐知遺跡4号遺構出土土器実測図(11)	24
第17図	佐知遺跡4号遺構出土土器実測図(12)	25
第18図	佐知遺跡4号遺構出土土器実測図(1)	28
第19図	佐知遺跡4号遺構出土土器実測図(2)	29
第20図	佐知遺跡16号遺構炉跡実測図	30
第21図	佐知遺跡16号遺構実測図	39
第22図	佐知遺跡16号遺構出土土器実測図(1)	31
第23図	佐知遺跡16号遺構出土土器実測図(2)	32
第24図	佐知遺跡16号遺構出土土器実測図(3)	33
第25図	佐知遺跡16号遺構出土土器実測図(4)	34
第26図	佐知遺跡16号遺構出土土器実測図(5)	35
第27図	佐知遺跡16号遺構出土土器実測図	37
第28図	佐知遺跡40号遺構実測図	38
第29図	佐知遺跡40号遺構出土土器実測図(1)	39

第30図	佐知遺跡40号遺構出土土器実測図(2)	40
第31図	佐知遺跡40号遺構出土土器実測図(3)	41
第32図	佐知遺跡40号遺構出土土器実測図(4)	42
第33図	佐知遺跡40号遺構出土土器実測図(5)	43
第34図	佐知遺跡40号遺構出土土器実測図(6)	44
第35図	佐知遺跡40号遺構出土土器実測図(7)	45
第36図	佐知遺跡40号遺構出土土器実測図(8)	46
第37図	佐知遺跡40号遺構出土土器実測図(9)	47
第38図	佐知遺跡40号遺構出土土器実測図(10)	48
第39図	佐知遺跡40号遺構出土紡錘車実測図	51
第40図	佐知遺跡40号遺構出土石器実測図	51
第41図	佐知遺跡40号遺構出土土偶実測図	52
第42図	佐知遺跡 J - 5 遺構出土土器実測図	53
第43図	佐知遺跡 J - 6 遺構出土土器実測図	54
第44図	佐知遺跡 J - 7 遺構出土土器実測図	54
第45図	佐知遺跡縄文時代小竪穴遺構実測図	55
第46図	佐知遺跡 J - 7 遺構実測図	56
第47図	佐知遺跡 J - 8 遺構実測図	56
第48図	佐知遺跡 J - 8 遺構周辺出土石器実測図	56
第49図	佐知遺跡 J - 8 遺構出土土器実測図	57
第50図	佐知遺跡 J - 8 遺構出土土偶実測図	58
第51図	佐知遺跡各地区出土縄文後期土器実測図(1)	60
第52図	佐知遺跡各地区出土縄文後期土器実測図(2)	61
第53図	佐知遺跡各地区出土縄文後期土器実測図(3)	62
第54図	佐知遺跡各地区出土縄文後期土器実測図(4)	63
第55図	佐知遺跡各地区出土縄文後期土器実測図(5)	64
第56図	佐知遺跡各地区出土縄文後期土器実測図(6)	65
第57図	佐知遺跡各地区出土縄文後期土器実測図(7)	66
第58図	佐知遺跡各地区出土縄文後期土器実測図(8)	67
第59図	佐知遺跡各地区出土縄文後期土器実測図(9)	68
第60図	佐知遺跡各地区出土縄文後期土器実測図(10)	69
第61図	佐知遺跡各地区出土縄文後期土器実測図(11)	70
第62図	佐知遺跡各地区出土縄文後期土器実測図(12)	71

第63図	佐知遺跡各地区出土縄文後期土器実測図(13)	72
第64図	佐知遺跡各地区出土縄文後期土器実測図(14)	73
第65図	佐知遺跡各地区出土縄文後期石器実測図(1)	78
第66図	佐知遺跡各地区出土縄文後期石器実測図(2)	79
第67図	佐知遺跡各地区出土縄文後期石器実測図(3)	80
第68図	佐知遺跡各地区出土縄文後期石器実測図(4)	81
第69図	佐知遺跡各地区出土縄文後期石器実測図(5)	82
第70図	佐知遺跡出土土器片加工品実測図	85
第71図	佐知遺跡出土縄文晩期土器実測図(1)	86
第72図	佐知遺跡出土縄文晩期土器実測図(2)	87
第73図	佐知遺跡出土銅剣実測図	89
第74図	佐知遺跡出土弥生前期土器実測図	90
第75図	佐知遺跡22号遺構出土土器実測図	92
第76図	佐知遺跡22号遺構実測図	93
第77図	佐知遺跡22号遺構出土石器実測図	94
第78図	佐知遺跡 Y - 1 遺構出土土器実測図	95
第79図	佐知遺跡弥生中期小竪穴遺構実測図	96
第80図	佐知遺跡 Y - 2 遺構出土土器実測図	97
第81図	佐知遺跡 Y - 3 遺構出土土器実測図	97
第82図	佐知遺跡 Y - 4 遺構出土土器実測図	97
第83図	佐知遺跡 Y - 5 遺構出土土器実測図	89
第84図	佐知遺跡 Y - 5 遺構実測図	98
第85図	佐知遺跡 Y - 6 遺構出土土器実測図	99
第86図	佐知遺跡 Y - 6 遺構実測図	99
第87図	佐知遺跡 Y - 7 遺構出土土器実測図	100
第88図	佐知遺跡 Y - 7 遺構実測図	100
第89図	佐知遺跡各地区出土弥生中期土器実測図(1)	102
第90図	佐知遺跡各地区出土弥生中期土器実測図(2)	103
第91図	佐知遺跡13号遺構実測図	104
第92図	佐知遺跡13号遺構出土土器実測図	105
第93図	佐知遺跡18号遺構実測図	105
第94図	佐知遺跡28号遺構実測図	106
第95図	佐知遺跡28号遺構出土鉄器実測図	107

第 96 図	佐知遺跡28号遺構出土土器実測図	107
第 97 図	佐知遺跡29号遺構実測図	108
第 98 図	佐知遺跡29号遺構出土土器実測図(1)	109
第 99 図	佐知遺跡29号遺構出土土器実測図(2)	110
第100図	佐知遺跡29号遺構出土土器実測図(3)	111
第101図	佐知遺跡29号遺構出土石器実測図	112
第102図	佐知遺跡30号遺構出土土器実測図	113
第103図	佐知遺跡30号遺構出土鉄器実測図	113
第104図	佐知遺跡30号遺構実測図	113
第105図	佐知遺跡39号遺構実測図	113
第106図	佐知遺跡39号遺構出土土器実測図	115
第107図	佐知遺跡Y-8 遺構実測図	117
第108図	佐知遺跡Y-8 遺構出土鉄器実測図	117
第109図	佐知遺跡Y-8 遺構出土土器実測図	117
第110図	佐知遺跡各地区出土弥生後期土器実測図(1)	119
第111図	佐知遺跡各地区出土弥生後期土器実測図(2)	120
第112図	佐知遺跡各地区出土磨製石器実測図	121
第113図	佐知遺跡各地区出土鉄器実測図	122
第114図	佐知遺跡7号遺構実測図	123
第115図	佐知遺跡8号遺構実測図	123
第116図	佐知遺跡8号遺構出土土器実測図	124
第117図	佐知遺跡10号遺構実測図	124
第118図	佐知遺跡10号遺構出土土器実測図	124
第119図	佐知遺跡14号遺構実測図	125
第120図	佐知遺跡14号遺構出土土器実測図	126
第121図	佐知遺跡19号遺構実測図	128
第122図	佐知遺跡19号遺構出土土器実測図	129
第123図	佐知遺跡2号遺構実測図	131
第124図	佐知遺跡2号遺構カマド実測図	132
第125図	佐知遺跡2号遺構出土土器実測図	133
第126図	佐知遺跡2号遺構出土石器実測図	134
第127図	佐知遺跡11号遺構実測図	135
第128図	佐知遺跡11号遺構カマド周辺遺物出土状態実測図	136

第129図	佐知遺跡11号遺構甕形土器内礫出土状態実測図	137
第130図	佐知遺跡11号遺構カマド実測図	137
第131図	佐知遺跡11号遺構出土土器実測図(1)	138
第132図	佐知遺跡11号遺構出土土器実測図(2)	131
第133図	佐知遺跡11号遺構出土土器実測図(3)	140
第134図	佐知遺跡20号遺構実測図	141
第135図	佐知遺跡20号遺構カマド実測図	142
第136図	佐知遺跡20号遺構出土土器実測図	143
第137図	佐知遺跡21号遺構実測図	144
第138図	佐知遺跡21号遺構カマド実測図	147
第139図	佐知遺跡21号遺構出土土器実測図(1)	147
第140図	佐知遺跡21号遺構出土土器実測図(2)	147
第141図	佐知遺跡21号遺構出土石器実測図	147
第142図	佐知遺跡21号遺構出土銅鈴実測図	147
第143図	佐知遺跡27号遺構実測図	148
第144図	佐知遺跡27号遺構カマド実測図	149
第145図	佐知遺跡27号遺構出土土器実測図(1)	150
第146図	佐知遺跡27号遺構出土土器実測図(2)	151
第147図	佐知遺跡27号遺構出土土器実測図(3)	152
第148図	佐知遺跡27号遺構出土石器実測図	153
第149図	佐知遺跡各地区出土古墳後期土器実測図(1)	155
第150図	佐知遺跡各地区出土古墳後期土器実測図(2)	156
第151図	佐知遺跡1号遺構実測図	157
第152図	佐知遺跡9号遺構出土土器実測図	158
第153図	佐知遺跡9号遺構実測図	159
第154図	佐知遺跡12号遺構実測図	160
第155図	佐知遺跡12号遺構出土土器実測図	160
第156図	佐知遺跡17号遺構実測図	161
第157図	佐知遺跡配石遺構実測図	162
第158図	佐知遺跡17号遺構出土遺物実測図	163～164
第159図	佐知遺跡17号遺構出土鉄釘実測図	165
第160図	佐知遺跡3号遺構実測図	167
第161図	佐知遺跡3号遺構出土土器実測図	168

第162図	佐知遺跡 5 号遺構出土土器実測図	168
第163図	佐知遺跡 5 号遺構実測図	169
第164図	佐知遺跡 6 号遺構出土土器実測図	170
第165図	佐知遺跡 6 号遺構実測図	171
第166図	佐知遺跡 A - 7 区出土土器実測図	165
第167図	佐知遺跡出土中世土器実測図(1)	175
第168図	佐知遺跡出土中世土器実測図(2)	176
第169図	佐知遺跡出土中世土器実測図(3)	177
第170図	佐知遺跡出土中世土器実測図(4)	178
第171図	佐知遺跡出土中世土器実測図(5)	179
第172図	佐知遺跡出土輸入陶磁器実測図(1)	181
第173図	佐知遺跡出土輸入陶磁器実測図(2)	182
第174図	佐知遺跡出土土錘実測図	183
第175図	佐知遺跡出土鉄刀実測図	185
第176図	佐知遺跡 K - 1 遺構実測図	185
第177図	佐知遺跡 K - 2 遺構実測図	186

表 目 次

第1章 はじめに

第1表	佐知遺跡周辺主要遺跡一覧表	4
第2表	佐知遺跡遺構名対象表	7

第2章 調査の成果

第3表	佐知遺跡4号遺構出土土器観察表(1)	26
第4表	佐知遺跡4号遺構出土土器観察表(2)	27
第5表	佐知遺跡16号遺構出土土器観察表	36
第6表	佐知遺跡40号遺構出土土器観察表(1)	49
第7表	佐知遺跡40号遺構出土土器観察表(2)	50
第8表	佐知遺跡各小竪穴遺構出土土器観察表	56
第9表	佐知遺跡各地区出土縄文後期土器観察表(1)	74
第10表	佐知遺跡各地区出土縄文後期土器観察表(2)	75
第11表	佐知遺跡各地区出土縄文後期土器観察表(3)	76
第12表	佐知遺跡各地区出土縄文後期土器観察表(4)	77
第13表	佐知遺跡各地区出土縄文後期石器観察表(1)	83
第14表	佐知遺跡各地区出土縄文後期石器観察表(2)	84
第15表	佐知遺跡出土縄文晩期土器観察表	88
第16表	佐知遺跡各地区出土弥生中期土器観察表	101
第17表	佐知遺跡各地区出土弥生後期土器観察表	118
第18表	佐知遺跡各地区出土磨製石器観察表	122
第19表	佐知遺跡各地区出土古墳時代後期土器観察表	154

写真図版目次

- 写真図版 1 上 佐知遺跡 4 号遺構遺物出土状態
下 佐知遺跡 4 号遺構
- 写真図版 2 上 佐知遺跡16号遺構
下右 佐知遺跡16号遺構柱穴の根じめ
下左 佐知遺跡16号遺構炉跡
- 写真図版 3 上 佐知遺跡40号遺構遺物出土状態
下 佐知遺跡40号遺構
- 写真図版 4 佐知遺跡縄文時代小竪穴遺構
上 J-6 遺構 中 J-5 遺構 下 J-3 遺構
- 写真図版 5 上 佐知遺跡 J-8 遺構遺物出土状態
下 佐知遺跡縄文時代小竪穴 J-1 遺構
- 写真図版 6 上 佐知遺跡22号遺構
下 佐知遺跡 Y-5 遺構
- 写真図版 7 佐知遺跡弥生時代小竪穴遺構(1)
上 Y-1 遺構 中 Y-2 遺構 下 Y-3 遺構
- 写真図版 8 佐知遺跡弥生時代小竪穴遺構(2)
上 Y-4 遺構 中 Y-6 遺構 下 Y-7 遺構
- 写真図版 9 上 佐知遺跡13号遺構
下 佐知遺跡18号遺構
- 写真図版10 上 佐知遺跡29号遺構
下 佐知遺跡39号遺構
- 写真図版11 上 佐知遺跡 Y-8 遺構
下 佐知遺跡28号遺構
- 写真図版12 上 佐知遺跡 8 号遺構
下 佐知遺跡14号遺構
- 写真図版13 上 佐知遺跡19号遺構
下 佐知遺跡19号遺構南壁沿い掘り込み
- 写真図版14 上 佐知遺跡 2 号遺構(1)
下 佐知遺跡 2 号遺構(2)
- 写真図版15 上 佐知遺跡 2 号遺構カマド調査状況
下 佐知遺跡 2 号遺構カマド

- 写真図版16 上 佐知遺跡11号遺構(1)
下 佐知遺跡11号遺構(2)
- 写真図版17 上 佐知遺跡11号遺構カマド周辺遺物出土状況(1)
下 佐知遺跡11号遺構カマド周辺遺物出土状況(2)
- 写真図版18 上 佐知遺跡11号遺構カマド
下 佐知遺跡11号遺構カマド調査状況
- 写真図版19 上 佐知遺跡20号遺構(1)
下 佐知遺跡20号遺構(2)
- 写真図版20 上 佐知遺跡21号遺構
下 佐知遺跡21号遺構遺物出土状態
右 銅鈴 左 カマド内の甑
- 写真図版21 上 佐知遺跡27号遺構
下 佐知遺跡27号遺構カマド及び遺物出土状態
- 写真図版22 上 佐知遺跡配石遺構(1)
下 佐知遺跡配石遺構(2)
- 写真図版23 上 佐知遺跡 5・6号遺構
下右 佐知遺跡 5号遺構 下左 佐知遺跡 6号遺構
- 写真図版24 上 佐知遺跡 1号遺構
下 佐知遺跡 3号遺構
- 写真図版25 上 佐知遺跡 9号遺構上部集石
下 佐知遺跡 9号遺構下部竪穴
- 写真図版26 上 佐知遺跡中世竪穴遺構
上 佐知遺跡12号遺構 中 C-1 遺構 下 C-2 遺構
- 写真図版27 上 佐知遺跡17号遺構
下 佐知遺跡17号遺構太刀出土状態
- 写真図版28 上 佐知遺跡17号遺構湖洲鏡出土状態
下 佐知遺跡17号遺構鉄鍬出土
- 写真図版29 上 佐知遺跡 K-2 遺構
下 佐知遺跡調査区全景
- 写真図版30 佐知遺跡 4号遺構出土縄文土器
- 写真図版31 佐知遺跡 4・16号遺構出土縄文土器
上 4号遺構 下 16号遺構
- 写真図版32 佐知遺跡40号遺構出土縄文土器(1)

- 写真図版33 佐知遺跡40号遺構出土縄文土器(2)
- 写真図版34 佐知遺跡出土縄文時代石器
上 偏平打製石斧 下 石錘
- 写真図版35 上 佐知遺跡出土土器片加工品
下 佐知遺跡出土土偶
- 写真図版36 上 佐知遺跡出土弥生時代中期土器
下 佐知遺跡出土弥生時代石器
- 写真図版37 佐知遺跡29号遺構出土土器
- 写真図版38 上 佐知遺跡14号遺構出土土器
下 佐知遺跡19号遺構出土土器
- 写真図版39 佐知遺跡2号遺構出土土器
- 写真図版40 佐知遺跡11号遺構出土土器(1)
- 写真図版41 佐知遺跡11号遺構出土土器(2)
- 写真図版42 佐知遺跡27号遺構出土土器
- 写真図版43 佐知遺跡出土古代・中世土器(1)
- 写真図版44 佐知遺跡出土古代・中世土器(2)
- 写真図版45 佐知遺跡出土輸入陶磁器

第1章 はじめに

第1節 調査の経緯

1 調査の経過

(1) 調査に至る経過

日出生台や英彦山など北部九州の山岳部に源を発し周防灘に注ぐ山国川沿いの道は、古来より西瀬戸内と九州内陸部を結ぶ交通路として使われてきた。江戸時代は天領日田に通じる主要官道として重要な位置を占め、現代では大分県中津市から熊本県阿蘇一ノ宮までぬける幹線道である国道212号となっている。しかし、峻険な谷筋を利用し、しかも旧道を拡幅したままであるためカーブが多く道幅もせまい道路となっている。このため古くから道筋の確保には困難を極めた。なかでも本耶馬溪町の「青の洞門」の掘削の模様を材題にした菊池寛の小説「恩讐のかなたに」はよく知られている。国道となってもその努力は続けられ、国と大分県と関係市町村が一体となり改良工事を重ねている。

今回、改良工事の対象となった下毛郡三光村佐知地区は古くからの街道筋の集落で、道の両側に街並が続いている。このため道幅が狭く、拡幅も困難であった。そこで、大分県土木建築部では、集落の西側を迂回し山国川の土手沿いにバイパス道路を建設する計画を立てた。しかし、その予定地には周知遺跡である佐知遺跡があり埋蔵文化財の保護か開発かの問題が生じた。主幹部局である県土木建築部から協議を受けた県教育委員会は、この問題の解決にあたった。しかし、既存の道路との関係からルートや工法の変更は困難であり、やむなく遺跡は記録保存とするため発掘調査することになった。

(2) 試掘調査の方法と結果

佐知遺跡に対する発掘調査は、昭和62年度に始まる。対象地は幅15m、長さ170mで国道212号線との接合部が広がる約3000㎡ある。地目は宅地と畑地であったが、一部地権者の了解が得られておらず、全面にわたって試掘調査を実施することができなかった。そこで調査可能な場所について2m×6mのトレンチを6ヵ所設定し掘り下げを行なった。掘り下げは遺構や遺物集中場所にあたった場合はそこで中止した。

その結果、すべてのトレンチで遺物が出土し、工事対象範囲の全域に遺跡が広がっていることがわかった。しかも、遺物を包含する層は厚く、地表面から約1m掘り下げても地山には届かなかった。出土遺物は土器の細片ばかりであるが、縄文時代・弥生時代・古墳時代・中世と多時代にわたる。また一部の試掘区で住居跡と考えられる掘り込みも確認した。これらの試掘調査を検討した結果、工事予定地には数時代にわたる集落跡があることが想定され、大規模な複合遺跡であることが予測できた。そこで全面調査をしなければならないとの結論に達した。

(3) 本調査の経過

試掘調査は昭和63年3月に終了したが、土地の買収事業がスムーズに進行せず、ただちに本調査に取りかかることはできなかった。本格的に調査に入ることができたのは10月になってからである。しかし、その時点でも工事予定地内の中央部にはまだ住宅が建っており、全面を一度に調査することは不可能であった。しかし、バイパス工事の開通予定は年度内で、発掘調査は急を要した。そこで調査はすぐに実施可能な工事対象内の北半分から取りかかり、南半分は住宅の移築をまつことにした。

調査は、作業可能な部分の表土を重機で取りのぞく事から始めた。調査区の設定は、ほぼ南北に直線で通じるバイパス工事のセンター杭を利用し、西側をA区、東側をB区とし、北端部から10mの間隔で1から順に区分けを行なった。こうしてA-1・B-1・A-2・B-2・A-3・・・と調査区の設定を行なった。発掘は排土の関係でA・B-5区から開始した。

発掘調査は、試掘調査の結果どおり、全面に厚い包含層が形成されていたため、遺構検出面である茶色の砂層上面に達するまで、多くの時間を要した。また、調査区内に残されていた住宅の移転も遅れ、平成元年3月になってようやくバイパス工事の施工範囲のすべて、すなわち全調査区画が確保された。このような状況であったため、昭和63年度に発掘調査できたのはA・B-1区～A・B-10区までの約1500㎡、調査予定面積の半分にとどまった。

年度が平成元年に改まり、残りの調査面積は約1500㎡となった。調査区はA・B-11区～A・B-17区と国道212号線と接続する拡張部分である。調査は排土の関係からA-17区から始めた。A-17区、A・B-16区は包含層も薄く、遺構も少なく調査も順調に進んだ。しかし、前年度の調査区に近くなるにつれ包含層も厚くなり、遺構も多くなっている。特に、A-11区～A-12区にかけては四基の住居跡が複雑に重複している。こうして佐知遺跡の発掘調査が全て終了したのは平成元年九月のことであった。

なお、国道212号線佐知バイパスの開通は平成2年3月となった。

2 調査の体制

調査主体 大分県教育委員会

調査指導員 賀川 光夫 (別府大学教授・大分県文化財保護審議会)

小田 富士雄 (福岡大学教授・大分県文化財保護審議会)

橘 昌信 (別府大学教授)

木村 幾多郎 (福岡県教育委員会専門員)

調査員 大分県教育委員会

教育長 嶋津 文雄

文化課長 小代 基擁 (昭和63年度)

文化課長 後藤 正二 (昭和63年度参事)

	文化課長補佐	後藤 宗俊
調査事務	庶務係長	今永 一成
	主 事	神 昭雄（昭和63年度担当）
	主 事	山口 淳史（平成元年度担当）
	主 事	青木 磨（平成元年度担当）
発掘調査	埋蔵文化財	
	第 1 係 長	清水 宗昭
	主 査	坂本 嘉弘
	主 査	高橋 徹（昭和62年度試掘担当）
	主 任	西 哲弘
	主 事	綿貫 俊一（昭和62年度試掘担当）
	嘱 託	丸山 啓子
	嘱 託	猪 薫

以上のほか、調査期間中、下條信行（愛媛大学教授）、田中良之（九州大学助教授）、岩永省三（奈良国立文化財研究所）、小池史哲・飛野博文・竹田光正・日高正幸（福岡県教育委員会）、栗焼憲治（中津市教育委員会）、小倉正五・佐藤良二郎（宇佐市教育委員会）、土居正幸（日田市教育委員会）各氏の来訪があり指導・助言を受けた。また、地元の三光村教育委員会からも調査の協力を得た。さらに、真野和夫・山田拓伸・飯沼賢司・小柳和宏・久恒章子氏（以上大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館）の協力も大きいものがある。

第2節 遺跡の立地と環境

1 地理的環境

下流で大分県と福岡県の県境となる山国川は、急峻な山間部を蛇行し北流するが、下毛郡三光村の八面山の西側を過ぎる付近から沖積作用が始まり、河口部にかけて中津市のある沖代平野を形成している。佐知遺跡は、この沖積地が始まる地域に属し、標高約25mで、西を流れる山国川との比高差は10数mある。地表面は厚いクロボクの火山灰に似た黒色土に覆われ、地山は周辺の台地が赤土の粘土層であるのに対し、茶黄色の砂層であった。このことから佐知遺跡は隆起した自然堤防上の遺跡であることが判った。また、この遺跡の東側には取り巻くように標高40m前後の台地が展開している。

2 歴史的環境

佐知遺跡の周辺には旧石器時代の遺跡は少ないものの、縄文時代から今日に至るまでの多くの生活の跡が残されている。縄文時代は後期からの遺跡が目立ち、県指定の植野貝塚・棒垣貝塚、土偶を出土した高畑遺跡などはよく知られている。弥生時代の遺跡は山国川の自然堤防上や沖代平野の微高地上、周辺の台地などにみられ、福岡県中桑野遺跡は前期から中期の遺跡としてこの地域ではまとまった資料を出土している。また、森山遺跡は平野を見下ろす山上にあり、高地性集落の様相を見せている。このほか上万田遺跡・高瀬遺跡も集落跡の可能性が強く、低湿地の樋多田遺跡からは木器や植物性遺物も出土している。古墳時代の遺跡は集落・墓地・窯跡に分けられる。集落は佐知遺跡をはじめ、上万田遺跡・大坪遺跡・権現島遺跡・福岡県上唐原遺跡が調査されている。古墳は大型の前期古墳は少ないものの後期の群集墳や横穴墓は、山国川兩岸の丘陵や崖面に多く点在している。福岡県側では穴ヶ葉山古墳群・上ノ熊古墳群・百留横穴墓群があり、大分県側では相原古墳群・上ノ原古墳群がある。窯跡は城山窯跡群・瓦ヶ迫窯跡群・草場窯跡群などがあり6世紀後半から9世紀まで操業されている。

律令時代になると、九州の中でも比較的早くこの地域に寺院が建立される。福岡県垂水廃寺、大分県相原廃寺は古くから知られており、最近では三光村秣小学校でも見つかっている。また洞ノ上遺跡では集落も確認されている。さらに正倉院文書の大宝二年戸籍残簡に書き残されている「豊前国上三毛郡塔里」も、佐知遺跡の対岸の沖積地にあったことが想定されている。

第1表 佐知遺跡周辺主要遺跡一覧表

1 佐知遺跡	12 穴ヶ葉山古墳	23 城の百穴横穴墓群	34 六畝町遺跡	45 樋多田遺跡
2 鈴熊山古墳	13 新池南古墳	24 白木古墳群	35 大池南遺跡	46 大平横穴墓群
3 楡生山古墳	14 下池古墳群	25 上ノ原横穴墓群	36 亀山古墳	47 森山横穴古墳
4 廣連寺古墳	15 能満寺古墳群	26 勘助野地遺跡	37 清水郎原西遺跡	48 洗添横穴墓群
5 天仲寺古墳	16 上ノ熊古墳群	27 幣旗邸古墳群	38 黒水遺跡	49 庵ノ尾横穴墓群
6 篠塚山古墳	17 カネツカ古墳群	28 相原古墳群	39 大坪遺跡	50 野崎横穴墓群
7 大塚古墳	18 小山田古墳群	29 坂手隈横穴墓群	40 棒垣貝塚	51 倉迫二ツ塚1号墳
8 垂水廃寺	19 皿山古墳群	30 坂手前横穴墓群	41 黒川古墳	52 倉迫二ツ塚2号墳
9 中桑野遺跡	20 上唐原遺跡	31 鶴市神社裏古墳	42 城山古墳群	53 三ツ塚古墳群
10 上桑野古墳群	21 下唐原遺跡	32 相原廃寺	43 城山横穴墓群	54 天神原横穴墓群
11 ガザメキ古墳群	22 百留横穴墓群	33 上万田遺跡	44 洞ノ上横穴墓群	



第1図 佐知遺跡と周辺主要遺跡位置図

第2章 調査の成果

第1節 調査の概要

1 遺跡の広がり

佐知遺跡は山国川の東岸の隆起した自然堤防上に立地する遺跡であるが、その広がりを地形と調査の結果から想定する。現在の遺跡の周辺は圃場整備事業も終了し、完全に旧地形が失われている。そこで古い地図をみると、国道212号線に沿って南北に細長くのびる今の佐知集落のうち南半分のほとんどは微高地に集中している。特に国道と川に挟まれた部分は一段高くなっており、さらに川に近づくほど高い。

こうした地形のなかで、遺物の分布範囲を見ると、今回調査した地区をはじめ、この南につづく自然堤防の最高所となっている住宅の庭先や、畑地などでも第4図のような遺物が出土している。時期は縄文時代・弥生時代・古墳時代・中世の遺物が見られ、発掘調査で出土した遺物の時期とほとんど同じである。

次に発掘調査で確認した遺構の分布から遺跡の広がりを推測する。調査区はちょうど遺跡の中に南北に15m×170mのトレンチを入れたことになる。この調査区内で縄文時代から中世までの遺構の広がりを見ると、北部に濃密に分布し、南の国道接合部に近くなるほど遺構は希薄になる。

以上のことから遺跡の範囲を考えると、地形の制約を受けているため、南北に細長い事が推測できる。このことは縄文時代・弥生時代・古墳時代にこの地にあった「ムラ」も細長い広がりを見せていたものと思われる。

2 調査した遺構と時代

佐知遺跡で検出した遺構は、出土した遺物が示すように縄文時代後期・晩期、弥生時代前期・中期・後期、古墳時代前期・後期、奈良時代、平安時代、鎌倉時代とほとんどとぎれることなく続いている。遺構の種類も、明らかな住居跡をはじめ、溝・小竪穴・柱穴等があり、これらが複雑に重なりあっている。このため、遺構の時期は、遺物がまとまって出土する大きな遺構ははっきりするが、遺物の出土が少なかったり、土器の出土しない小さな遺構は、時代を確定することはできなかった。

そこで、調査に当っては、北のA・B-1区から住居跡・溝・小竪穴など、比較的大きな遺構は検出順に1号遺構・2号遺構・3号遺構・・・と番号をつけていった。そして遺物を出土した柱穴状の土坑や墓状の竪穴については、地区ごとに例えばA-3区P-1・P-2・P-3・・・とした。しかし、この番号は便宜的に付けたため、両者の間に区別のつかないものが生じた。

報告書の作成にあたっては、これらを一部修正し、縄文時代の落し穴やまとまった遺物の出

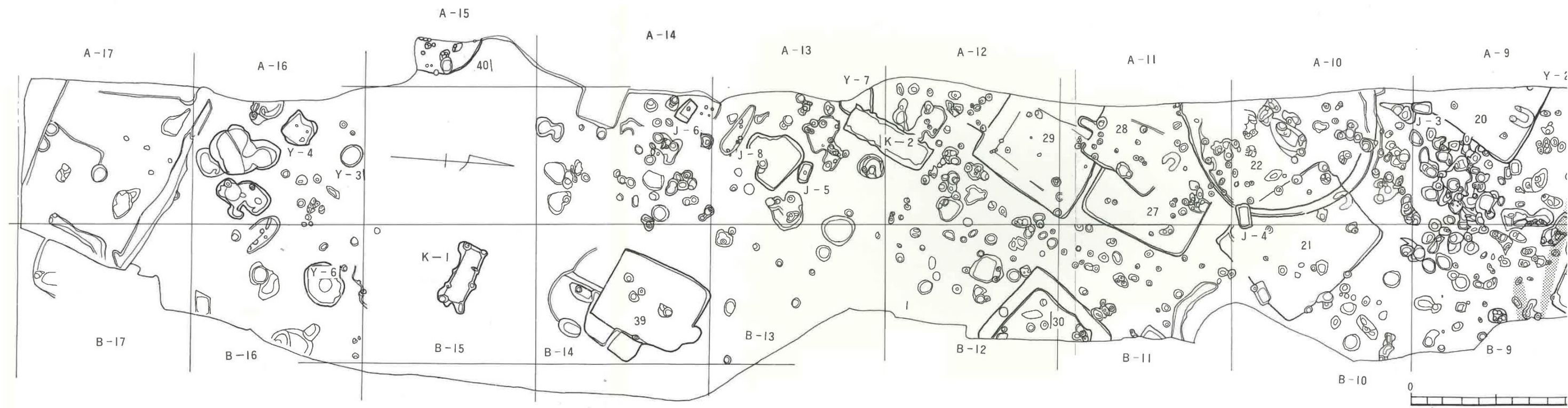
土した土坑については J-1・J-2・J-3・・・とし、弥生時代の貯蔵穴や小竪穴については Y-1・Y-2・Y-3・・・とした。下記の一覧表は調査時の名称と本報告書の名称を目次順にした対照表である。

第2表 佐知遺跡遺構名対象表

本書の名称	調査時の名称	本書の名称	調査時の名称
4号遺構	4号遺構	30号遺構	30号遺構
16号遺構	16号遺構	39号遺構	39号遺構
40号遺構	40号遺構	Y-7遺構	32号遺構
J-1遺構	A-3・P-1	7号遺構	7号遺構
J-2遺構	A-6	8号遺構	8号遺構
J-3遺構	A-9	10号遺構	10号遺構
J-4遺構	26号遺構	14号遺構	14号遺構
J-5遺構	34号遺構	19号遺構	19号遺構
J-6遺構	35号遺構	2号遺構	2号遺構
J-7遺構	36号遺構	11号遺構	11号遺構
J-8遺構	A-4・P-3	20号遺構	20号遺構
22号遺構	22・23号遺構	21号遺構	21号遺構
Y-1遺構	A-9・P-5	27号遺構	27号遺構
Y-2遺構	A-8・P-22	1号遺構	1号遺構
Y-3遺構	49号遺構	3号遺構	3号遺構
Y-4遺構	50号遺構	5号遺構	5号遺構
Y-5遺構	15号遺構	6号遺構	6号遺構
Y-6遺構	45号遺構	9号遺構	9号遺構
Y-7遺構	37号遺構	12号遺構	12号遺構
13号遺構	13号遺構	17号遺構	17号遺構
28号遺構	28号遺構	G-1遺構	G-1遺構
18号遺構	18号遺構	G-2遺構	G-2遺構
29号遺構	29号遺構		

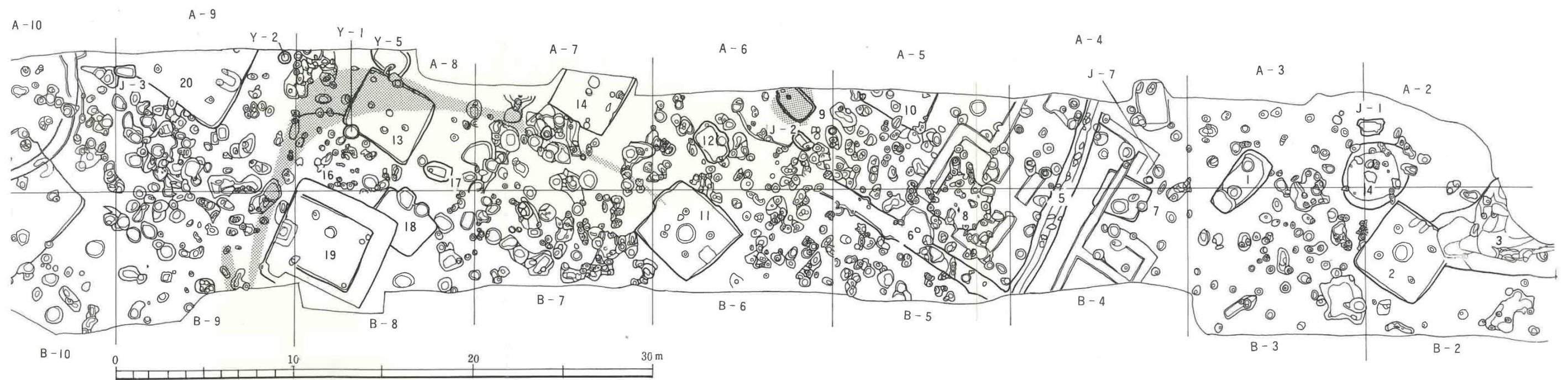


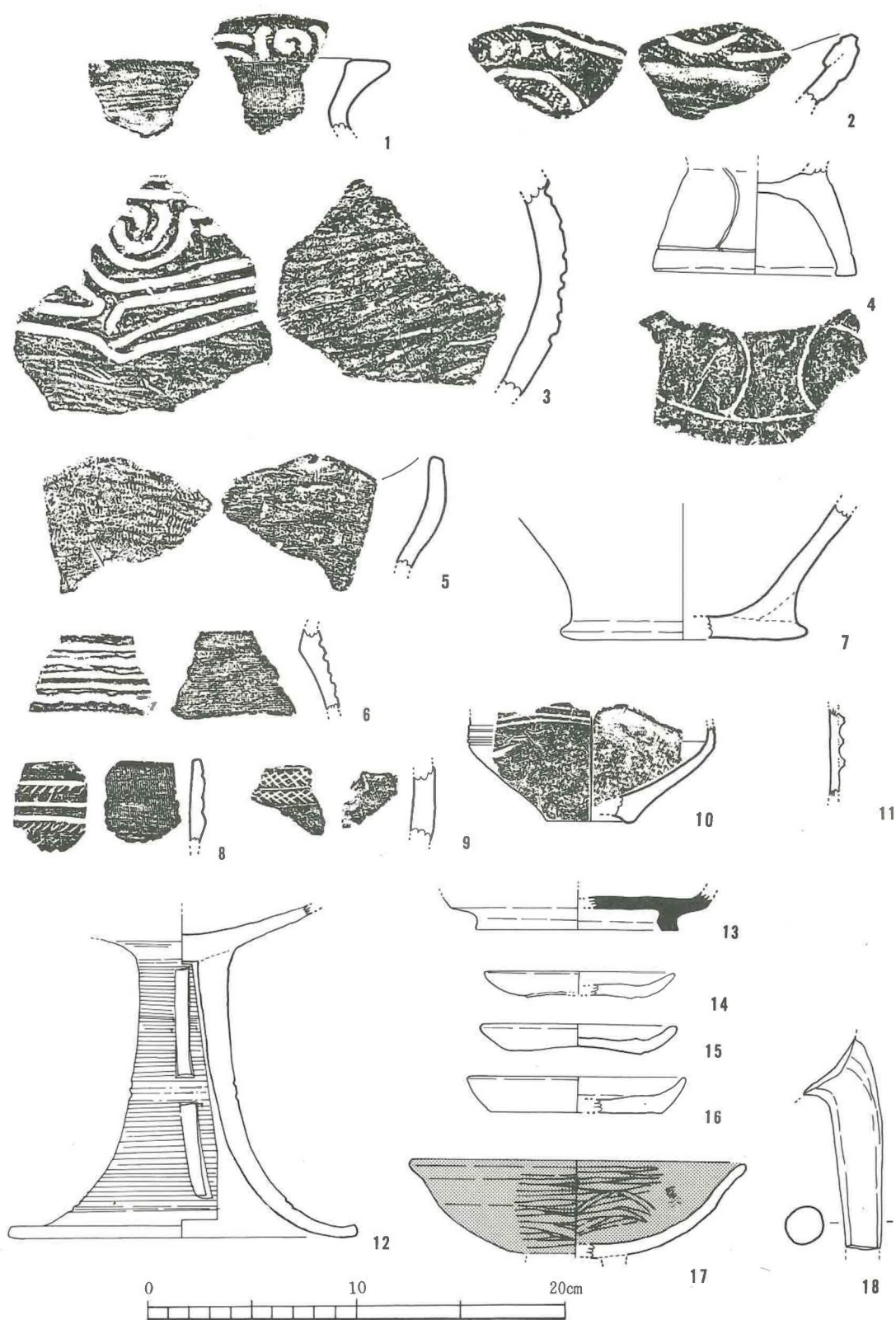
第2図 佐知遺跡と周辺地形図



数字は遺構番号
アミかけ部は集石

第3図 佐知遺跡遺構分布図





第4図 佐知遺跡表採遺物実測図

第2節 縄文時代の調査

1 縄文時代後期

(1) 住居跡

1) 4号遺構(第5図)

調査区の北端部、自然堤防の末端で検出した住居跡である。検出の際は遺物が集中的に出土し、それを徐々に掘り下げた結果、上面の規模は4.0m×3.4m、深さ0.3mで3.2m×2.7mの床面に達した。床面の中央には直径0.5mの掘りくぼめられた炉跡が検出され、中には焼土が詰まっている。壁は緩やかな傾斜面となっており、崩壊した可能性が強い。柱穴は新しい時代のものでいくつか掘り込まれているが、床面と壁の接する部分にある4ヵ所がそれと想定される。

遺物は多量の土器をはじめ、石鏃・扁平打製石斧・石錘・搔器などの石器が出土している。土器は口縁部と胴部を縄文・疑似縄文で飾ったものが主体をしめる。

I類は波状口縁部外面に縄文・疑似縄文を施文し、その上から細い施文具で、横方向の平行沈線文を描いている。その文様は第6図9のような弧文、同図12のような渦巻き文や第7図の1のような刺突文と縦方向の沈線による磨消縄文などがみられる。また、第6図11・14のように口縁部に粘土の浮文を付けたものもある。口縁部の下は無文帯があり胴部は第6図14や第7図8のように縄文・疑似縄文だけで飾られるものもあるが、第7図9は二本の平行沈線の間に波状沈線文が描かれている。また同図10は磨消縄文で飾られている。

II類は沈線文のみで飾られた土器である。沈線もI類に比較すると太い。第8図1～4がその代表例である。この土器は鐘崎式土器の流れをくむもので2の土器には低い波状口縁部の頂部に刺突文、外面に渦巻き文などその特徴がよく表れている。

III類は第8図5～8で土器面の一部にわずかに沈線文を施文している。5は波状口縁の頂部の内側に刺突文と弧文を施文している。6は断面三角形の外面に沈線が一条めぐっている。

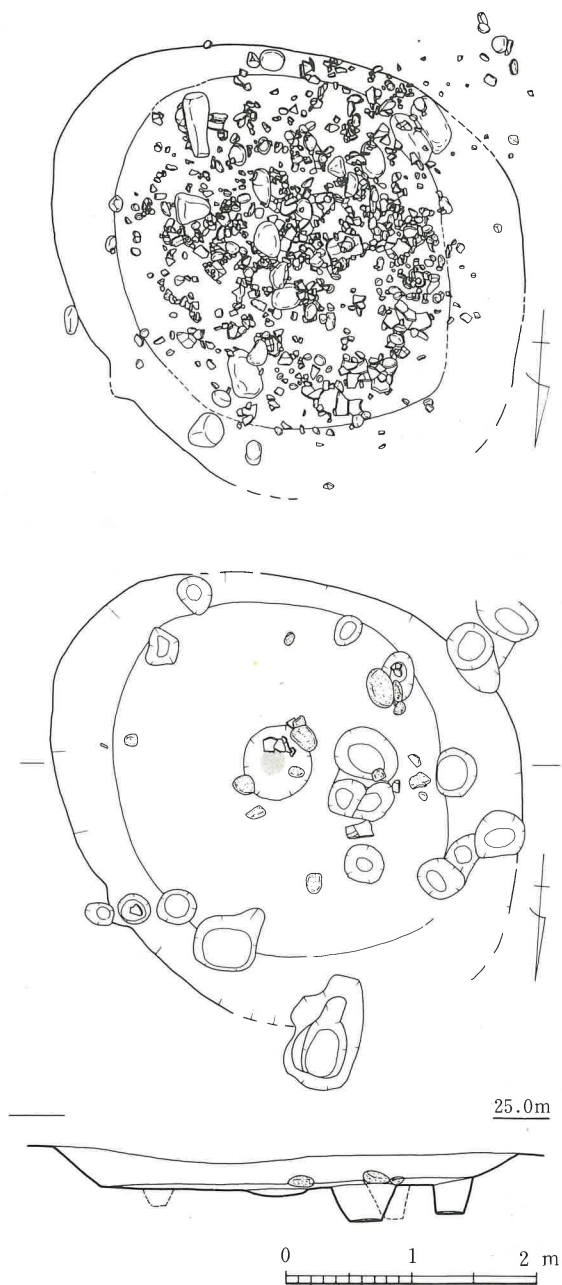
IV類は無軸の羽状文のある土器で、第8図9・11の2例のみである。9は口縁部の外面に沈線で区画をし、その中を羽状文で埋めている。11は口唇部と二条の沈線のめぐる頸部に羽状文が施文されている。

V類は口縁部外面と胴部を、縄文・疑似縄文のみで飾る土器である。口縁部の形態は波状になるものと、平坦なものがある。また、第9図1は壺形にちかい。第9・10・11図がその代表的資料である。

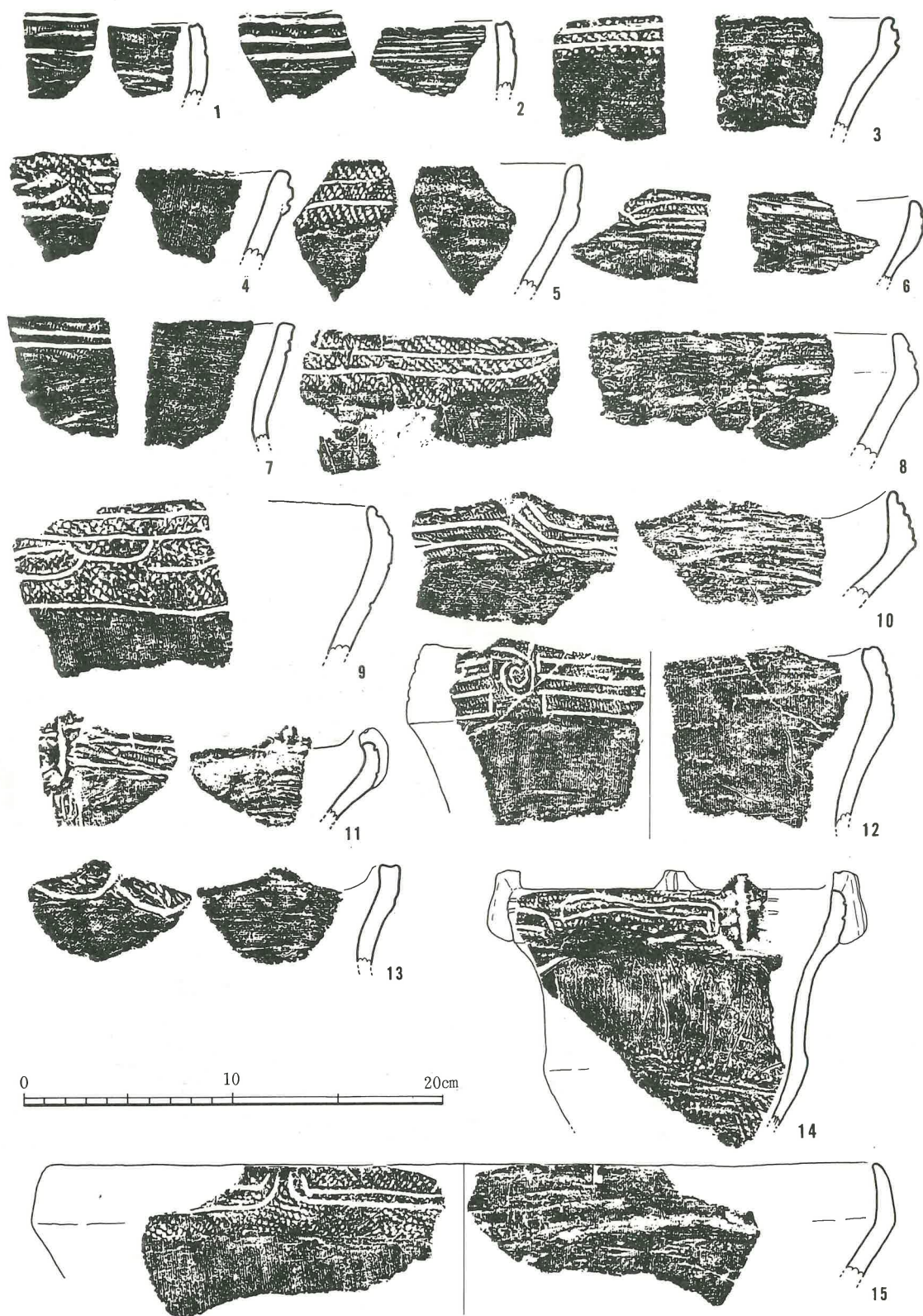
VI類は条痕文土器である。器面は巻貝による条痕で仕上げられており、さらに篋磨きをその上から加えている。器形は口縁部が波状になるものと平坦なものがある。また第8図13は注口土器で、この時期に伴うものである。

石器は石鏃が7点、扁平打製石斧8点、石錘4点が出土している。剥片石器の石材は全て姫

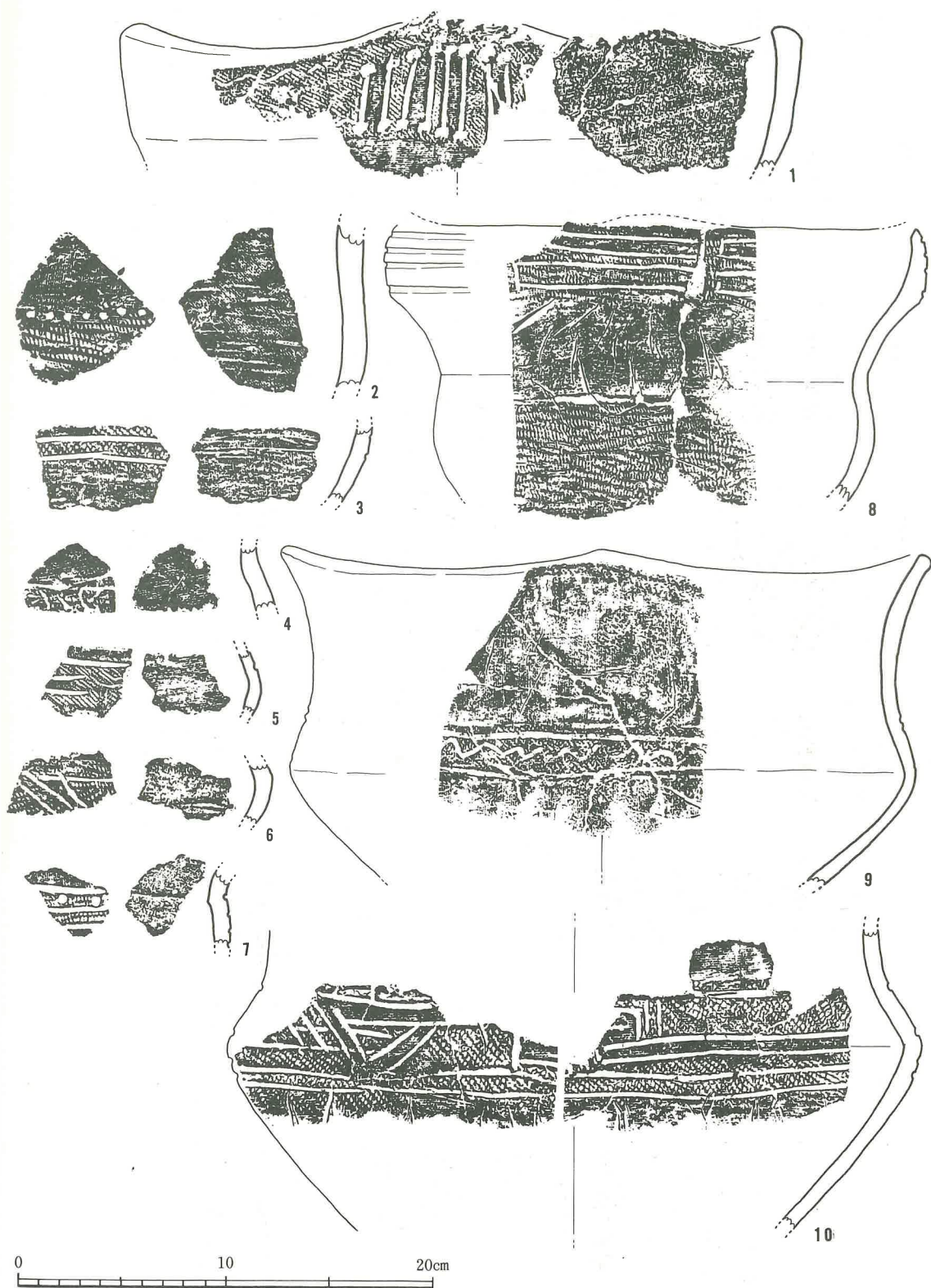
島産黒曜石で、搔器の1点のみ腰岳産黒曜石である。扁平打製石斧の石材は安山岩・結晶片岩が主体を占め、石錘は安山岩の小礫が多く使われている。



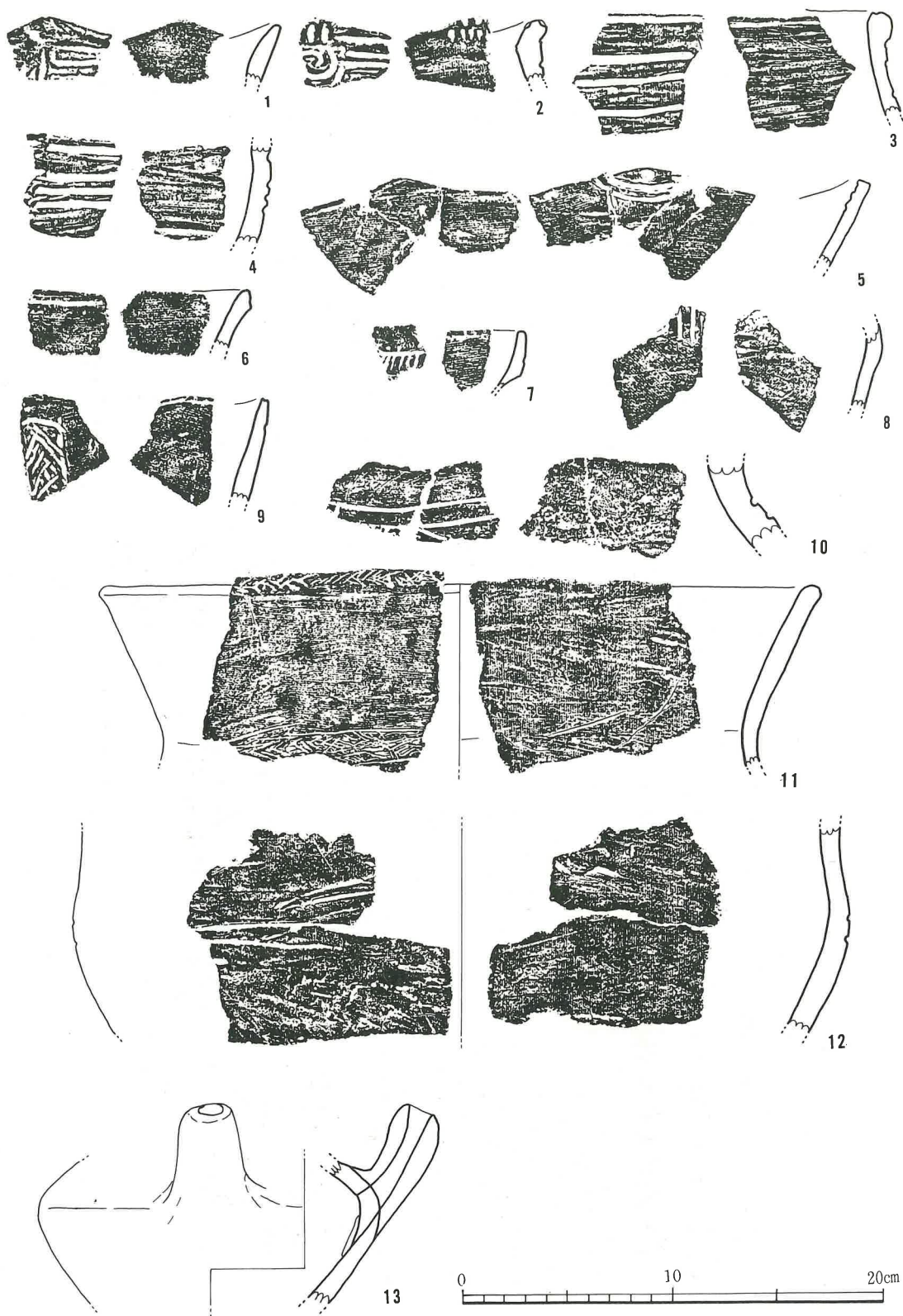
第5図 佐知遺跡4号遺構実測図



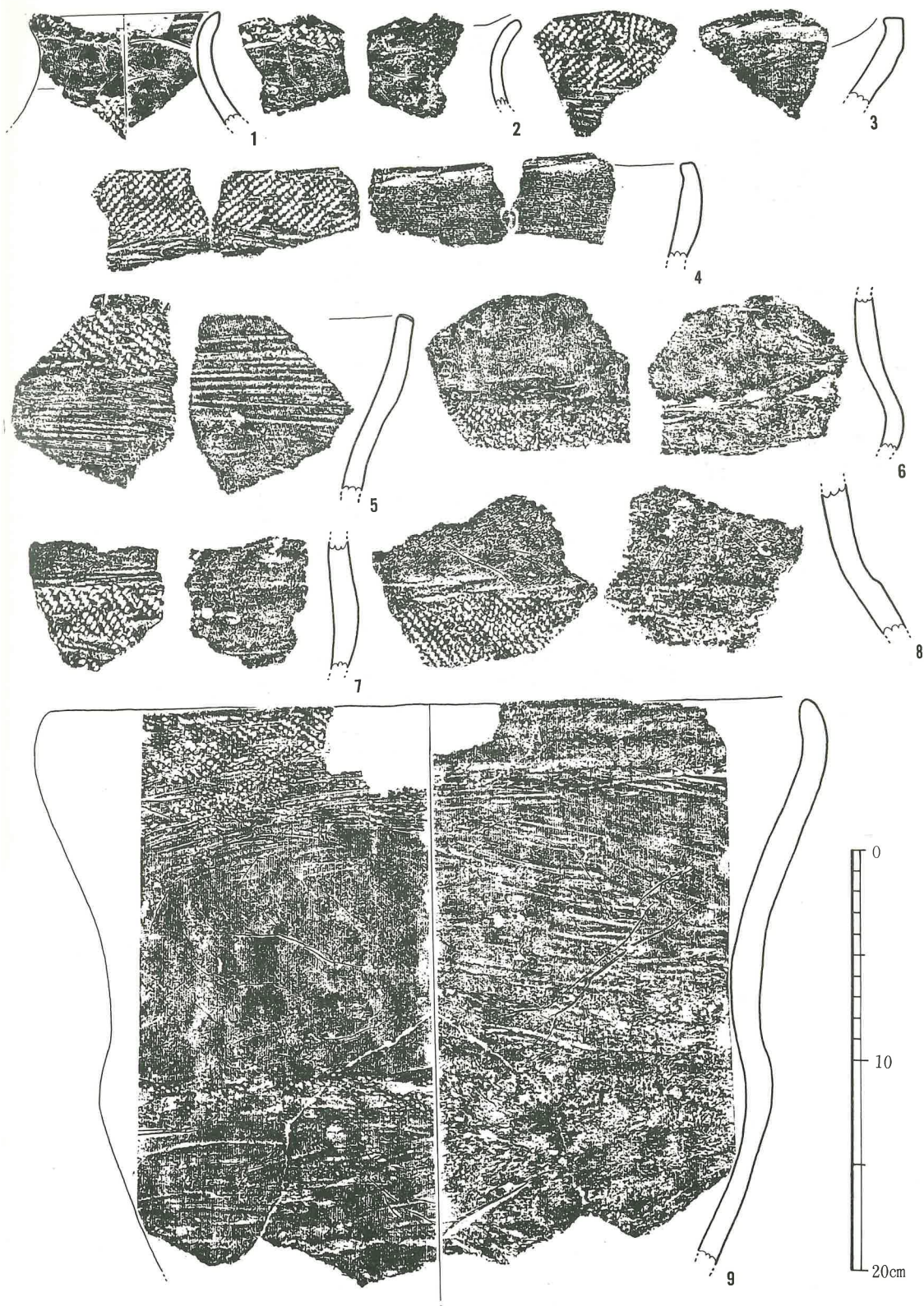
第6図 佐知遺跡4号遺構出土土器実測図(1)



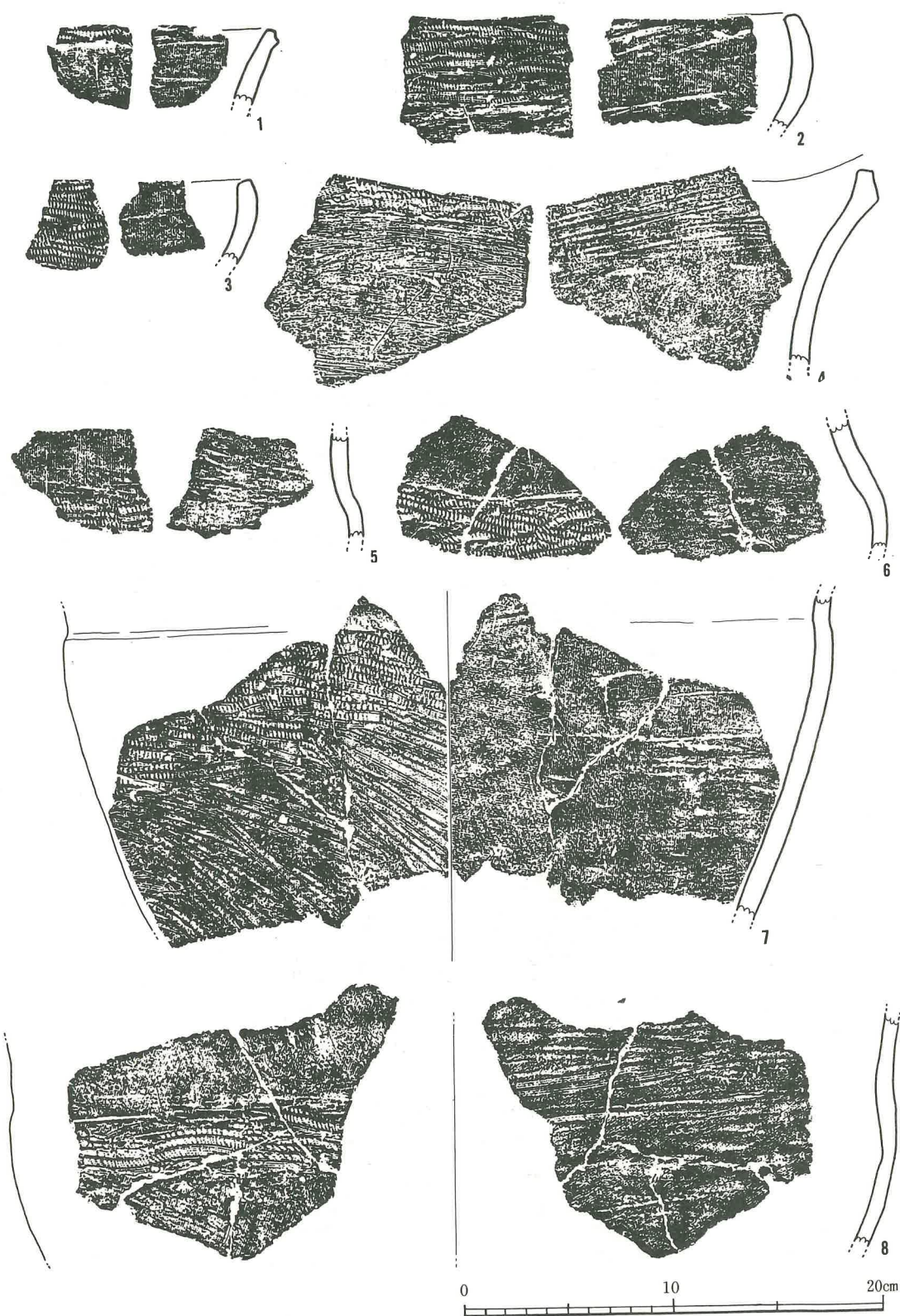
第7図 佐知遺跡4号遺構出土土器実測図(2)



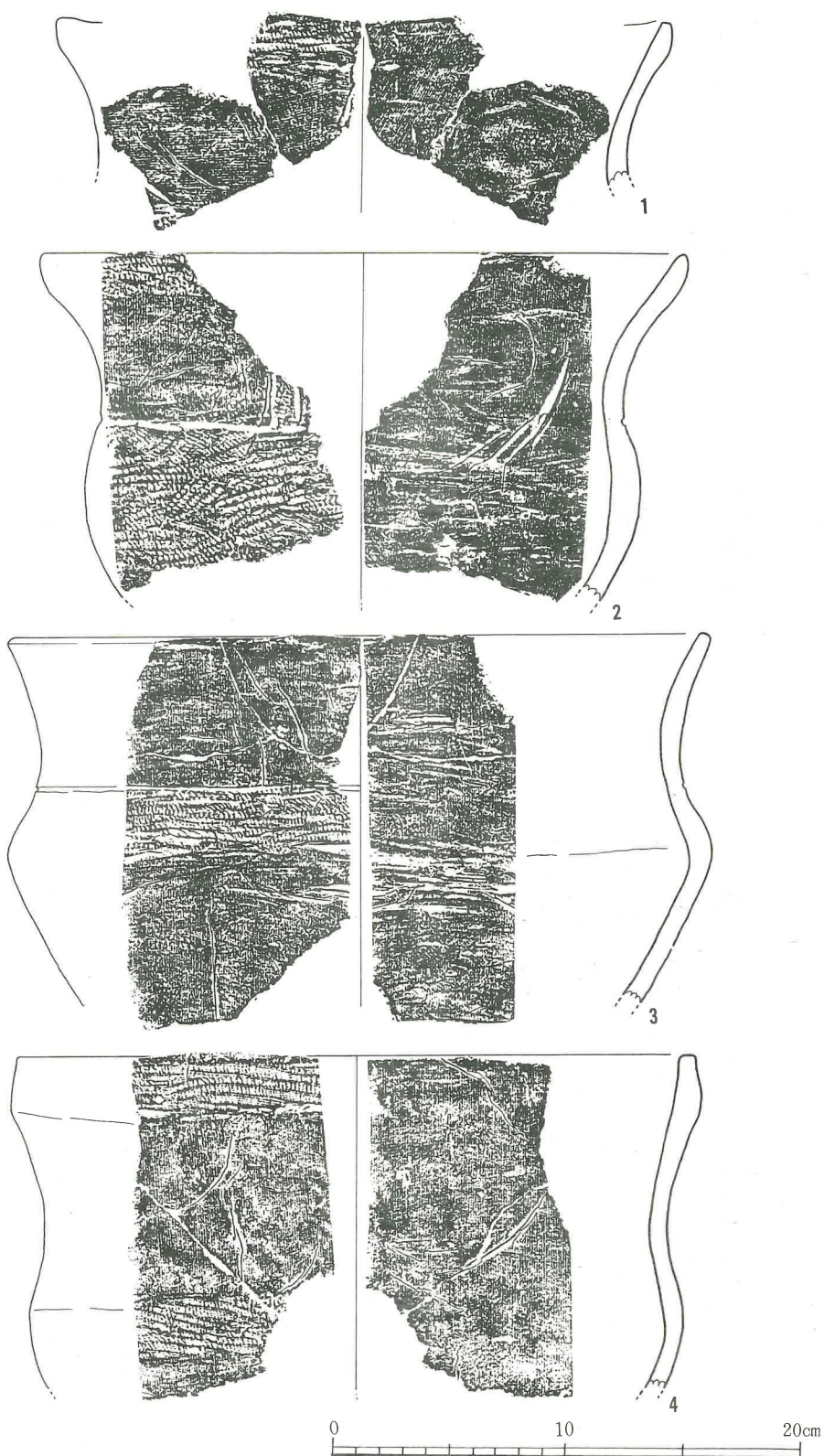
第8図 佐知遺跡4号遺構出土土器実測図(3)



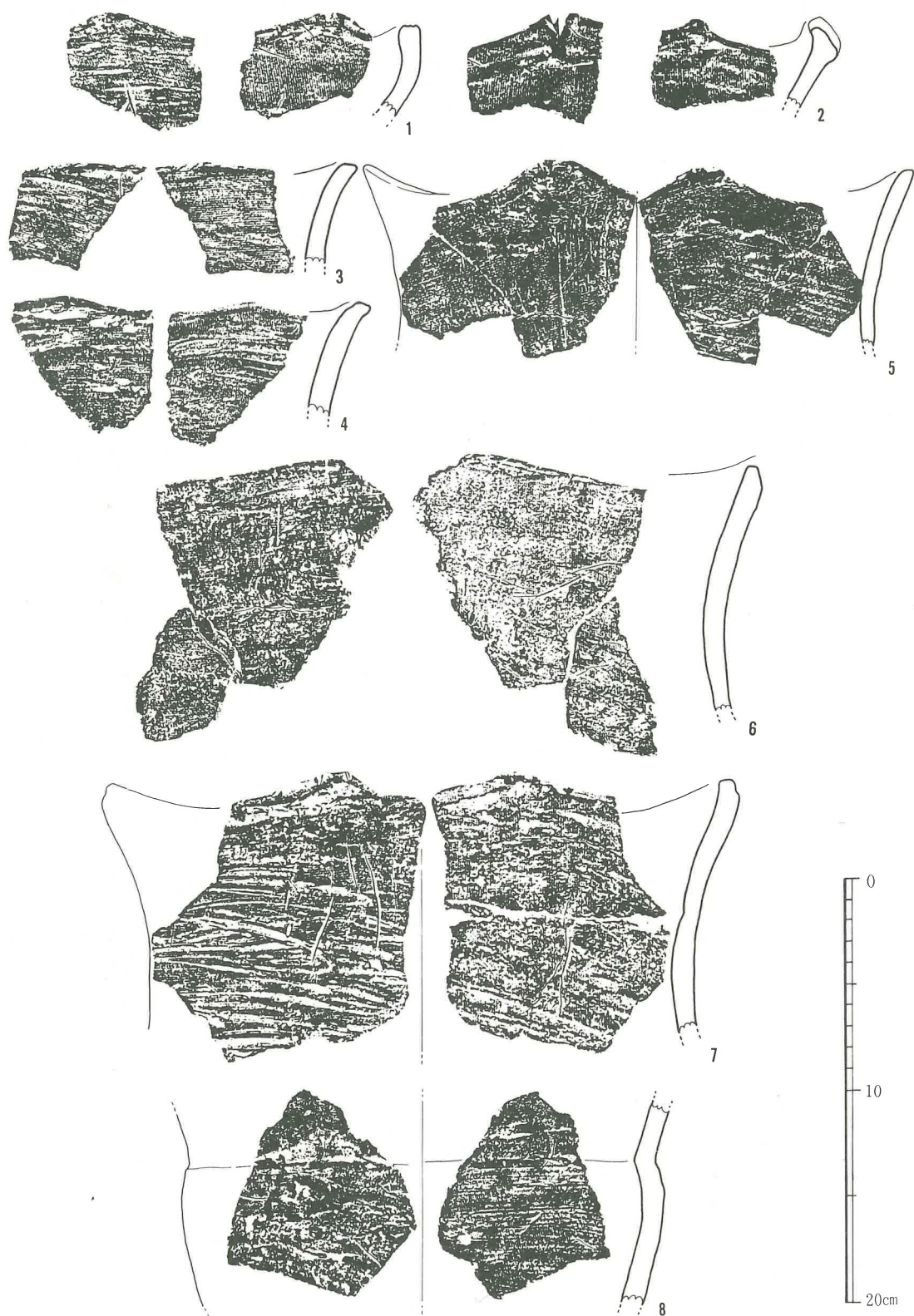
第9図 佐知遺跡4号遺構出土土器実測図(4)



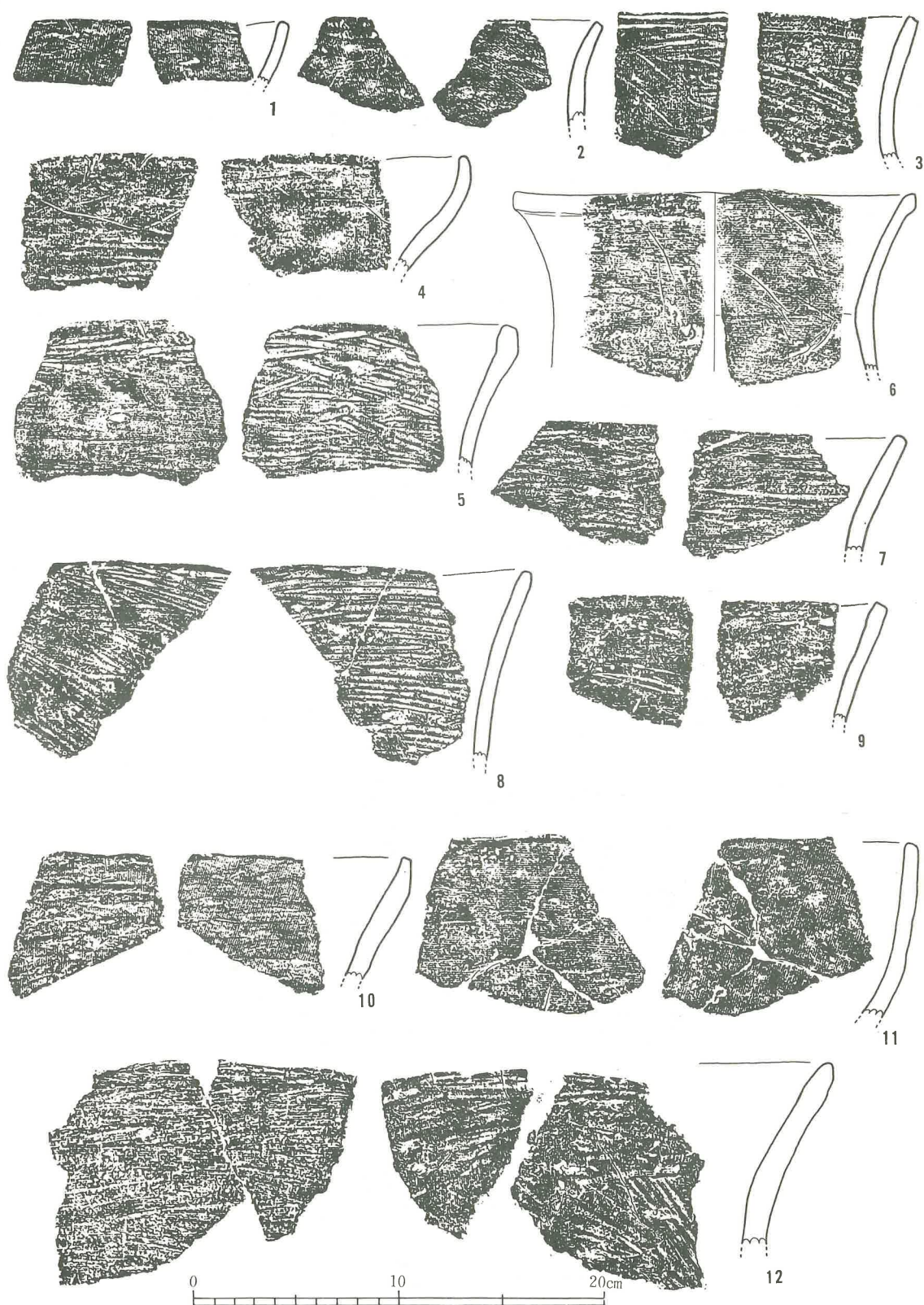
第10図 佐知遺跡 4号遺構出土土器実測図(5)



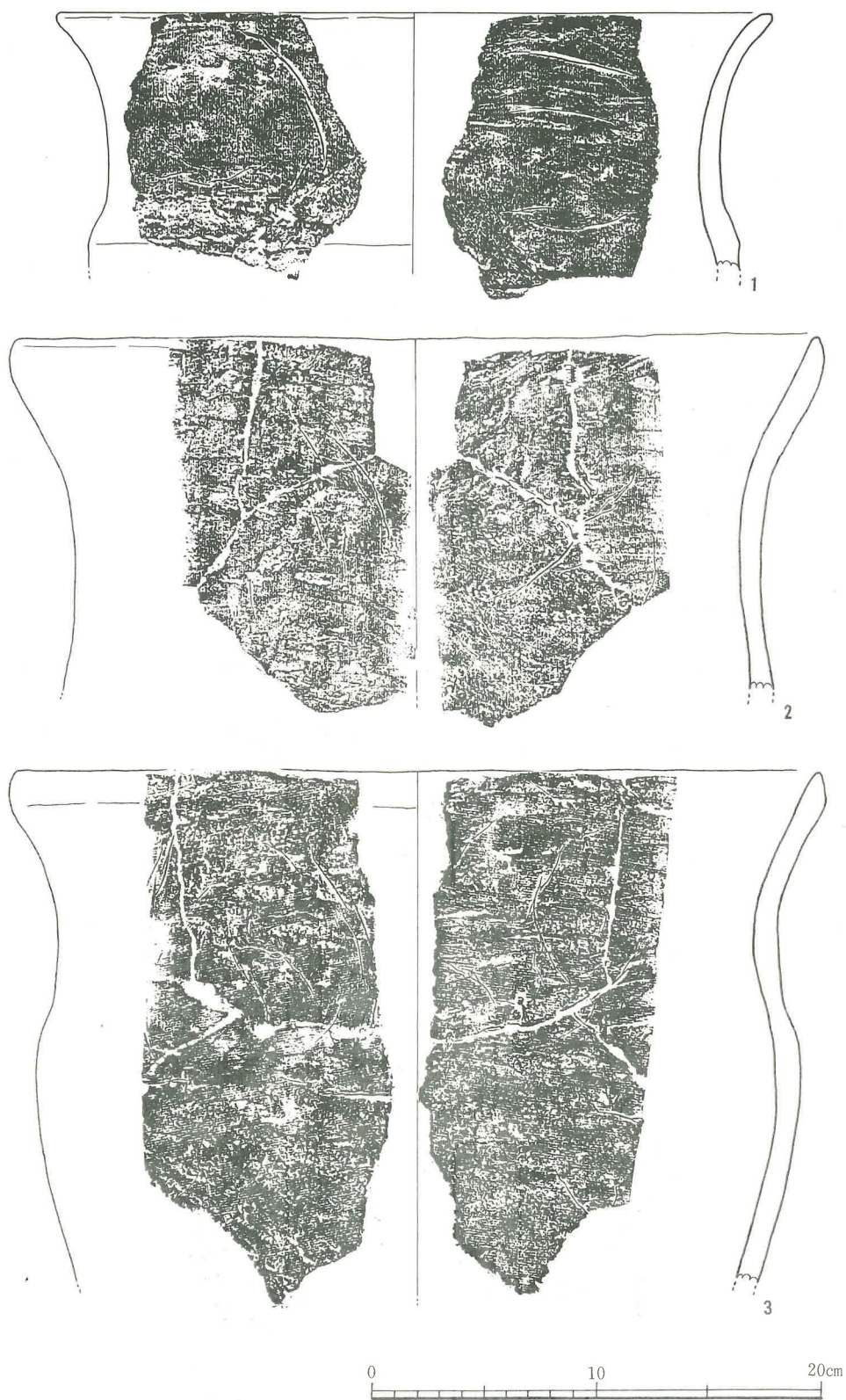
第11図 佐知遺跡4号遺構出土土器実測図(6)



第12図 佐知遺跡4号遺構出土土器実測図(7)



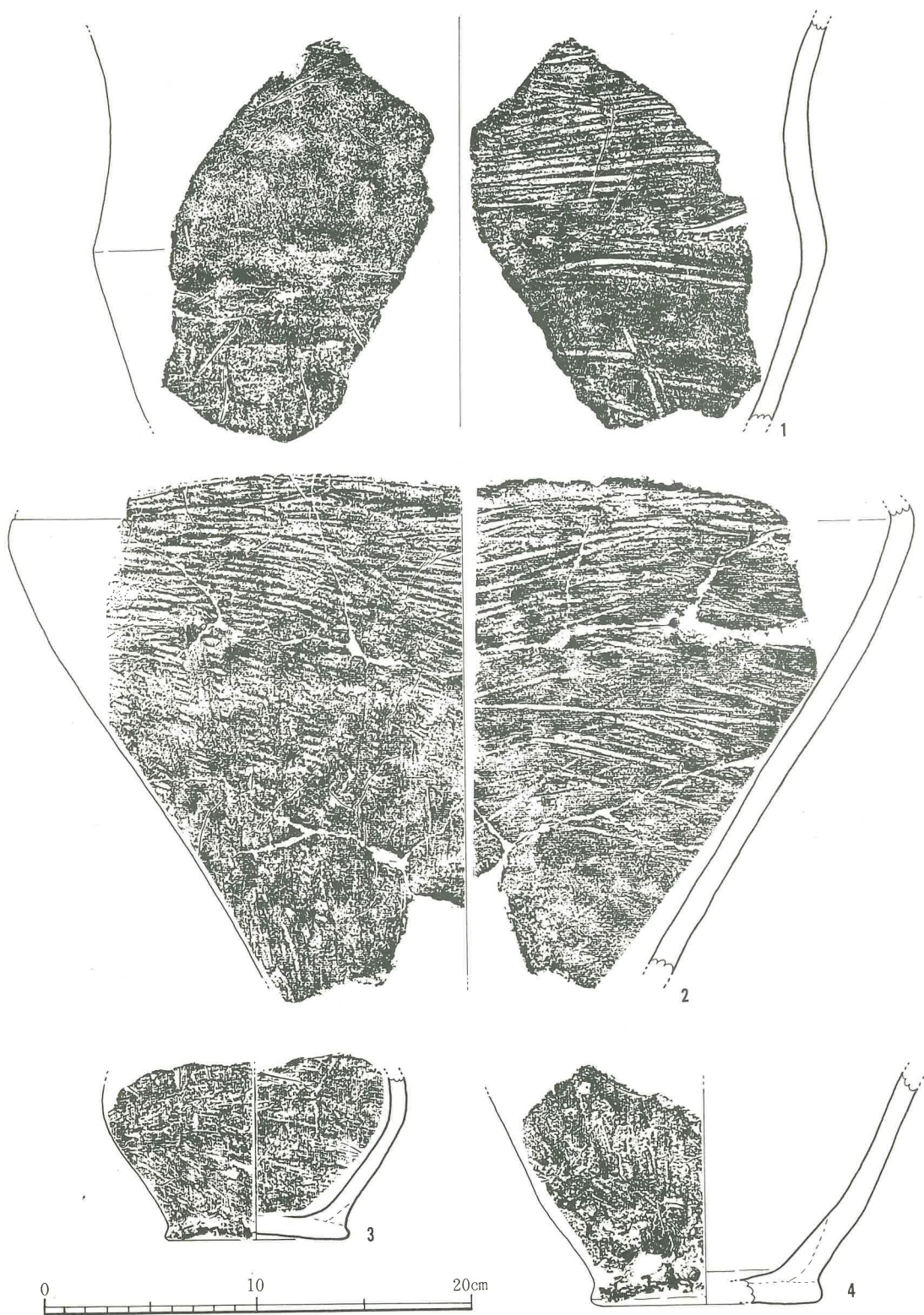
第13図 佐知遺跡 4号遺構出土土器実測図(8)



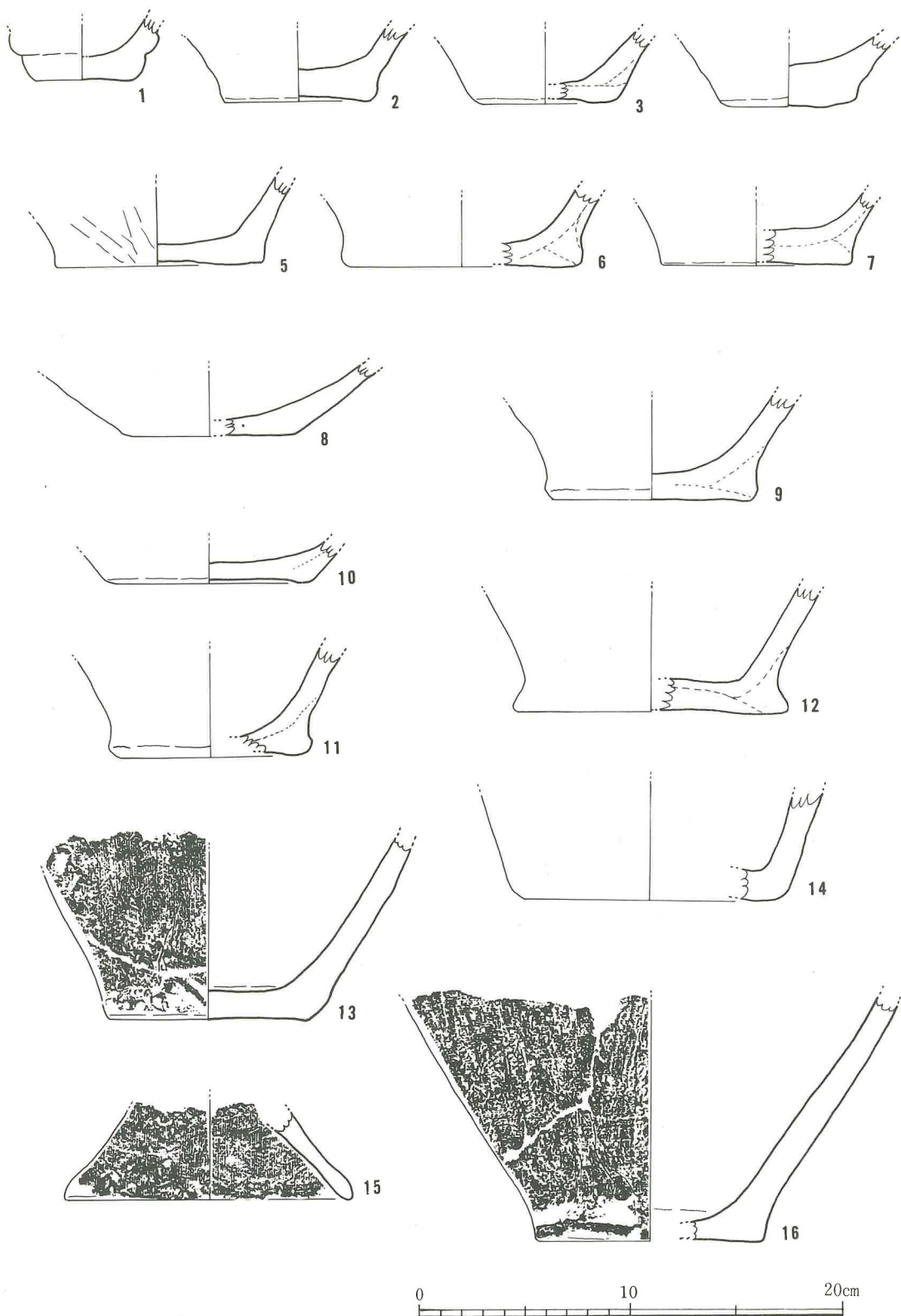
第14図 佐知遺跡4号遺構出土土器実測図(9)



第15図 佐知遺跡 4号遺構出土土器実測図(10)



第16図 佐知遺跡 4号遺構出土土器実測図(11)



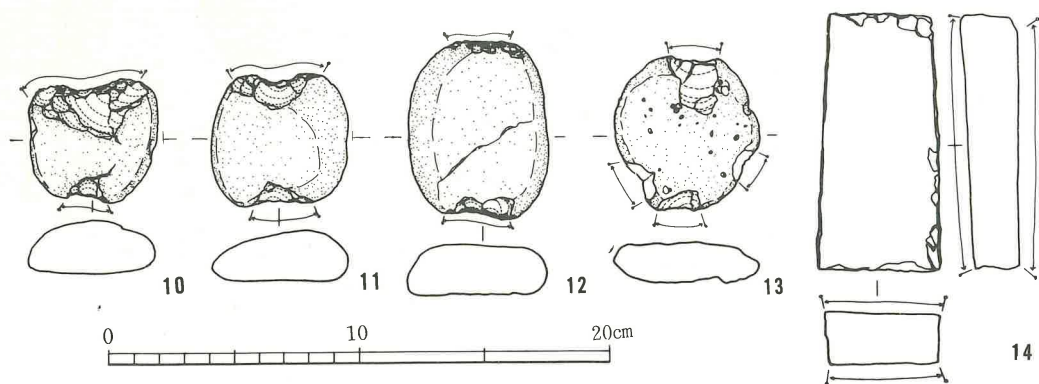
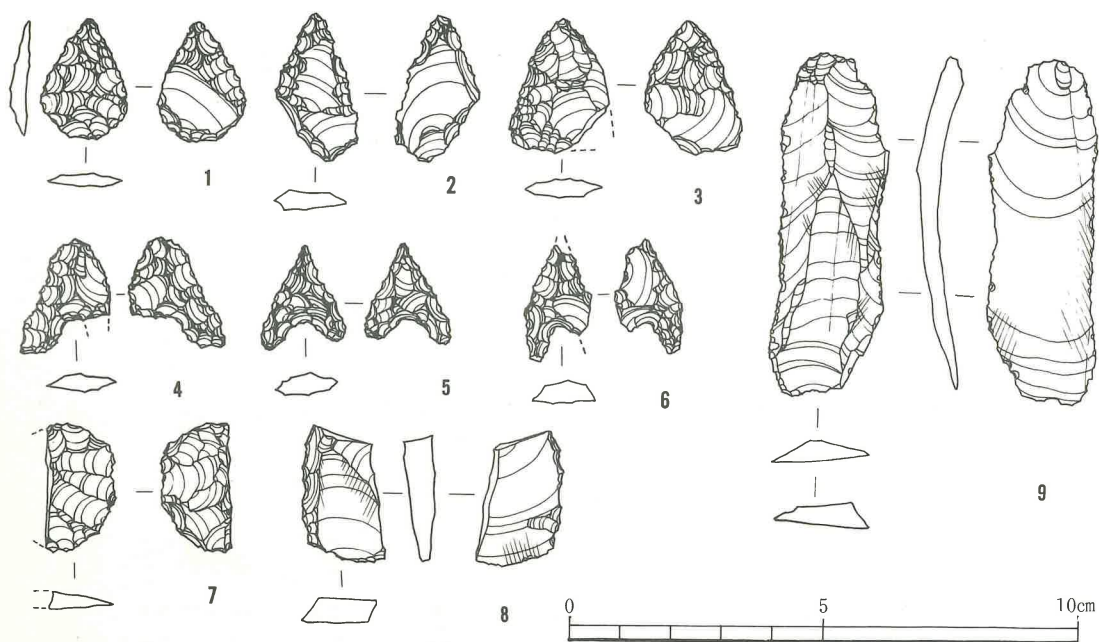
第17図 佐知遺跡4号遺構出土土器実測図(12)

第3表 佐知遺跡4号遺構出土土器観察表(1)

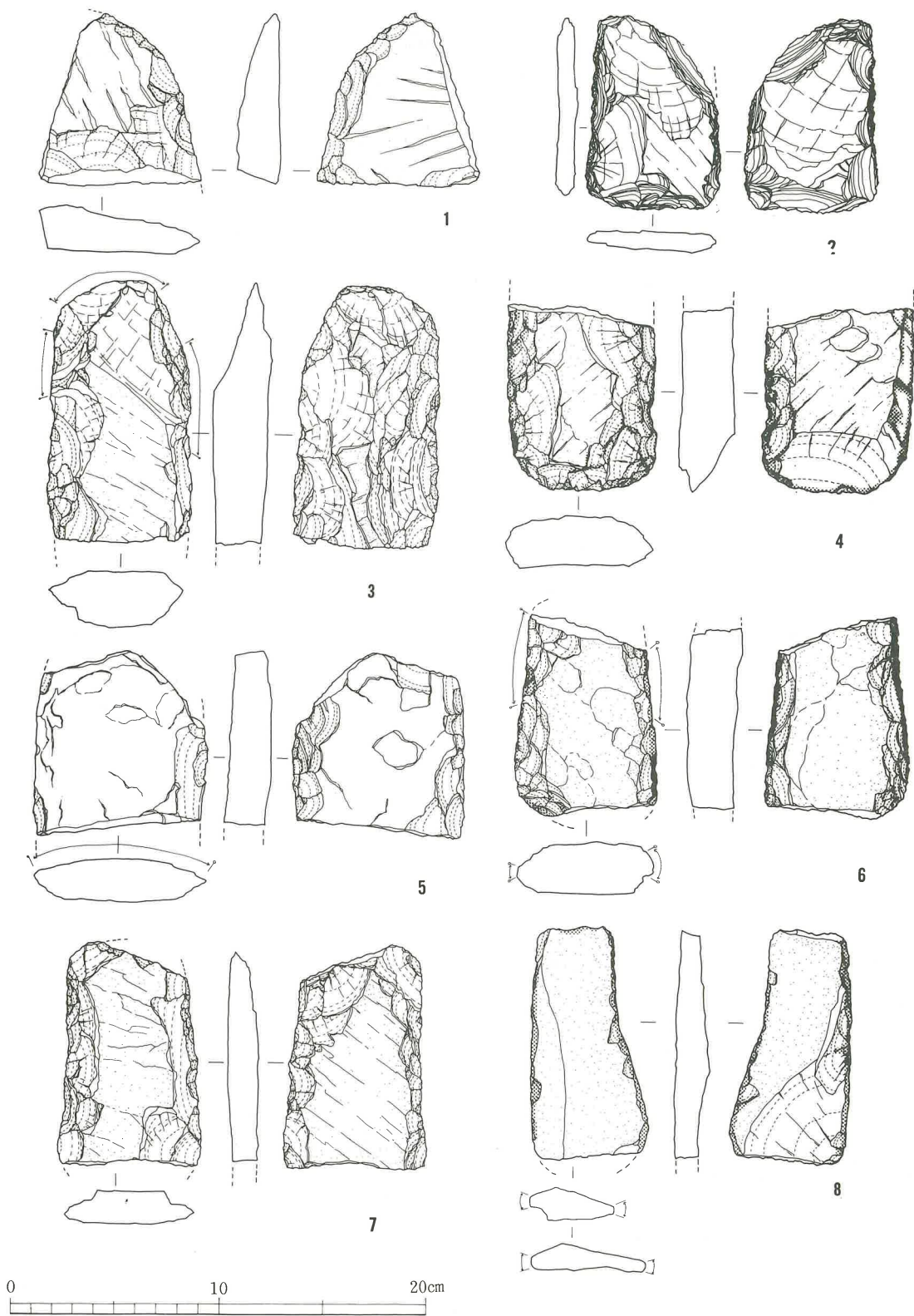
図番号	遺物番号	出土場所	文様の特徴と器面調整の方法		胎土				備考	分類
			表	裏	角閃石	斜長石	石英	その他		
6	1	4号遺構	疑似縄文、巻貝条痕	巻貝条痕一箇研磨	茶色	○	○		同一個体	I
	2		先端不揃な工具で沈線 疑似縄文	巻貝条痕一箇研磨		○	○			I
	3		縄文→2条沈線 茶色	横ナデ		○	○			I
	4		縄文→沈線、下位は横篋研磨	横篋研磨	暗茶色	○	○	白色粒		I
	5		縄文→2条沈線	横篋研磨		○	○	白色粒		I
	6		疑似縄文→沈線 横篋研磨 茶色	横篋研磨 巻貝条痕	黒色	○	○	白色粒		I
	7		疑似縄文→沈線 横篋研磨	横篋研磨		○	○	白色粒		I
	8		縄文→沈線 下位は縦ナデ 黒色	横ナデ		○	○			I
	9		縄文→沈線 下位は横篋研磨	横篋研磨		○	○	白色粒		I
	10		疑似縄文→沈線 巻貝条痕→横篋研磨	巻貝条痕	明茶色	○	○	白色粒		I
	11		疑似縄文 巻貝条痕→横篋研磨 茶色	巻貝条痕		○	○			I
	12		疑似縄文 横篋研磨 茶色	横篋研磨		○	○	白色粒	スス付着	I
	13		縄文→沈線 横篋研磨	横篋研磨		○	○	○		I
	14		疑似縄文 横篋研磨 先端の細い篋	横篋研磨		○	○			I
	15		縄文 縦ナデ 明茶色	横ナデ		○	○			I
7	1	4号遺構	縄文→一箇研磨 精製土器 茶色	横篋研磨		○	○		スス付着	I
	2		疑似縄文→上下は横篋研磨 円形刺突	横篋研磨	明茶色	○	○			I
	3		縄文→沈線 文様部丹塗 篋研磨	横篋研磨		○	○	白色粒		I
	4		疑似縄文→沈線 横篋研磨	横篋研磨		○	○			I
	5		縄文→沈線 茶色	横篋研磨	灰茶色	○	○			I
	6		疑似縄文→沈線 上は横篋研磨	横ナデ		○	○			I
	7		疑似縄文→沈線 刺突 上下横篋研磨	横篋研磨		○	○			I
	8		疑似縄文→沈線 頭部は横篋研磨	横篋研磨	明茶色	○	○			I
	9		口縁と胴部は縄文→沈線 横篋研磨	横篋研磨	黄茶色	○	○	白色粒		I
	10		条痕→縄文→沈線→横篋研磨→丹塗	横篋研磨		○	○			I
8	1	4号遺構	横ナデ→沈線 暗茶色	横篋研磨		○	○	白色粒		II
	2		横ナデ→棒条工具による沈線 茶色	横篋研磨		○	○			II
	3		巻貝条痕→ナデ→沈線 灰茶色	巻貝条痕		○	○			II
	4		巻貝条痕→ナデ→沈線 茶色	横方向の巻貝条痕→粗い篋研磨		○	○			II
	5		横方向の篋研磨 茶色	横篋研磨→沈線・刺突		○	○			III
	6		横方向の篋研磨→沈線 茶色	横篋研磨		○	○	白色粒		III
	7		横ナデ→沈線	横篋研磨		○	○	○ 白色粒		III
	8		沈線→横方向の篋研磨 茶色	横篋研磨		○	○			III
	9		横ナデ→沈線 口唇部にも沈線 茶色	横ナデ		○	○			IV
	10		横ナデ→沈線 暗茶色	横ナデ		○	○	白色粒		II
	11		巻貝条痕→横篋ナデ→羽状文 茶色	横篋ナデ		○	○			IV
	12		縦横斜目方向ナデ 茶色	横篋研磨		○	○	○		
	13		条痕→一箇研磨 茶色	横ナデ		○	○			
9	1	4号遺構	縄文→横篋研磨 茶色	横篋研磨		○	○			V
	2		縄文→横篋研磨 茶色	横篋研磨		○	○			V
	3		巻貝条痕→縄文 明茶色	横ナデ		○	○			V
	4		巻貝条痕→縄文 茶色	横篋研磨		○	○	白色粒		V
	5		巻貝条痕→縄文 茶色	横巻貝条痕→横篋研磨		○	○	白色粒		V
	6		縄文→横ナデ 茶色	横ナデ		○	○			V
	7		縄文→横篋研磨 暗茶色	横ナデ		○	○	白色粒		V
	8		縄文→横篋研磨 灰暗茶色	横ナデ		○	○	白色粒		V
	9		巻貝条痕→縄文→横篋研磨 茶色	巻貝条痕		○	○	白色粒		V
10	1	4号遺構	疑似縄文→横篋研磨 茶色	横ナデ		○	○			V
	2		疑似縄文→横篋研磨 茶色	横篋研磨		○	○			V
	3		疑似縄文 薄茶色	横篋研磨		○	○			V
	4		巻貝条痕→疑似縄文 茶色	疑似縄文		○	○			V
	5		疑似縄文→横方向の篋研磨 黄茶色	横篋研磨 横ナデ		○	○			V
	6		疑似縄文→横方向の篋研磨 黄茶色	横篋研磨		○	○			V
	7		巻貝条痕→疑似縄文 茶色	ナデ		○	○			V
	8		疑似縄文→横篋研磨 茶色	横巻貝条痕→横篋研磨		○	○	白色粒		V

第4表 佐知遺跡4号遺構出土土器観察表(2)

図番号	遺物番号	出土場所	文様の特徴と器面調整の方法		胎土				備考	分類
			表	裏	陶器	石器	土	その他		
11	1	4号遺構	疑似縄文一横・縦篋研磨	暗茶色	横篋研磨	○	○			V
	2		疑似縄文一沈線一横篋研磨		巻貝条痕一横篋研磨	○	○			V
	3		胴部疑似縄文一横篋研磨	茶色	巻貝条痕一横篋研磨	○	○			V
	4		疑似縄文一横篋研磨	明茶色	上位横篋研磨、下位横ナデ	○	○			V
12	1	4号遺構	横篋研磨	明茶色 茶色	横篋研磨	○	○		スス付着	VI
	2		横篋研磨	茶色	横篋研磨	○	○			VI
	3		横篋研磨	茶色	横篋研磨	○	○			VI
	4		横篋研磨	茶色	横篋研磨	○	○			VI
	5		縦ナデ	黒茶色	条痕一横ナデ	○	○	白色粒		VI
	6		条痕一横篋研磨	茶色	横篋研磨	○	○	赤色粒		VI
	7		巻貝条痕一ナデ	暗茶色	器面は粗いナデ	○	○	砂粒	スス付着	VI
	8		ナデ		巻貝条痕一ナデ	○	○			VI
13	1	4号遺構	入念な横篋研磨精製	茶色	横篋研磨	○	○	白色粒		VI
	2		疑似縄文一横篋研磨	暗茶色	横篋研磨	○	○	白色粒		VI
	3		巻貝条痕一ナデ	茶色	巻貝条痕	○	○			VI
	4		条痕一ナデ	茶色	横ナデ	○	○	白色粒		VI
	5		巻貝条痕一ナデ	茶色	巻貝条痕	○	○	白色粒		VI
	6		横削り状一横篋研磨	暗茶色	横ナデ	○	○			VI
	7		巻貝条痕一横篋研磨	茶色	巻貝条痕一横篋研磨	○	○	白色粒		VI
	8		巻貝条痕	茶色	巻貝条痕	○	○		スス付着	VI
	9		横削り状	茶色	横削り状	○	○	白色粒		VI
	10		横削り状	茶色	横篋研磨	○	○			VI
	11		横篋研磨	茶色	横篋研磨	○	○			VI
	12		巻貝条痕一疑似縄文一篋研磨	茶色	横削り状	○	○			VI
14	1	4号遺構	横ナデ一粗い横篋研磨	暗茶色	横の粗い篋研磨	○	○	白色粒		VI
	2		横篋研磨	茶色	横篋研磨	○	○	白色粒		VI
	3		横篋研磨	茶色	横篋研磨	○	○	白色粒		VI
15	1	4号遺構	横の入念な篋研磨	茶色	横の入念な篋研磨	○	○			VI
	2		横篋研磨	黒茶色	横篋研磨	○	○	白色粒	スス付着	VI
	3		口は横ナデ 頸は横 胴は縦の篋研磨		上位横篋研磨 下位ナデ	○	○	○		VI
	4		横条痕一横ナデ	茶色	横篋研磨	○	○	白色粒		VI
16	1	4号遺構	二枚貝条痕	暗茶色	横ナデ	○	○		スス付着	VI
	2		巻貝条痕一粗い縦篋研磨	茶色	巻貝条痕一横ナデ	○	○			VI
	3		削り状の条痕	茶色	横の削り状条痕	○	○	白色粒		VI
	4		上位縦ナデ 底部横ナデ	茶色	ナデ	○	○	白色粒		VI
17	1	4号遺構	横ナデ	灰茶色	ナデ	○	○	○		
	2		ナデ	明茶色	ナデ	◎	◎			
	3		横ナデ	淡茶色	ナデ	○	○	○	白色粒	
	4		横ナデ 不安定	暗茶色	ナデ	○	○			
	5		底は篋研磨 横篋研磨	茶色	ナデ	○	○	白色粒		
	6		横ナデ	明茶色	ナデ	◎	◎			
	7		底は篋研磨 胴部は縦研磨	白茶色	ナデ	○	○			
	8		横の粗い篋研磨	茶色	ナデ	○	○			
	9		横ナデ	明茶色	横篋研磨	○	○			
	10		横篋研磨	茶色	篋ナデ	○	○	白色粒		
	11		横ナデ一横篋研磨	明茶色	ナデ	○	○			
	12		底は網代圧痕 胴部ナデ	灰灰茶色	ナデ	○	○			
	13		底は網代圧痕 胴部条痕		横条痕	○	○	○	白色粒	
	14		底篋ナデ 胴は縦の粗いナデと篋研磨		ナデ	○	○			
	15		横ナデ		横ナデ	○	○	白色粒		
	16		横ナデ		ナデ	○	○	白色粒		



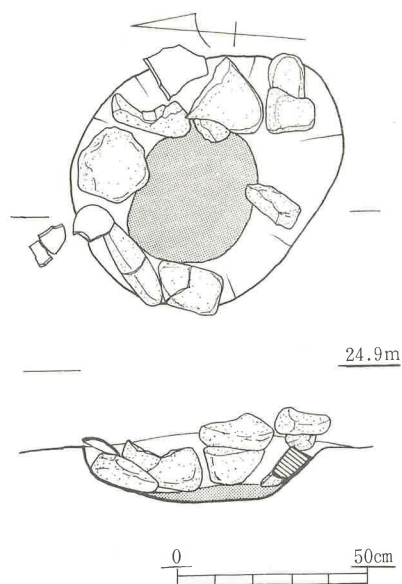
第18図 佐知遺跡4号遺構出土石器実測図(1)



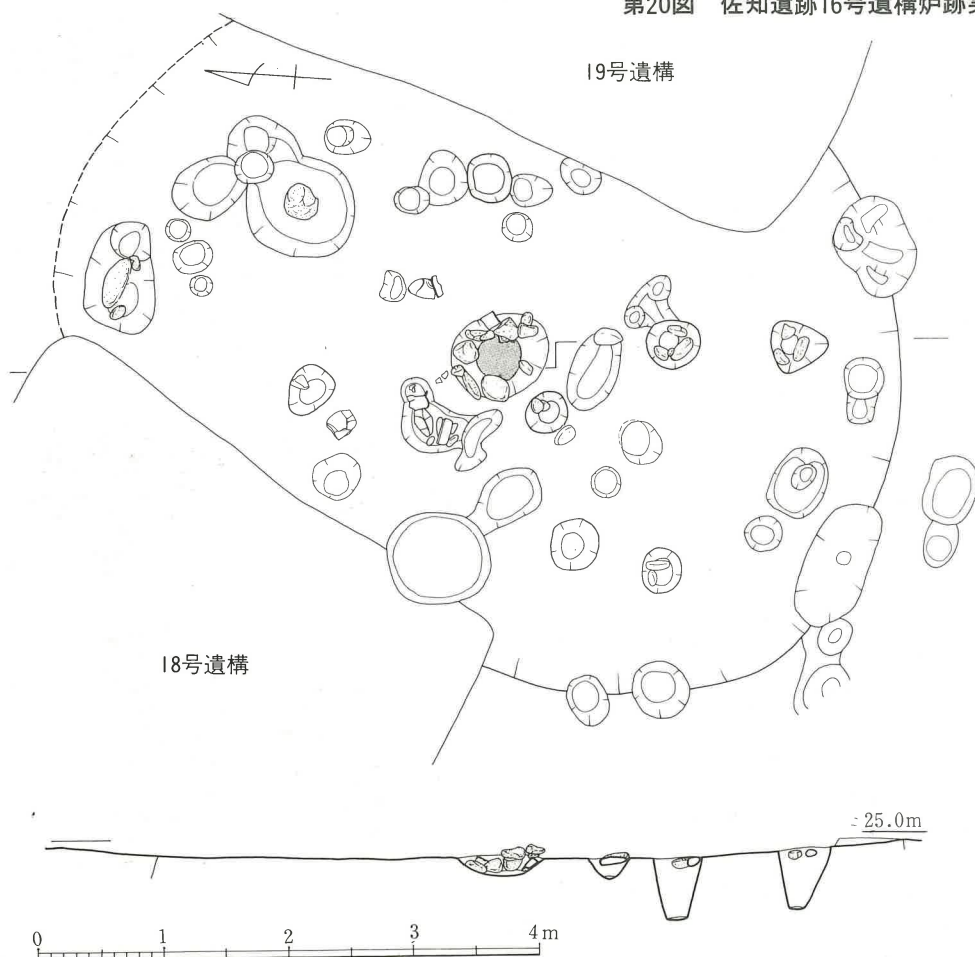
第19図 佐知遺跡4号遺構出土石器実測図(2)

2) 16号遺構 (第21図)

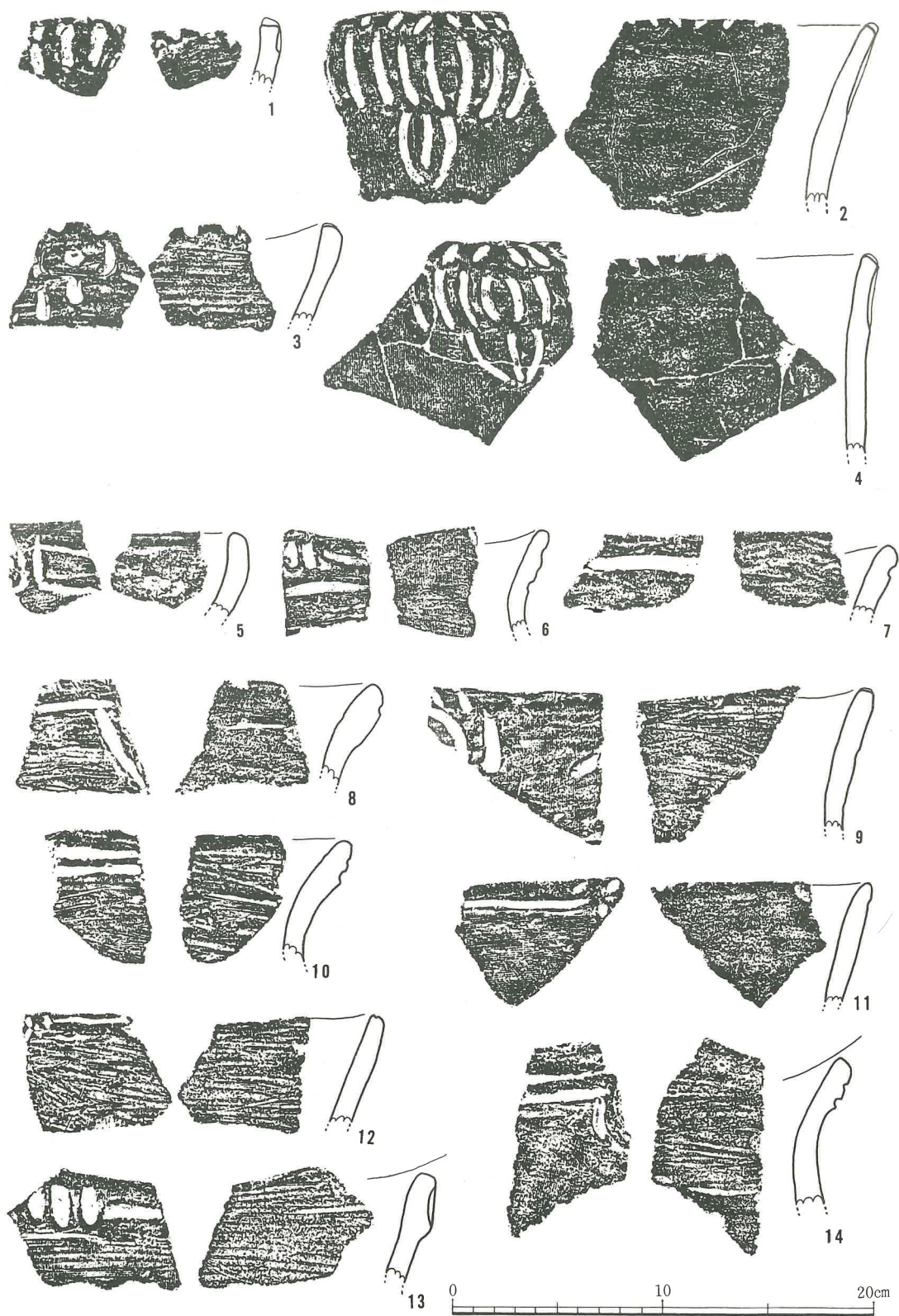
調査区の中央部のA・B-8区を調査中縄文後期の土器が集中的に出土した。その部分を掘り下げた結果、一部壁の部分は不明確であったが住居跡を検出した。想定できる住居跡の規模は、長軸が約5mの楕円形の平面観を呈する。しかし、短軸方向は19号遺構と13号遺構に切られ不明である。検出面から床面までは浅く、従って壁の立ち上がりは南部が皿状になるが北部は判別できない。床面の中央部からは7個の円礫を径0.7mの範囲に組み、南に開く形態の石囲炉が検出された。中は掘り窪められており、その部分には焼土が詰まっていた。また柱穴のいくつかには根石をつめたものも観察された。



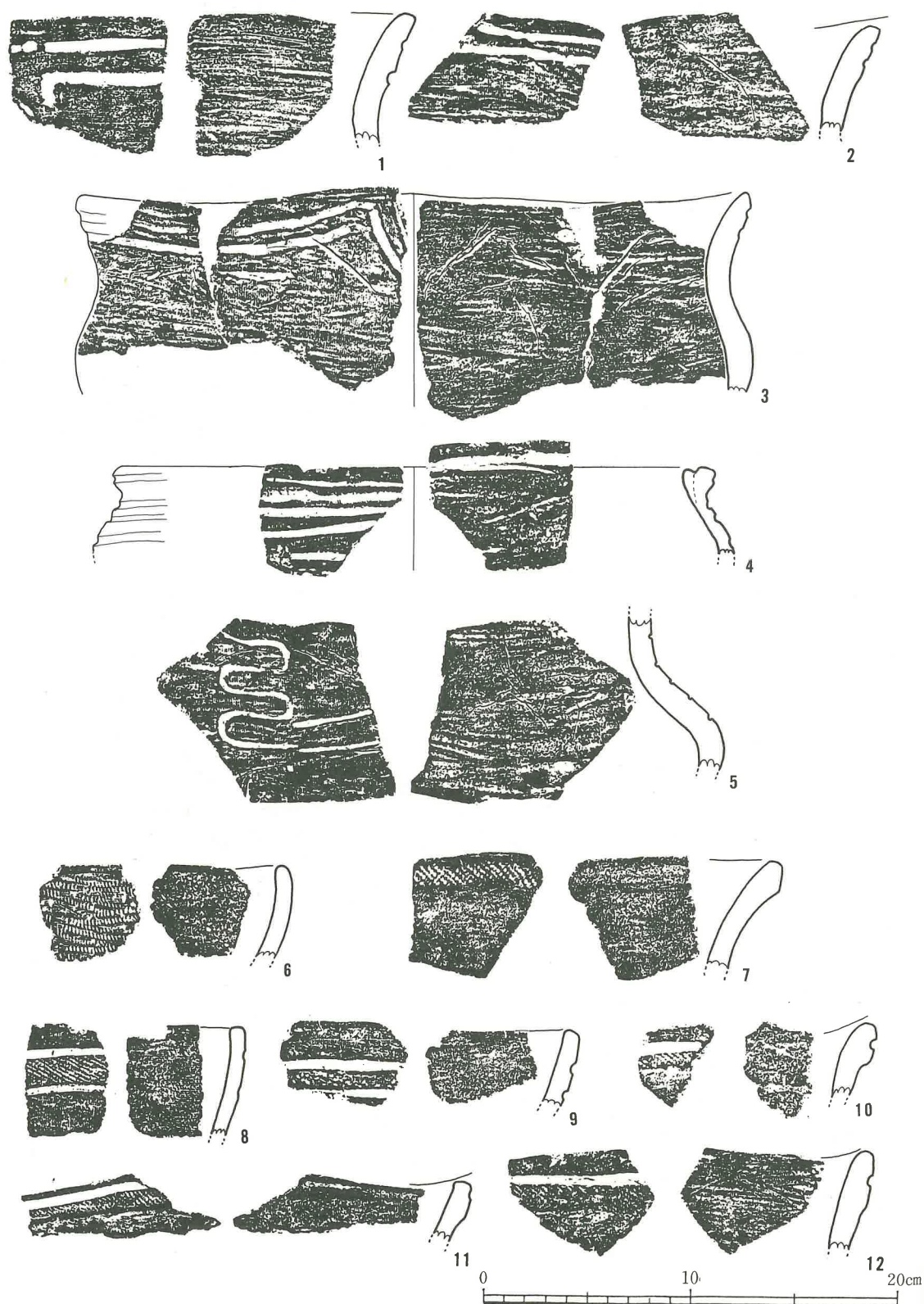
第20図 佐知遺跡16号遺構炉跡実測図



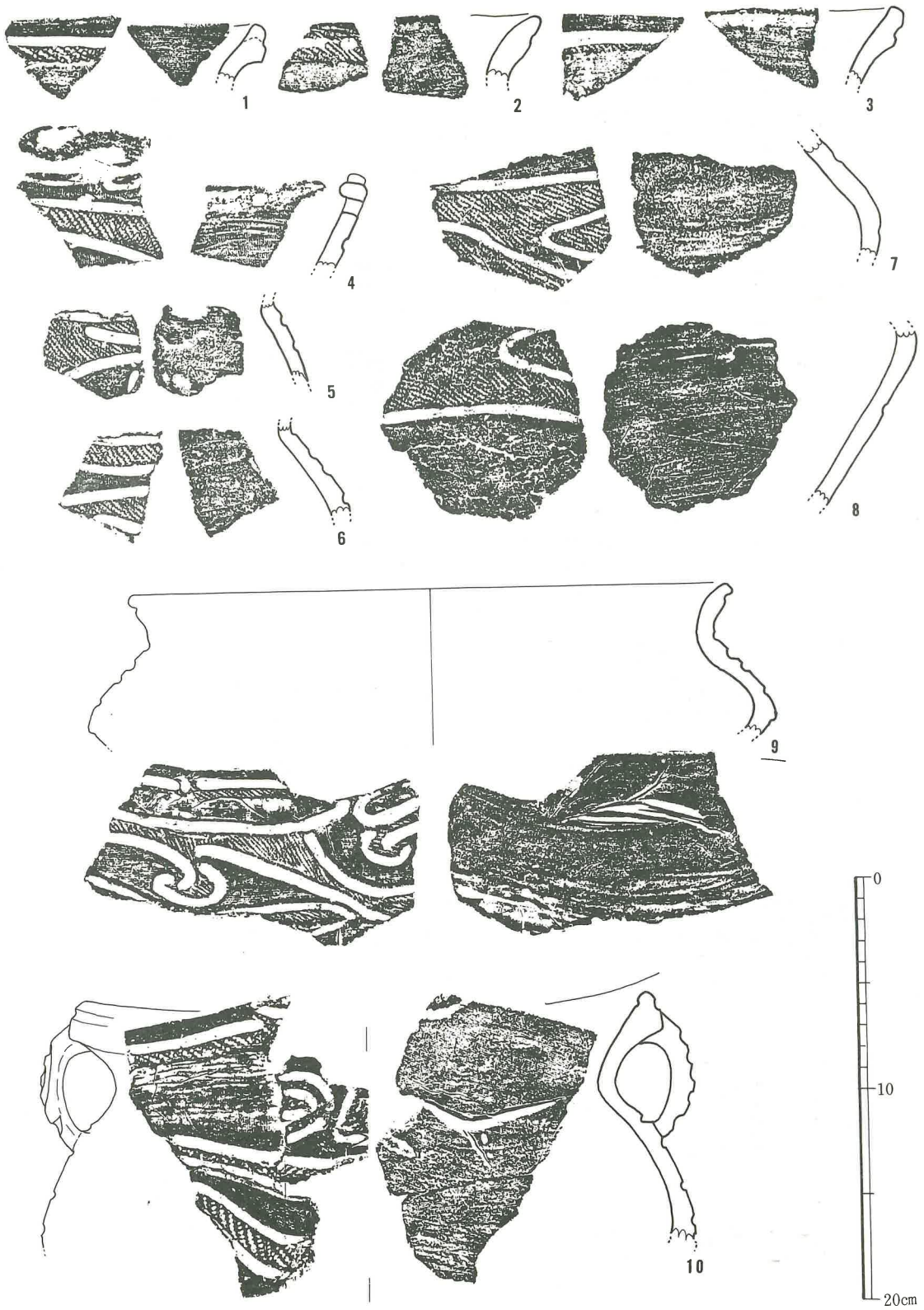
第21図 佐知遺跡16号遺構実測図



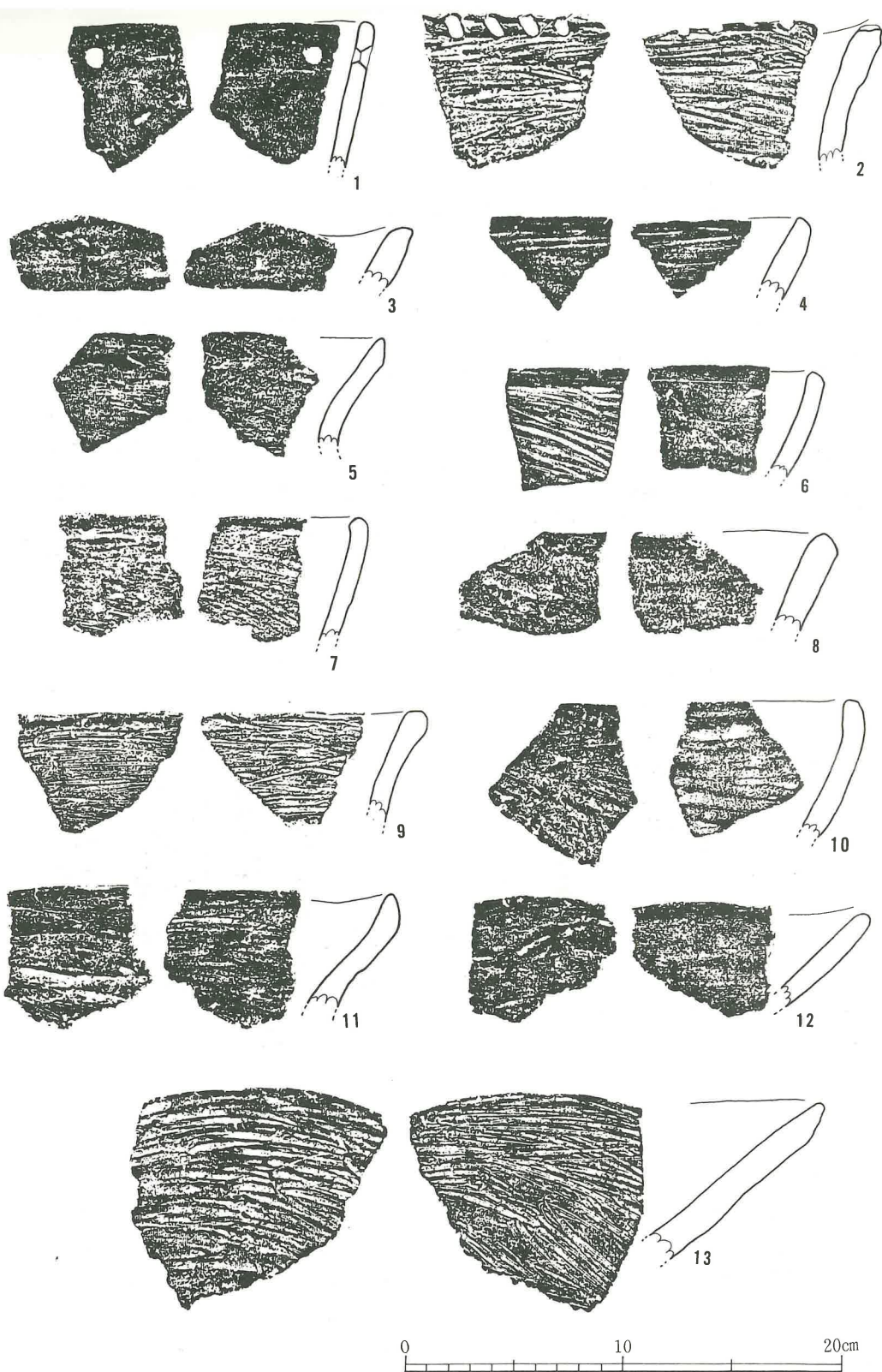
第22図 佐知遺跡16号遺構出土土器実測図(1)



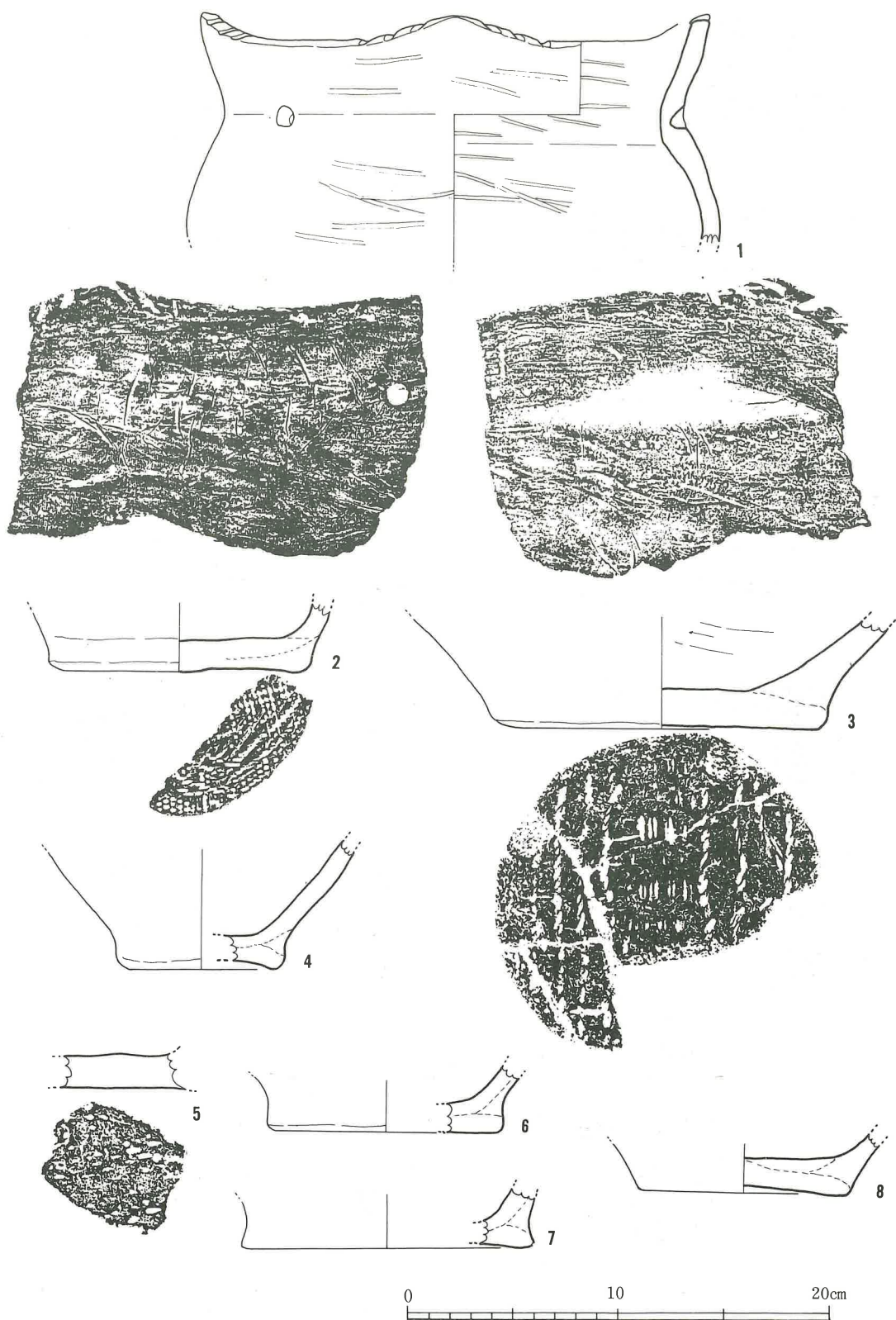
第23図 佐知遺跡16号遺構出土土器実測図(2)



第24図 佐知遺跡16号遺構出土土器実測図(3)



第25図 佐知遺跡16号遺構出土土器実測図(4)



第26図 佐知遺跡16号遺構出土土器実測図(5)

第5表 佐知遺跡16号遺構出土土器観察表

図番号	遺物番号	出土位置	文 様 の 特 徴 と 器 面 調 整 の 方 法		胎 土				備考	分類
			表	裏	隅閃石	斜長石	石英	その他		
22	16号遺構	1	ナデ→口唇・口縁に沈線 茶色	ナデ	○	○		白色粒		I
		2	横ナデ→口唇・口縁に沈線 茶色	横篋研磨	○	○				I
		3	二枚貝条痕→横ナデ 茶色	二枚貝条痕	○	○				I
		4	横ナデ→口唇・口縁に沈線 茶色	横篋研磨	○	○			2と同一個体	I
		5	横ナデ→沈線 茶色	横篋研磨	○	○				II
		6	横篋研磨→沈線 暗茶色	横篋研磨	○	○				II
		7	横ナデ 淡茶色	横ナデ	○	○				II
		8	条痕→横ナデ→沈線 茶色	横篋研磨	○	○				II
		9	横ナデ→頂部口唇に刻目・沈線 茶色	横篋研磨	○	○				II
		10	巻貝条痕→ナデ→沈線 黒茶色	巻貝条痕	○	○				II
		11	横ナデ 茶色	横ナデ	○	○				II
		12	巻貝条痕→口唇に沈線+刺突 黒茶色	巻貝条痕	○	○				II
		13	巻貝条痕→沈線 茶色	巻貝条痕	○	○		白色粒		II
		14	ナデ→沈線 暗茶色	巻貝条痕→ナデ	○	○				II
23	16号遺構	1	横ナデ→沈線 茶色	巻貝条痕	○	○				II
		2	条痕→横ナデ→先端不揃いな沈線 茶色	横ナデ	○	○				II
		3	巻貝条痕→ナデ→沈線 暗茶色	巻貝条痕→ナデ	○	○				II
		4	横ナデ→沈線→篋研磨 茶色	横篋研磨	○	○				III
		5	横ナデ→沈線 茶色	条痕状のナデ	○	○				IV
		6	疑似縄文 口唇は横ナデ 茶色	横篋研磨	○	○				V
		7	縄文→横ナデ 茶色	横ナデ	○	○				V
		8	沈線→縄文→横篋研磨 黒色	横篋研磨	○	○				VI
		9	横ナデ→縄文→沈線 茶色	横ナデ	○	○				VI
		10	縄文→沈線→横ナデ 暗茶色	横ナデ	○	○		白色粒		VI
		11	縄文→沈線→横ナデ 茶黒色	横ナデ	○	○				VI
		12	縄文→沈線→横ナデ 黄茶色	巻貝条痕	○	○				VI
24	16号遺構	1	縄文→沈線→横篋研磨 暗茶色	横篋研磨	○	○				VI
		2	縄文→沈線→横篋研磨 黄茶色	横篋研磨	○	○				VI
		3	縄文→沈線→横篋研磨 明茶色	横篋研磨	○	○				VI
		4	縄文→沈線→横篋研磨 穿孔 暗茶色	横篋研磨、口唇にS字条貼り付け	○	○		白色粒		VI
		5	縄文→沈線→篋研磨 黄茶色	ナデ	○	○				VI
		6	縄文→沈線→篋研磨 黒茶色	横篋研磨	○			白色粒		VI
		7	縄文→沈線→篋研磨 明茶色	横篋研磨	○	○				VI
		8	縄文→沈線→篋研磨 明茶色	横篋研磨	○	○				VI
		9	縄文→沈線→篋研磨 茶色	条痕→横篋研磨	○	○	○			VI
		10	縄文→沈線→篋研磨	条痕→横篋研磨	○	○	○			VI
25	16号遺構	1	穿孔→横篋研磨 茶色	横篋研磨	○	○		白色粒		VII
		2	巻貝条痕→粗い篋研磨→口唇刻目 茶色	巻貝条痕→粗い篋研磨	○	○				VII
		3	磨減 明茶色	磨減	○	○				VII
		4	横条痕→横篋研磨 茶色	横条痕→横篋研磨	○	○				VII
		5	横篋研磨 明茶色	横篋研磨	○	○				VII
		6	巻貝条痕 茶色	横篋研磨	○	○				VII
		7	粗いナデ 明茶色	巻貝条痕	○	○		白色粒		VII
		8	横篋研磨 明茶色	横篋ナデ	◎	○				VII
		9	巻貝条痕 茶色	巻貝条痕	○	○				VII
		10	粗い篋ナデ 黄茶色	巻貝条痕	○	○				VII
		11	粗い横篋ナデ 暗茶色	粗い篋ナデ	○	○				VII
		12	横篋研磨 暗茶色	横篋研磨	○	○				VII
		13	巻貝条痕 茶色	巻貝条痕	○	○		白色粒		VII
26	16号遺構	1	横篋ナデ→穿孔・頂部に刻目 茶色	横篋ナデ	○	○				VII
		2	横ナデ 網代圧痕 茶色	横ナデ	○	○	○			
		3	網代圧痕 縦ナデ 淡茶色	横削り条痕	○	○				
		4	巻貝条痕 底部磨減 赤茶色	巻貝条痕	○	○		砂粒		
		5	網代圧痕 茶色	ナデ	○	○				
		6	横ナデ 茶色	横ナデ	○	○				
		7	横ナデ 茶色	横条痕	○	○				
		8	底部ナデ 条痕→横ナデ 赤茶色	横ナデ	○	○				

遺物は土器がほとんどで、石器は礫石錘が3点出土しているのみである。

土器は4号遺構に比べると古い様相を見せる。Ⅰ類は頸部のくびれの少ない深鉢形土器の口縁部に太い沈線で文様を描き、口唇部には刻み目を加えている。第22図1～4がその代表である。

Ⅱ類は太い沈線で文様を描く点ではⅠ類と同じであるが、文様の構成や器形が異なる。すなわち、頸部のくびれが著しくなり、口縁外端部を肥厚し文様帯にしている。この土器は小池原上層式の範疇に入るもので第22図5～14・第23図1～3がこれにあたる。

Ⅲ類は第23図4の土器であるが、短頸壺状の器形になり、口縁外端部を肥厚させ、沈線で文様を描いている。鐘崎式土器に類似する。

Ⅳ類も第23図5の1点のみである。胴部に蛇行する沈線文が描かれている。

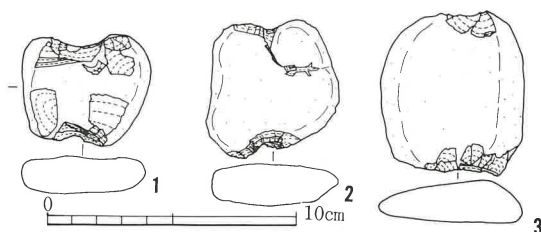
Ⅴ類は第23図6・7で口縁部の外面に縄文・疑似縄文で文様をつけている。

Ⅵ類はⅡ類の文様構成と器形に磨消縄文を加えたもので、疑似縄文は見られない。この土器は小池原上層式土器で、第23図8～12・第24図1～10がそれにあたる。特に第24図10は橋状把手をもつ典型的なものである。

Ⅶ類は第25・26図の条痕文土器である。器形はほとんどが深鉢形土器であるが第25図12・13のような浅鉢形土器もある。条痕は巻貝によるものが多く、さらに篋磨きや撫でによる器面調整を行なっている。

底部は3点に敷物の圧痕が認められた。第26図2は網代編み、同図3・5はスタレ状の圧痕である。

3点の礫石錘（第27図）はいずれも安山岩の小さな川原石を加工したものである。



第27図 佐知遺跡16号遺構出土石器実測図

3) 40号遺構(第28図)

昭和62年の試掘調査の際、多量の縄文土器が出土した。しかし、その時点では調査区が狭いため遺構の性格まで確認することはできなかった。本調査でこの部分をひろげ、精査すると、遺物が出土する範囲に限られる事がわかった。しかし、大部分が工事対象範囲の外に広がっており、調査区内でわかるのは限られたものであった。それによると16号遺構と同様な小判形のプランになる可能性が高い。検出面から約10cmで床面に達し、その面には多くの柱穴状の掘り込みが見られた。

遺物は数型式にわたる多量の土器、扁平打製石器などの石器のほか、土器片を加工した紡錘車、土偶などが出土している。

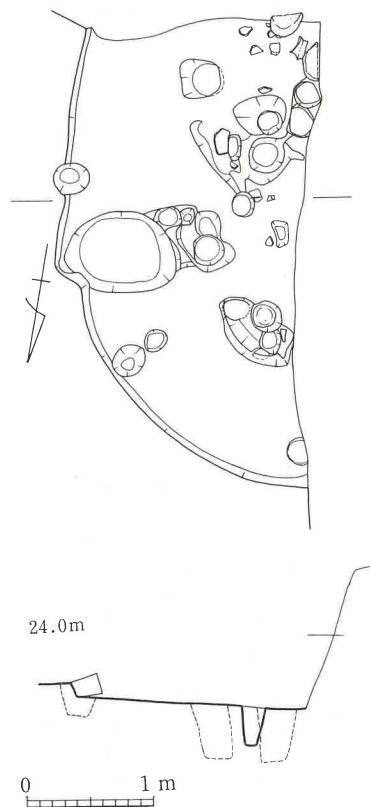
土器は4・16号遺構に較べると、複雑な状況を呈する。Ⅰ類は第29図1～3・第30図1・2・4で、外反する口縁部や橋状把手をもち、太い沈線で区画された幅広の磨消縄文で飾られている。

Ⅱ類は口縁部と胴部に文様帯が分かれ、縄文・疑似縄文を施文し、その上から細い沈線で直線的な文様を描いている。また、沈線文を加えないものも含まれる。第29図4～16がその代表例である。

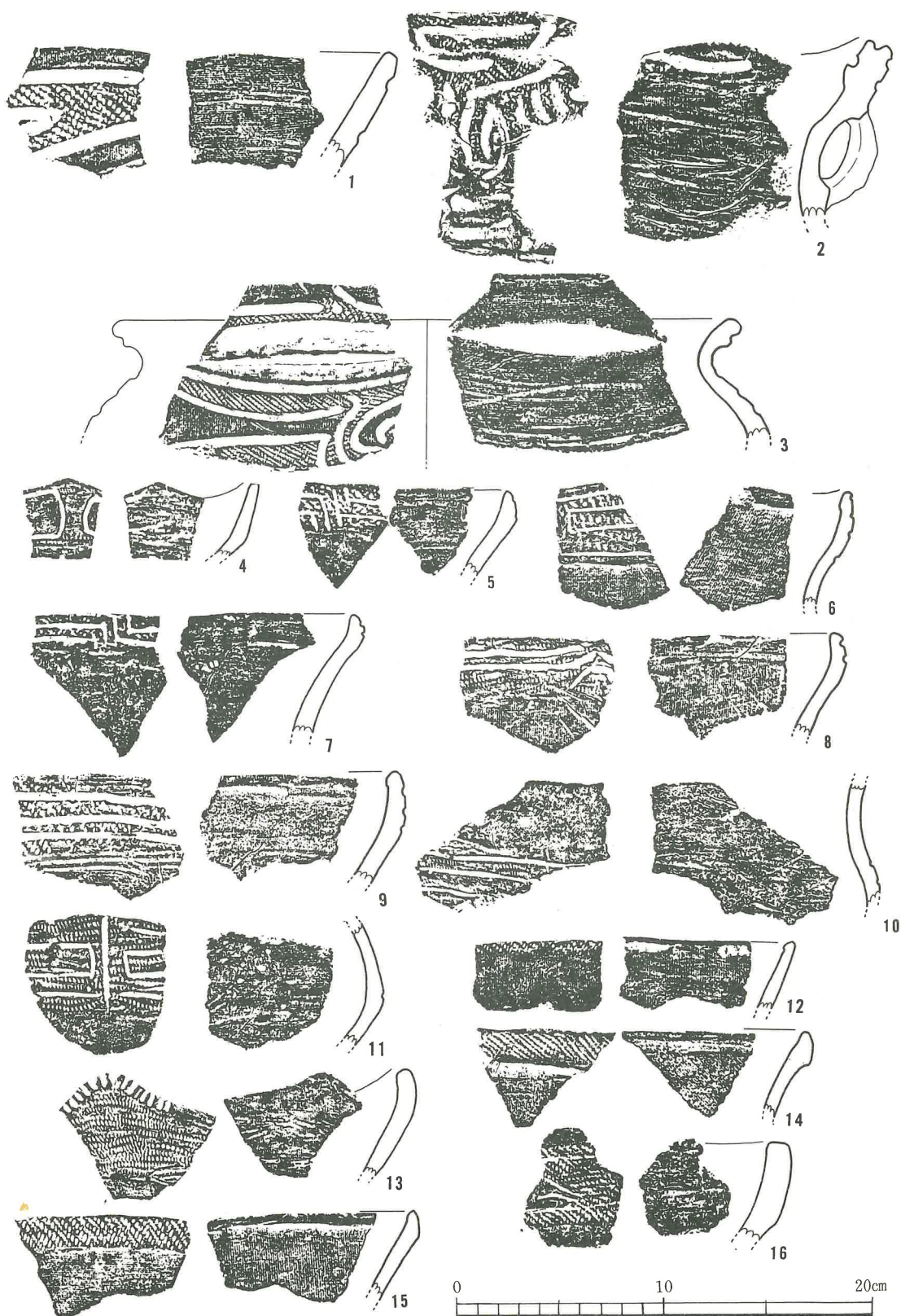
Ⅲ類は短く屈曲する口縁部に橋状把手を持ち、文様は口縁部と胴部が分離せず、Ⅰ類より細い沈線で渦巻き文などを描いているが、磨消縄文は1例のみである。この土器は第30図3・5～10・第31図～11で、深鉢を主体とするが第31図3・5・11は浅鉢である。

Ⅳ類は第32・33・34図で口縁部と胴部に分かれた文様帯の文様は細く直線的になり、無文部は横方向の篋磨きで仕上げられている。また、Ⅰ～Ⅲ類に比較すると器壁が薄くなっている。この土器文様は磨消縄文(第33・34図)と沈線文(第32図)のみの2種類があり、器形は深鉢が主体をしめるが、口縁部の形態で波状と平坦に二分できる。

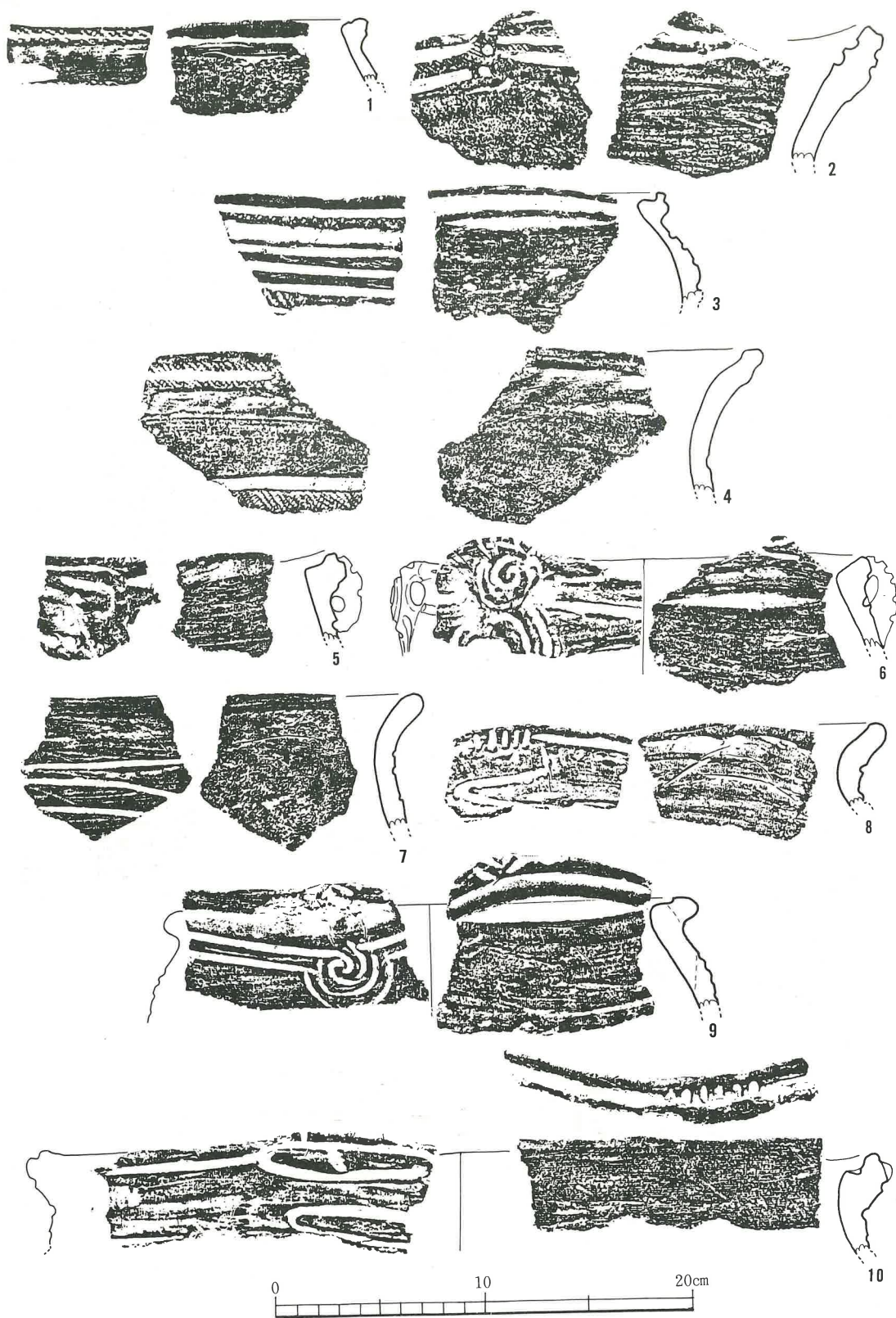
Ⅴ類は細い沈線文で区画された中に羽状文が施文されている。第35図1～7がそれであるが4・5・7など浅鉢が目立つ。それでも3・6・8は深鉢で丁寧に横方向の篋磨きで仕上げられている。また1・2は脚をもつ高杯の口縁部で、上面観が方形になる。2の内面には巻貝の圧痕が付いている。



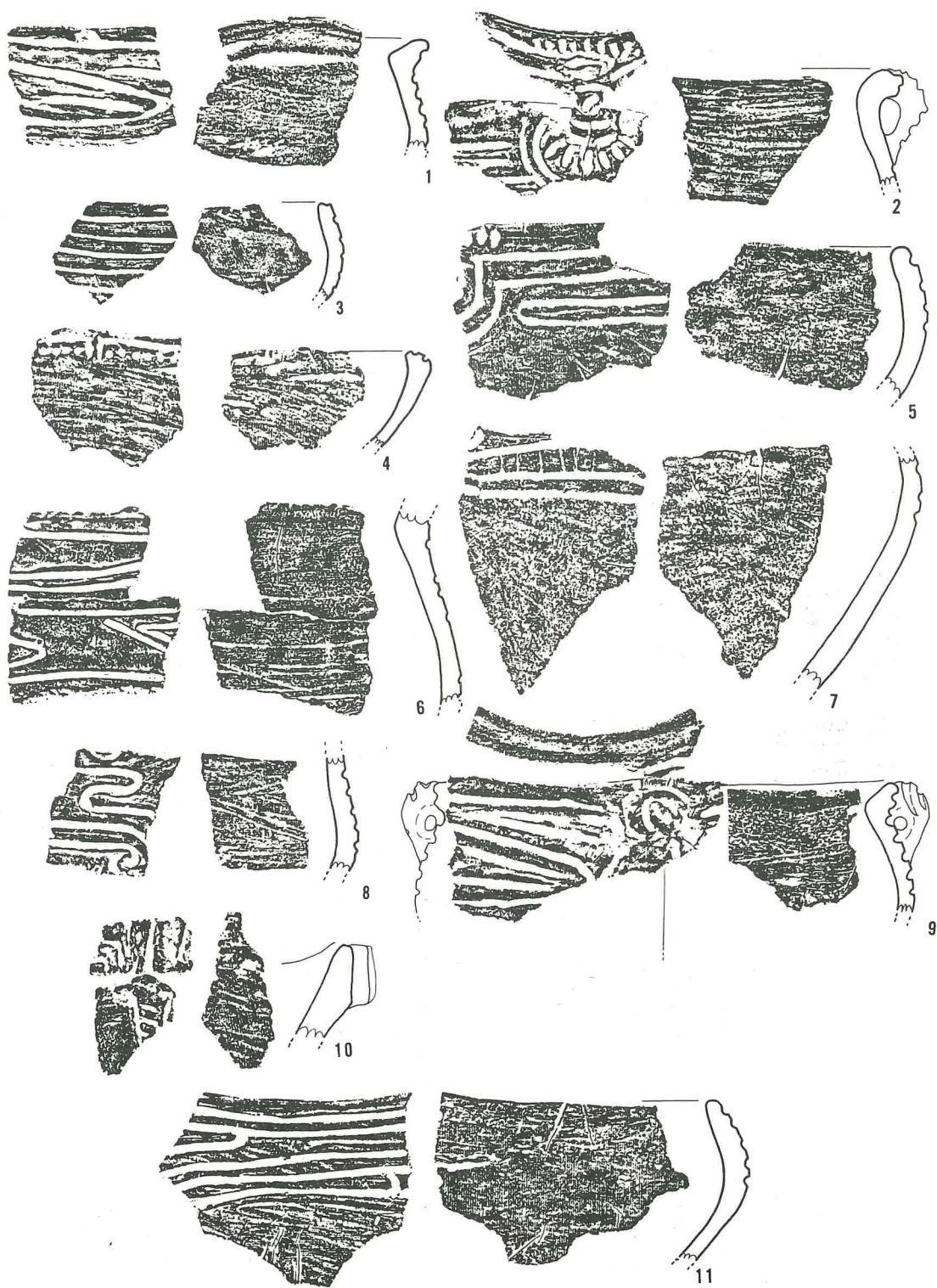
第28図 佐知遺跡40号遺構実測図



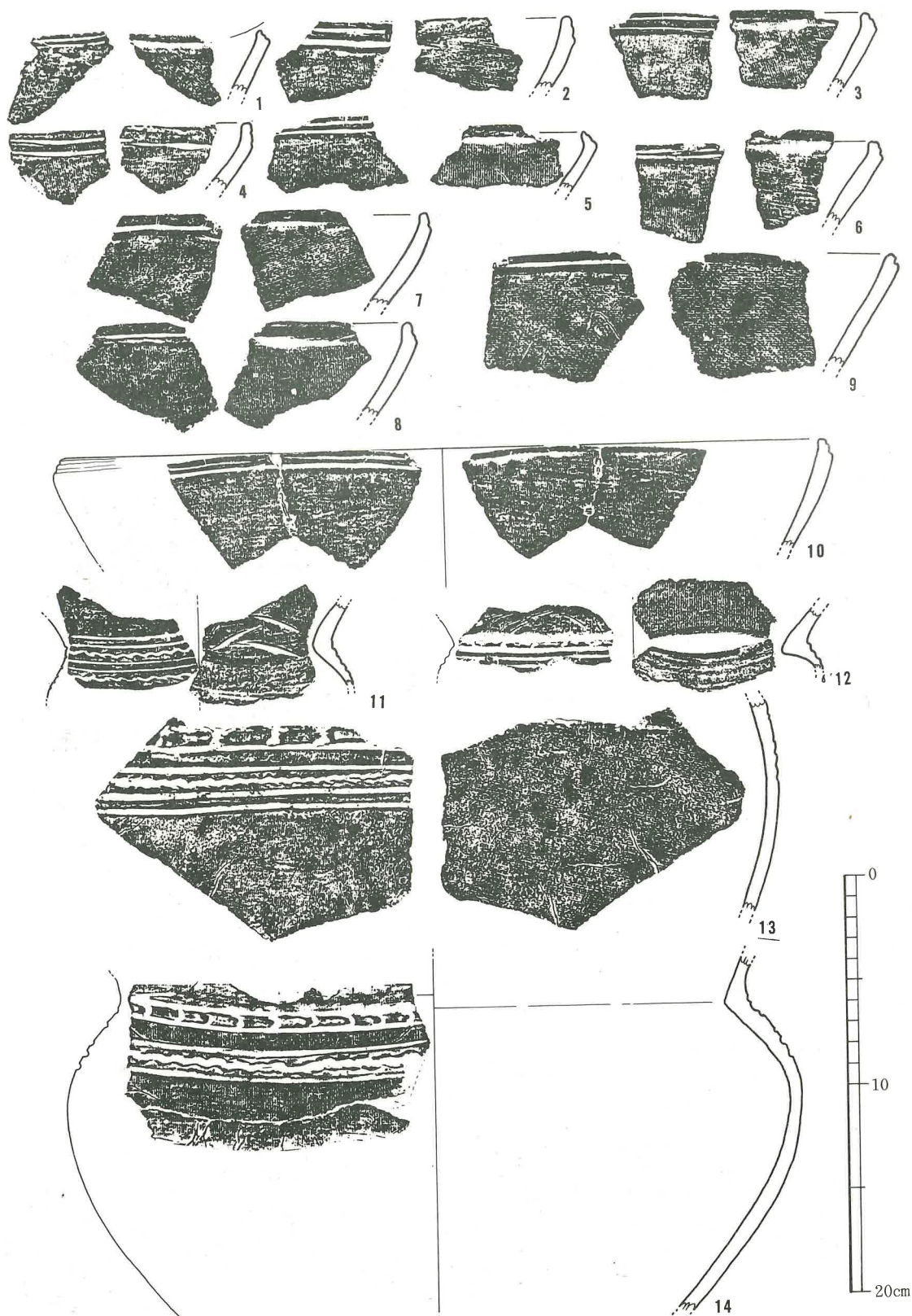
第29図 佐知遺跡40号遺構出土土器実測図(1)



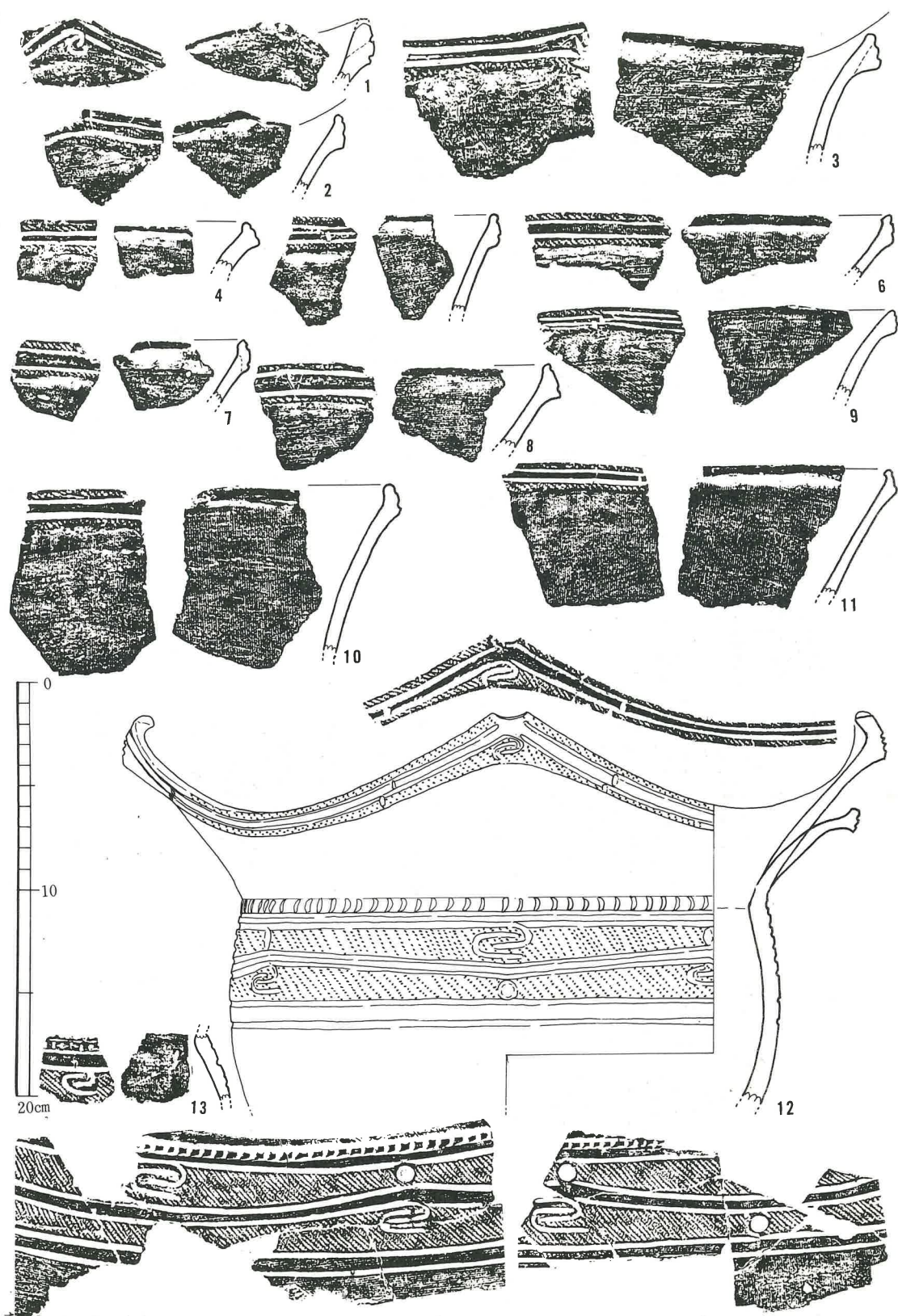
第30図 佐知遺跡40号遺構出土土器実測図(2)



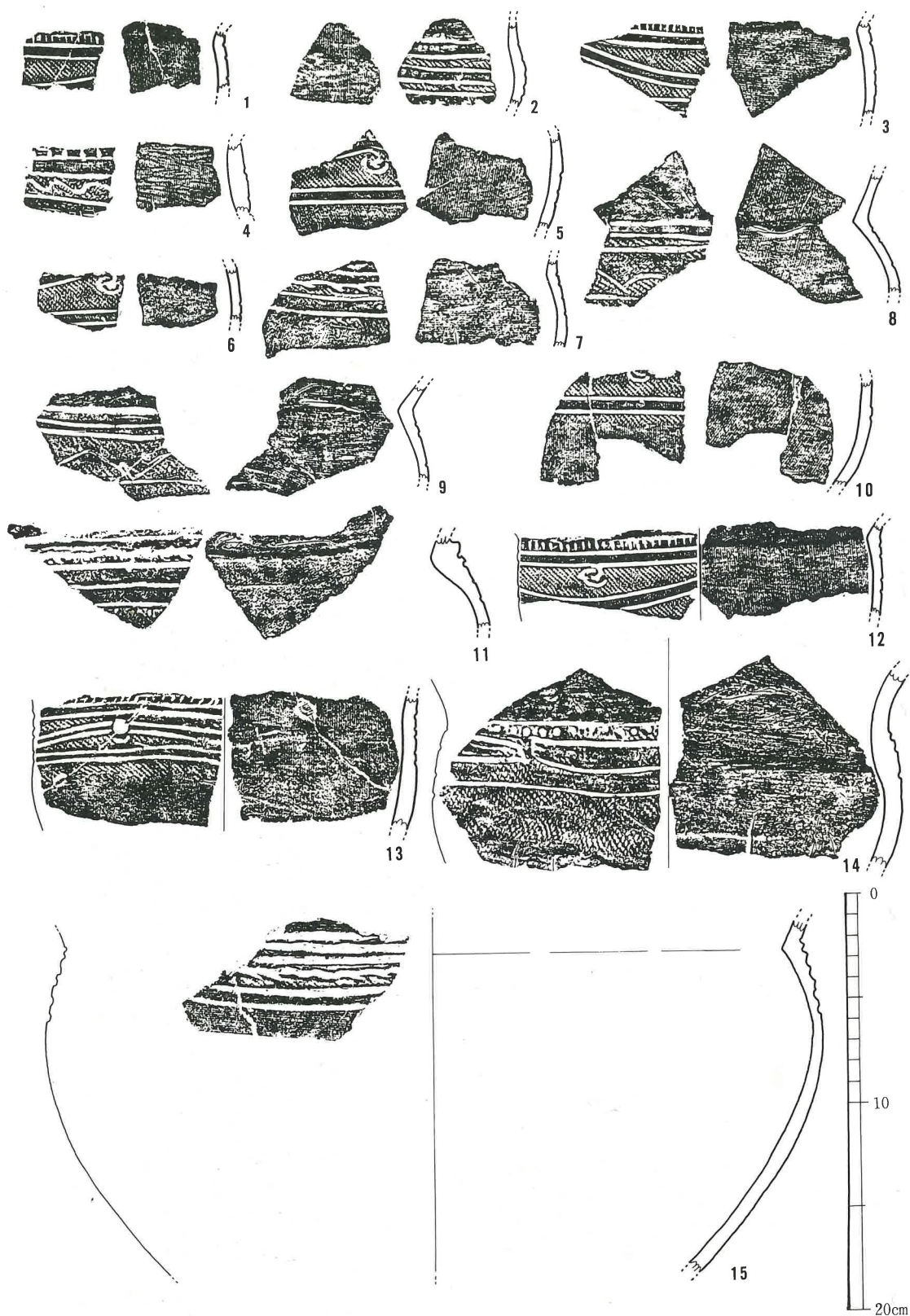
第31図 佐知遺跡40号遺構出土土器実測図(3)



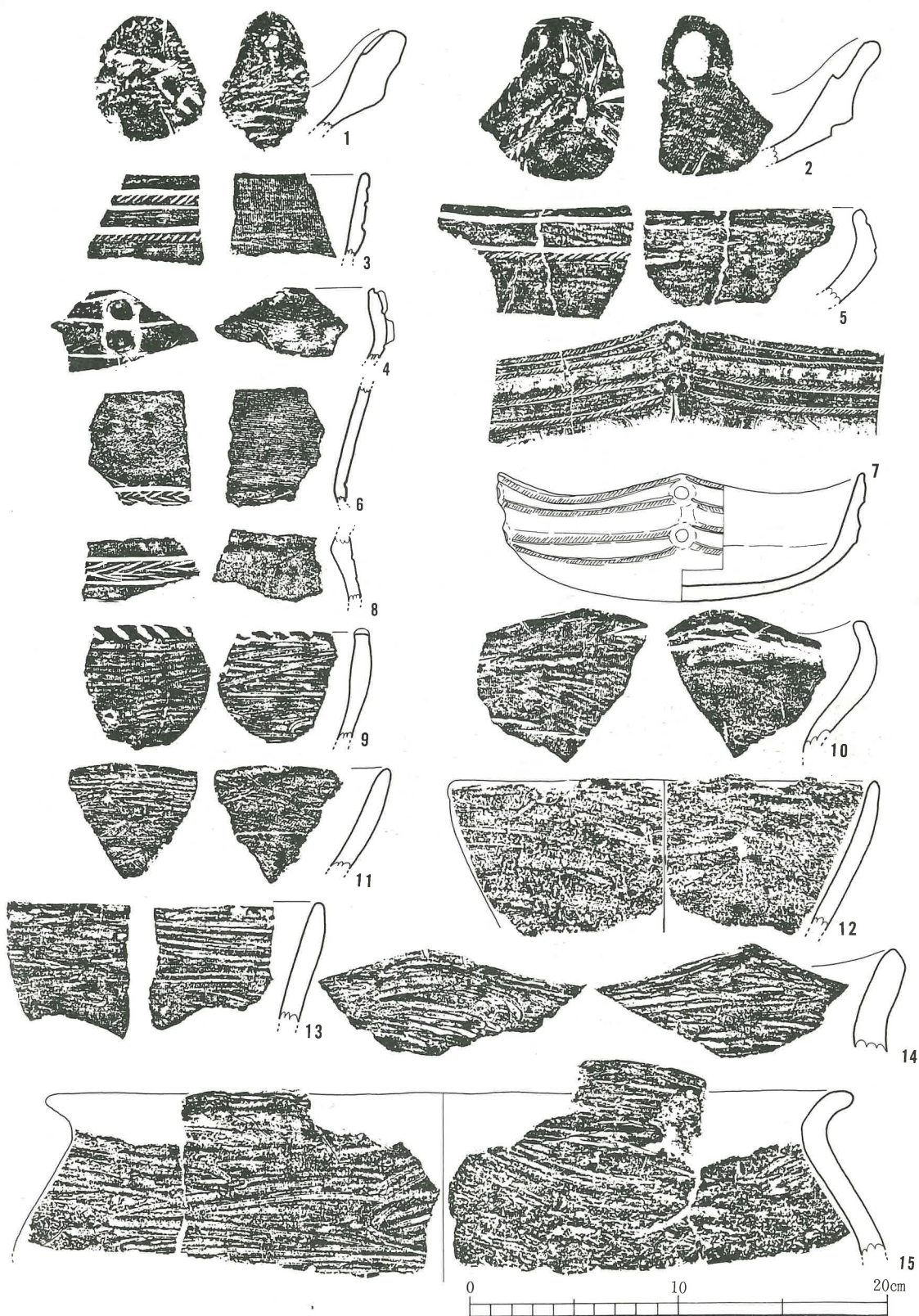
第32図 佐知遺跡40号遺構出土土器実測図(4)



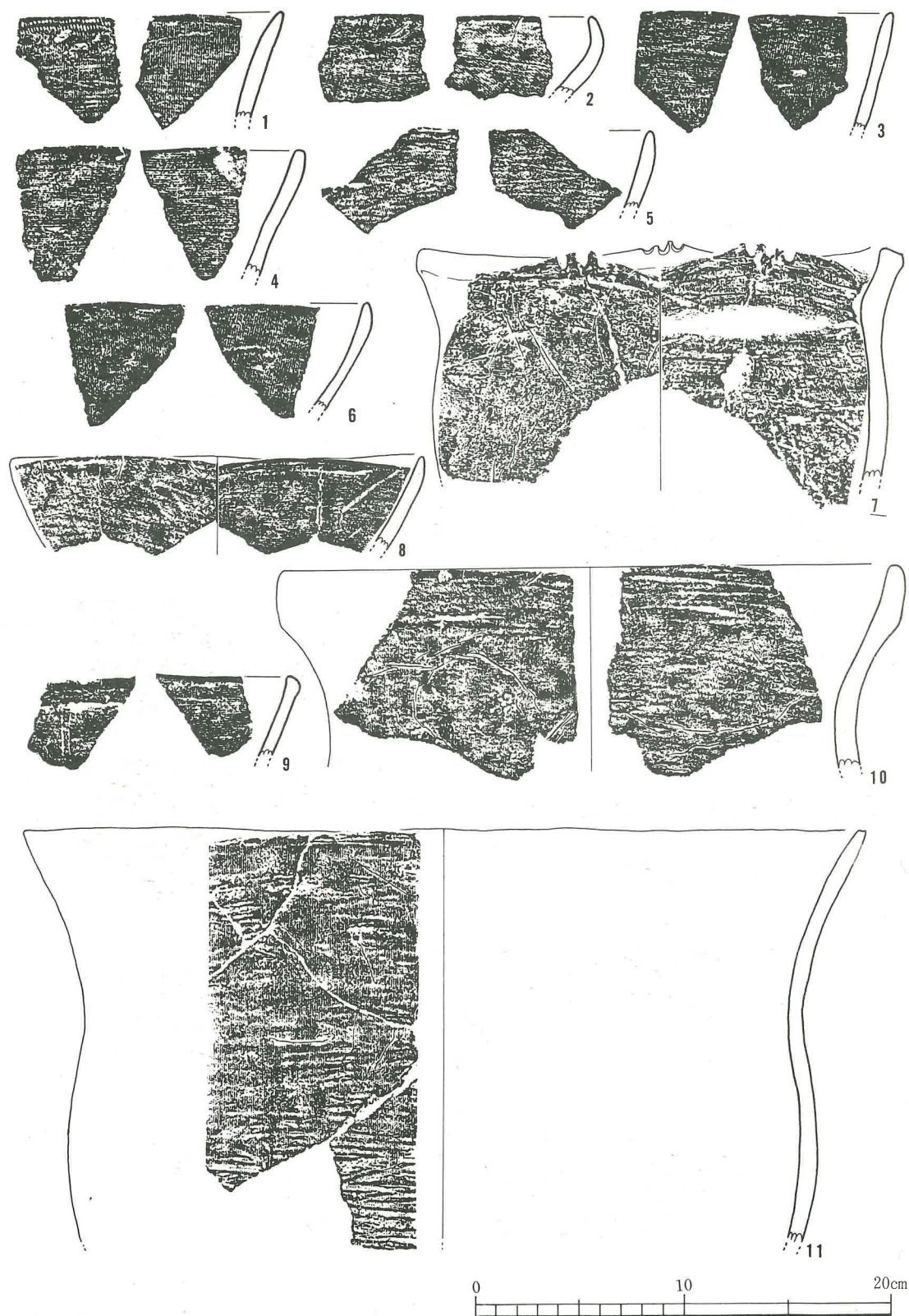
第33図 佐知遺跡40号遺構出土土器実測図(5)



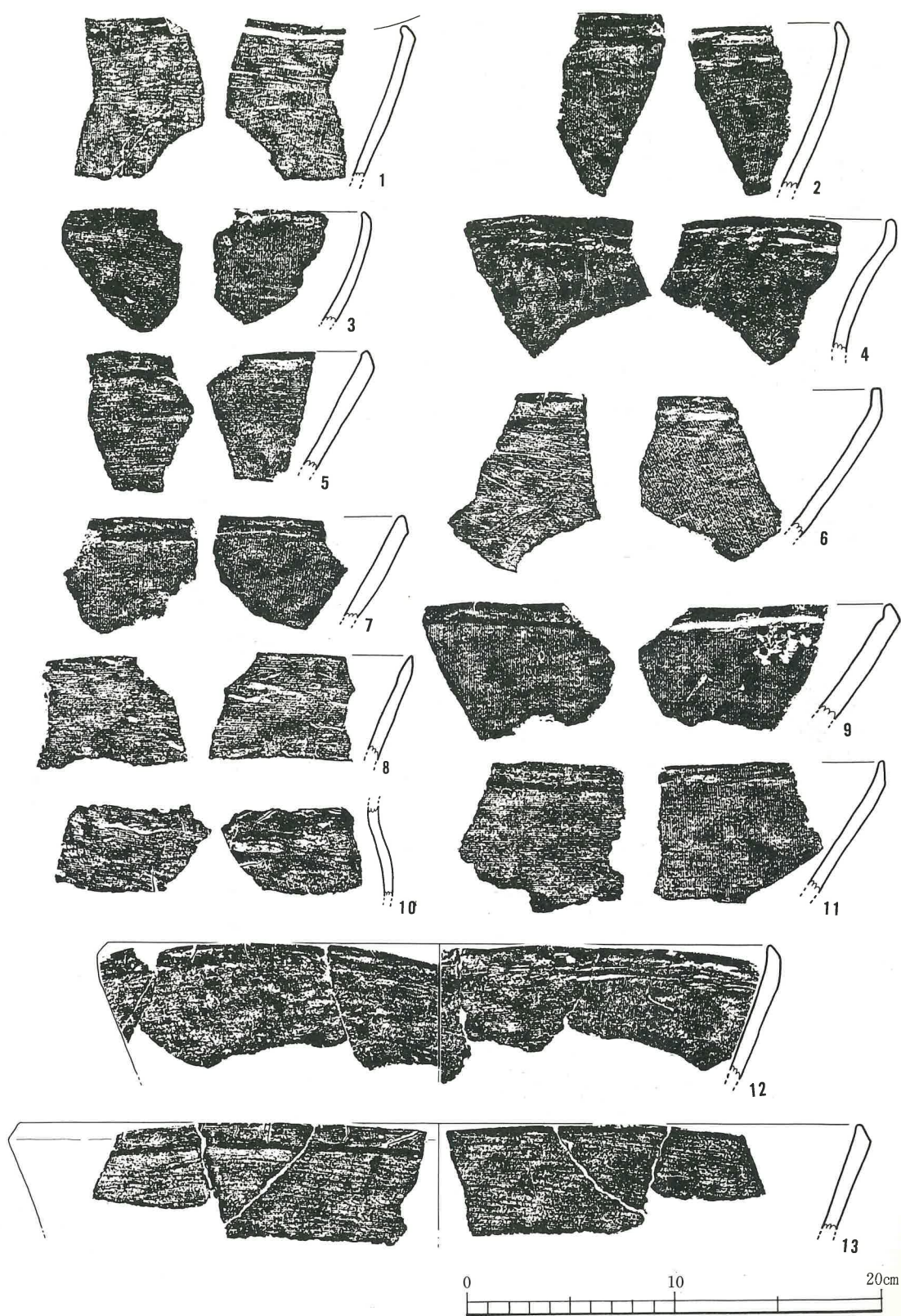
第34図 佐知遺跡40号遺構出土土器実測図(6)



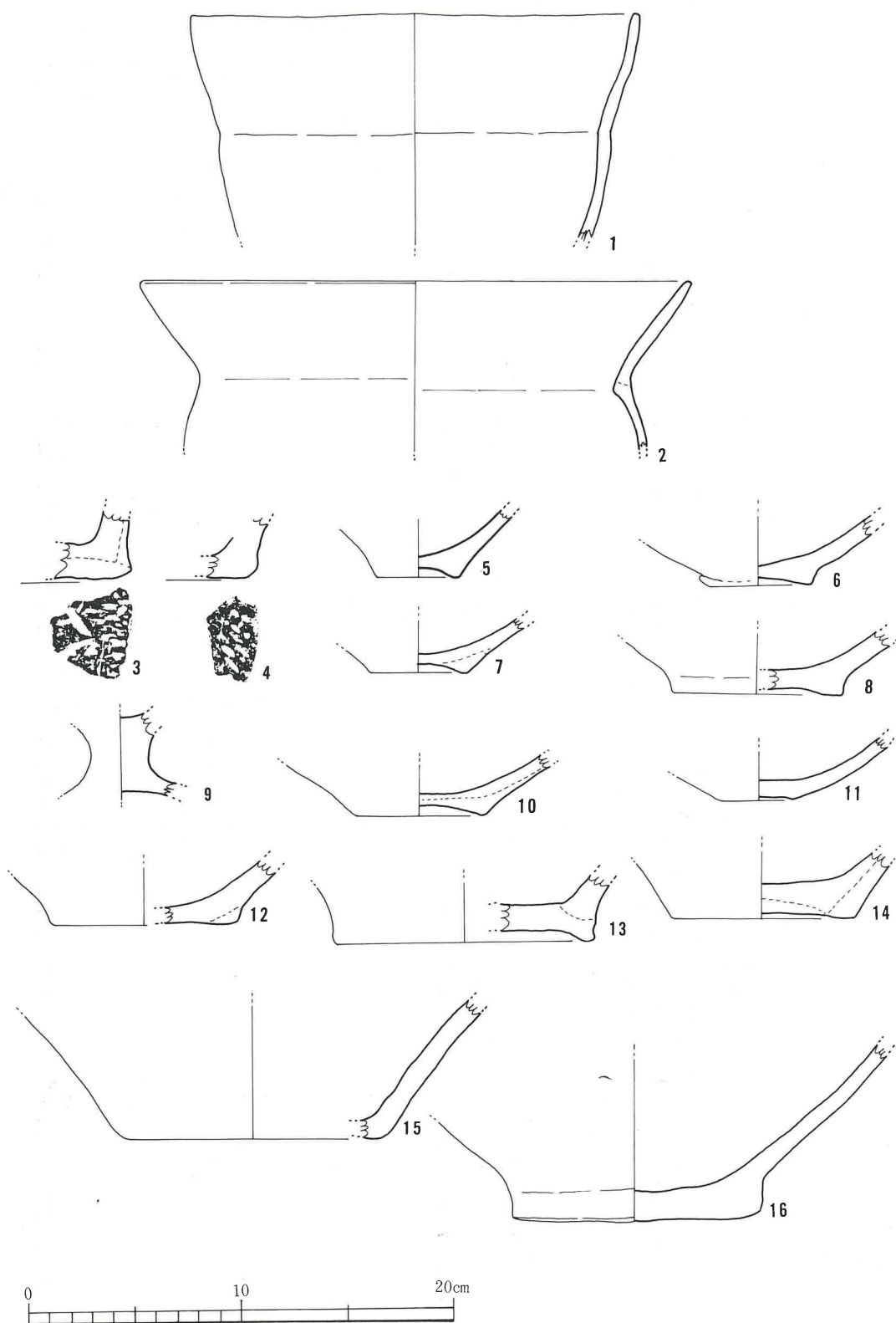
第35図 佐知遺跡40号遺構出土土器実測図(7)



第36図 佐知遺跡40号遺構出土土器実測図(8)



第37図 佐知遺跡40号遺構出土土器実測図(9)



第38図 佐知遺跡40号遺構出土土器実測図(10)

第6表 佐知遺跡40号遺構出土土器観察表(1)

図番号	遺物 番号	出土 場所	文 様 の 特 徴 と 器 面 調 整 の 方 法		胎 土				備考	分類
			表	裏	角 閃 石	斜 長 石	石 英	その他		
29	40号遺構	1	縄文→沈線→横篋研磨	暗茶色	条痕→横篋研磨	○	○			I
		2	縄文→沈線	淡茶色	条痕→ナデ→篋研磨	○	○			I
		3	縄文→沈線→横篋研磨	暗茶色	条痕→横篋研磨	○	○			I
		4	疑似縄文→沈線→ナデ	茶色	条痕→ナデ	○	○	◎		II
		5	縄文→沈線→ナデ	茶色	ナデ	○	○			II
		6	縄文→沈線→横篋研磨	暗茶色	横篋研磨	○	○			II
		7	縄文→沈線→横篋研磨	茶色	横篋研磨	○	○			II
		8	疑似縄文→沈線・横篋研磨	黄茶色	横篋研磨	○	○			II
		9	巻貝条痕→縄文→沈線		条痕→ナデ	◎	○			II
		10	疑似縄文→沈線ナデ	茶色	ナデ	○	○			II
		11	疑似縄文→沈線→横ナデ	茶色	横ナデ	○	○			II
		12	縄文→横篋研磨	茶色	横篋研磨	○	○			II
		13	疑似縄文→横篋研磨→頂部刻目	茶色	横篋研磨	○	○			II
		14	縄文→横ナデ	明茶色	横ナデ	○	○			II
		15	縄文→横篋研磨	茶色	横篋研磨	○	○			II
		16	縄文→沈線→ナデ	茶色	横ナデ	○	○			II
30	40号遺構	1	縄文→横篋研磨	明茶色	横削り状	○	○			I
		2	縄文→沈線→ナデ	茶色	条痕→沈線	○	○			I
		3	縄文→沈線→横ナデ	明茶色	横篋研磨	○	○	○		III
		4	縄文→沈線→横ナデ	明茶色	横ナデ	○	○			I
		5	ナデ→沈線	茶色	横ナデ	○	○			III
		6	ナデ→沈線	茶色	横ナデ	○	○			III
		7	ナデ→沈線	茶色	横ナデ	○	○			III
		8	ナデ→沈線→横篋研磨	茶色	条痕→ナデ	○	○			III
		9	横ナデ→沈線→篋研磨	茶色	条痕→ナデ	○	○			III
		10	横ナデ→沈線・刺突	淡茶色	横篋研磨	○	○	○		III
31	40号遺構	1	ナデ→沈線	茶色	削り状	○	○			III
		2	ナデ→沈線	淡茶色	条痕	○	○			III
		3	沈線→横篋研磨	茶色	横ナデ	○	○			III
		4	条痕→沈線・刺突→篋研磨	茶色	削り状	○	○			III
		5	ナデ→沈線		横ナデ	○	○	○		III
		6	ナデ→沈線	茶色	ナデ	○	○			III
		7	ナデ→沈線→二枚貝の刺突	茶色	ナデ 白色の不純物付着	○	○			III
		8	ナデ→沈線→篋ナデ	茶色	条痕	○	○			III
		9	ナデ→沈線	茶色	横削り状	○	○			III
		10	ナデ→浮文→沈線	茶色	ナデ	○	○			III
		11	条痕→ナデ→沈線→篋研磨	暗茶色	横削り状	○	○			III
32	40号遺構	1	沈線→横篋研磨	茶色	横篋研磨	○	○			IV
		2	沈線→横篋研磨	茶色	横篋研磨	○	○			IV
		3	沈線→横篋研磨	淡茶色	横篋研磨	○	○			IV
		4	沈線→横篋研磨	黒色	横篋研磨	○	○			IV
		5	沈線→横篋研磨	茶色	横篋研磨	○	○			IV
		6	沈線→横篋研磨	黒色	横篋研磨	○	○			IV
		7	沈線→横篋研磨	黒茶色	横篋研磨	○	○			IV
		8	沈線→横篋研磨	暗茶色	横篋研磨	○	○			IV
		9	沈線→横篋研磨	暗茶色	横篋研磨	○	○			IV
		10	沈線→横篋研磨	茶色	横篋研磨	○	○			IV
		11	沈線→横篋研磨	茶色	横篋研磨	○	○		金雲母	IV
		12	沈線・刺突→横篋研磨		横篋研磨	○	○			IV
		13	沈線・刺突→横篋研磨	暗茶色	横篋研磨	○	○			IV
		14	沈線・刺突→横篋研磨	茶色	横篋研磨	○	○			IV
33	40号遺構	1	沈線→横篋研磨	茶色	横篋研磨	○	○			IV
		2	縄文→沈線→横篋研磨	茶色	横篋研磨	○	○			IV
		3	縄文→沈線→横篋研磨	茶色	横篋研磨	○	○	○		IV
		4	縄文→沈線→横篋研磨	茶色	横篋研磨	○	○			IV
		5	縄文→沈線→横篋研磨	淡茶色	横篋研磨	○	○			IV
		6	縄文→沈線→横篋研磨	茶色	横篋研磨	○	○			IV
		7	縄文→沈線→横篋研磨	茶色	横篋研磨	○	○			IV
		8	縄文→沈線→横篋研磨	茶色	横篋研磨	○	○			IV
		9	縄文→沈線→横篋研磨	淡茶色	横篋研磨	○	○			IV
		10	縄文→沈線→横篋研磨	明茶色	横篋研磨	○	○			IV
		11	縄文→沈線→篋研磨	茶色	横篋研磨	○	○			IV
		12	縄文→沈線→篋研磨	暗茶色	横篋研磨	○	○			IV
		13	縄文→沈線→篋研磨	暗茶色	横篋研磨	○	○		同一個体	IV

第7表 佐知遺跡40号遺構出土土器観察表(2)

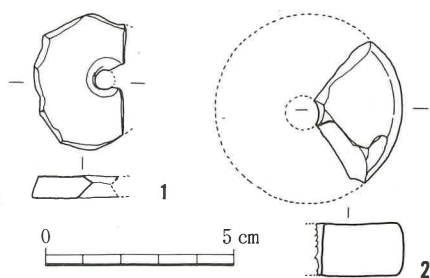
図番号	遺物番号	出土位置	文 様 の 特 徴 と 器 面 調 整 の 方 法		胎 土				備考	分類		
			表	裏	角閃石	斜長石	石英	その他				
34	1	40号遺構	縄文-沈線-横篋研磨	茶色	横篋研磨	○	○	○	金雲母	1.3.5.6 10.12は 同一個体	IV	
	2		縄文-沈線-横篋研磨	茶色	横篋研磨	○	○	○			IV	
	3		縄文-沈線-横篋研磨	茶色	横篋研磨	○	○	○			IV	
	4		縄文-沈線-横篋研磨	淡茶色	横篋研磨	○	○	○			IV	
	5		縄文-沈線-横篋研磨	茶色	横篋研磨	○	○	○			IV	
	6		縄文-沈線-横篋研磨	茶色	横篋研磨	○	○	○			IV	
	7		縄文-沈線-横篋研磨	薄茶色	横篋研磨	○	○	○			IV	
	8		縄文-沈線-横篋研磨	茶黒色	横篋研磨	○	○	○		スス付着 同一体	IV	
	9		縄文-沈線-横篋研磨	茶黒色	横篋研磨	○	○	○			IV	
	10		縄文-沈線-横篋研磨	茶黒色	横篋研磨	○	○	○			IV	
	11		縄文-沈線-横ナデ	黒色	横ナデ	○	○	○			IV	
	12		縄文-沈線-横篋研磨	茶黒色	横篋研磨	○	○	○		スス付着	IV	
	13		縄文-沈線-横ナデ	暗茶色	横ナデ	○	○	○			IV	
	14		縄文-沈線-横篋研磨	暗茶色	横篋研磨	○	○	○	スス付着	IV		
	15		縄文-沈線-横篋研磨	薄茶色	横篋研磨	○	○	○				
35	1	40号遺構	疑似縄文-羽状文-篋研磨	明茶色	篋研磨	○	○	○		スス付着	V	
	2		羽状文-篋研磨	暗茶色	篋研磨	○	○	○			V	
	3		沈線-羽状文-横篋研磨	淡茶色	横篋研磨	○	○	○			V	
	4		沈線-浮文-篋研磨	茶色	横篋研磨	○	○	○			V	
	5		疑似縄文-沈線-羽状文-篋研磨	茶色	横篋研磨	○	○	○			V	
	6		沈線-羽状文-横篋研磨	淡茶色	横篋研磨	○	○	○			V	
	7		沈線-羽状文-横篋研磨	黄茶色	横篋研磨	○	○	○			V	
	8		沈線-羽状文-横篋研磨	暗茶色	横篋研磨	○	○	○			V	
	9		巻貝条痕-刻目	暗茶色	巻貝条痕	○	○	○			VI	
	10		巻貝条痕-ナデ	淡茶色	横ナデ	○	○	○			VI	
	11		巻貝条痕-横篋研磨	茶色	巻貝条痕-ナデ	○	○	○			VI	
	12		条痕	茶色	条痕	○	○	○			VI	
	13		条痕-横篋研磨	茶色	条痕-横篋研磨	○	○	○			VI	
	14		条痕	茶色	条痕	○	○	○			VI	
	15		巻貝条痕	黒茶色	巻貝条痕-削り状	○	○	○			VI	
36	1	40号遺構	疑似縄文-横篋研磨	茶色	横篋研磨	○	○	○	金雲母		VI	
	2		横篋研磨	黒茶色	横篋研磨	○	○	○			VI	
	3		横篋研磨	知や色	横篋研磨	○	○	○			VI	
	4		横篋研磨	茶色	横篋研磨	○	○	○			VI	
	5		横篋研磨	淡茶色	横篋研磨	○	○	○			VI	
	6		横篋研磨	暗茶色	横篋研磨	○	○	○			VI	
	7		横ナデ	薄茶色	横ナデ・篋研磨条痕 不純物付着	○	○	○			VI	
	8		横篋研磨	茶色	横篋研磨	○	○	○			VI	
	9		横篋研磨	茶色	横篋研磨	○	○	○			VI	
	10		横ナデ	茶色	横ナデ	○	○	○			VI	
	11		巻貝条痕-横ナデ	茶色	横篋研磨	○	○	○			VI	
37	1	40号遺構	横篋研磨	茶色	横篋研磨	○	○	○		スス付着	VI	
	2		横篋研磨	暗茶色	横篋研磨	○	○	○			VI	
	3		横篋研磨	茶色	横篋研磨	○	○	○			VI	
	4		横篋研磨	茶色	横篋研磨	○	○	○			VI	
	5		横篋研磨	茶色	横篋研磨	○	○	○			VI	
	6		横篋研磨	茶色	横篋研磨	○	○	○			VI	
	7		横篋研磨	茶色	横篋研磨	○	○	○			VI	
	8		横篋研磨	茶色	横篋研磨	○	○	○			VI	
	9		横篋研磨	暗茶色	横篋研磨	○	○	○			VI	
	10		疑似縄文-横篋研磨	茶色	横篋研磨	○	○	○			VI	
	11		横篋研磨	茶色	横篋研磨	○	○	○			白色粒	VI
	12		横篋研磨	茶色	横篋研磨	○	○	○				VI
	13		横篋研磨	黒色	横篋研磨	○	○	○				VI
38	1	40号遺構	横篋研磨	暗茶色	横篋研磨	○	○	○		スス付着	VI	
	2		横篋研磨	茶色	横篋研磨	○	○	○			VI	
	3		底網代痕 ナデ	薄茶色	ナデ	○	○	○			VII	
	4		底網代痕 ナデ	薄茶色	篋研磨	○	○	○			VII	
	5		篋研磨	茶色	篋研磨	○	○	○			VII	
	6		篋研磨	茶褐色	篋研磨	○	○	○			VII	
	7		篋研磨	茶色	篋研磨	○	○	○			VII	
	8		接地部磨減 篋研磨	淡茶色	篋研磨	○	○	○			VII	
	9		篋研磨	暗茶色	篋研磨	○	○	○			VII	
	10		篋研磨	明茶色	篋研磨	○	○	○			VII	
	11		篋研磨	茶褐色	ナデ	○	○	○			VII	
	12		ナデ	赤褐色	条痕	○	○	○			VII	
	13		ナデ	茶色	ナデ	○	○	○			VII	
	14		ナデ	茶色	削り状	○	○	○			VII	
	15		篋研磨	薄茶色	ナデ	○	○	○			VII	
	16		ナデ	明茶色	ナデ	○	○	○			VII	

Ⅵ類は条痕文または無文土器で、第35図9～15、第36・37図、第38図1～2がそれである。これらはⅠ～Ⅴ類の文様のある土器に伴うもので、大きくはⅠ～Ⅲ類とⅣ・Ⅴ類の2時期が認められる。前者は第35図9～15・第36図で巻貝による条痕文を主体とする。後者は第37図と第38図1・2で薄い器壁の表面は横方向の篋磨きで仕上げられている。

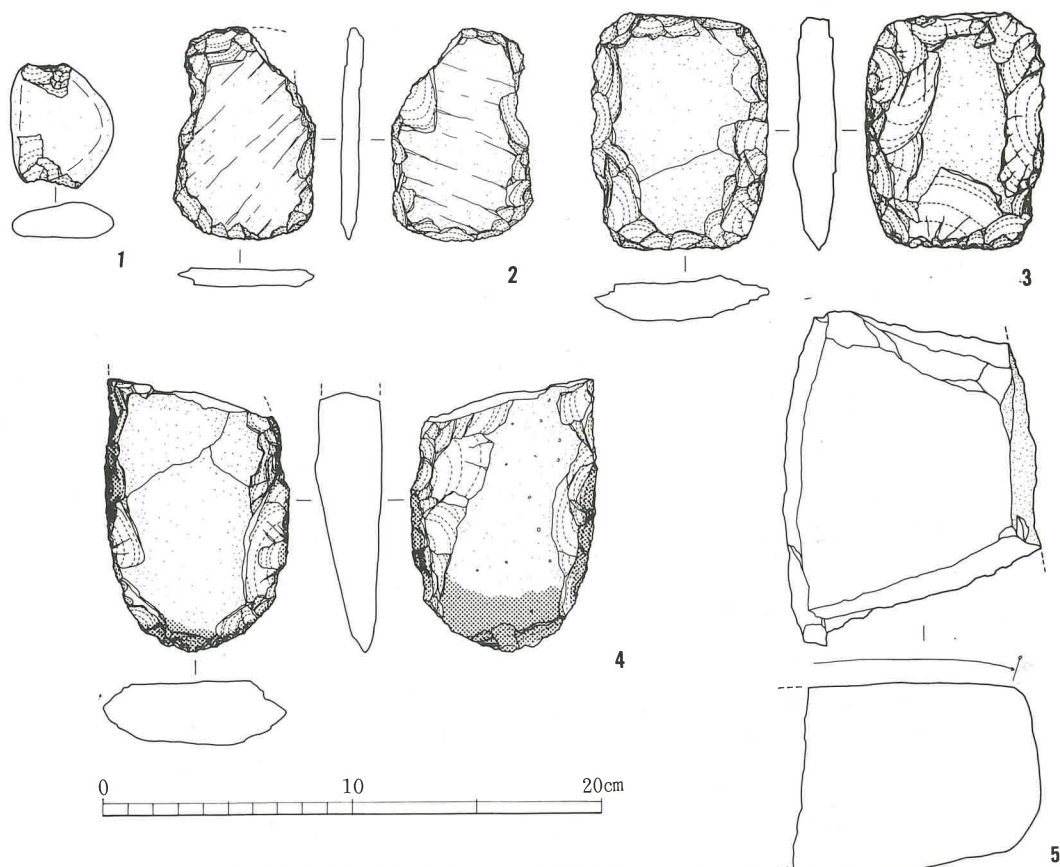
Ⅶ類は第38図3～16の底部であるが、Ⅵ類と同様に大きく2時期に分けられる。3・4・12～16はⅠ～Ⅲ類、5～11はⅣ・Ⅴ類のものである。

また、3・4には網代痕が認められる。

土偶は2点出土している。1は分銅形になると考えられ、その4分の1の破片である。表面には縄文・沈線文・刺突文で構成される文様が描かれている。2は小さいが頭部で、顔面には特に文様は描かれてない。



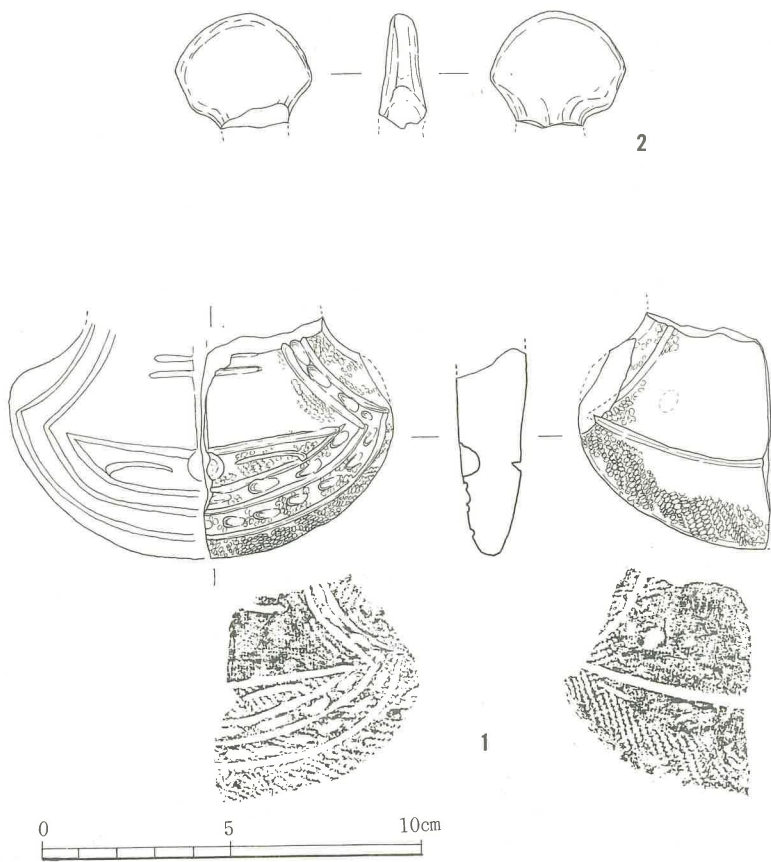
第39図 佐知遺跡40号遺構出土紡錘車実測図



第40図 佐知遺跡40号遺構出土石器実測図

石器は石錘1点、扁平打製石斧3点が出土しているが、土器に較べると量も少なく、多様性に欠ける。

紡錘車は2点出土している。1は土器片を加工したもので中央に穿孔している。2の穿孔は焼成前のもので、最初から径5cmの紡錘車として作られたものである。



第41図 佐知遺跡40号遺構出土土偶実測図

(2) 小竪穴遺構

この遺構のほとんどは、平面形が長方形になり、深さが1m前後になるものである。遺構内からの出土遺物は少なく、J-5・6・7遺構からわずかに縄文後期の土器片が検出されたのみである。そこで、この小竪穴遺構は形状から落とし穴と考え、時期も縄文後期とし報告する。

1) J-1 遺構 (第45図)

検出面は1.2m×0.8mの方形で、0.75m×0.4mの平坦な床面までの深さは0.7mである。北に接するピットは新しい時代のものである。遺物の出土はない。

2) J-2 遺構 (第45図)

中世の遺構である9号遺構の上部にあった集石の下で検出された。検出面は1.2m×0.7mの方形で、深さ0.35mで0.95m×0.4mの平坦な床面に達する。遺物は出土しなかった。

3) J-3 遺構 (第45図)

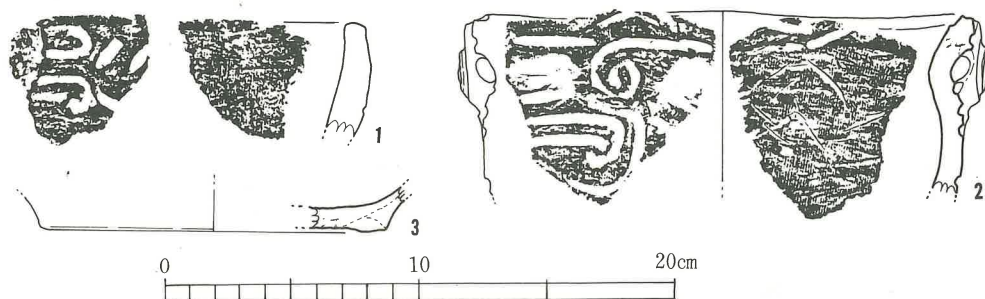
6世紀の竪穴住居跡である20号遺構の南東隅で検出された。検出面は1.2m×0.6mの方形で、深さ0.8mで0.4m×0.9mの平坦な床面に達する。床面の主軸は南北で北が広がっている。遺物は出土しなかった。

4) J-4 遺構 (第45図)

弥生時代中期の22号遺構と古墳時代後期の21号遺構に切られて検出された。上面に21号遺構の完形品が出土したことからも、これらの時代より古いことがわかる。検出面は1.4m×0.7mで、深さ0.7mで1.2m×0.5mの平坦な床面に達する。遺構内は黒色の軟質土で遺物の出土はない。

5) J-5 遺構 (第45図)

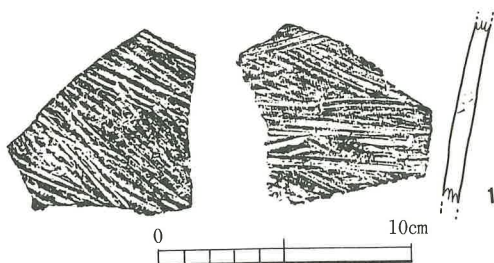
検出面での規模は1.2m×0.7mで、深さは0.96mである。床面は1m×0.5mの長方形を呈し、中央に径22cm、深さ27cmのピットが検出された。出土した遺物は第42図であるが、橋状把手の付く深鉢や太い沈線で描かれた文様などがあり、縄文後期前葉の時期と考えられる。



第42図 佐知遺跡 J-5 遺構出土土器実測図

6) J-6 遺構 (第45図)

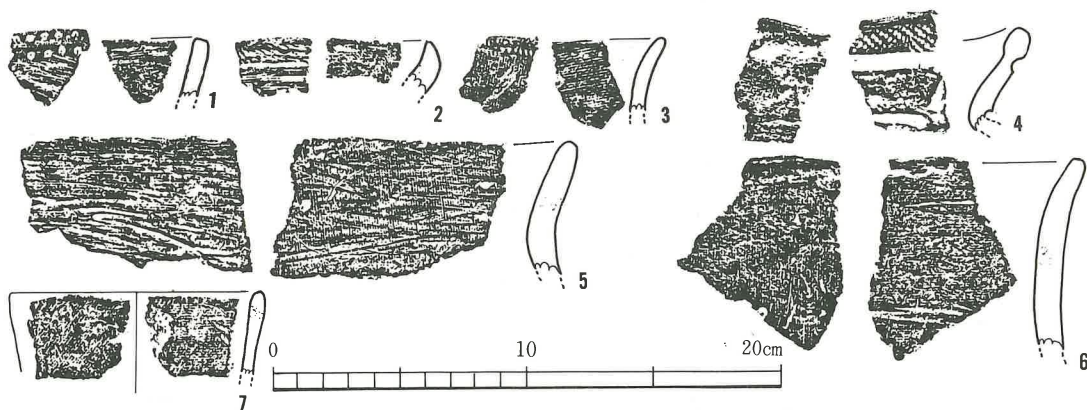
検出面での規模は1.2m×0.75mで、深さは0.9mである。床面は0.85m×0.45mの長方形を呈し、中央には径18cm、深さ50cmのピットが検出された。第43図はこの遺構から出土した遺物であるが、両面に巻貝条痕が付いている。縄文後期前半のものとする。



第43図 佐知遺跡 J-6 遺構出土土器実測図

7) J-7 遺構 (第46図)

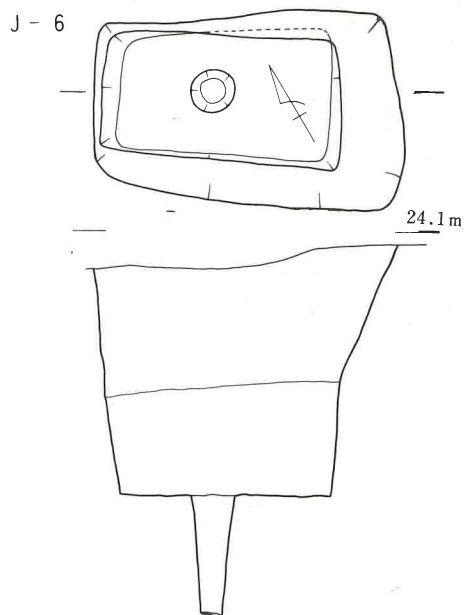
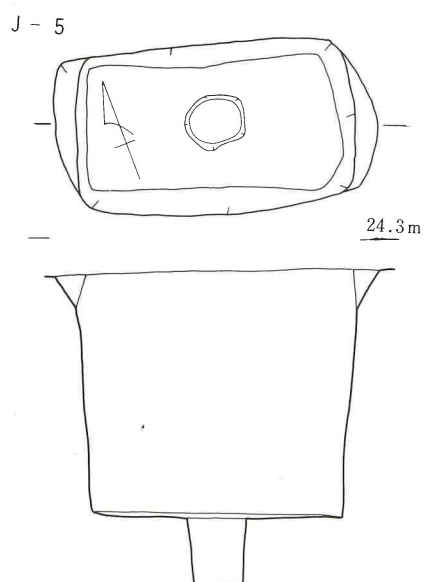
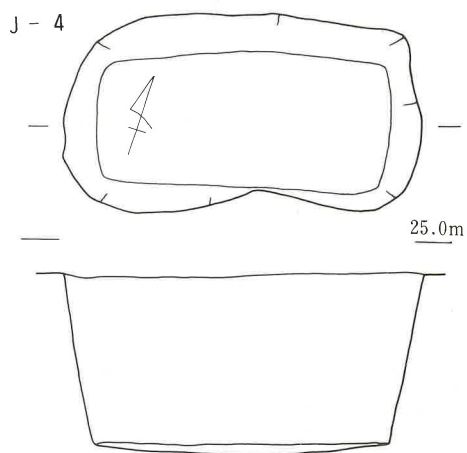
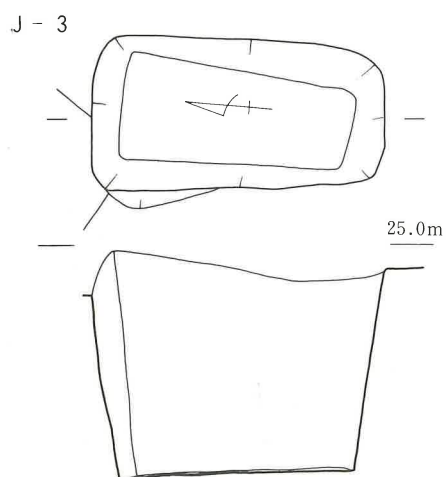
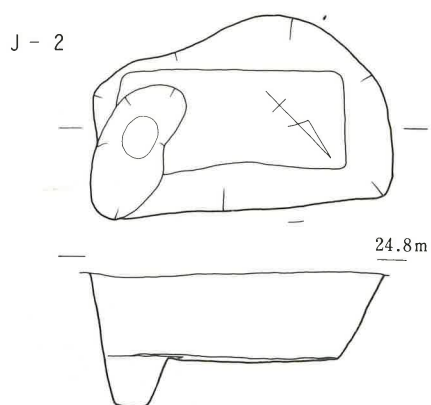
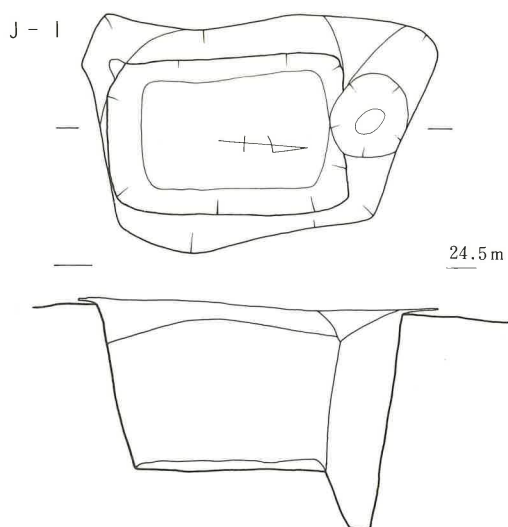
この遺構は弥生時代中期の方形竪穴遺構に北部を切られているため、幅1.3m、深さ30cmということ以外は知ることができない。しかしその形状から J-1～6 遺構とは性格が異なることがわかる。出土遺物は第44図であるが、刺突文・疑似縄文・磨消縄文・条痕文を施文したものがあり、縄文後期前葉と考える。



第44図 佐知遺跡 J-7 遺構出土土器実測図

8) J-8 遺構 (第47図)

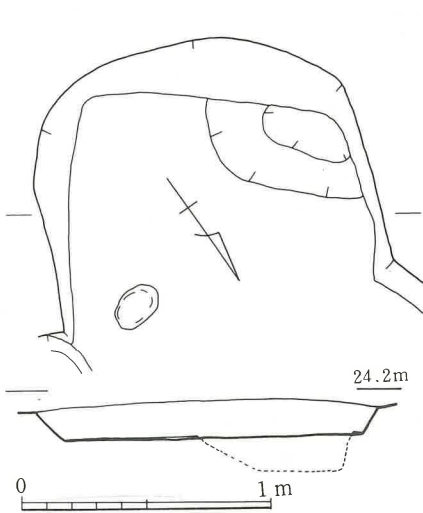
A-4 区を調査中、縄文土器一固体分を検出した。この土器は径50cm、深さ70cmのピットの上面に破壊された状態で出土した。この土器は口径34cm、器高36cmで、器面には疑似縄文による磨消縄文が施文されている。口縁部は四ヵ所が高くなる波状になり、その頂部には S 字状の浮文がつく。また、周辺からは扁平打製石斧が2点 (第48図 1・2) 出土している。



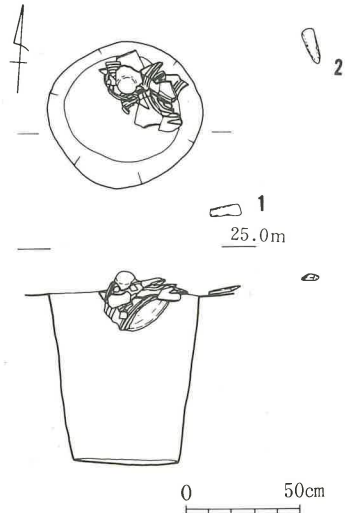
第45図 佐知遺跡縄文時代小竪穴遺構実測図

第8表 佐知遺跡各小竪穴遺構出土土器観察表

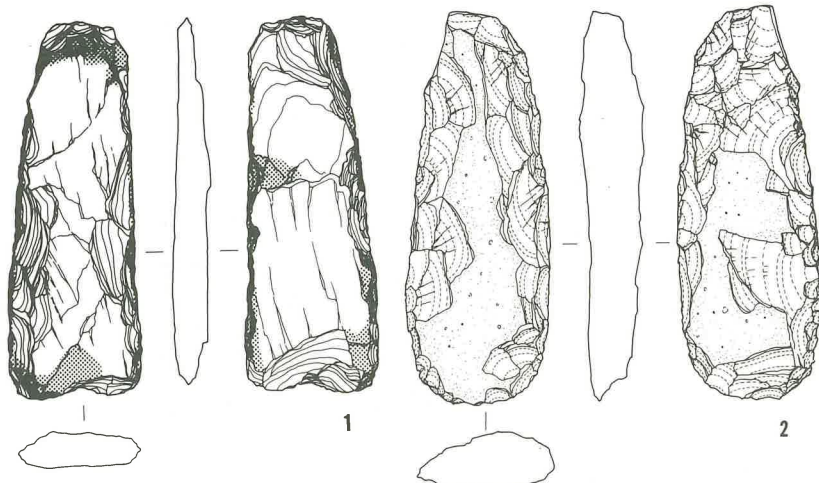
図番号	遺物番号	出土位置	文様の特徴と器面調整の方法		胎土				備考
			表	裏	角閃石	斜長石	石英	その他	
42	1	J-5	ナデ→沈線	茶色	条痕	○	○		
	2		ナデ→沈線→篋研磨	明茶色	横篋研磨	○	○	全雲母	
	3		横篋研磨	茶色	横篋研磨	○	○		
43	1	J-6	条痕	明茶色	条痕	○	○		
44	1	J-7	条痕→刺突	明茶色	条痕	○	○		
	2		条痕→縄文	明茶色	ナデ	○	○		
	3		疑似縄文→篋研磨	茶色	篋研磨	○	○		
	4		縄文→沈線→ナデ	暗茶色	横篋研磨	○	○		
	5		巻貝条痕→横篋研磨	茶色	巻貝条痕→横篋研磨				
	6		条痕→ナデ	淡茶色	ナデ				
	7		条痕→ナデ	明茶色	ナデ				
49		J-8	巻貝条痕→疑似縄文→沈線→ナデ・横篋研磨		巻貝条痕→横篋研磨・ナデ	○	○		



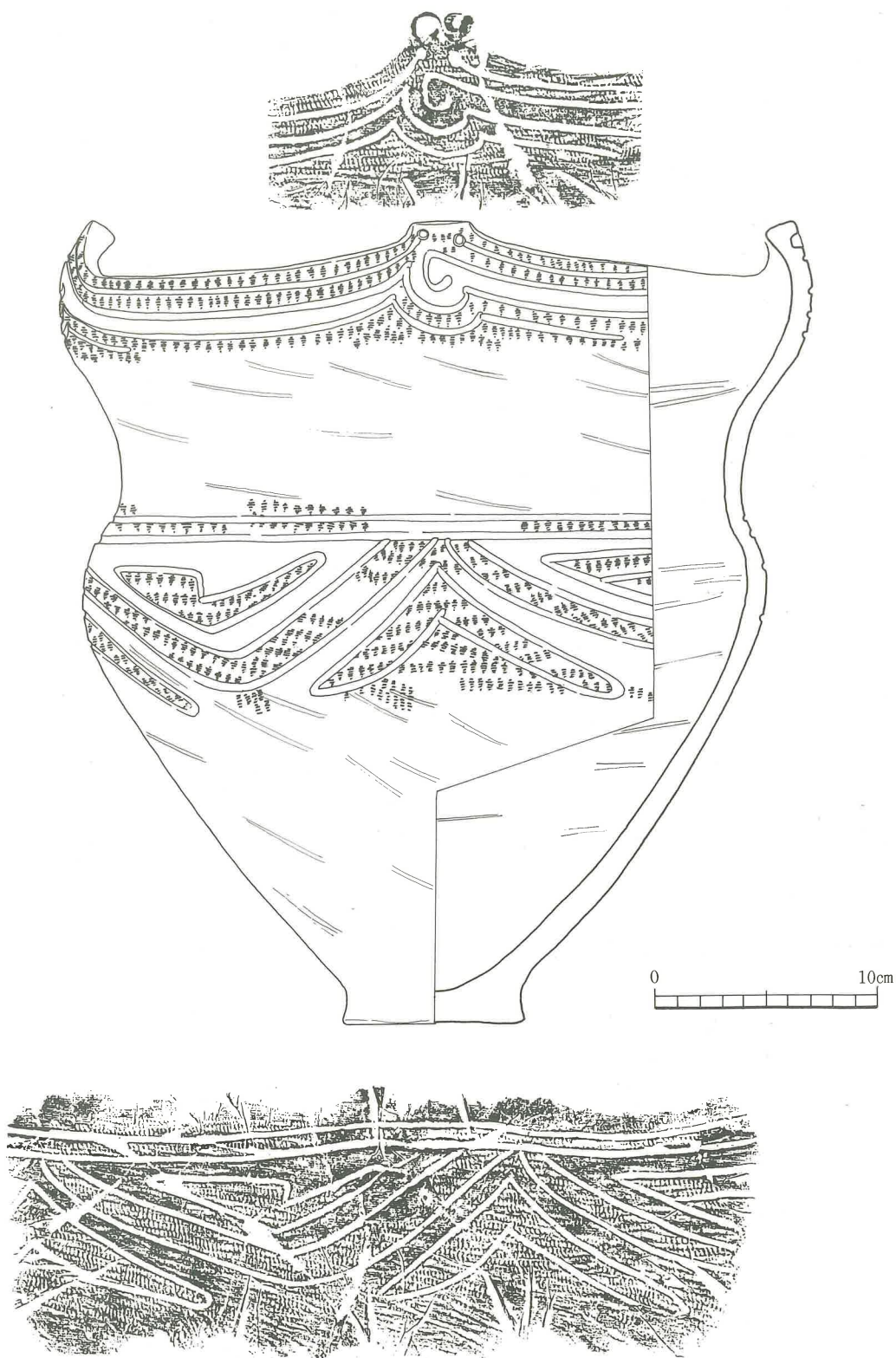
第46図 佐知遺跡 J-7 遺構実測図



第47図 佐知遺跡 J-8 遺構実測図



第48図 佐知遺跡 J-8 遺構周辺出土石器実測図



第49図 佐知遺跡J-8遺構出土土器実測図

(3) 各地区出土の縄文後期遺物

佐知遺跡では3軒の縄文後期の住居跡が検出されたが、この他包含層や縄文時代以降の遺構からも多量の縄文後期土器をはじめとする遺物が出土した。

1) 土器

I類(第51図1・2)は口唇部に太い刻み目を付け、口縁部に凹線文で文様を描いた土器である。縄文中期の阿高式土器の系統を引く土器である。

II類(第51図3・4)は細かい縄文による磨消縄文土器である。3は口縁部につく把手で、4はII類の特徴がよく表れている。この土器は縄文後期初頭の中津式土器と考える。

III類(第51図5～8)は口縁部を肥厚しその上面に沈線による文様が描かれている。この土器は、瀬戸内地方中心に分布する縁帯文土器の一部である。

IV類(第51図9～20・第52図1～3)は太い沈線により区画された磨消縄文で飾られる土器である。器種は口縁部の外反する深鉢(第51図9～20)と外傾する浅鉢(第52図2・3)がある。この土器は小池原上層式土器に含まれる。

V類(第52図4～12)は細い沈線により区画された縄文・疑似縄文による磨消縄文で飾られる土器である。IV類の器形に較べても口縁外反部が短く、文様も直線的である。

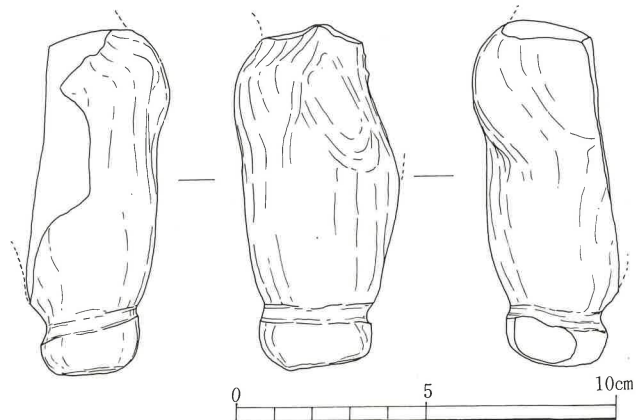
VI類(第53・54・55・56図)はV類の縄文・疑似縄文が施文されないものが主体となり、一部にIV類と同様なものも含まれる。これらの土器は鐘崎式土器として捉えられる。

VII類(第57図)は頸部が長く延びるため無文帯が生じ、文様は口縁部と胴部のみに施文されている。VII類の文様は縄文・疑似縄文だけで、口縁部の一部に粘土瘤が付けられている。

VIII類(第58図)はVII類と同じ器形、文様位置であるが、縄文・疑似縄文に直線的な沈線文が加わる。

IX類(第59図)はVIII類と同じ器形、文様位置であるが、縄文・疑似縄文が施文されず、直線的な沈線文のみで飾られる。

X類(第60図) VIII・IX類の特徴がさらに顕著になったもので、口縁部と胴部の文様帯はさらに細くなり、それに従い頸部の無文帯は広くなる。また、器壁も薄くなり、無文部は丁寧な横方



第50図 佐知遺跡J-8遺構出土土偶実測図

向の筥磨きで仕上げられる。器形は深鉢が多いが、口縁部の形態は波状と平坦に分かれる。

XI類（第61図1～4）は羽状文のある土器である。器形は深鉢のほか浅鉢・注口土器なども認められる。

XII類（第61図6～20・第62・63図）は条痕文土器と無文土器である。前者の器面は横方向の二枚貝や巻貝による条痕で仕上げられ、器壁も厚い。器種も深鉢をはじめ鉢・脚なども見られる。後者で図示したのは第63図3～6と少ないが、器面は筥で研磨されており器壁も薄い。前者はI～IX類に伴うもので縄文後期前半に属する。後者はX・XI類に伴うもので縄文後期後半に属する。

底部（第64図）もXII類と同様で1～12は条痕や撫でで仕上げられており縄文後期前半に属する。器壁も厚く、接地面には網代痕も見られる。13は揚げ底で筥磨きされ、器壁も薄い。縄文後期後半のものである。

2) 石器

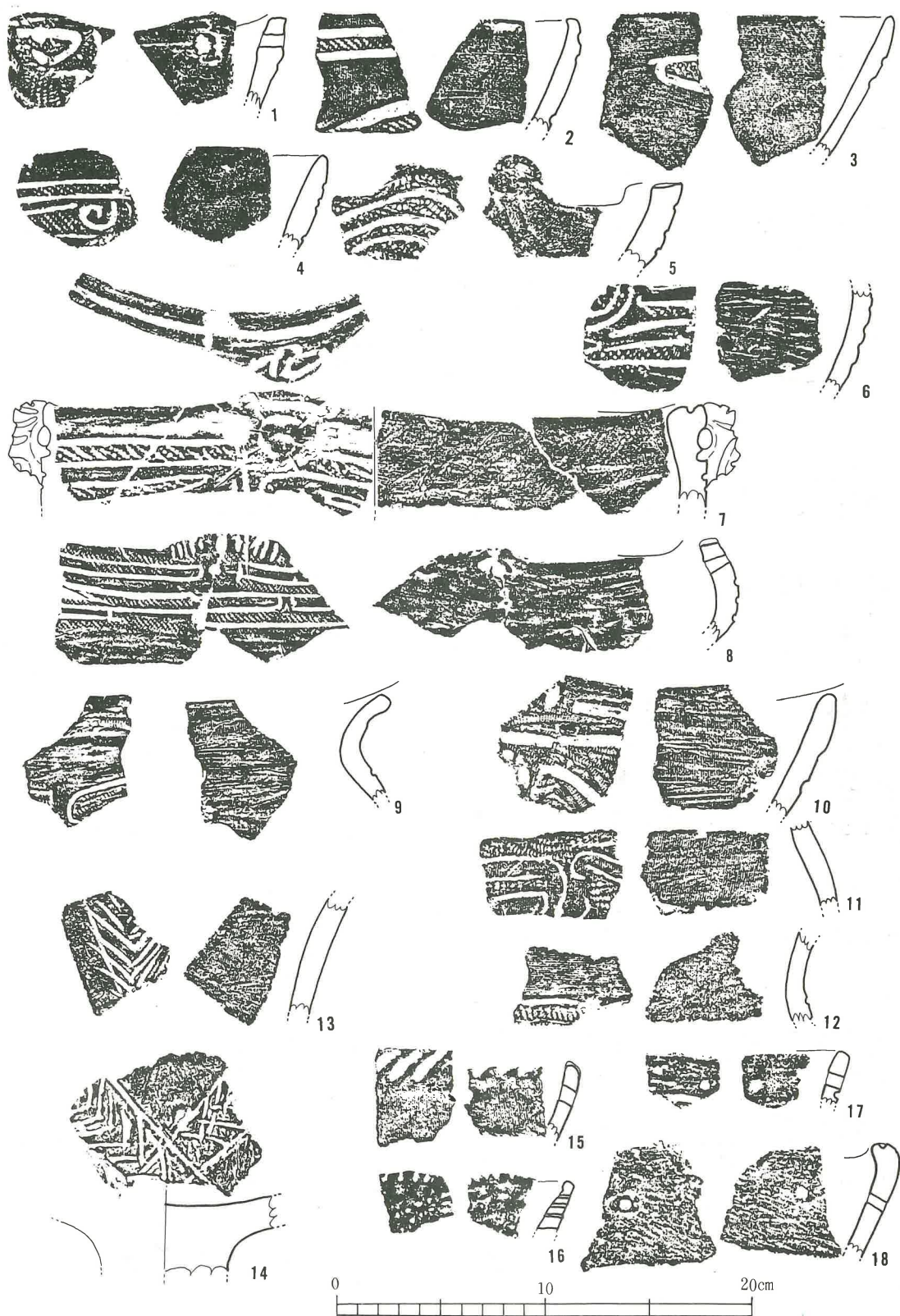
佐知遺跡では縄文後期の遺構以外からも多量に縄文時代の石器が出土している。しかし縄文晩期の土器も出土しており厳密には所属時期不明と言わざるを得ない。器種は、石鏃・石錘・扁平打製石斧そして多量の姫島産黒曜石の石碎である。石鏃の石材はほとんどが姫島産黒曜石で、一部安山岩も認められる。石錘は全て礫石錘で、両端に打欠きがあり、重さはほとんどが40g前後で漁網錘と考えられる。扁平打製石斧は東九州では縄文後期中葉に出現し縄文晩期前半までは確実に存在する。佐知遺跡のこの石器は、出土する土器から所属時期は不明である。完形品は少なく、刃部には使用痕と考えられる磨耗痕が観察できる。

3) 土偶

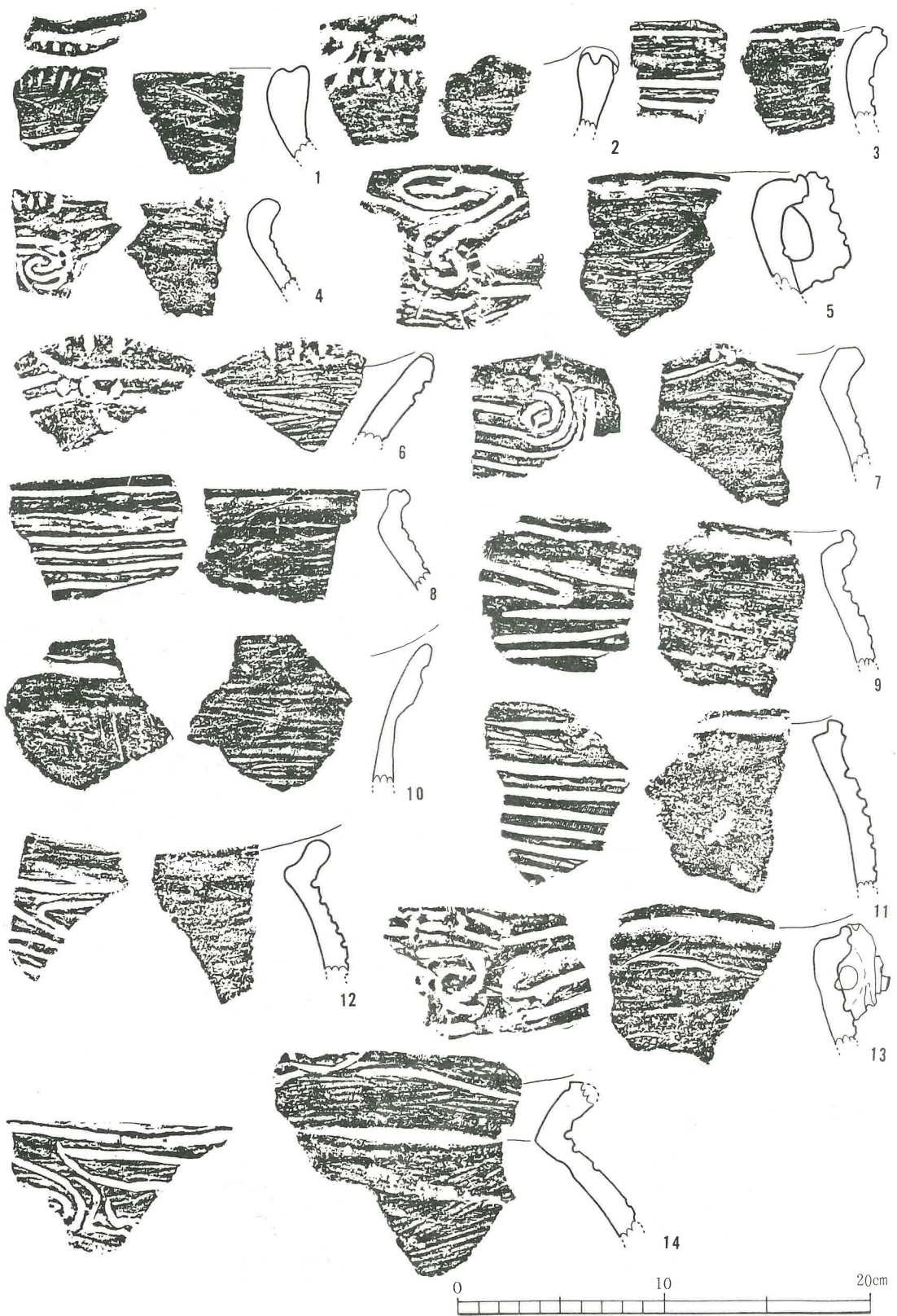
第50図に図示した土偶の脚部は弥生時代中期の22号遺構の東部の床面から出土したものである。臀部は張るが扁平で、先端部は足首を意識してくびれている。遺存部分から想定すると大型の土偶である。表面は筥磨きで仕上げており、胎土に角閃石・斜長石を含み、色調は茶色である。時期は他遺跡の例から縄文後期後葉と考えられる。



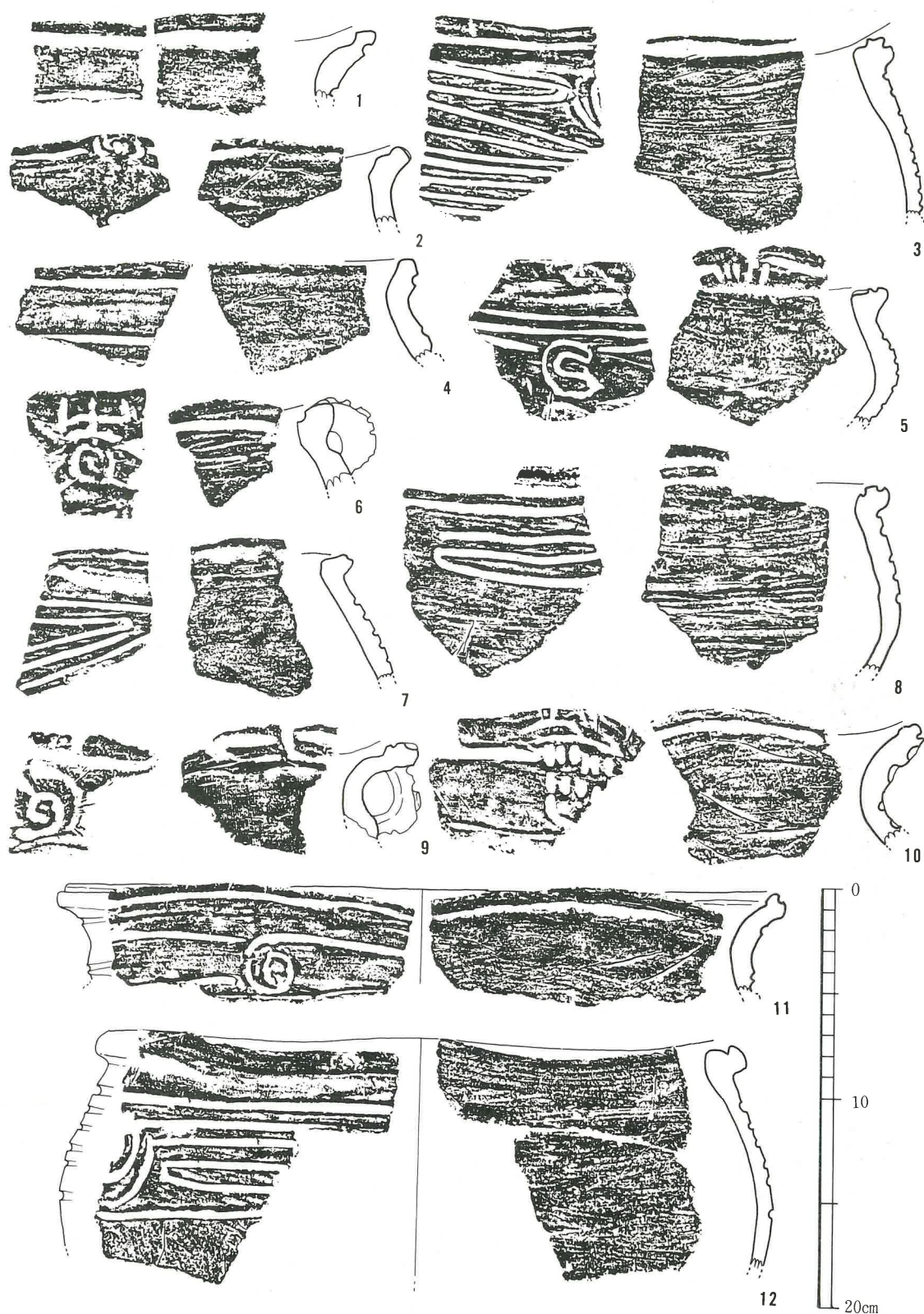
第51図 佐知遺跡各地区出土縄文後期土器実測図(1)



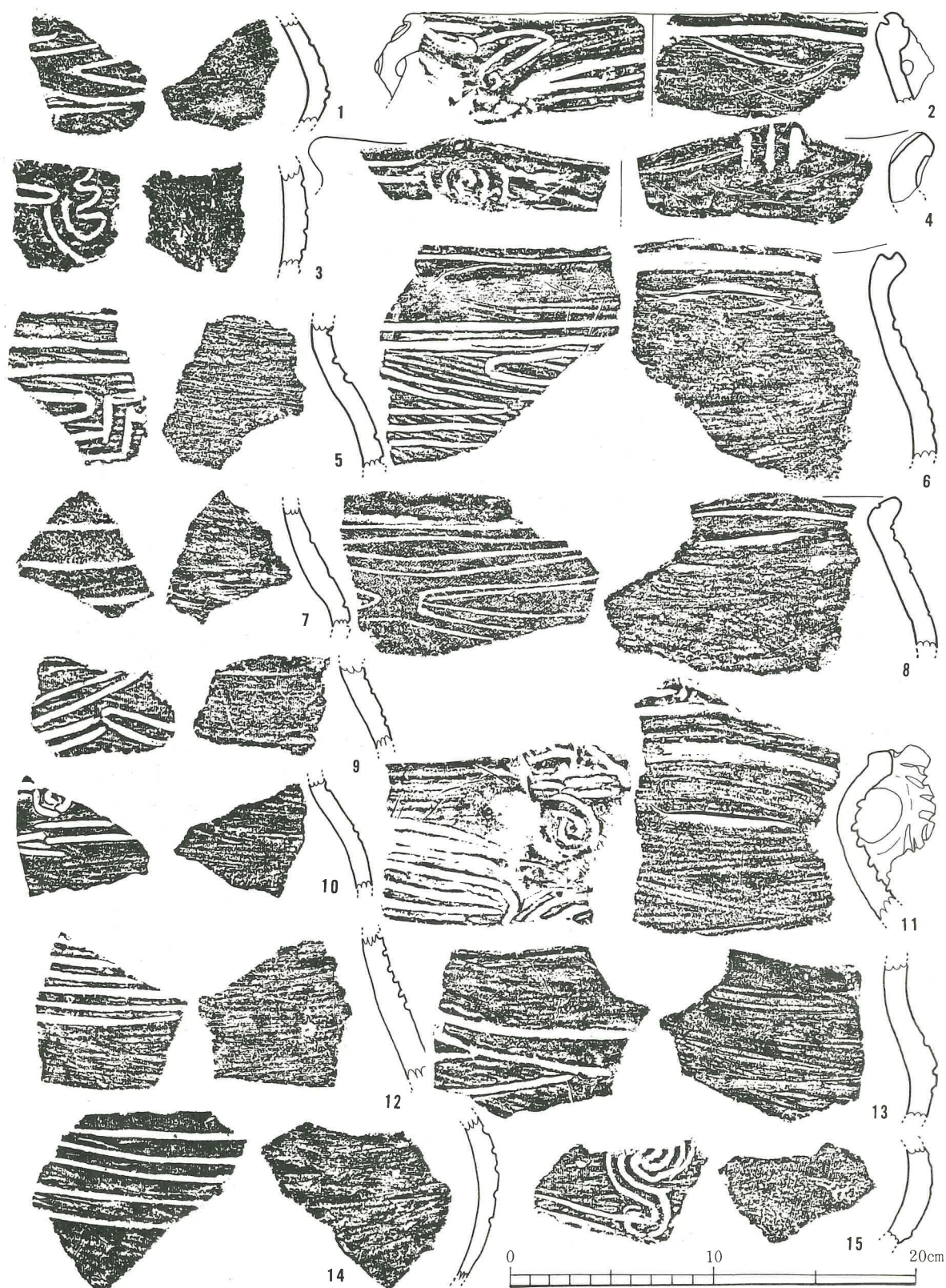
第52図 佐知遺跡各地区出土縄文後期土器実測図(2)



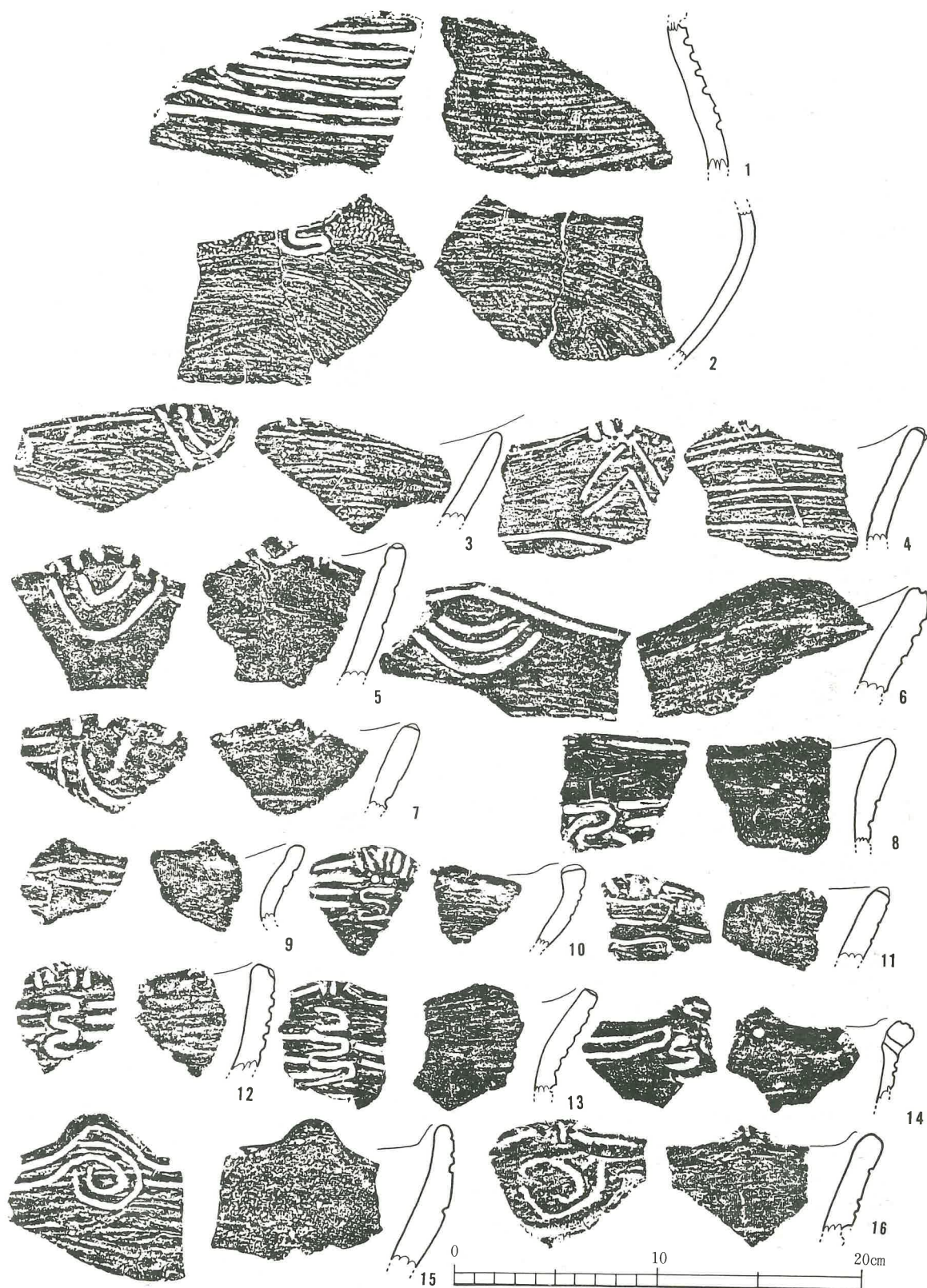
第53図 佐知遺跡各地区出土縄文後期土器実測図(3)



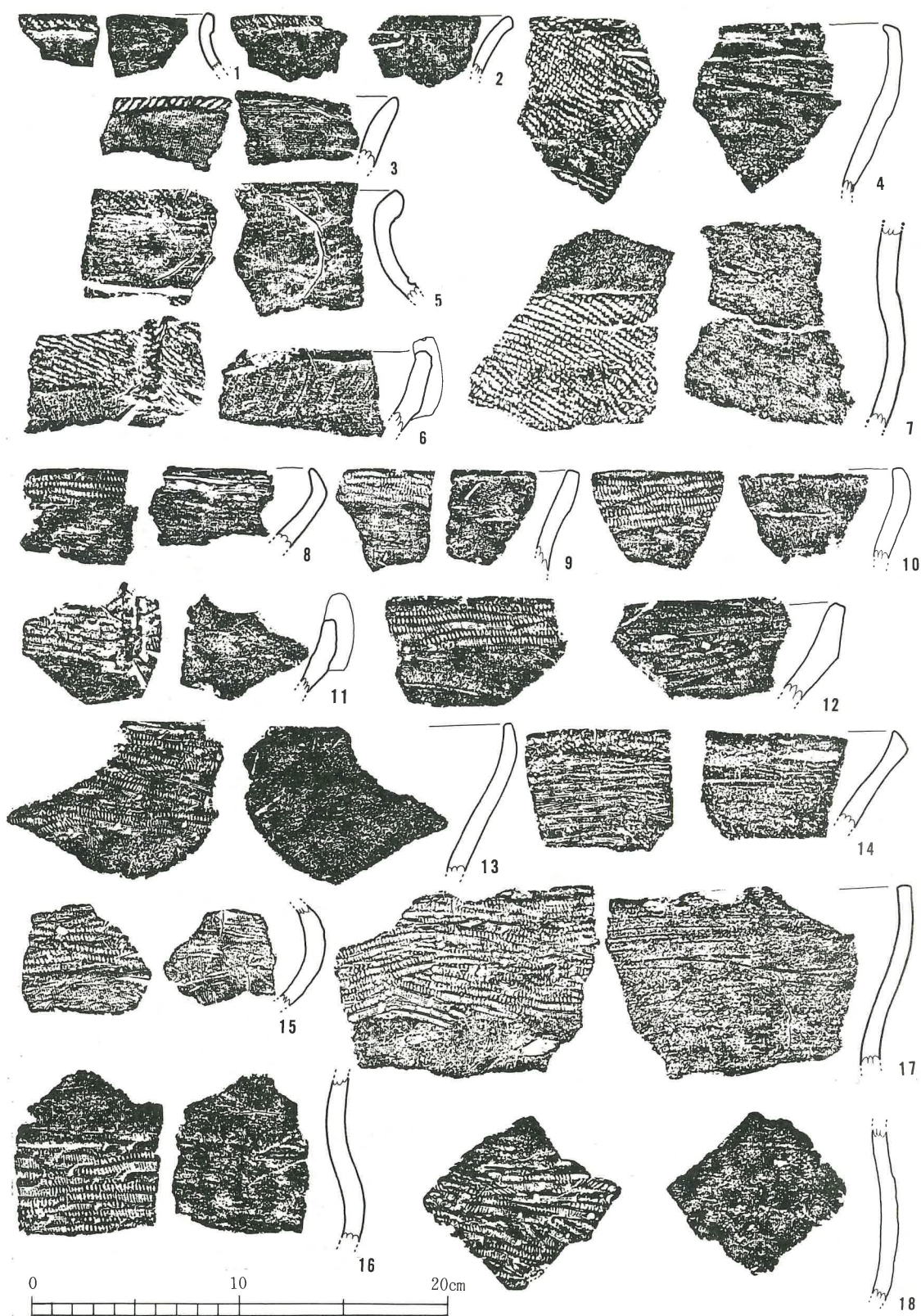
第54図 佐知遺跡各地区出土縄文後期土器実測図(4)



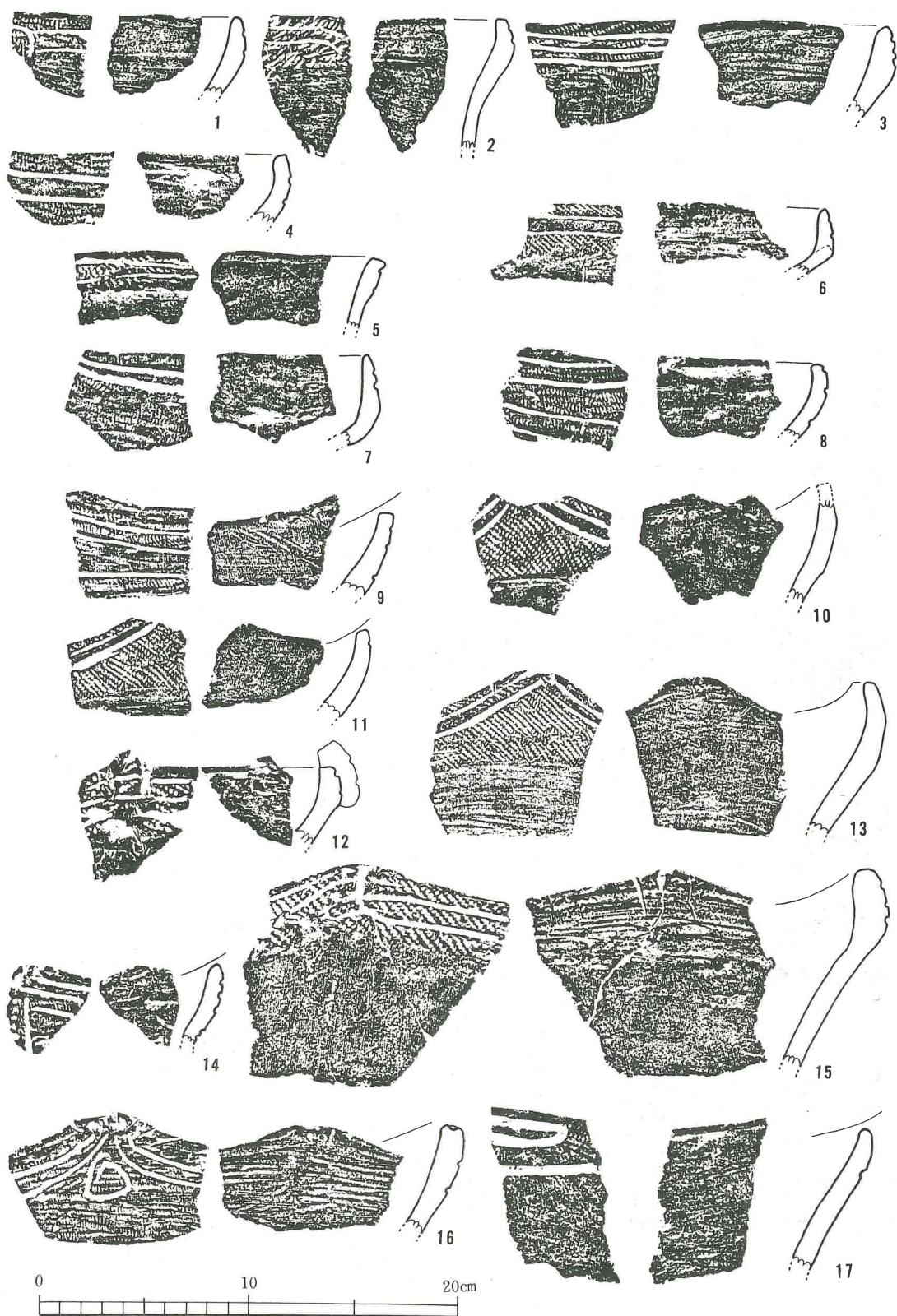
第55図 佐知遺跡各地区出土縄文後期土器実測図(5)



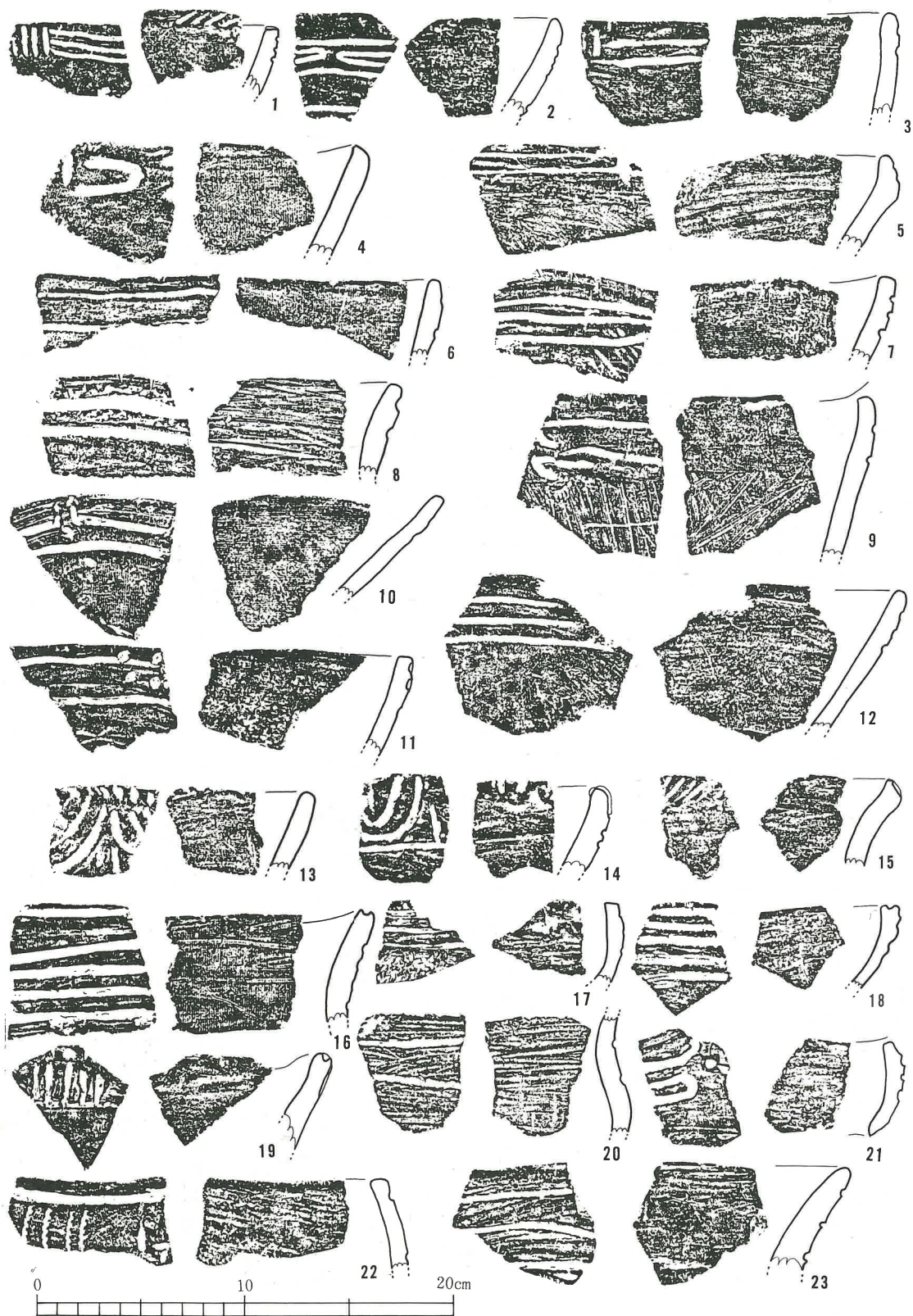
第56図 佐知遺跡各地区出土縄文後期土器実測図(6)



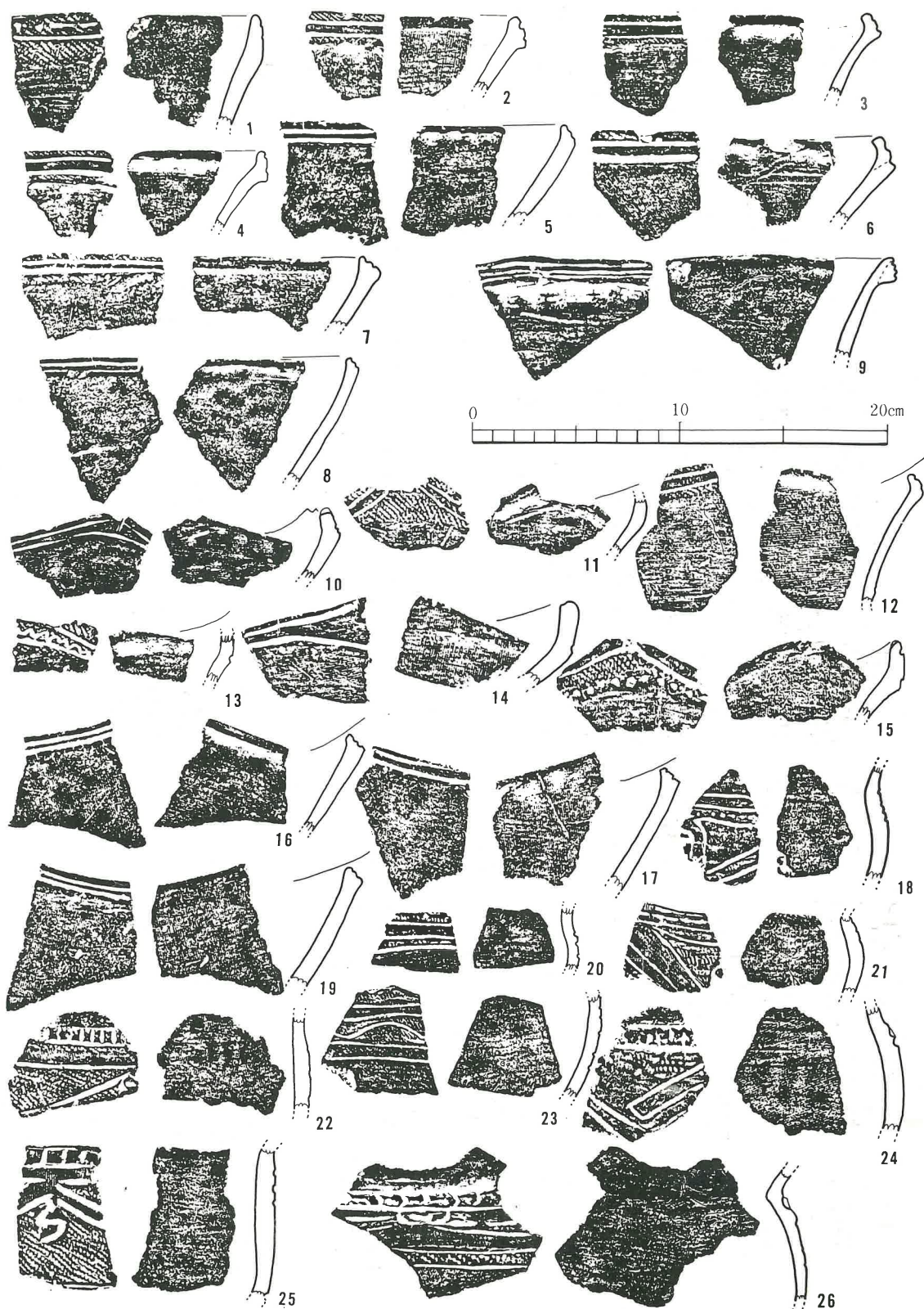
第57図 佐知遺跡各地区出土縄文後期土器実測図(7)



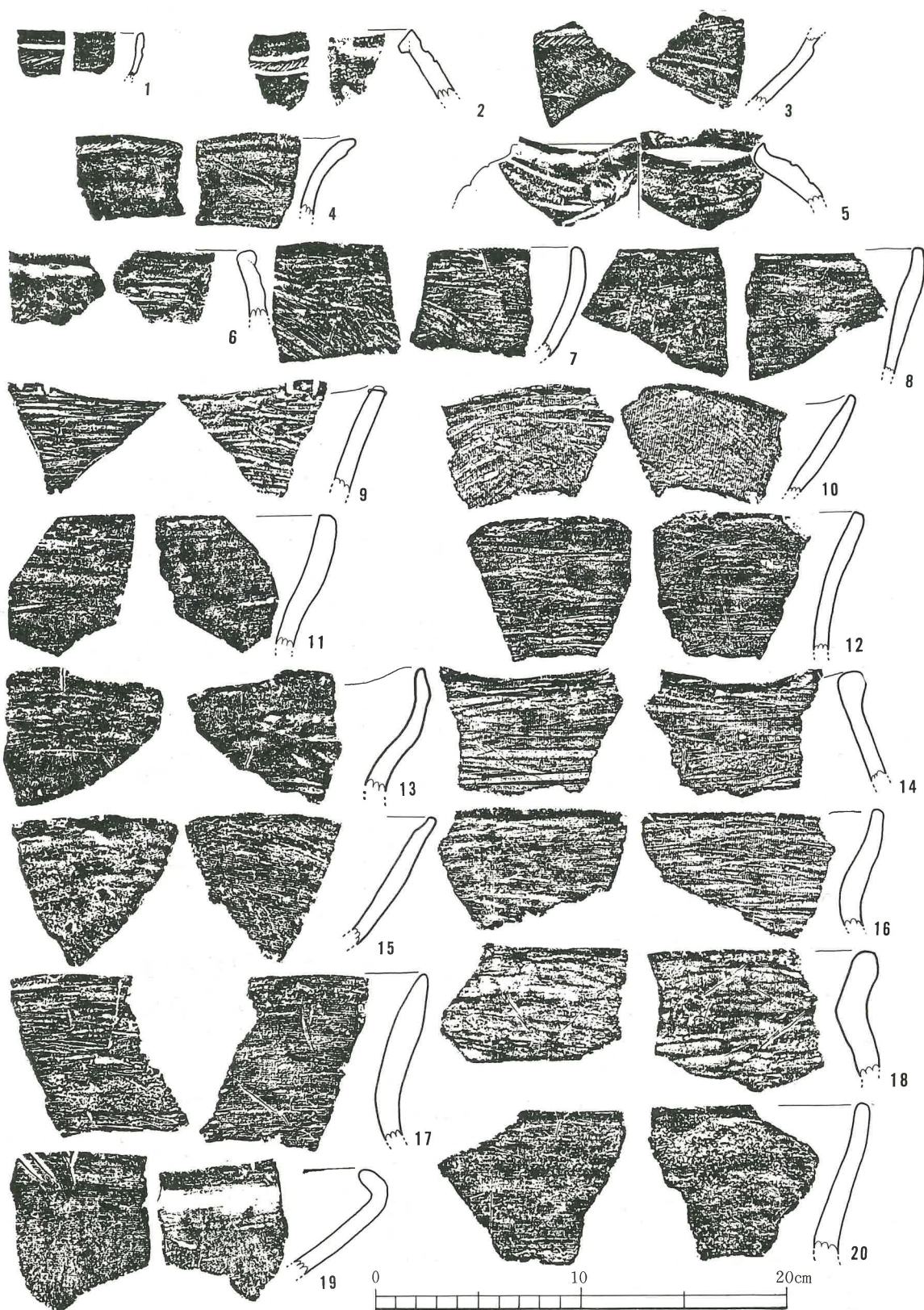
第58図 佐知遺跡各地区出土縄文後期土器実測図(8)



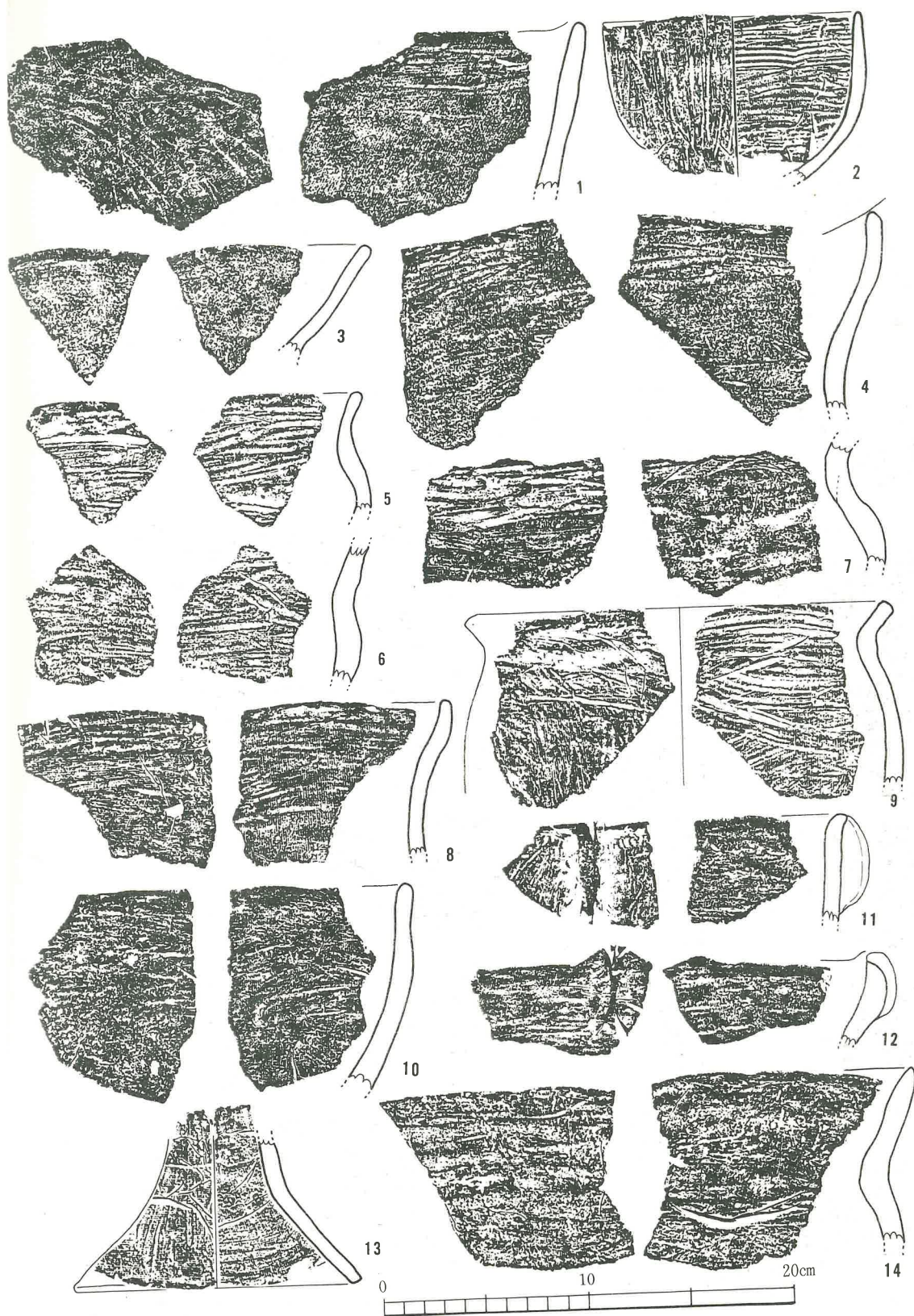
第59図 佐知遺跡各地区出土縄文後期土器実測図(9)



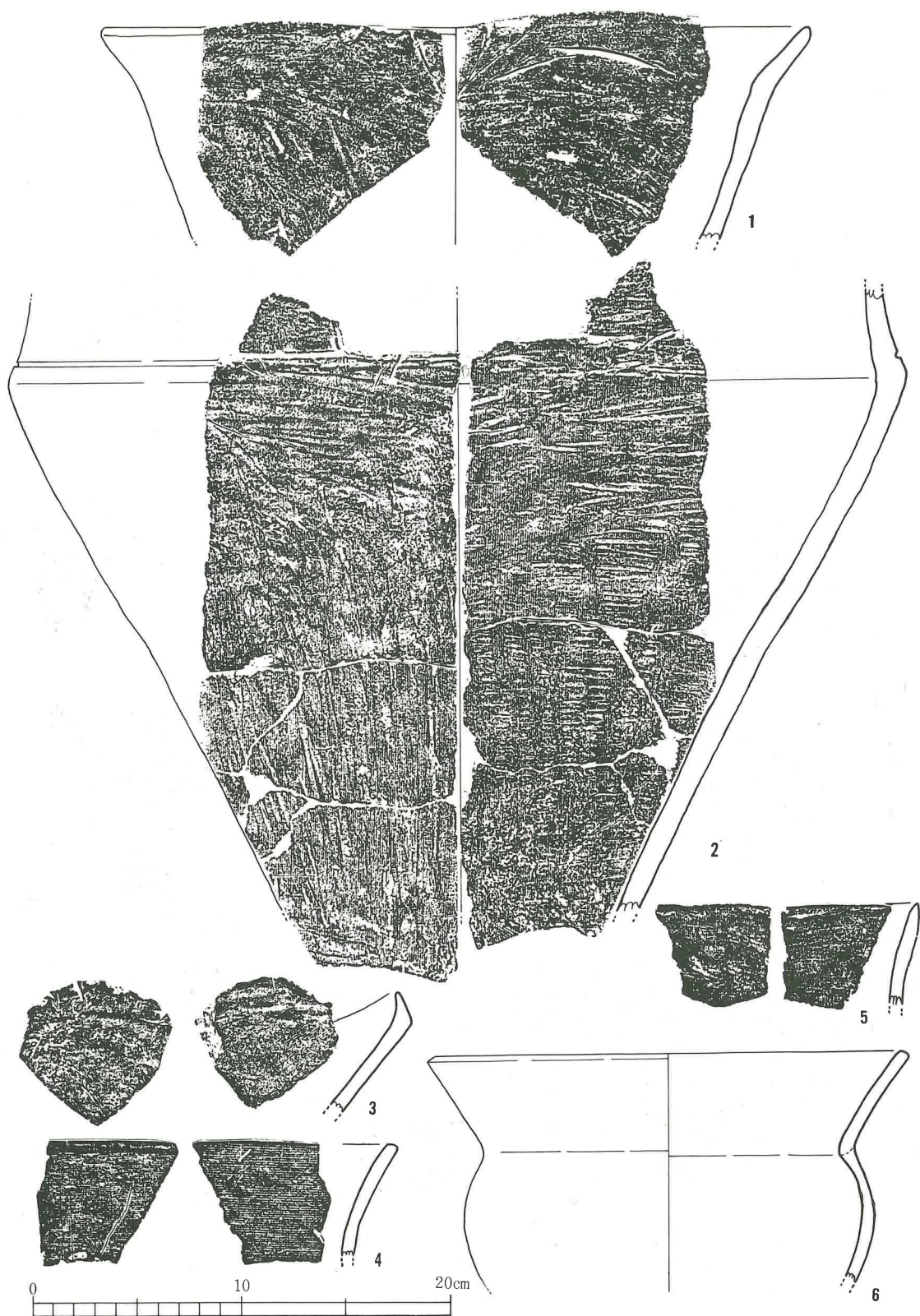
第60図 佐知遺跡各地区出土縄文後期土器実測図(10)



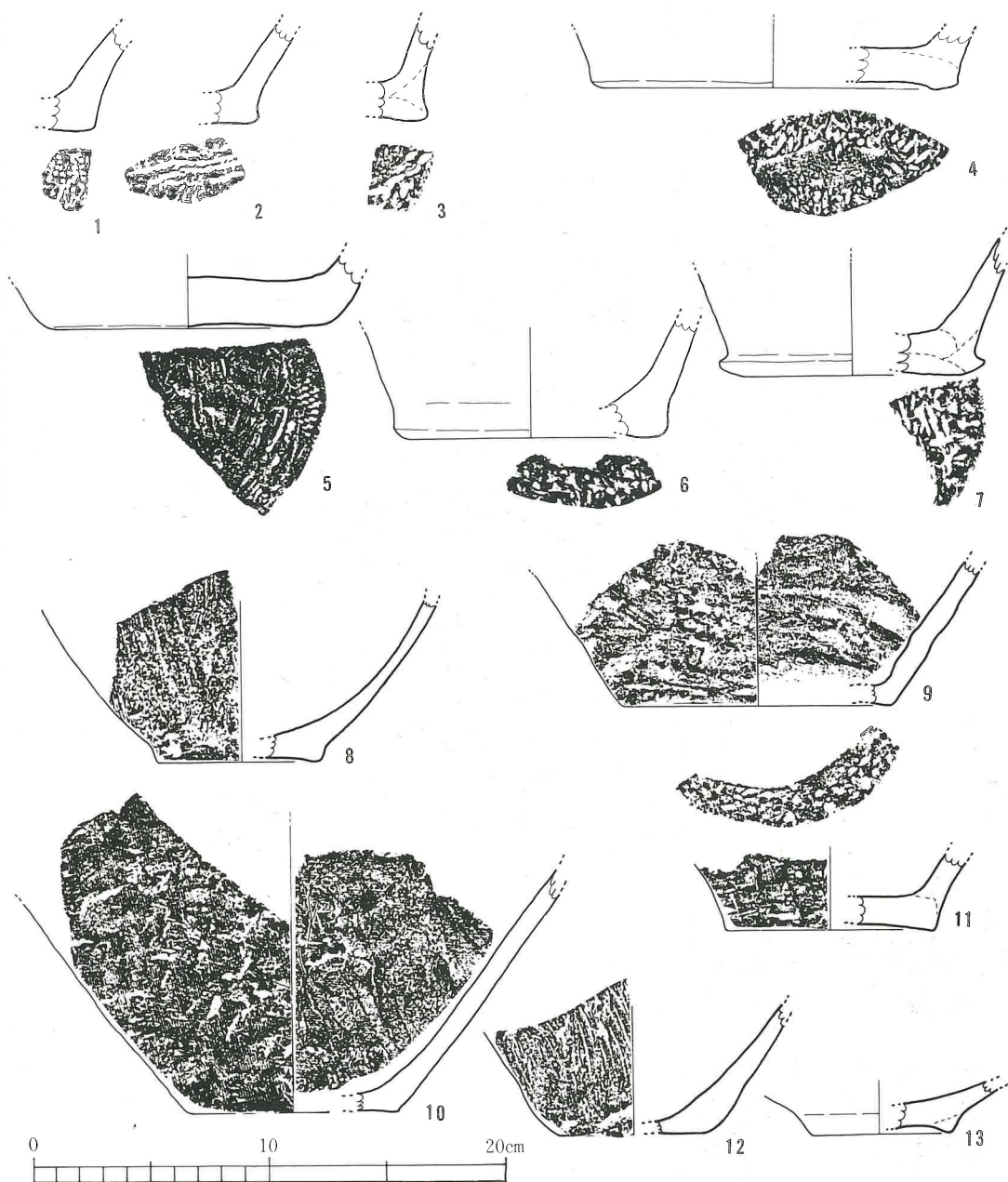
第61図 佐知遺跡各地区出土縄文後期土器実測図(11)



第62図 佐知遺跡各地区出土縄文後期土器実測図(12)



第63図 佐知遺跡各地区出土縄文後期土器実測図(13)



第64図 佐知遺跡各地区出土縄文後期土器実測図(14)

第9表 佐知遺跡各地区出土縄文後期土器観察表(1)

図番号	遺物番号	出土位置	文 様 の 特 徴 と 器 面 調 整 の 方 法		胎土	角閃石	斜長石	石英	その他	備考	分類
			表	裏							
51	1	A-9	条痕→凹線→横ナデ	淡茶色	条痕→横ナデ	黄茶色	○	○			I
	2	39号	条痕→凹線→横ナデ	茶色	条痕		○	○			I
	3	19号	縄文→沈線→笥研磨	茶色	笥研磨		○	○			II
	4	B-6	縄文→沈線→笥研磨	茶色	笥研磨		○	○			II
	5	B-6	沈線→横笥研磨	茶色	横笥研磨		○	○			III
	6	B-6	沈線→横笥研磨	茶色	横笥研磨		○	○			III
	7	A-14	沈線→横笥研磨 精製	茶色	横笥研磨		○	○			III
	8	A-10	沈線→横笥研磨 精製	淡茶色	横笥研磨		○	○	◎		III
	9	B-6	縄文→沈線→笥研磨	茶色	横笥研磨		○	○			IV
	10	27号	疑似縄文→沈線→縦笥研磨	茶色	横笥研磨		○	○			IV
	11	B-10	縄文→沈線→ナデ	明茶色	条痕→縄文→ナデ		○	○	白色粒		IV
	12	A-8	縄文→沈線→ナデ→丹塗り	茶色	横笥研磨		○	○			IV
	13	29号	縄文→沈線→ナデ	茶色	笥ナデ・笥研磨		○	○			IV
	14	A-9	縄文→沈線→笥研磨	茶色	笥研磨		○	○			IV
	15	A-8	縄文→沈線→笥研磨	茶色	条痕		○	○			IV
	16	B-12	縄文→沈線→ナデ	暗茶色	横笥研磨		○	○			IV
	17	B-14	縄文→沈線→笥研磨	赤茶色	条痕→横笥研磨		○	○			IV
	18	A-11	縄文→沈線→笥研磨	茶色	横笥研磨		○	○			IV
	19	A-14	縄文→沈線→笥研磨	黄茶色	巻貝条痕		○	○			IV
	20	B-8	巻貝条痕→縄文→沈線	黒色	巻貝条痕		○	○	白色粒		IV
52	1	20号	縄文→沈線	黄茶色	横ナデ		○	○			IV
	2	A-8	縄文→沈線→笥研磨	茶色	笥研磨		○	○			IV
	3	B-11	縄文→沈線→丹塗り→笥研磨	茶色	笥研磨		○	○			IV
	4	19号	縄文→沈線→笥研磨	暗茶色	横笥研磨		○	○			V
	5	21号	縄文→沈線	茶色	ナデ→笥研磨		○	○			V
	6	21号	縄文→沈線→笥研磨	茶色	横笥研磨		○	○			V
	7	B-12	縄文→沈線→笥研磨→丹塗り	黄茶色	横笥研磨		○	○	白色粒		V
	8	39号	縄文→沈線→笥研磨 穿孔	茶色	横笥研磨		○	○			V
	9	A-15	疑似縄文→ナデ	茶色	巻貝条痕		○	○			V
	10	B-8	疑似縄文→沈線	茶色	巻貝条痕→横笥研磨		○	○			V
	11	A-11	疑似縄文→笥研磨	明茶色	笥研磨		○	○			V
	12	20号	縄文→沈線→笥研磨	茶色	笥研磨		○	○			V
	13	31号	沈線→笥研磨	明茶色	笥研磨		○	○			V
	14	A-9	沈線→笥研磨・ナデ	明茶色	笥研磨・ナデ		○	○	○		V
	15	B-12	刻目→横笥研磨	黒色	横笥研磨		○	○	白色粒		V
	16	39号	ナデ 細い穿孔多数	淡茶色	ナデ		○	○			V
	17	28号	穿孔→笥研磨	茶色	横笥研磨		○	○			V
	18	B-12	条痕→笥研磨	茶色	条痕→笥研磨		○	○			V
53	1	A-3	沈線→横ナデ	茶色	横笥研磨		○	○			VI
	2	B-3	口唇に沈線・刺突 ナデ		ナデ		○	○			VI
	3	Y-7	条痕→沈線→横ナデ	茶色	条痕→横ナデ		○	○			VI
	4	39号	沈線→横ナデ	淡茶色	横笥研磨		○	○			VI
	5	A-15	沈線→ナデ	明茶色	条痕→横笥研磨		○	○			VI
	6	B-12	沈線→ナデ	茶色	巻貝条痕		○	○			VI
	7	39号	沈線→ナデ	茶色	横笥研磨		○	○			VI
	8	39号	沈線→ナデ	茶色	横笥研磨		○	○			VI
	9	Y-6	沈線→ナデ	茶色	削り状		○	○			VI
	10	28号	沈線→ナデ	黄茶色	巻貝条痕→ナデ		○	○			VI
	11	A-14	沈線→笥研磨	茶色	ナデ		○	○			VI
	12	A-15	沈線→ナデ	赤茶色	ナデ		○	○			VI
	13	A-15	沈線→ナデ	茶色	条痕→ナデ		○	○			VI
	14	A-15	条痕→沈線→ナデ	茶色	条痕		○	○			VI
54	1	33号	沈線→横ナデ	茶色	横笥研磨		○	○			VI
	2	A-15	条痕→沈線ナデ	茶色	ナデ		○	○			VI
	3	A-15	条痕→沈線→ナデ	茶色	巻貝条痕ナデ		○	○			VI
	4	B-14	沈線→ナデ	暗茶色	ナデ		○	○			VI
	5	45号	沈線→ナデ	茶色	ナデ		○	○			VI
	6	28号	沈線→ナデ	茶色	横条痕		○	○			VI

第10表 佐知遺跡各地区出土縄文後期土器観察表(2)

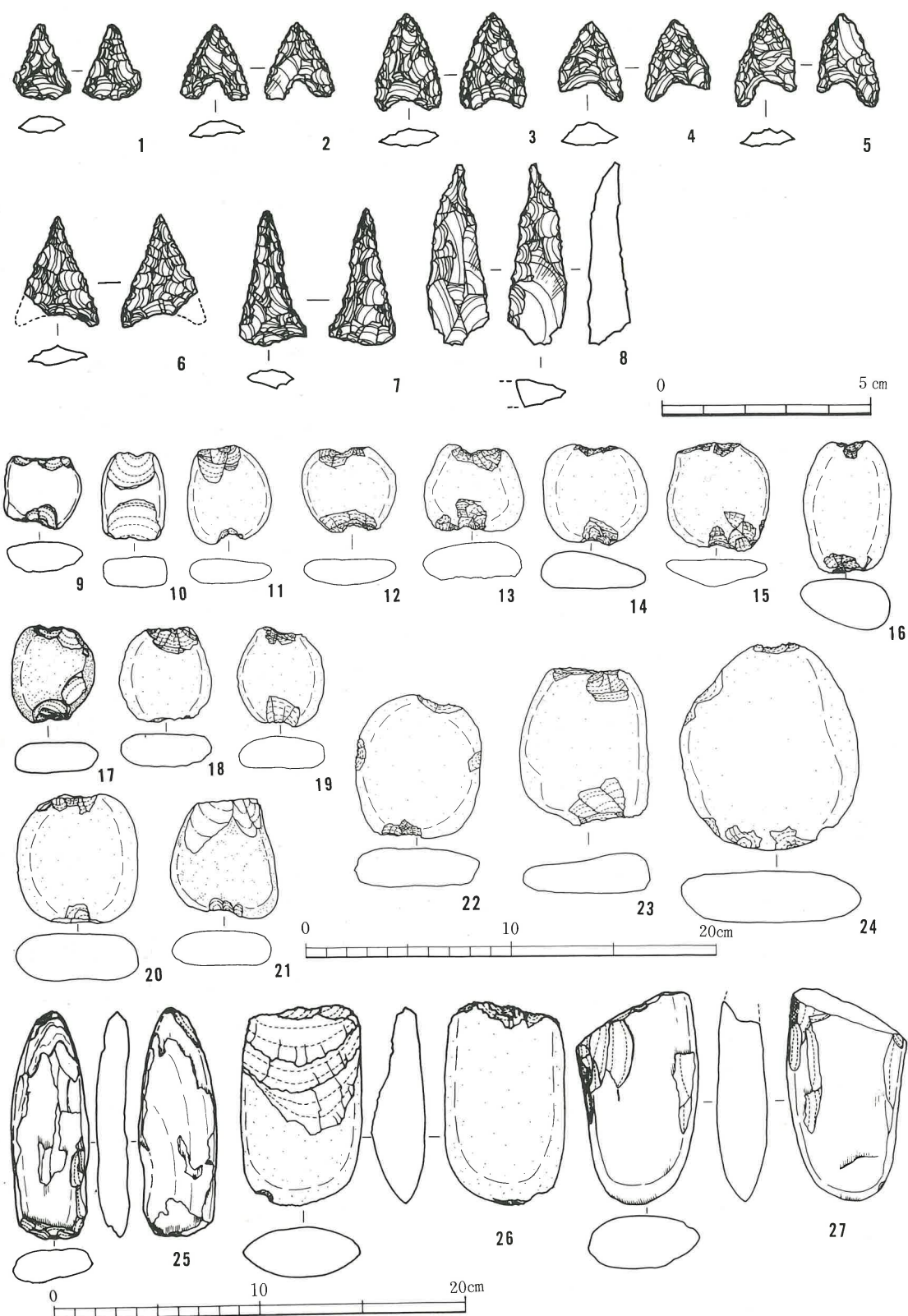
図番号	遺物位置	出土位置	文様の特徴と器面調整の方法		胎土				備考	分類
			表	裏	角閃石	斜長石	石英	その他		
54	7	B-6	沈線→横ナデ	黄茶色	削り状→篋研磨	○	○			VI
	8	A-15	沈線→横ナデ	暗茶色	巻貝条痕→篋研磨	○	○			VI
	9	A-12	縄文→沈線→横ナデ	茶色	横篋研磨	○	○			VI
	10	B-11	刺突・沈線→横ナデ	茶色	横条痕	○	○			VI
	11	A-15	沈線→横ナデ	茶色	横ナデ	○	○			VI
	12	30号	沈線→横ナデ	暗茶色	巻貝条痕→ナデ	○	○			VI
55	1	A-14	沈線→横ナデ	暗茶色	ナデ	○	○			VI
	2	A-15	巻貝条痕→沈線	茶色	巻貝条痕	○	○			VI
	3	39号	沈線→ナデ	茶色	ナデ	○	○			VI
	4	A-15	沈線→ナデ	白茶色	ナデ	○	○			VI
	5	A-14	条痕→沈線ナデ	茶色	巻貝条痕	○	○			VI
	6	A-14	巻貝条痕→沈線→ナデ	茶色	削り状	○	○			VI
	7	37号	沈線→ナデ	茶色	篋研磨	○	○			VI
	8	B-14	沈線→ナデ	茶色	篋研磨	○	○			VI
	9	B-9	沈線→ナデ	茶色	横条痕	○	○	赤色粒		VI
	10	A-15	沈線→篋研磨	黒茶色	巻貝条痕	○	○			VI
	11	B-12	沈線→ナデ	茶色	条痕	○	○			VI
	12	30号	沈線→ナデ	茶色	条痕	◎	○			VI
	13	A-9	沈線→ナデ	白茶色	巻貝条痕	○	○			VI
	14	30号	沈線→横篋研磨	茶色	横篋研磨	○	○			VI
	15	A-11	巻貝条痕→沈線→ナデ	明茶色	ナデ	○	○			VI
56	1	30号	条痕→沈線→ナデ	明茶色	条痕	◎	○			VI
	2	A-14	条痕→沈線→縄文状の刺突	暗茶色	条痕	○	○			VI
	3	A-8	条痕→沈線	茶色	条痕	○	○			VI
	4	B-12	条痕→ナデ→沈線	茶色	条痕	○	○			VI
	5	A-9	ナデ→沈線	茶色	ナデ→沈線	○	○			VI
	6	A-9	条痕→ナデ→沈線	茶色	条痕→ナデ	○	○			VI
	7	A-9	ナデ→沈線	茶色	横篋研磨	○	○			VI
	8	19号	ナデ→沈線	茶色	ナデ	○	○			VI
	9	B-8	ナデ→沈線→横篋研磨	茶色	削り状	○	○			VI
	10	39号	巻貝条痕→沈線	明茶色	巻貝条痕→ナデ	○	○			VI
	11	A-9	横ナデ→沈線	黄茶色	ナデ	○	○			VI
	12	B-11	ナデ→沈線	淡茶色	条痕	○	○			VI
	13	39号	巻貝条痕→沈線	明茶色	巻貝条痕	○	○			VI
	14	19号	横ナデ→沈線 穿孔	茶色	ナデ	○	○			VI
	15	B-7	巻貝条痕→沈線	赤茶色	条痕→ナデ	○	○			VI
	16	A-14	ナデ→沈線	茶色	ナデ	○	○			VI
57	1	A-8	縄文→横篋研磨	茶色	横篋研磨	○	○			VII
	2	A-6	縄文→篋研磨	茶色	沈線→横篋研磨	○	○			VII
	3	B-11	縄文→篋研磨	茶色	横篋研磨	○	○			VII
	4	28号	縄文→横ナデ	茶色	横ナデ	○	○			VII
	5	B-9	縄文→沈線→横篋研磨	茶色	横篋研磨	○	○			VII
	6	B-11	浮文・縄文→篋研磨	明茶色	縦ナデ	○	○			VII
	7	B-2	縄文→ナデ	茶色	ナデ	○	○			VII
	8	B-6	疑似縄文→篋研磨	茶色	篋研磨	○	○			VII
	9	29号	疑似縄文→篋研磨	茶色	篋研磨	○	○			VII
	10	29号	疑似縄文→篋研磨	茶色	篋研磨	○	○			VII
	11	A-10	浮文→疑似縄文→横篋研磨	明茶色	横篋研磨	○	○			VII
	12	28号	疑似縄文→横篋研磨	茶色	横篋ナデ	○	○			VII
	13	27号	疑似縄文→横篋研磨	明茶色	横篋研磨	○	○			VII
	14	A-8	疑似縄文・巻貝条痕	茶色	疑似縄文→ナデ	○	○			VII
	15	B-9	疑似縄文→横篋研磨	茶色	横篋研磨	○	○			VII
	16	21号	疑似縄文→横篋研磨	茶色	横篋研磨	○	○			VII
	17	B-12	疑似縄文→ナデ	茶色	横条痕	◎	◎			VII
	18	28号	疑似縄文→ナデ	茶色	横ナデ	○	○			VII
58	1	B-11	疑似縄文→沈線	茶色	条痕→ナデ	○	○			VIII
	2	29号	縄文→沈線	茶色	ナデ→横篋研磨	○	○			VIII
	3	A-3	ナデ→縄文→沈線	茶色	横篋研磨	○	○			VIII

第11表 佐知遺跡各地区出土縄文後期土器観察表(3)

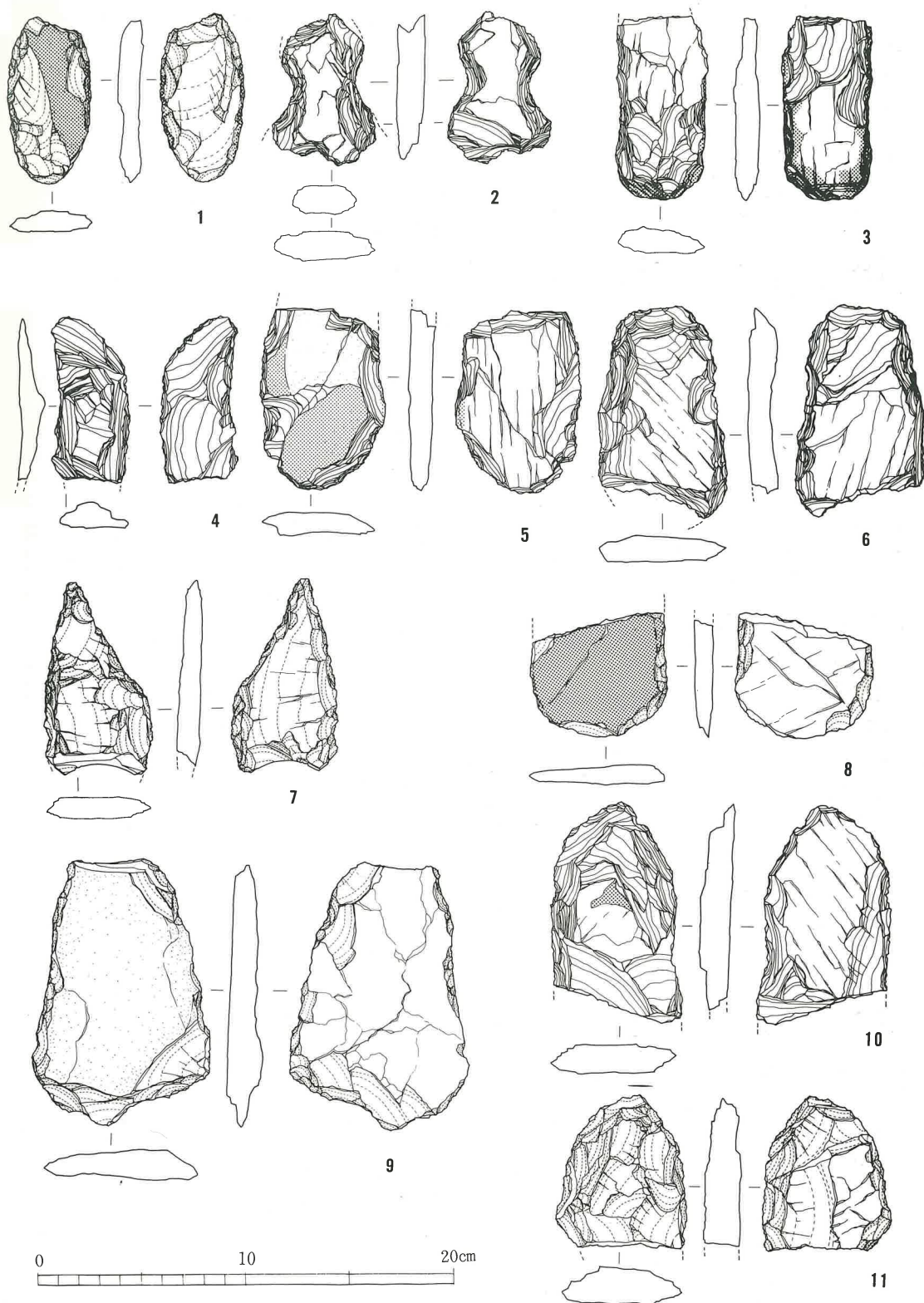
図番号	遺物番号	出土位置	文様の特徴と器面調整の方法		胎土				備考	分類
			表	裏	角閃石	斜長石	石英	その他		
58	4	B-9	疑似縄文→沈線→ナデ	茶色	条痕	○	○			VIII
	5	A-3	縄文→沈線→横篋研磨	茶色	横篋研磨	○	○			VIII
	6	B-10	縄文→沈線→ナデ	黒茶色	ナデ	○	○			VIII
	7	A-9	疑似縄文→沈線	茶色	横篋研磨	○	○			VII
	8	A-9	疑似縄文→沈線	明茶色	横篋研磨	○	○			VIII
	9	A-11	疑似縄文→沈線→篋研磨	茶色	横ナデ	○	○			VII
	10	28号	縄文→沈線→篋研磨	明茶色	篋研磨	○	○			VIII
	11	B-7	縄文→沈線	茶色	横篋研磨	○	○			VII
	12	A-10	浮文→縄文	淡茶色	横ナデ	○	○			VII
	13	B-7	縄文→沈線	茶色	横篋研磨	○	○		11と同一個体	VII
	14	B-3	縄文→沈線→横篋研磨	明茶色	横篋研磨	○	○			VIII
	15	B-2	縄文→沈線	茶色	条痕→ナデ	○	○			VIII
	16	B-11	疑似縄文→沈線	明茶色	巻貝条痕	○	○			VIII
	17	A-3	縄文→沈線→横篋研磨		横ナデ	○	○			VIII
59	1	28号	ナデ→沈線	薄茶色	ナデ	○	○			IX
	2	39号	沈線→横篋研磨	茶色	横篋研磨	○	○			IX
	3	B-8	ナデ→沈線	暗茶色	巻貝条痕→ナデ	○	○			IX
	4	A-14	沈線→ナデ	明茶色	ナデ	○	○			IX
	5	B-10	巻貝条痕→沈線→ナデ・篋研磨	茶色	巻貝条痕→ナデ	○	○			IX
	6	B-11	ナデ→沈線	茶色	ナデ	○	○			IX
	7	A-14	条痕→沈線	茶色	横篋研磨	○	○			IX
	8	B-14	巻貝条痕→縄文→沈線	茶色	巻貝条痕	○	○			IX
	9	B-7	条痕→ナデ→沈線	茶色	条痕→ナデ	○	○			IX
	10	37号	ナデ→沈線		横篋研磨	○	○			IX
	11	21号	ナデ→沈線→篋研磨	茶色	ナデ	○	○			IX
	12	21号	ナデ→沈線		横篋研磨	○	○			IX
	13	A-14	ナデ→先端不揃い工具による沈線	茶色	横篋研磨	○	○			IX
	14	A-8	ナデ→沈線	暗茶色	条痕→ナデ	○	○			IX
	15	A-10	横篋研磨→口唇刻目	明茶色	横篋研磨	○	○			IX
	16	B-10	ナデ→沈線	白茶色	条痕→ナデ	○	○			IX
	17	37号	ナデ→巻貝の沈線・縄文	茶色	ナデ	○	○			IX
	18	A-9	条痕→沈線→ナデ	茶色	横篋研磨	○	○			IX
	19	A-8	ナデ→先端不揃い工具による沈線	茶色	ナデ	○	○			IX
	20	A-10	条痕→沈線	明茶色	条痕	○	○			IX
	21	39号	浮文→刺突→沈線→篋研磨・明茶色		横篋研磨	○	○			IX
	22	B-6	ナデ→沈線・放射筋貝の刺突	薄茶色	横篋研磨	○	○			IX
	23	A-7	条痕→沈線	茶色	条痕→ナデ	○	○			IX
60	1	B-7	縄文→沈線	茶色	横篋研磨	○	○			X
	2	A-12	横篋研磨→縄文→沈線→篋研磨	茶色	横篋研磨	○	○			X
	3	A-15	縄文→沈線→横篋研磨	黒色	横篋研磨	○	○			X
	4	27号	縄文→沈線→横篋研磨	白茶色	横篋研磨	○	○			X
	5	27号	縄文→沈線→横篋研磨	淡茶色	横篋研磨	○	○			X
	6	A-9	縄文→沈線→横篋研磨	明茶色	横篋研磨	○	○			X
	7	A-15	縄文→沈線→横篋研磨	暗茶色	横篋研磨	○	○			X
	8	27号	横篋研磨→沈線	黒茶色	横篋研磨	○	○			X
	9	A-15	横篋研磨→沈線	淡茶色	横篋研磨	○	○			X
	10	27号	横篋研磨→沈線	暗茶色	横篋研磨	○	○			X
	11	A-10	縄文→沈線	明茶色	横篋研磨	○	○			X
	12	B-7	縄文→沈線→篋研磨	茶色	横篋研磨	○	○			X
	13	28号	縄文→沈線	明茶色	横篋研磨	○	○			X
	14	B-10	横篋研磨	白茶色	横篋研磨	○	○			X
	15	B-11	縄文→沈線→横篋研磨	黄茶色	横篋研磨	○	○			X
	16	28号	横篋研磨→沈線	薄茶色	横篋研磨	○	○			X
	17	A-10	横篋研磨→沈線	明茶色	横篋研磨	○	○			X
	18	A-5	横篋研磨→沈線	黄茶色	横篋研磨	○	○			X
	19	A-9	横篋研磨→沈線	淡茶色	横篋研磨	○	○			X
	20	A-10	疑似縄文→沈線→横篋研磨	黄茶色	横篋研磨	○	○			X
	21	21号	疑似縄文→沈線→篋研磨	茶色	篋研磨	○	○			X

第12表 佐知遺跡各地区出土縄文後期土器観察表(4)

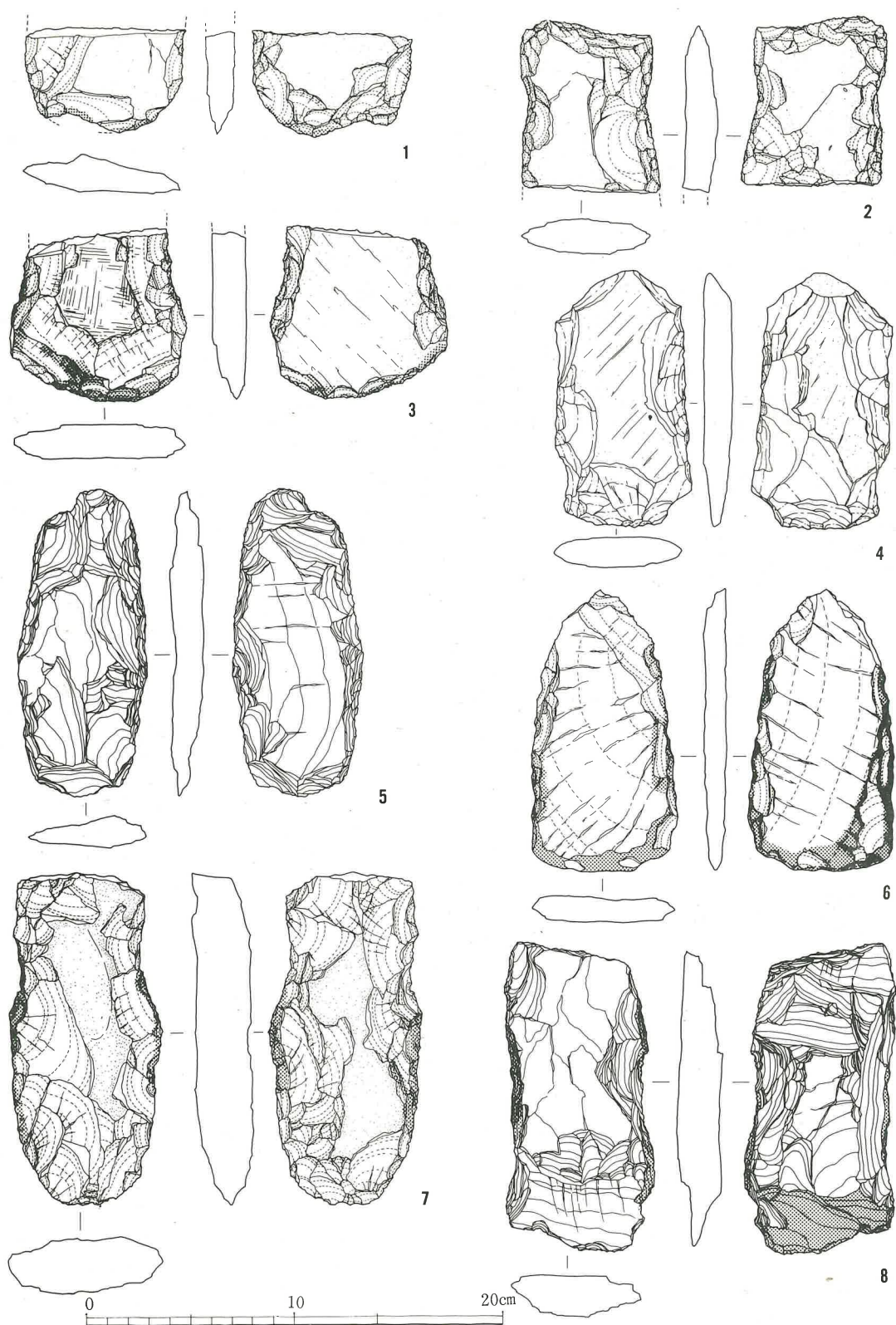
図番号	遺物番号	出土位置	文様の特徵と器面調整の方法				胎土				備考	分類
			表		裏		角閃石	斜長石	石英	その他		
60	22	21号	縄文→沈線→篋研磨	茶色	篋研磨		○	○				X
	23	A-10	縄文→沈線→篋研磨	茶色	篋研磨		○	○				X
	24	B-10	疑似縄文→沈線→ナデ	茶色	条痕→篋研磨		○	○				X
	25	B-6	縄文→沈線→篋研磨	茶色	ナデ		○	○				X
	26	21号	縄文→沈線→篋研磨	淡灰色	横篋研磨		○	○				X
61	1	28号	沈線→羽状文→横篋研磨	茶色	横篋研磨		○	○			注口土器	XI
	2	28号	沈線→羽状文→横篋研磨	薄茶色	ナデ		○	○				XI
	3	B-6	横篋研磨→羽状文	茶色	横篋研磨		○	○				XI
	4	A-10	羽状文→篋研磨	淡茶色	横篋研磨		○	○				XI
	5	A-15	疑似縄文→沈線→篋研磨	淡茶色	横ナデ		○	○			注口土器	XI
	6	33号	ナデ	明茶色	条痕		○	○				XII
	7	A-8	巻貝条痕	茶色	巻貝条痕		○	○				XII
	8	B-6	横篋研磨	薄茶色	横篋研磨		○	○				XII
	9	37号	巻貝条痕	茶色	巻貝条痕		○	○				XII
	10	B-14	横篋研磨	茶色	横篋研磨		○	○			スス付着	XII
	11	A-6	横篋研磨	茶色	横篋研磨		○	○				XII
	12	A-10	巻貝条痕	茶色	巻貝条痕		○	○				XII
	13	A-4	横ナデ	茶色	横ナデ		○	○				XII
	14	B-10	巻貝条痕	茶色	巻貝条痕		○	○				XII
	15	B-11	ナデ	茶色	削り状		○	○				XII
	16	B-11	巻貝条痕	茶色	巻貝条痕		○	○				XII
	17	A-11	巻貝条痕	茶色	巻貝条痕→篋研磨		○	○				XII
	18	A-15	巻貝条痕→横ナデ	茶色	横篋研磨		○	○				XII
	19	A-7	横篋研磨	茶色	横篋研磨		○	○				XII
	20	39号	横篋研磨	茶色	横篋研磨		○	○				XII
62	1	B-11	巻貝条痕→ナデ	黒茶色	巻貝条痕→ナデ		○	○				XII
	2	A-14	条痕	茶色	条痕→下位は削り状		○	○				XII
	3	A-10	ナデ	茶色	ナデ		○	○				XII
	4	B-12	巻貝条痕→ナデ	明茶色	巻貝条痕→ナデ		○	○				XII
	5	B-11	巻貝条痕	茶色	巻貝条痕		○	○				XII
	6	A-12	巻貝条痕	暗茶色	巻貝条痕		○	○				XII
	7	37号	巻貝条痕→ナデ	白茶色	ナデ		◎	○				XII
	8	B-11	巻貝条痕→横篋研磨	茶色	巻貝条痕→横篋研磨		○	○				XII
	9	A-14	条痕→篋ナデ	暗茶色	条痕→篋ナデ		○	○	○			XII
	10	A-10	条痕→ナデ	赤茶色	ナデ		○	○				XII
	11	27号	浮文→ナデ	明茶色	横ナデ		○	○				XII
	12	29号	浮文→ナデ	黄茶色	横ナデ		○	○	○			XII
	13	A-15	条痕	黄茶色	条痕		○	○				XII
	14	39号	横ナデ	暗茶色	削り状		○	○				XII
63	1	27号	巻貝条痕→ナデ	暗茶色	巻貝条痕→削り状		○	○				XII
	2	B-3	条痕→篋研磨	茶色	条痕→篋研磨		○	○				XII
	3	A-10	横篋研磨	薄茶色	横篋研磨		○	○				XII
	4	B-7	横篋研磨	茶色	横篋研磨		○	○				XII
	5	28号	横篋研磨	茶色	横篋研磨		○	○				XII
	6	B-10	横篋研磨	茶色	横篋研磨		○	○			スス付着	XII
64	1	A-8	網代底 ナデ	茶色	ナデ		○	○			白色粒	
	2	A-9	網代底 ナデ	茶色	巻貝条痕		○	○				
	3	A-11	網代底 ナデ	茶色	ナデ		○	○				
	4	A-7	網代底 ナデ	茶色	ナデ		○	○				
	5	21号	網代底 篋研磨	茶色	ナデ		○	○				
	6	21号	網代底 ナデ	赤茶色	条痕		○	○				
	7	13号	網代底 ナデ	赤茶色	ナデ		○	○				
	8	A-8	条痕	黄茶色	ナデ		○	○				
	9	B-11	横ナデ 雑なつくり	黄茶色	ナデ		○	○				
	10	30号	篋研磨	茶色	ナデ		○	○				
	11	B-3	削り状	茶色	巻貝条痕		○	○				
	12	A-10	条痕	茶色	ナデ		○	○				
	13	B-3	篋研磨	茶色	篋研磨		○	○				



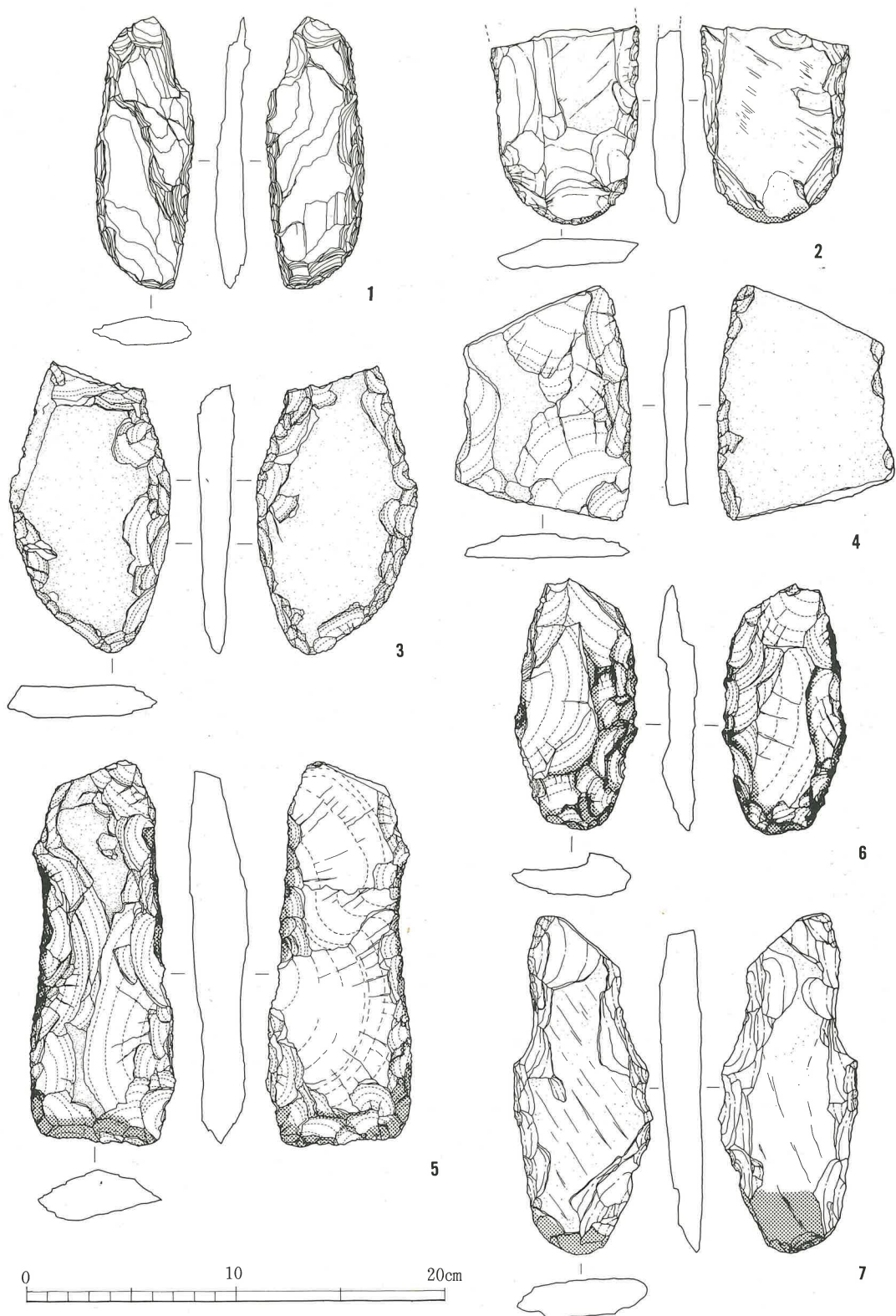
第65図 佐知遺跡各地区出土縄文後期石器実測図(1)



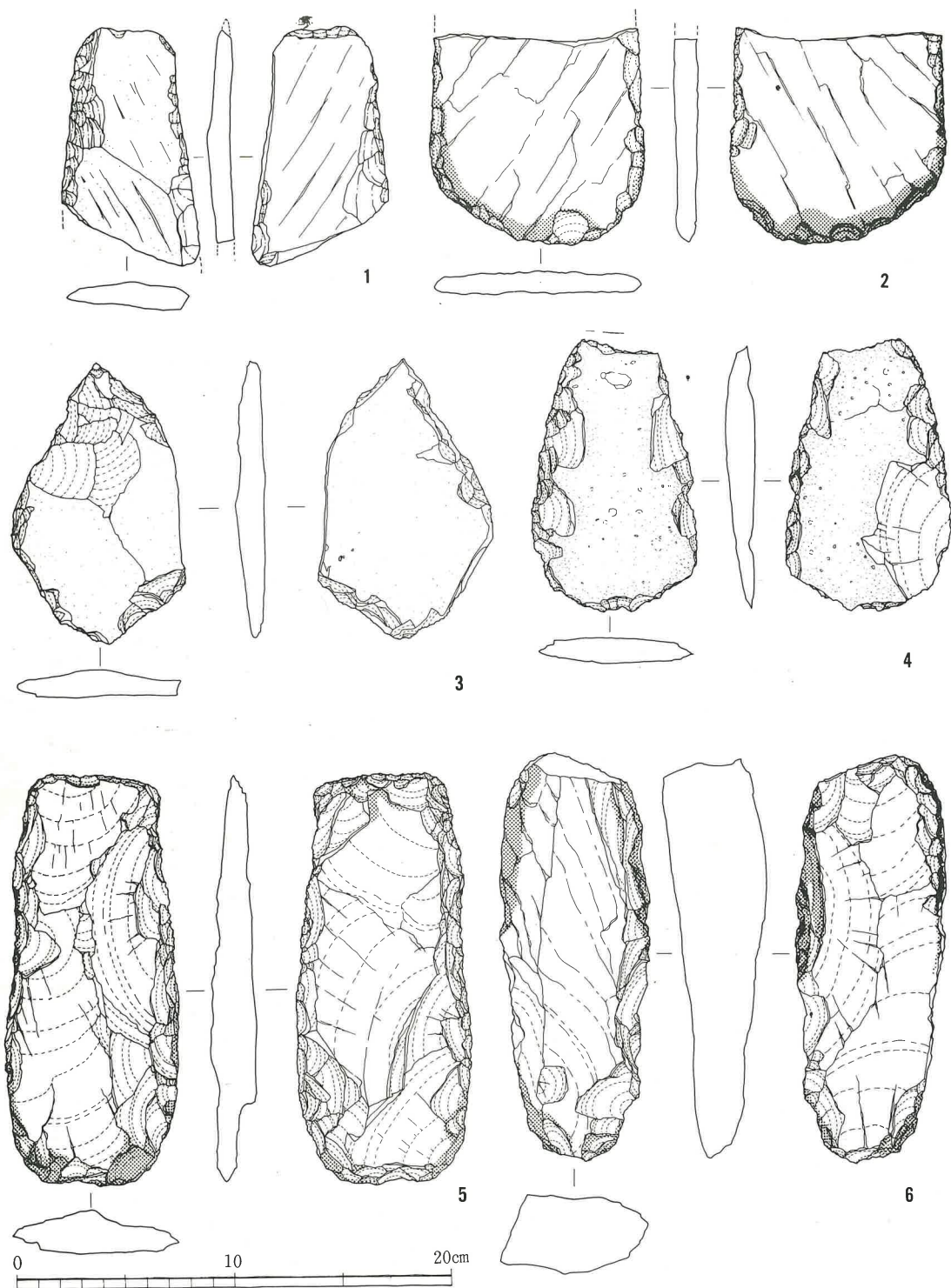
第66図 佐知遺跡各地区出土縄文後期石器実測図(2)



第67図 佐知遺跡各地区出土縄文後期石器実測図(3)



第68図 佐知遺跡各地区出土縄文後期石器実測図(4)



第69図 佐知遺跡各地区出土縄文後期石器実測図(5)

第13表 佐知遺跡出土縄文時代石器観察表(1)

図番号	遺物番号	出土位置	器種	石材	大 き さ				備 考
					長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	
18	1	4号遺構	石 鏃	姫島黒曜石	2.3	1.6	0.3	1.1	脚部を欠く 脚部を欠く 脚部を欠く 脚部を欠く 先端と脚部を欠く 両側に使用痕 両側は磨滅による刻み目
	2		石 鏃	姫島黒曜石	2.9	1.5+ α	0.4	2.0	
	3		石 鏃	姫島黒曜石	2.6	2.0+ α	0.4	1.4	
	4		石 鏃	姫島黒曜石	2.4	1.6+ α	0.4	1.0	
	5		石 鏃	姫島黒曜石	2.0	1.7	0.5	0.9	
	6		石 鏃	姫島黒曜石	2.3+ α	1.8	0.5	1.0	
	7		不 明	姫島黒曜石	2.5	1.4+ α	0.3	1.5	
	8		スクレーパー	姫島黒曜石	2.7+ α	1.6+ α	0.5	2.9	
	9		スクレーパー	姫島黒曜石	6.7	2.1	0.5	7.7	
	10		石 錐	安 山 岩	5.7	5.0	2.2	59.0	
	11		石 錐	安 山 岩	5.2	5.5	2.0	74.0	
	12		石 錐	安 山 岩	7.0	5.5	2.0	124.0	
	13		石 錐	安 山 岩	6.0	5.1	1.6	84.0	
	14		石 皿	安 山 岩	10.2	4.8	2.0	198.0	
19	1	4号遺構	打製石斧	安 山 岩	8.2	7.8	2.2	154.0	一部分のみ
	2		打製石斧	結晶片岩	9.3	6.5	0.9	98.0	基部を欠く
	3		打製石斧	安 山 岩	12.5	6.7	2.7	258.0	刃部を欠く
	4		打製石斧	安 山 岩	8.8	7.1	2.4	258.0	刃部のみ
	5		打製石斧	結晶片岩	8.5	8.2	2.0	204.0	両端を欠く、磨滅が著しい
	6		打製石斧	安 山 岩	9.5	6.8	2.5	238.0	両端を欠く
	7		打製石斧	安 山 岩	10.7	6.8	1.5	154.0	両端を欠く
	8		打製石斧	安 山 岩	11.2	5.6	1.6	132.0	扁平な自然礫を素材
27	1	16号遺構	石 錐	安 山 岩	4.4	5.2	1.5	45.0	
	2		石 錐	安 山 岩	5.3	5.2	1.6	56.0	
	3		石 錐	安 山 岩	6.3	5.7	1.6	100.0	
40	1	40号遺構	石 錐	安 山 岩	5.2	4.1	1.4	40.0	自然礫を周辺加工 一部を欠く 一部のみ
	2		扁平打製石斧	安 山 岩	8.4	5.5	0.7	88.0	
	3		扁平打製石斧	安 山 岩	9.3	7.3	1.5	110.0	
	4		扁平打製石斧	安 山 岩	10.6	7.4	2.7	240.0	
	5		石 皿	安 山 岩	13.0	10.0	7.2	—	
48	1	J-8	扁平打製石斧	結晶片岩	15.0	5.4	1.4	290.0	刃部に使用痕がある。
	2		扁平打製石斧	安 山 岩	15.6	5.7	2.5	310.0	自然面が両面に残る
65	1	19号遺構	石 鏃	姫島黒曜岩	1.8	1.4	0.4	0.7	脚部を欠く
	2	19号遺構	石 鏃	姫島黒曜岩	1.7	1.6	0.4	0.6	
	3	B-11	石 鏃	姫島黒曜岩	2.2	1.6	0.3	1.1	
	4	B-6	石 鏃	姫島黒曜岩	2.0	1.5	0.5	1.0	
	5	3号遺構	石 鏃	姫島黒曜岩	2.3	1.5	0.4	0.9	
	6	14号遺構	石 鏃	姫島黒曜岩	2.6	1.7+ α	0.4	0.9	
	7	45号遺構	石 鏃	姫島黒曜岩	3.2	1.7	0.5	1.3	
	8	28号遺構	石 鏃	姫島黒曜岩	4.4	1.4	1.0	3.5	

第14表 佐知遺跡出土縄文後期石器観察表(2)

図番号	遺物番号	出土位置	器種	石材	大 き さ				備 考
					長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	
65	10	12号遺構	石 錐	安 山 岩	3.7	3.5	1.4	22.0	四方から打ち欠き 打ち欠きは明瞭でない 刃部を欠く 基部を欠く
	11	19号遺構	石 錐	安 山 岩	4.3	3.1	1.5	6.0	
	12	B - 11	石 錐	安 山 岩	5.0	4.2	1.1	35.0	
	13	39号遺構	石 錐	安 山 岩	4.2	4.6	1.3	40.0	
	14	39号遺構	石 錐	安 山 岩	4.3	4.8	1.7	45.0	
	15	2号遺構	石 錐	安 山 岩	5.0	5.1	1.6	60.0	
	16	B - 2	石 錐	安 山 岩	5.0	5.0	1.3	45.0	
	17	28号遺構	石 錐	安 山 岩	6.6	4.4	2.3	90.0	
	18	表 採	石 錐	安 山 岩	4.6	4.0	1.5	41.0	
	19	B - 9	石 錐	安 山 岩	4.6	4.4	1.6	35.0	
	20	B - 2	石 錐	安 山 岩	5.0	4.1	1.5	40.0	
	21	B - 2	石 錐	安 山 岩	6.2	6.0	2.1	120.0	
	22	27号遺構	石 錐	安 山 岩	5.8	5.2	1.6	80.0	
	23	27号遺構	石 錐	安 山 岩	7.0	6.2	1.8	130.0	
	24	B - 10	石 錐	安 山 岩	7.5	6.2	1.8	130.0	
	25	9号遺構	石 錐	安 山 岩	10.0	8.5	2.5	340.0	
66	26	2号遺構	石 斧	安 山 岩	11.0	3.8	1.3	98.0	分銅形石斧？ 一部か 刃部のみ 刃部を欠く 刃部を欠く 一部削落 自然面をもつ 刃部を欠く
	27	A - 15	石 斧	安 山 岩	9.6	6.0	2.3	245.0	
	28	A - 10	石 斧	安 山 岩	10.5	5.8	2.5	224.0	
	1	表 採	打製石斧	安 山 岩	8.1	4.9	1.0	88.0	
	2	19号遺構	打製石斧	結晶片岩	7.5	5.0	1.4	61.0	
	3	19号遺構	打製石斧	結晶片岩	8.8	4.2	1.3	70.0	
	4	37号遺構	打製石斧	結晶片岩	7.7	3.6	1.3	65.0	
	5	37号遺構	打製石斧	結晶片岩	8.5	6.0	1.2	89.0	
	6	48号遺構	打製石斧	結晶片岩	10.3	6.2	1.2	93.0	
	7	B - 11	打製石斧	サヌカイト	9.3	5.2	1.0	51.0	
	8	50号遺構	打製石斧	結晶片岩	5.8	6.7	1.0	62.0	
67	9	51号遺構	打製石斧	安 山 岩	12.5	8.5	1.5	131.0	両面に自然面 刃部のみ 両端を欠く 自然面をもつ 自然面をもつ 刃部は磨滅のためか磨製状 両面に自然面 自然面をもつ
	10	29号遺構	打製石斧	結晶片岩	10.5	6.0	1.5	11.0	
	11	試 堀	打製石斧	安 山 岩	7.2	6.2	1.7	90.0	
	1	13号遺構	打製石斧	安 山 岩	5.0	7.5	1.4	80.0	
	2	B - 11	打製石斧	安 山 岩	8.0	6.5	1.7	123.0	
	3	表 採	打製石斧	安 山 岩	8.0	8.5	1.6	168.0	
	4	39号遺構	打製石斧	安 山 岩	12.4	6.4	1.4	171.0	
	5	B - 6	打製石斧	結晶片岩	14.5	6.3	1.5	204.0	
68	6	3号遺構	打製石斧	安 山 岩	13.5	7.0	1.1	213.0	刃部に使用痕 基部を欠く 両面に自然面 両面に自然面 両端を欠く 一部に自然面 刃部は使用により磨滅 基部に両側から挟り
	7	39号遺構	打製石斧	安 山 岩	15.5	7.0	2.6	271.0	
	8	39号遺構	打製石斧	安 山 岩	15.8	7.3	2.8	250.0	
	1	28号遺構	打製石斧	結晶片岩	13.0	4.6	1.4	114.0	
	2	20号遺構	打製石斧	安 山 岩	9.4	7.0	1.4	132.0	
	3	B - 11	打製石斧	安 山 岩	14.0	7.8	1.5	204.0	
	4	B - 6	打製石斧	安 山 岩	10.5	8.0	1.1	148.0	
69	5	27号遺構	打製石斧	安 山 岩	18.2	7.0	2.6	347.0	節理面を利用 両面に自然面 両面に自然面
	6	3号遺構	打製石斧	安 山 岩	12.0	6.0	1.9	120.0	
	7	49号遺構	打製石斧	安 山 岩	16.0	6.5	1.8	254.0	
	1	39号遺構	打製石斧	安 山 岩	11.0	6.0	1.2	110.0	
	2	B - 10	打製石斧	安 山 岩	9.5	10.0	1.0	135.0	
	3	表 採	打製石斧	安 山 岩	12.5	7.7	1.3	120.0	
69	4	13号遺構	打製石斧	安 山 岩	12.5	7.5	1.3	128.0	
	5	B - 11	打製石斧	安 山 岩	18.8	8.0	2.0	393.0	
	6	B - 7	打製石斧	安 砂 岩	18.5	7.0	4.5	225.0	

2 縄文時代晩期

(1) 土器片加工品 (第70図)

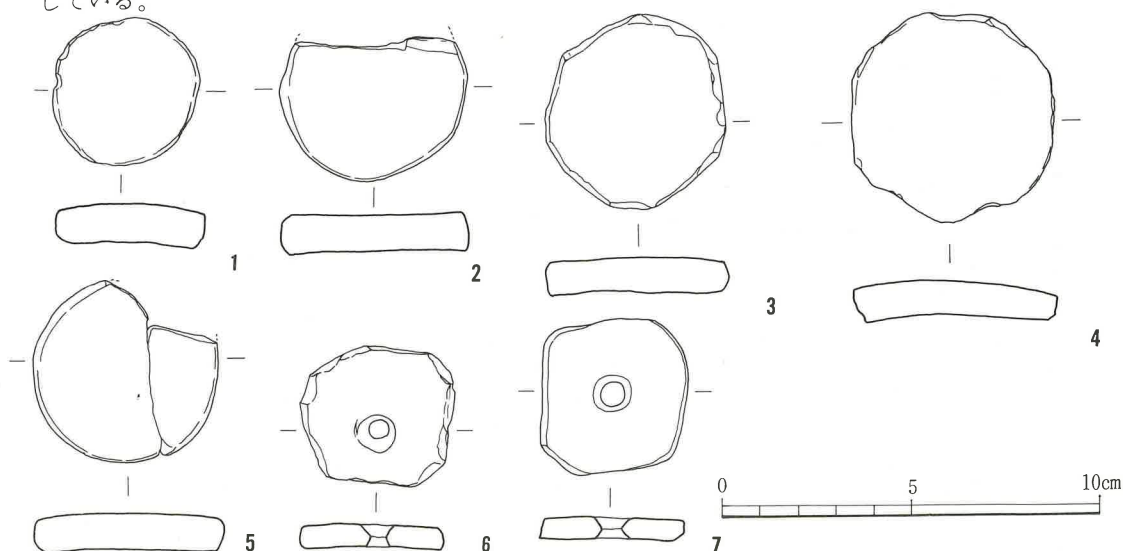
佐知遺跡からは約50点の土器片加工品が出土している。この遺物は、土器の破片を打欠き円形に仕上げたもので、その割れ口を研磨し形を整えたものもある。さらに中には中央に穿孔をし紡錘車状にしたものもある。この遺物は確認できるだけで約20点あり、第70図はその代表的な遺物である。素材となる土器は器面調整から縄文土器と考えられるが、後・晩期のいずれかは区別することができない。これらの遺物の大きさは径5cm～3cmで4cm前後が最も多い。

(2) 土 器

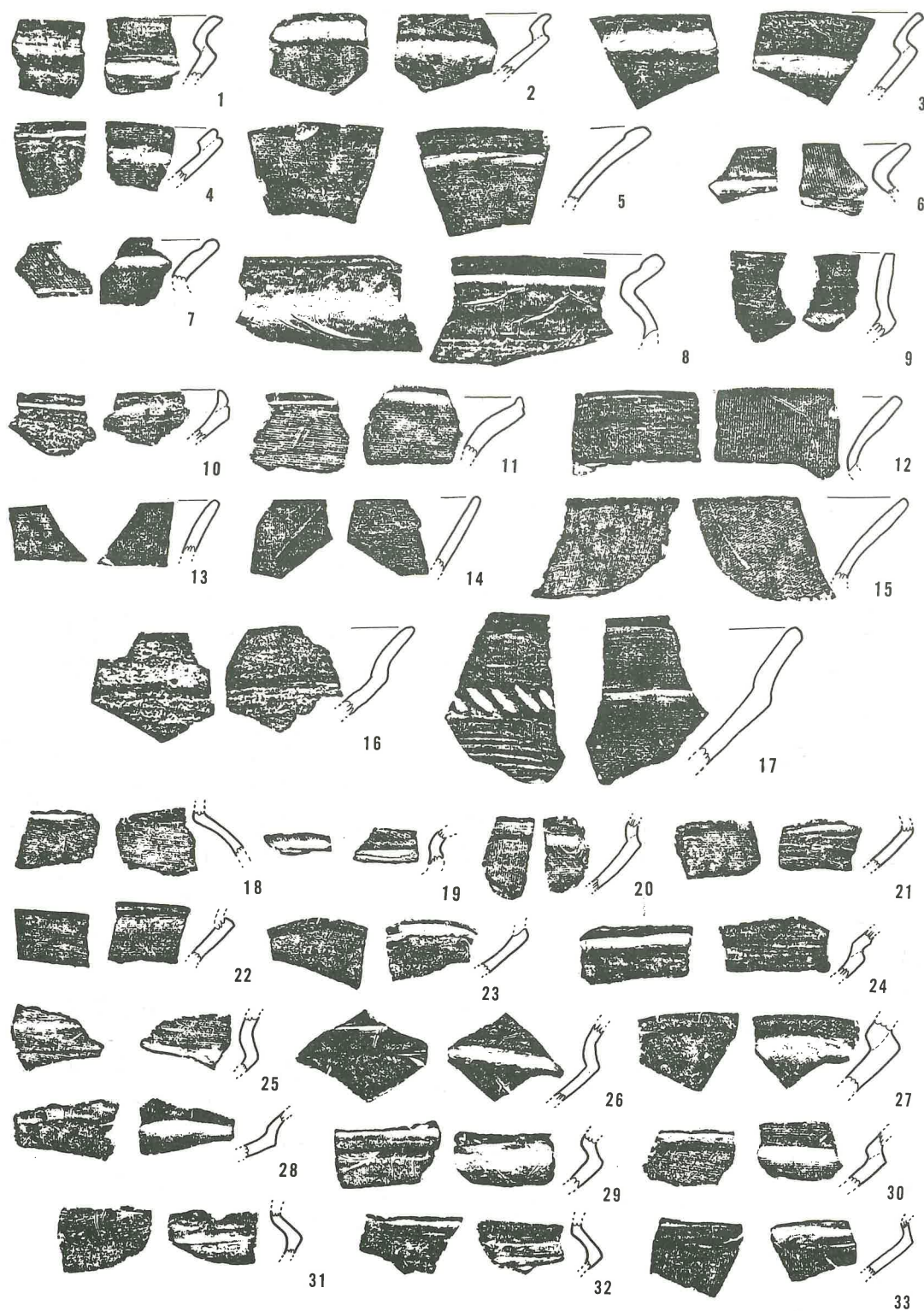
縄文晩期の土器は調査区のほぼ全面から出土したが、遺構は確認できなかった。土器は浅鉢と深鉢の2形態に分類でき、さらにそれぞれ細分できる。

浅鉢(第71図)のⅠ類は1～3・6で屈曲する口縁部は短く、胴部の屈曲は稜が生じている。Ⅱ類は4・5で口縁部は長く延び、口縁内端部は肥厚している。Ⅲ類は7・8で屈曲する口縁部は短く、内端部は肥厚し、胴部は扁球状に張る。Ⅳ類は10・11で外反する口縁端部が立ち上がり、外面に一条の沈線がめぐる。Ⅴ類は12～17で口縁部は直線的に外反する。この浅鉢はバリエーションがあり、17の胴部屈曲部には刻み目がある。第71図18～33・第72図1～8はⅠ類～Ⅴ類の浅鉢の胴部である。

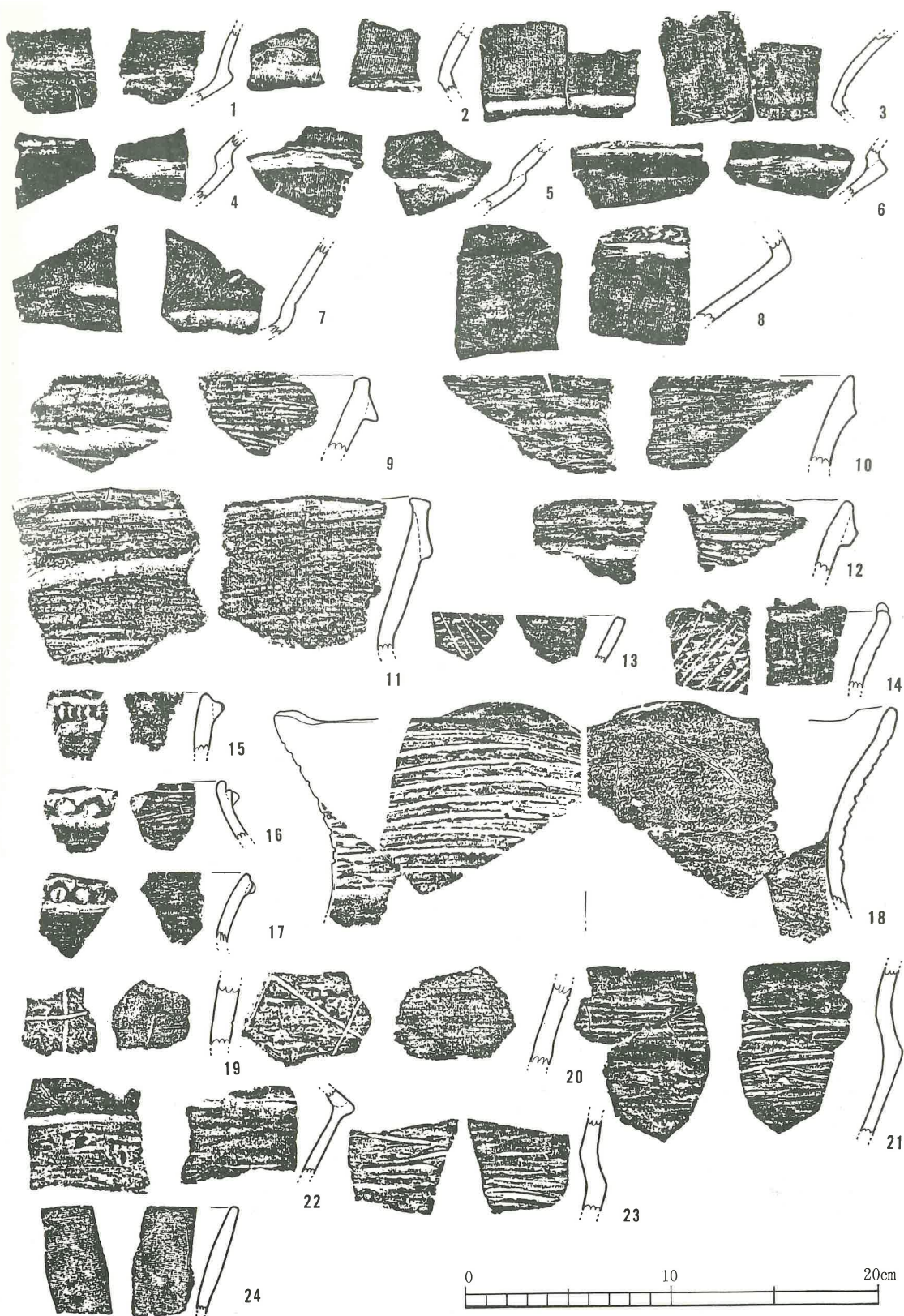
深鉢(第72図)のⅠ類は9～12で外反する口縁部の外面に一条の突帯がめぐる。Ⅱ類は13・14・18で外反する口縁部の外面に数条の沈線を横あるいは斜めに施文している。また14の口縁端部にはリボン状の浮文が付いている。Ⅲ類は15・16・17であるが、外反または内傾する口縁部の外面に一条の刻み目突帯がめぐる。19～23は深鉢の胴部で、19・20にはさらに沈線を施文している。



第70図 佐知遺跡出土土器片加工品実測図



第71図 佐知遺跡出土縄文晩期土器実測図(1)



第72図 佐知遺跡出土縄文晩期土器実測図(2)

第15表 佐知遺跡出土縄文晩期土器観察表

図番号	遺物番号	出土位置	文様の特徴と器面調整の方法		胎土				備考	分類
			表	裏	角閃石	斜長石	石英	その他		
71	1	A-6	横篋研磨	茶色	横篋研磨	○	○			I
	2	16号	横篋研磨	暗茶色	横篋研磨	○	○			I
	3	2号	横篋研磨	黒色	横篋研磨	○	○			I
	4	A-6	横篋研磨	黒色	横篋研磨	○	○			II
	5	B-3	横篋研磨	黒色	横篋研磨	○	○			II
	6	B-10	横篋研磨	黒色	横篋研磨	○	○			I
	7	B-7	横篋研磨	茶色	横篋研磨	○	○			III
	8	B-7	横篋研磨	黒色	横篋研磨	○	○			III
	9	21号	横篋研磨	茶色	横篋研磨	○	○			IV
	10	28号	横篋研磨	暗茶色	横篋研磨	○	○			IV
	11	B-10	横篋研磨	黒色	横篋研磨	○	○			V
	12	B-7	横篋研磨	黒色	横篋研磨	○	○			V
	13	A-10	横篋研磨	黒色	横篋研磨	○	○			V
	14	B-7	横篋研磨	茶色	横篋研磨	○	○			V
	15	A-9	横篋研磨	茶色	篋研磨	○	○			V
	16	A-10	条痕一ナデ	茶色	篋研磨	○	○			V
	17	40号	条痕一刻目一篋研磨	茶色	篋研磨	○	○			V
	18	B-8	横篋研磨	黒色	横篋研磨	○	○			
	19	B-10	横篋研磨	黒色	横篋研磨	○	○			
	20	B-9	横篋研磨	黒色	横篋研磨	○	○			
	21	B-3	横篋研磨	黒色	横篋研磨	○	○			
	22	16号	横篋研磨	黒色	横篋研磨	○	○			
	23	A-3	横篋研磨	黒色	横篋研磨	○				
	24	21号	横篋研磨	淡茶色	横篋研磨	○	○			
	25	B-8	横篋研磨	黒色	横篋研磨	○	○			
	26	21号	横篋研磨	黒色	横篋研磨	○	○			
	27	B-7	横篋練磨	茶色	横篋研磨	○	○			
	28	A-3	横篋研磨	黒色	横篋研磨	○	○			
	29	A-8	横篋研磨	黒色	横篋研磨	○	○			
	30	B-10	横篋研磨	黒色	横篋研磨	○	○			
	31	B-3	横篋研磨	明茶色	横篋研磨	○	○			
	32	B-7	横篋研磨	茶色	横篋研磨	○	○			
	33	14号	横篋研磨	暗茶色	横篋研磨	○	○			
72	1	27号	肩部縄文一横篋研磨	暗茶色	横篋研磨	○	○			I
	2	b-8	横篋研磨	黒色	横篋研磨	○	○			I
	3	A-9	横篋研磨	黒色	横篋研磨	○	○			I
	4	20号	横篋研磨	黒色	横篋研磨	○	○			II
	5	B-6	横篋研磨	黒色	横篋研磨	○	○			II
	6	39号	横篋研磨	茶色	横篋研磨	○	○			III
	7	20号	横篋研磨	黒茶色	横篋研磨	○	○			III
	8	b-3	横篋研磨	黒茶色	横篋研磨	○	○			II
	9	29号	突帯一横ナデ	暗茶色	条痕	○	○			
	10	B-11	条痕一横篋研磨	茶色	条痕一ナデ	○	○			
	11	A-11	条痕	茶色	条痕	○	○			
	12	21号	条痕一ナデ	茶色	巻貝条痕	○	○			
	13	19号	条痕一ナデー沈線	茶色	横篋研磨	○	○			
	14	A-6	条痕一沈線 リボン状突起	明茶色	横篋研磨	○	○			
	15	19号	刷毛目状工具の刻目突帯	茶色	横ナデ	○	○			
	16	A-10	条痕一刻目突帯一ナデ	黒茶色	条痕	○	○			
	17	21号	条痕一刻目突帯一ナデ	黒茶色	横篋研磨	○	○			
	18	B-7	ナデー沈線	茶色	横篋研磨	○	○		スス付着	
	19	B-3	条痕一沈線	黄茶色	ナデ	○	○			
	20	A-10	条痕一沈線	茶色	条痕一篋研磨	○	○			
	21	B-3	条痕	黄茶色	条痕一上位はナデ	○	○		スス付着	
	22	B-3	条痕	黒色	条痕	○	○			
	23	B-3	条痕	黄茶色	横ナデ	○	○			
	24	A-10	横篋研磨	灰茶色	横篋研磨	○	○			

第3節 弥生時代の調査

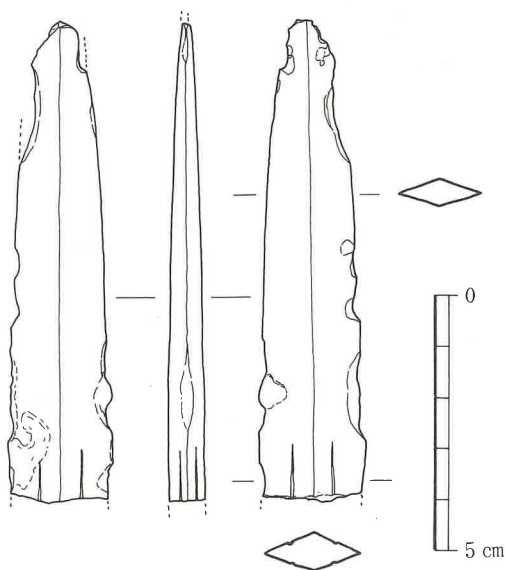
1 弥生時代前期

佐知遺跡の弥生時代前期は縄文時代晩期と同様、遺物のみの出土で遺構は確認されなかった。遺物の出土状況もわずかであり、特徴的な様相は見られなかった。しかし、大分県で初めて朝鮮半島系の無文土器や細形銅剣など、注目される遺物が出土した。

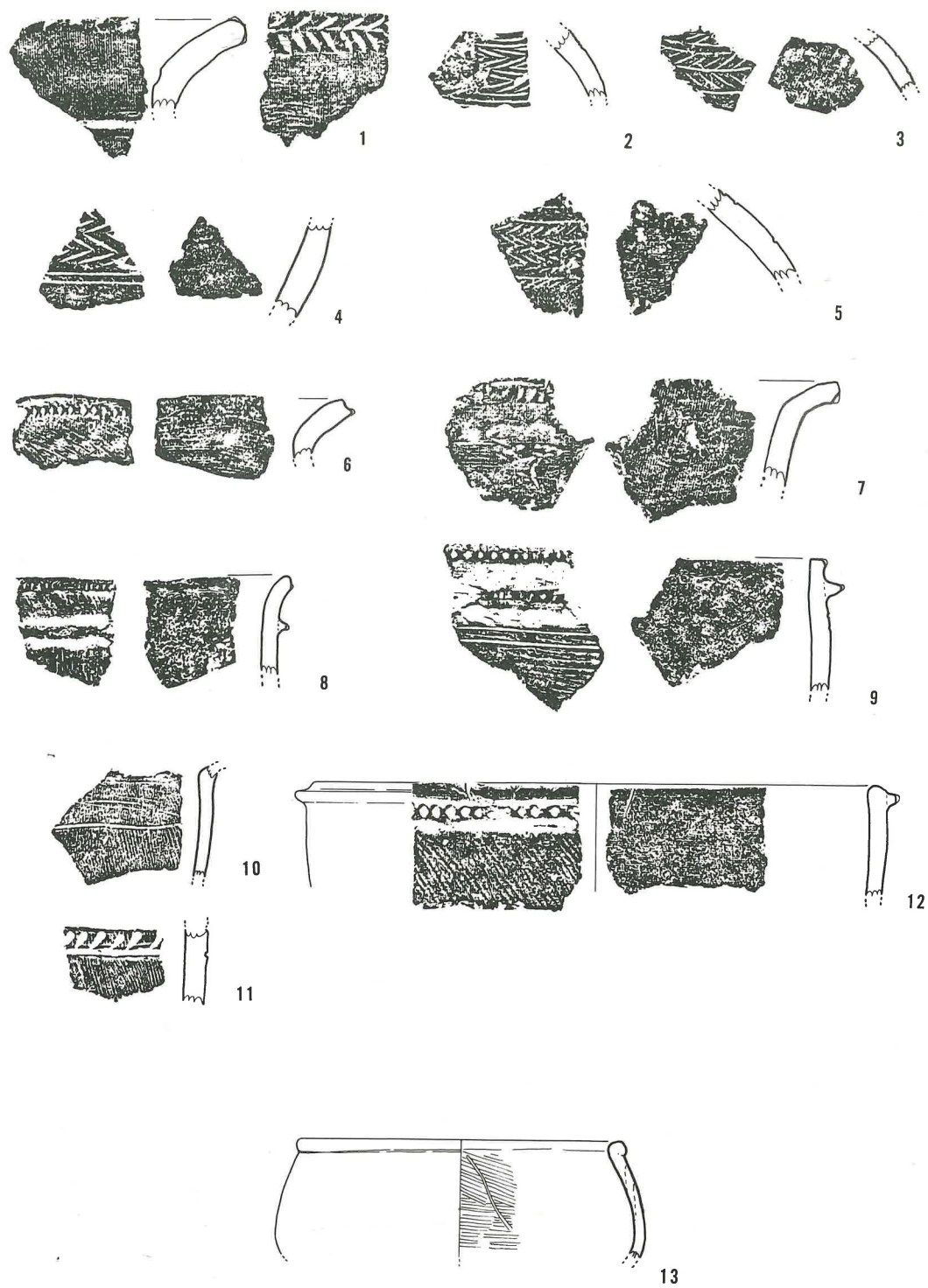
(1) 土器（第74図）

1～5は壺形土器である。1・2はA-17出土で1は口縁部の内側を肥厚気味にし、口唇部に羽状の刻み目を加えている。器面は横方向の篋磨きで仕上げている。2は胴部であるが、表面に貝殻の腹縁で羽状文を施文している。3はB-8、4はA-15、5は29号遺構出土の胴部である。3は有軸、4・5は無軸の羽状文が施文されている。以上5点とも角閃石・斜長石を含み、1には石英も認められる。色調は黄茶色である。

6～11は甕形土器である。6はA-8出土で如意状口縁の内面は横、外面は斜目の刷毛目で器面調整をしており口縁下端部に細かい刻み目が付く。茶色で石英・角閃石・斜長石を含む。B-2出土の7も如意状口縁で、外面は横撫で、内面は横方向の篋研磨仕上げである。明茶色で胎土に角閃石・斜長石を含む。8は50号遺構出土で、6・7と同じタイプの口縁部の外面に刷毛目調整をし、その上から一条の刻み目突帯をめぐらしている。内面は横撫でで、胎土に角閃石・斜長石を含み、暗茶色を呈する。9は45号遺構出土で、直口する口縁部の外端部に刻み



第73図 佐知遺跡出土銅剣実測図



第74図 佐知遺跡出土弥生前期土器実測図

目が付き、内面は横撫で、外面は横方向の刷毛目のあと刻み目突帯と二条の沈線がめぐる。白茶色で、胎土に角閃石・斜長石を含む。10・11は37号遺構出土で、如意状口縁の内面は横撫で、外面は刷毛目のあと沈線・刷毛目原体による刺突文を施文している。暗茶色で、胎土に角閃石・斜長石・石英を含む。12はA-15出土で、直口する口縁部の内側は撫で、外面は刷毛目の上から刻み目突帯がめぐる。茶色で角閃石・斜長石・石英を含む。

13は19号遺構出土の無文土器である。口縁部は折り曲げ玉縁状にし、外面は横方向の筥研磨、内面は刷毛目のあと粗い筥磨きで仕上げている。黄褐色で黒色斑があり、胎土は精良で斜長石を含む。この土器は、弥生時代前期の朝鮮系無文土器とも考えられるが出土した19号遺構は5世紀代の遺構であり、流れ込みの出土遺物も弥生時代後期からのものが多く、弥生時代前期のものはみられない。このため、朝鮮半島系の遺物であることは間違いないと思われるが、弥生時代後期の可能性が強い。

(2) 細形銅剣（第73図）

B-10の包含層出土である。切っ先部分で現存長は9.5cmで、断面は鎬のしっかりした厚さ8mmの菱形になり、細い樋も4面に認められる。両側の刃部は欠けている部分もあるが、銅質は暗緑色で良い。

2 弥生時代中期

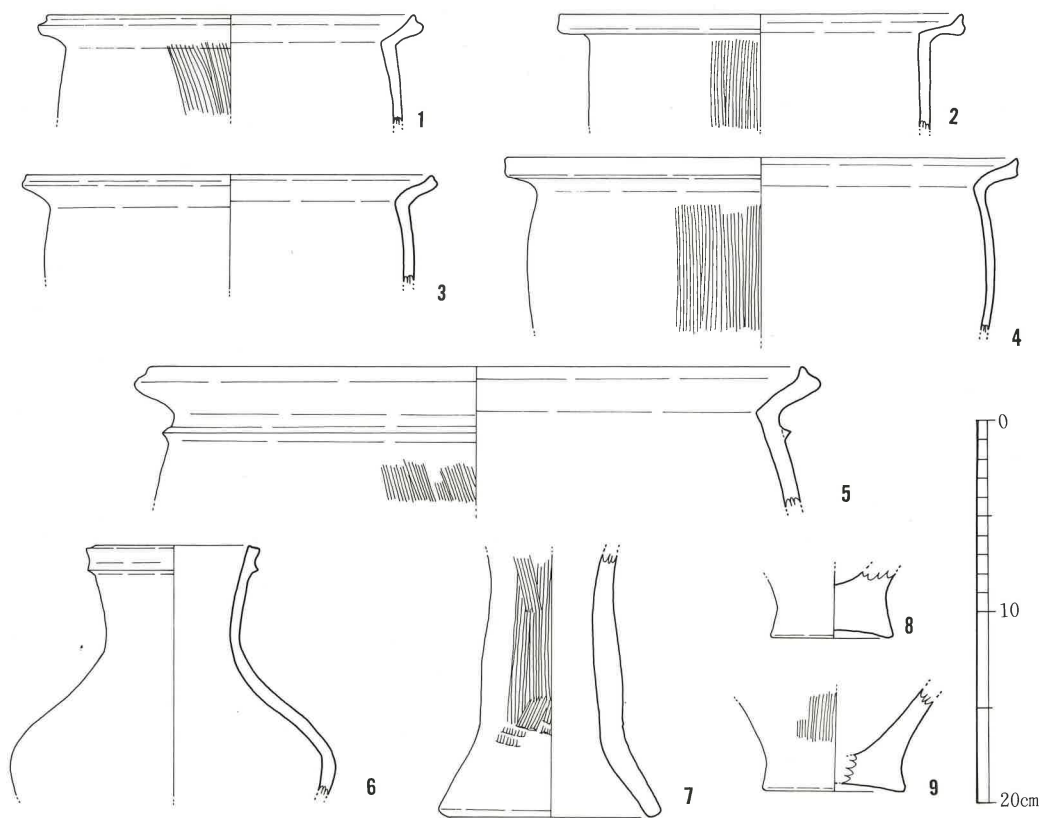
弥生時代中期の遺構は住居跡を1基と7基の小竪穴を検出した。

(1) 住居跡

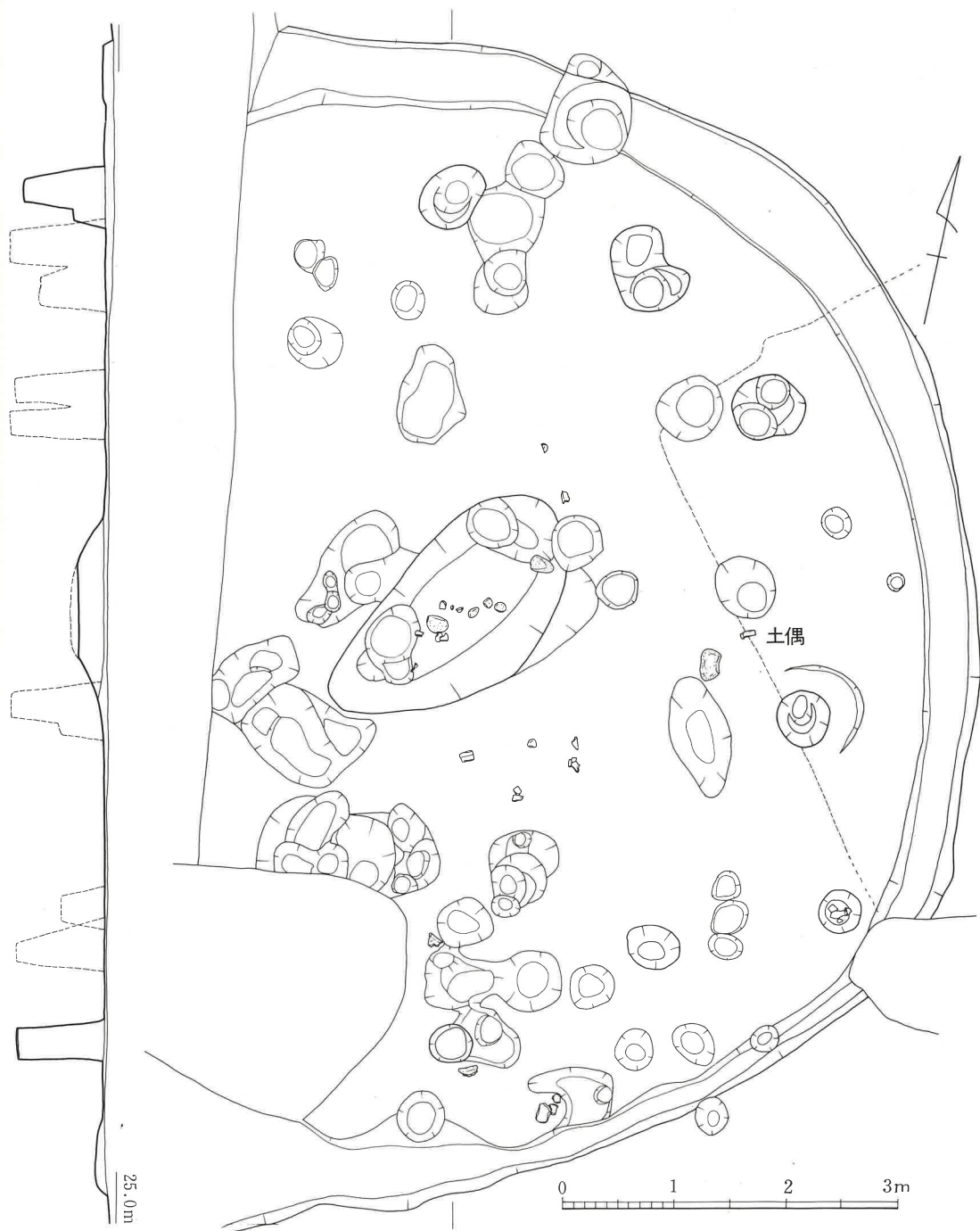
1) 22号遺構（第76図）

調査区の中央部A-10区で検出した遺構で、径10.5mの円形住居跡である。壁に沿って幅50cm前後、深さ10cmの溝がめぐり、中央部には2.6m×1.2mの楕円形で深さ30cmの土坑がある。柱穴は壁の内側1.5m前後の位置に平行して並び、深さは約90cmである。この他、平坦な床面からは多くの柱穴状の掘り込みを検出したが、時期不明である。

第75・77図の遺物は、床面や柱穴内からの出土で、多くない。1～5は甕形土器で、1～4は口縁部を「L」字に屈曲し、端部を跳ね上がり状に仕上げている。器面調整は1・2・4の外表面が刷毛目で、内面が撫でであるが、3は両面とも撫で仕上げである。胎土にはいずれも角閃石・斜長石を含むが、2は石英が多く、4は金雲母が目立つ。5は1～4に比較すると胴部が張る。「L」字に屈曲する口縁部は跳ね上がり状になり、胴部外面の屈曲部には三角突帯がめぐる。器面調整は口縁部外面から内面にかけては撫で、三角突帯からは刷毛目で仕上げている。赤茶色で胎土に角閃石・斜長石を含み、口縁部にはススが付着する。6は東南隅の柱穴



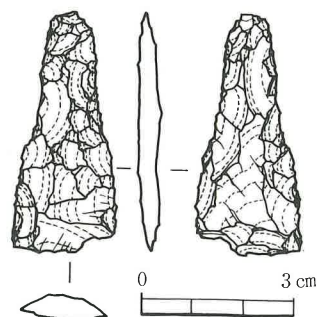
第75図 佐知遺跡22号遺構出土土器実測図



第76図 佐知遺跡22号遺構実測図

内からの出土した長頸壺である。口縁部の外面に三角突帯が一条めぐる。内面は撫で仕上げであるが、外面の器面調整は突帯周辺が横撫で、頸部は縦、胴部は横方向の篋磨きである。黄茶色で胎土に角閃石・斜長石を含む。7は器台の脚と考える。器面は脚端部が内外面とも横撫で、外面は刷毛目仕上げである。茶色で角閃石・斜長石を含む。8・9は中央の楕円形土坑から出土した甕形土器の底部である。9の一部に刷毛目が見られるほかは撫で仕上げで、いずれも茶色で角閃石・斜長石を含む。

石器はサヌカイト質の石鏃で一部を欠くが、長さ4.6cm、幅2.0cm、厚さ0.6cm、重さ4.3gである。



第77図 佐知遺跡22号遺構
出土石器実測図

(2) 小竪穴遺構

1) Y-1 遺構 (第79図)

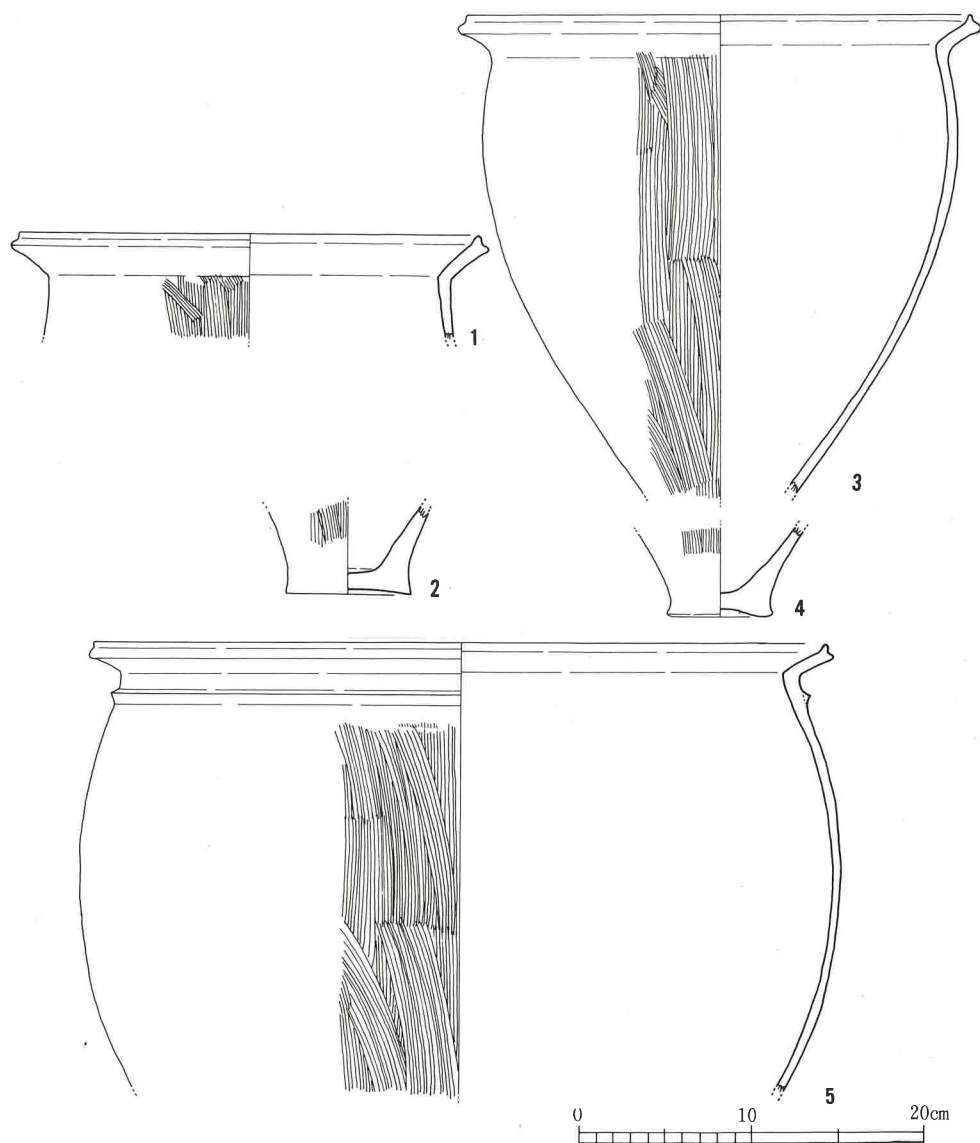
A-8区の中央部で検出した遺構で、上面は75cm×75cm、深さ16cm、床面径65cmの小竪穴である。下部から3個体分の甕形土器が出土した。第78図の土器がそれであるが甕形土器はいずれも跳ね上がり口縁で、底部は平底である。5は口縁下に三角突帯が一条めぐる。器面調整は口縁部周辺から内側が撫で仕上げであるが、外面は刷毛目仕上げである。胎土にはいずれも角閃石・斜長石を含むが、同一個体の可能性の強い3・4は白色粒子を含む。色調はおおむね茶色である。

2) Y-2 遺構 (第79図)

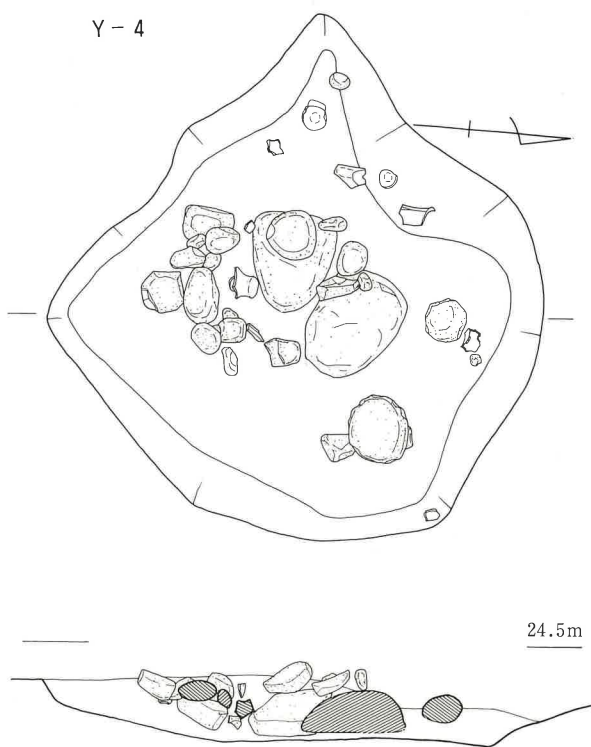
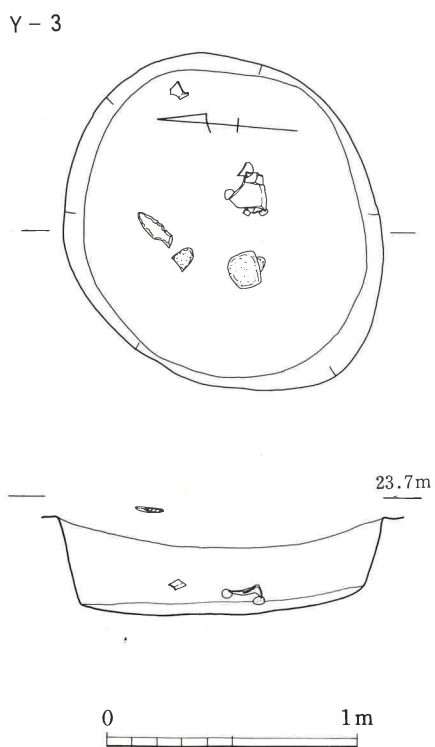
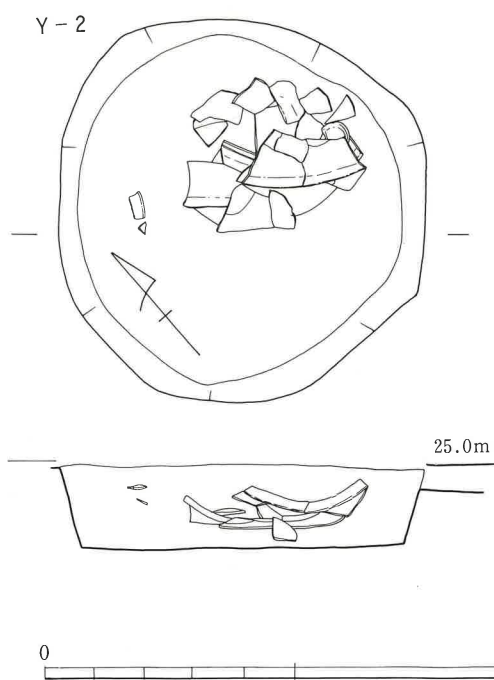
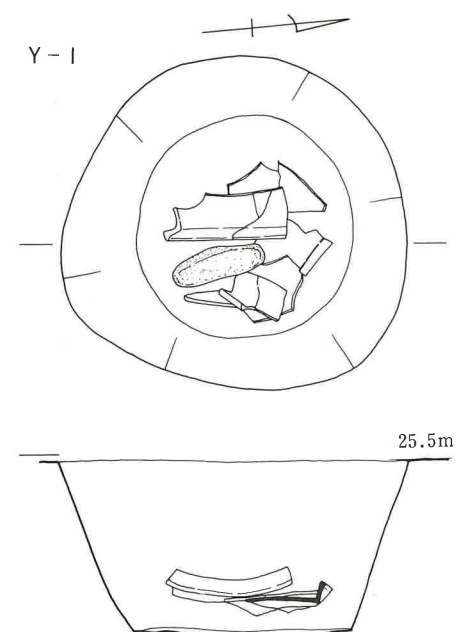
A-9区の北西隅で検出した小竪穴で、上面は68cm×65cm、深さ35cm、床面径41cmで、下部で礫と甕形土器3個体分が出土した。第80図の土器であるが、口縁部は跳ね上がり状になり、1の胴部には三角突帯がめぐる。また3の底部と考えられる4は、Y-1遺構に比較すると薄い平底である。器面調整は口縁部から内面にかけては撫でで、胴部は刷毛目で仕上げている。いずれも胎土には角閃石・斜長石を含み、色調は1が茶色で、ほかは白茶色である。外面にはススが付着する。

3) Y-3 遺構 (第79図)

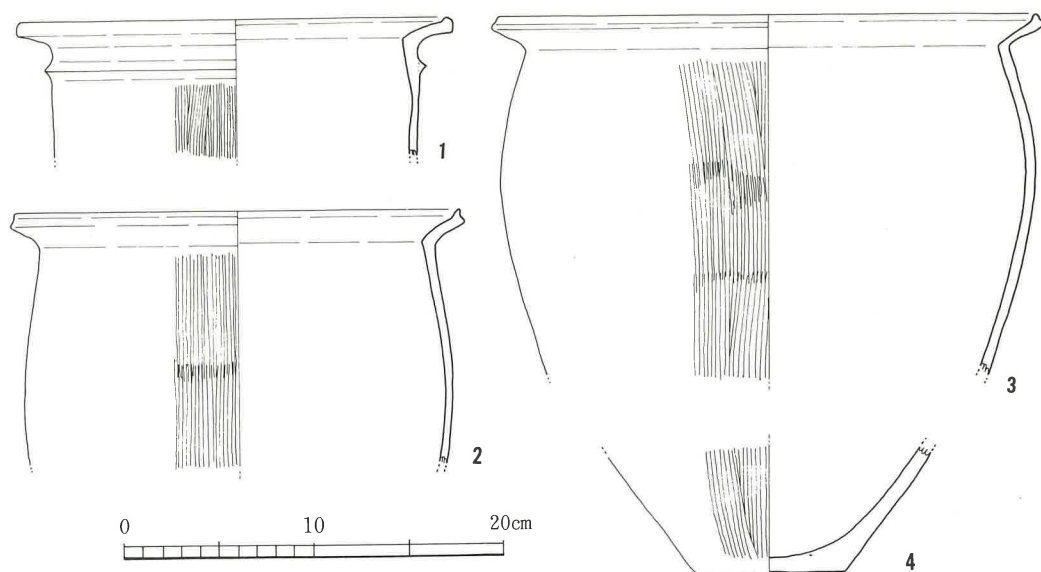
A-16区の北端部で検出した円形竪穴遺構で、検出面の径1.3m、中央部が低くなる床面は径1.1mで、深さは30cmである。出土遺物は第81図であるが、1～4は跳ね上がり口縁の甕形土器と厚みのあるその底部で、5は丹塗りの高坏である。前者の器面調整は口縁部から内面にかけては撫で、外面は刷毛目仕上げである。胎土はいずれも角閃石・斜長石を含むが、さらに1・2には白色粒子、3には金雲母が認められる。色調は茶色を基調とし4は明茶色である。1の外面にはススが付着する。5は全面丹塗り研磨で、胎土には白色・赤色の粒が目立つ。



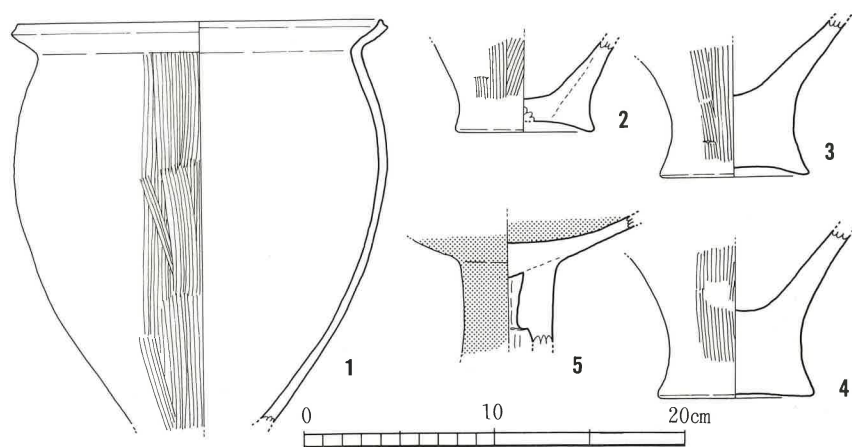
第78図 佐知遺跡Y-1 遺構出土土器実測図



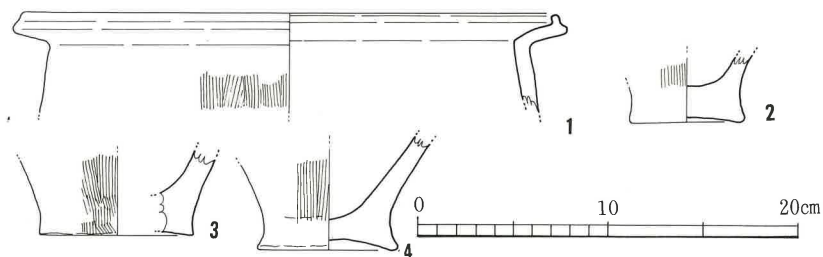
第79図 佐知遺跡弥生中期小堅穴遺構実測図



第80図 佐知遺跡Y-2遺構出土土器実測図



第81図 佐知遺跡Y-3遺構出土土器実測図



第82図 佐知遺跡Y-4遺構出土土器実測図

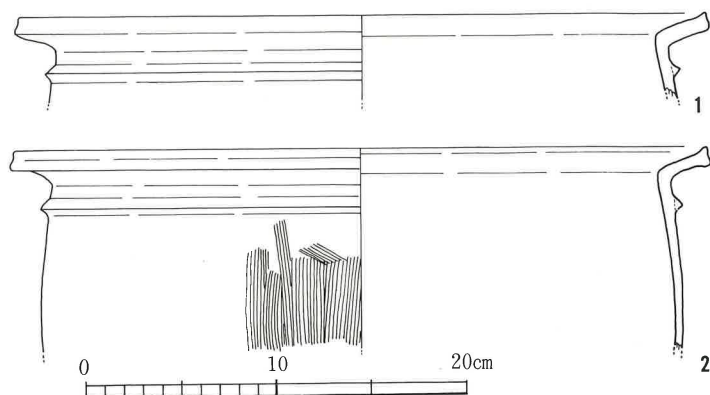
4) Y-4 遺構 (第79図)

A-16区で検出した遺構で、他に比べると不定形である。検出面の規模は1.63m×1.68m、深さは10cm～30cmで、床面は平坦でない。遺構内からは円礫が多量に出土し、それに混入して土器が出土した。第82図がその土器である。1は跳ね上がり口縁で、口縁部から内面は撫で、外面は刷毛目仕上げである。明茶色で角閃石・斜長石・金雲母を含む。2～4は甕形土器の底部である。外面は刷毛目調整で他は撫で仕上げである。いずれも明茶色で角閃石・斜長石を含み、3には石英も認められる。

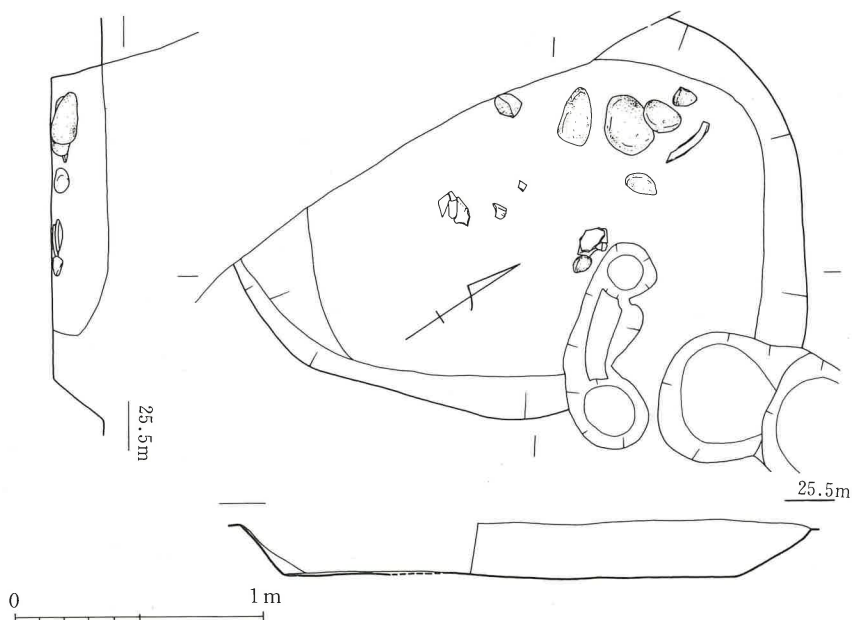
5) Y-5 遺構 (第84図)

A-8区で検出した隅丸方形の竪穴遺構で一部は調査範囲外である。検出面での規模は2.25m×1.7m、深さ20cmで1.8m×1.2mの平坦な床面に達する。遺構内からは円礫や甕形土器の破片が出土した。第83図に図示した2点は同一個体の可能性もあるが、

いずれも跳ね上がり口縁で胴部に1条の三角突帯がめぐる。器面調整は突帯部から内面にかけて横撫で、2の胴部外面には細かい刷毛目が認められる。明茶色で角閃石を多く含む。



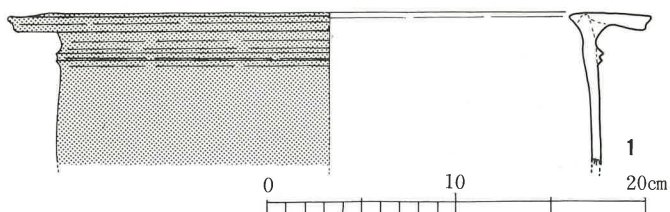
第83図 佐知遺跡Y-5遺構出土土器実測図



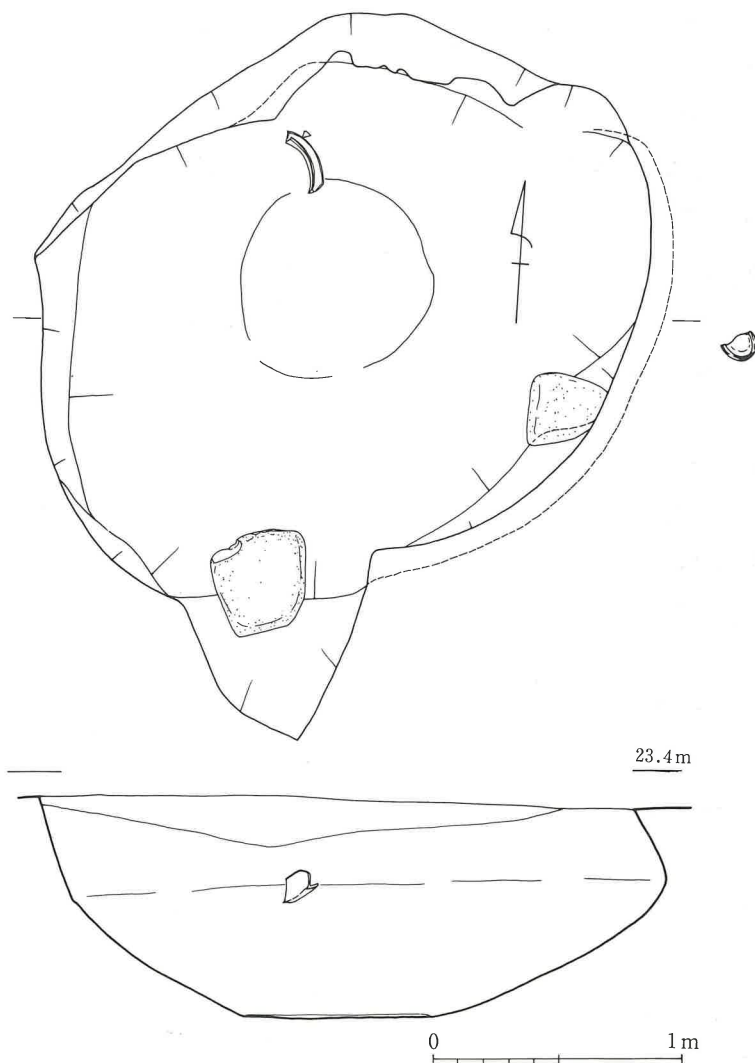
第84図 佐知遺跡Y-5遺構実測図

6) Y-6 遺構 (第86図)

B-16区で検出した遺構で中ぶくれの竪穴である。検出面は径2.3mの不整円形で、深さ90cmで径80cmの平坦面に達し、壁は図示するように一部がオーバーハングする。遺物は土器の碎片ばかりであるが、第85図の土器が中位から出土した。口縁部は「T」字になりその下に「M」字突帯が1条めぐる。器面は外面が丹塗りで、内面は撫でである。胎土には角閃石・斜長石・金雲母を含む。



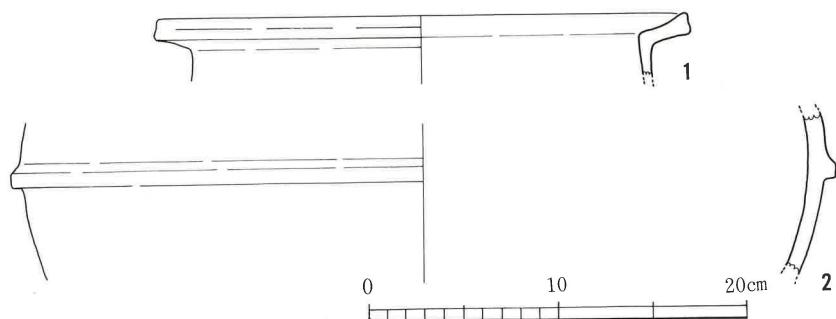
第85図 佐知遺跡Y-6 遺構出土土器実測図



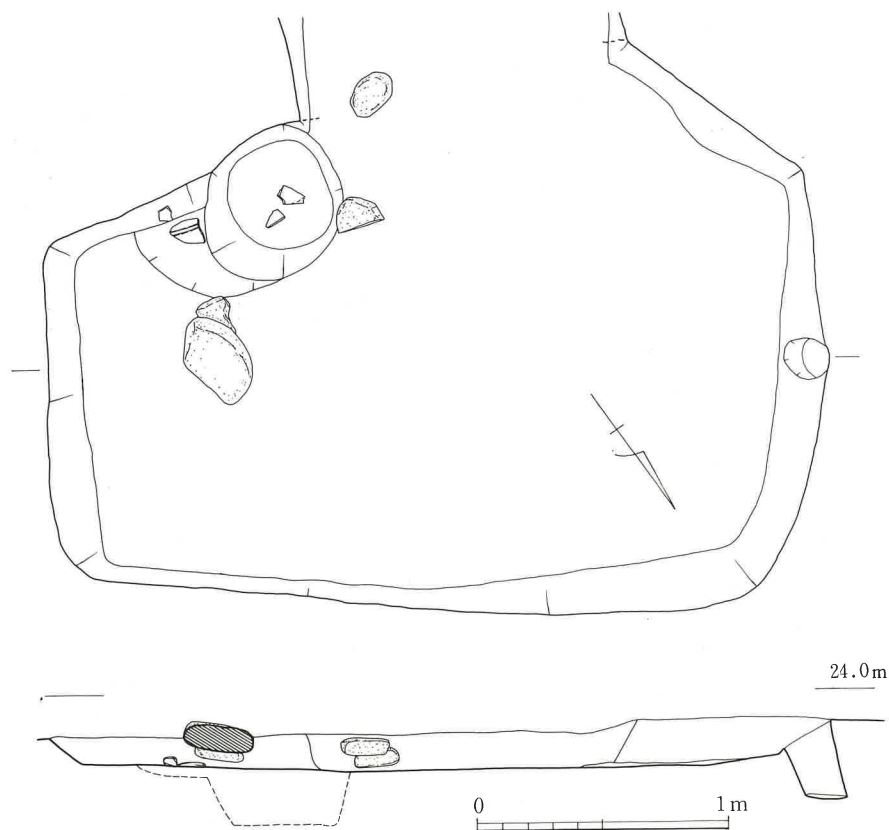
第86図 佐知遺跡Y-6 遺構実測図

7) Y-7 遺構 (第88図)

A-13区で検出した方形遺構で、J-7 遺構の北部を切る。検出面での規模は3.1m×1.8mで、深さ10数cmで2.7m×1.6mの平坦な床面に達する。床面からは南壁に接して径50cm、深さ20cmのピットが検出された。遺物は礫と第87図の土器片である。1は甕形土器で、器面調整は横撫で、茶色で角閃石・斜長石を含む。2は壺形土器の胴部で、断面台形の突帯がめぐり、器面は横方向の篋磨きで、胎土に角閃石・斜長石を含み、茶色を呈する。



第87図 佐知遺跡Y-7 遺構出土土器実測図



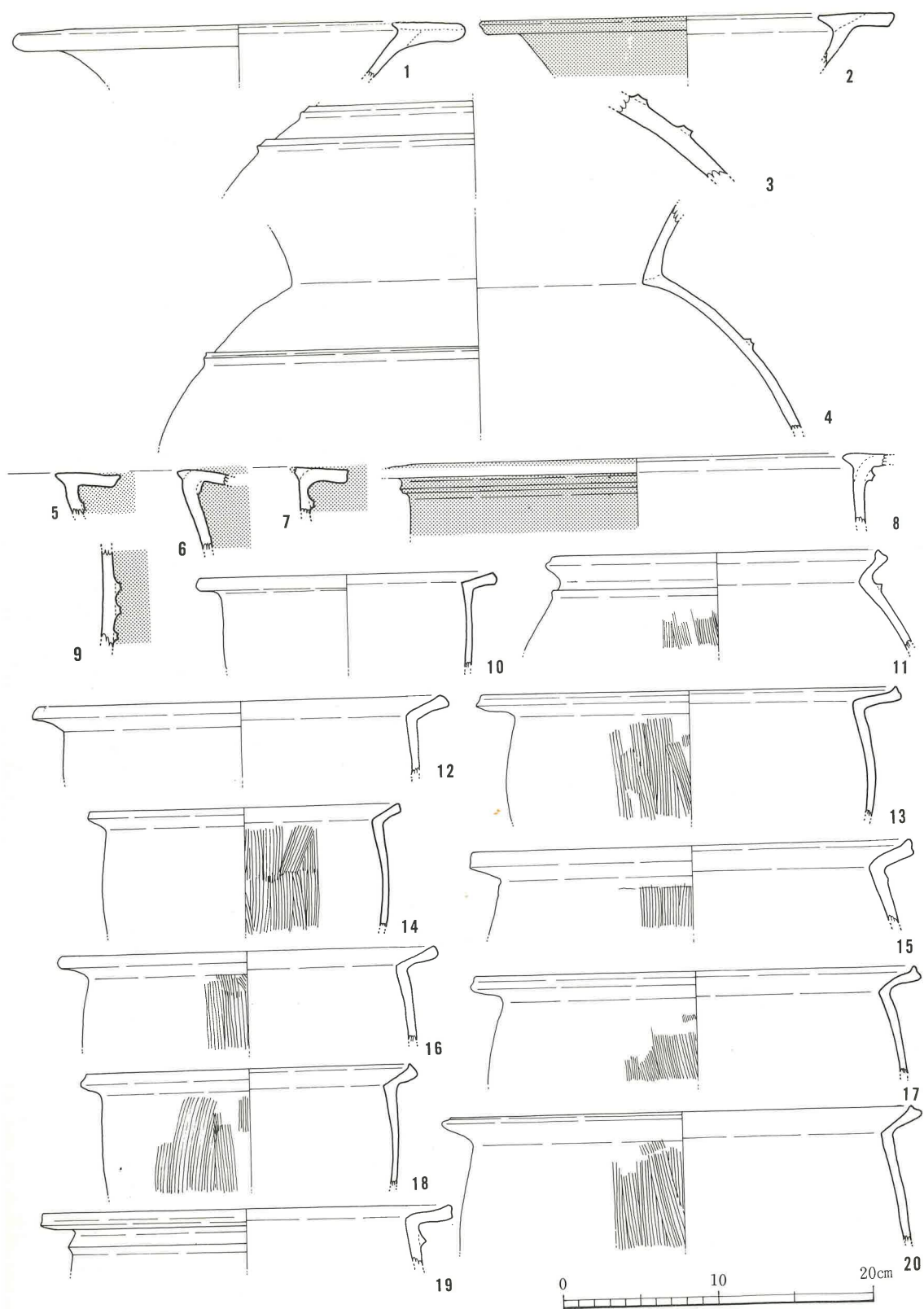
第88図 佐知遺跡Y-7 遺構実測図

(3) 各地区出土の弥生中期土器

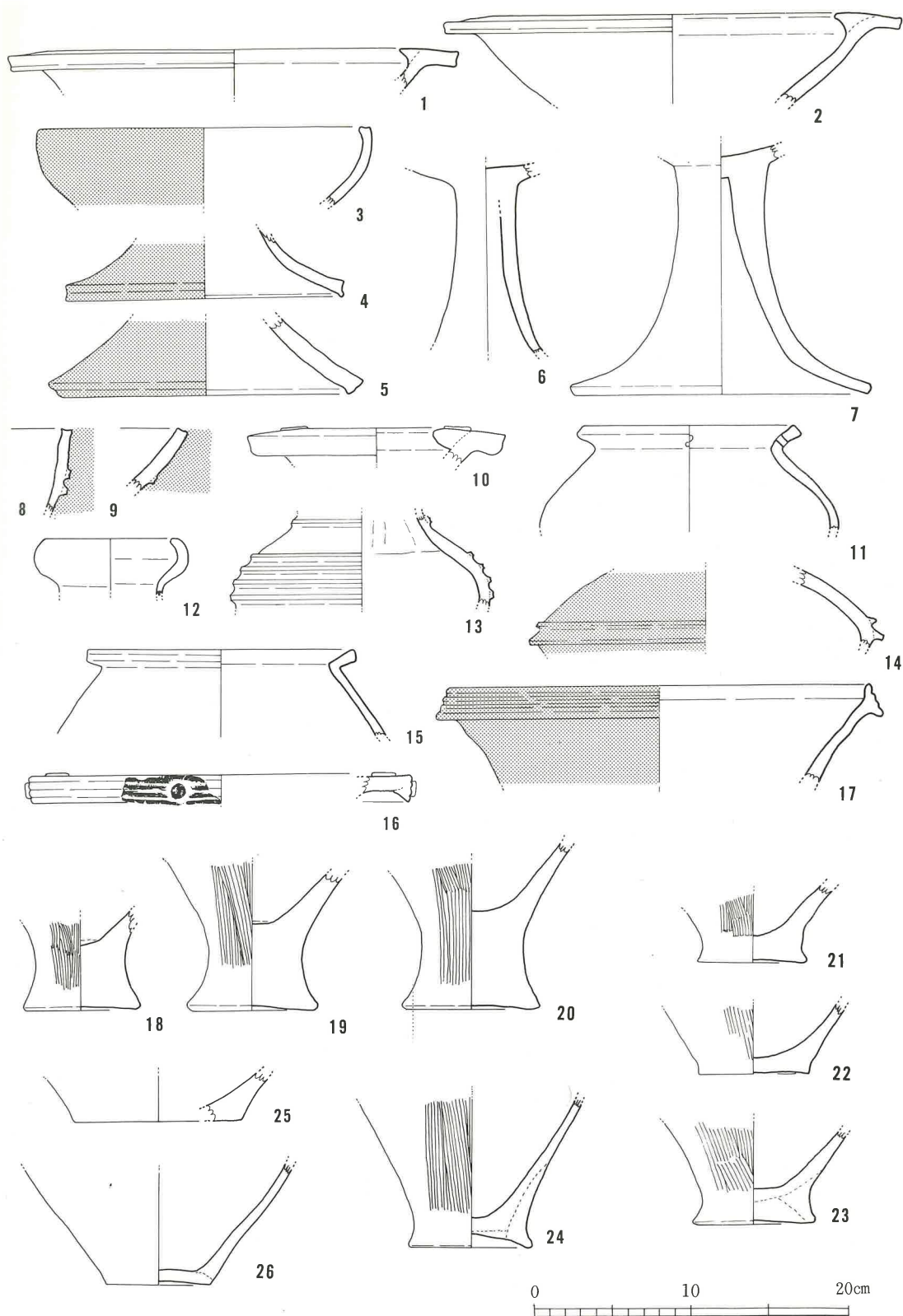
以上の遺構と遺物のほか、新しい時代の遺構や包含層から遺物が出土している。良好な遺物を第89～90図に図示する。

第16表 佐知遺跡各地区出土弥生中期土器観察表

図番号	遺物番号	出土位置	器種	文様の特徴と器面調整の方法		胎土				備考
				表	裏	角内石	斜長石	石英	その他	
89	1	A-10	壺	丹塗り研磨	ナデ	○	○			
	2	B-12	壺	篋研磨 茶色	ナデ	○	○			
	3	43号	壺	横篋研磨→M字突帯 暗茶色	ナデ	○	○			
	4	39号	壺	横篋研磨→M字突帯 茶色	ナデ	○	○			
	5	47号	甕	M字突帯 丹塗り 篋研磨	ナデ	○	○			
	6	A-12	甕	丹塗り研磨 明茶色	ナデ	○	○			
	7	39号	甕	丹塗り研磨	ナデ	○	○			
	8	39号	甕	丹塗り研磨	ナデ	○	○			
	9	19号	甕	三条M字突帯	ナデ	○	○			
	10	A-17	甕	ナデ	ナデ	○	○			スス付着
	11	17号	甕	口縁はナデ 胴部は三角突帯 刷毛目	ナデ	○	○			
	12	A-17	甕	ナデ 茶色	ナデ	○	○			スス付着
	13	B-10	甕	口縁はナデ 胴部は刷毛目 茶色	ナデ	○	○			
	14	B-11	甕	口縁はナデ 胴部は刷毛目 茶色	ナデ	○	○			スス付着
	15	A-10	甕	口縁はナデ 胴部は刷毛目 明茶色	ナデ	○	○			
	16	A-12	甕	口縁はナデ 胴部は刷毛目 明茶色	ナデ	○	○			
	17	17号	甕	跳ね上がり口縁 口縁はナデ 灰茶色	ナデ	○	○			
	18	30号	甕	口縁はナデ 胴部は刷毛目 淡茶色	ナデ	○	○			
	19	39号	甕	ナデ→三角突帯	ナデ	○	○			
	20	B-12	甕	口縁はナデ 胴部は刷毛目	ナデ	○	○			
90	1	B-11	高坏	丹塗り研磨	丹塗り研磨	○	○			
	2	A-11	高坏	磨減している	ナデ	○	○			
	3	A-10	脚付鉢	丹塗り研磨 茶色	ナデ 黒色	○	○			
	4	A-13	高坏	丹塗り研磨 明茶色	ナデ	○	○			
	5	A-10	高坏	丹塗り研磨 茶色	ナデ	○	○	○		
	6	A-3	高坏	縦篋研磨 明茶色	ナデ	○	○			
	7	B-9	高坏	縦篋研磨 端部はナデ 明茶色	ナデ	○	○			
	8	39号	鉢	丹塗り研磨	ナデ	○	○			
	9	39号	鉢	丹塗り研磨 茶色	ナデ	○	○			
	10	A-10	壺	ナデ 口縁平坦部に円形浮文 茶色	ナデ	○	○			
	11	B-6	壺	篋研磨 明茶色	ナデ	○	○			
	12	39号	壺	ナデ 黄茶色	ナデ	○	○			
	13	A-10	壺	M字突帯→ナデ	ナデ	○	○			
	14	A-10	壺	突帯→丹塗り研磨	ナデ	○	○			
	15	B-8	壺	篋研磨 茶色	ナデ 茶色	○	○			
	16	B-10	壺	端部は凹線文→浮文 平坦部も浮文 茶色	ナデ	○	○			
	17	B-14	壺	凹線文→ナデ→丹塗り 明茶色	ナデ	○	○			
	18	39号	甕	刷毛目→ナデ 黄茶色	ナデ	○	○			
	19	A-12	甕	刷毛目→ナデ 茶色	ナデ	○	○			
	20	39号	甕	刷毛目→ナデ 茶色	ナデ	○	○			
	21	30号	甕	ナデ→刷毛目 淡茶色	ナデ	○	○			
	22	A-12	甕	刷毛目→ナデ 茶色	ナデ	○	○			
	23	B-10	甕	刷毛目→ナデ 淡茶色	ナデ	○	○			
	24	39号	甕	刷毛目→ナデ	ナデ	○	○		白色粒	
	25	43号	壺	篋研磨 茶色	ナデ	○	○			
	26	21号	壺	ナデ→篋研磨 茶色	ナデ	○	○			



第89図 佐知遺跡各地区出土弥生中期土器実測図(1)



第90図 佐知遺跡各地区出土弥生中期土器実測図(2)

3 弥生時代後期

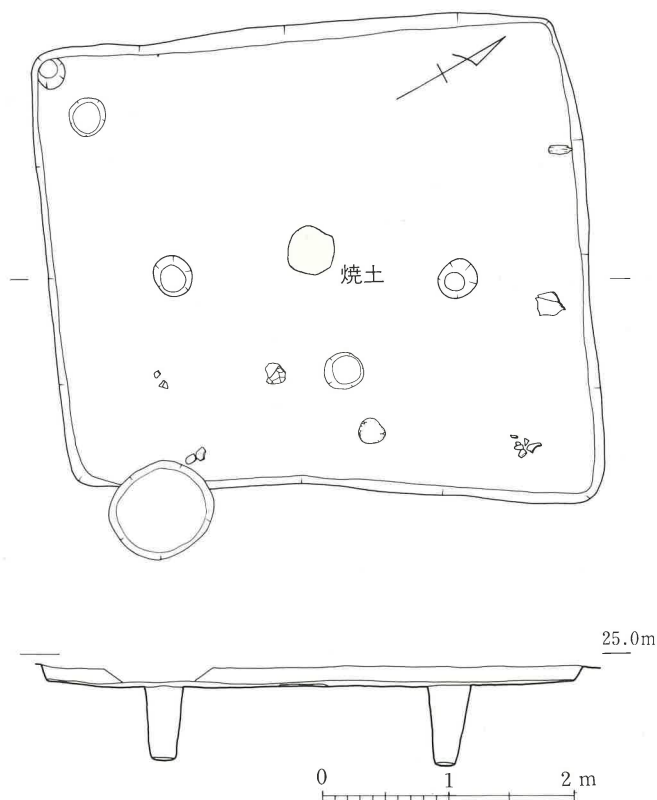
弥生時代後期の遺構は住居跡と考えられる方形の竪穴遺構6基と小竪穴1基を検出した。その他、包含層から多くの遺物が出土した。

(1) 住居跡

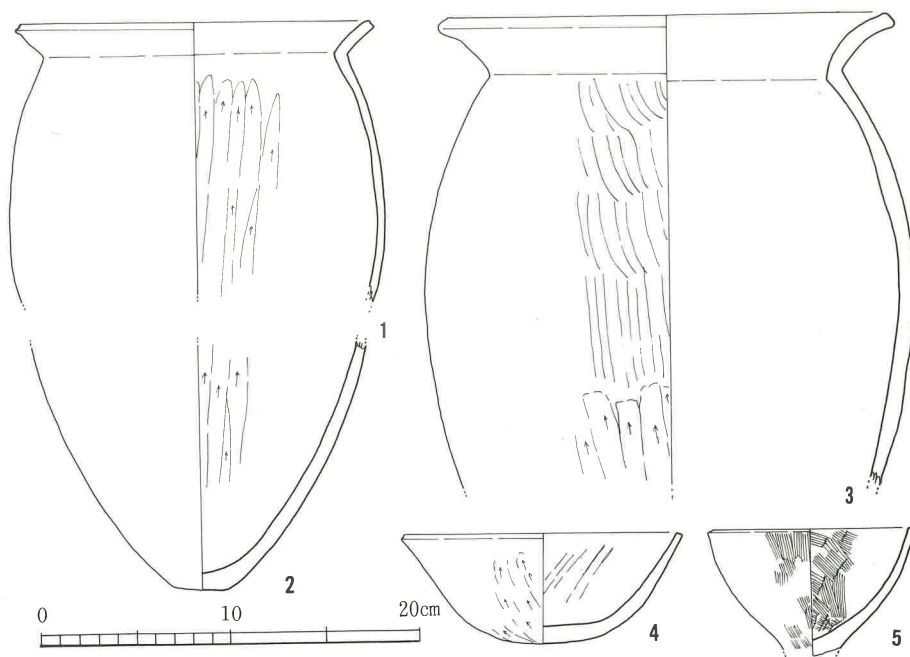
1) 13号遺構(第91図)

A-8区で検出した遺構で、東西3.6m、南北4.3mの方形を呈し、検出面から約15cmで平坦な床面に達する。床面の中央部には径40cmの範囲で炉跡と考えられる焼土が検出された。柱穴は炉跡を挟むように検出され、その間隔は2.3mで深さは約80cmである。このほか、東壁中央部から約40cmの位置の床面で径20cmの扁平な礫が埋められているのを検出した。

遺物(第92図)は床面から甕形土器の大きな破片が出土したほか、鉢・碗も見られる。1・2は同一個体で口縁部は、横撫でで、長胴の胴部は篋撫で、平坦部の残る底部は削り状の調整の後、縦方向の篋磨きである。内面は縦方向の篋研磨である。暗茶色で外面にススが付着し、胎土には角閃石・斜長石を含む。3は口縁部が横撫でで、胴部は刷毛目にならない板目状の縦撫でで、下位は削り状である。ススが付着する。内面は撫で仕上げである。暗茶色で胎土に角閃石・斜長石を含む。4は鉢形土器で、口縁部は撫で、外面は篋削り、内面は撫で仕上げである。薄茶色で胎土に角閃石・斜長石を含む。5も鉢形土器で、内外面ともに刷毛目調整しており、底部は剥落している。明茶色で黒色斑があり、胎土には角閃石・斜長石・石英を含む。



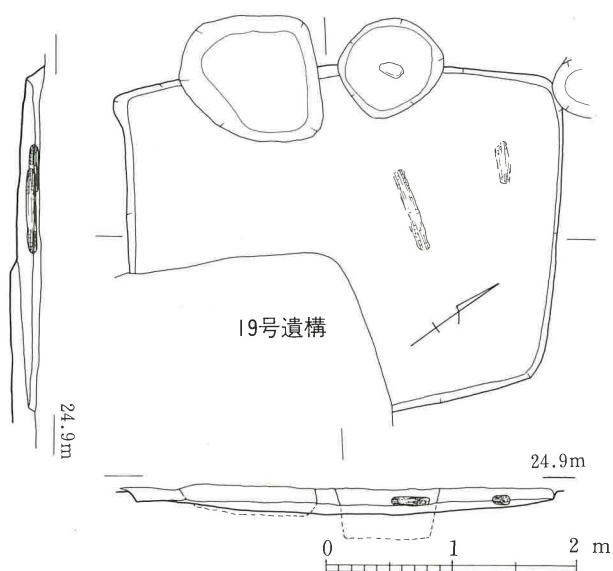
第91図 佐知遺跡13号遺構実測図



第92図 佐知遺跡13号遺構出土土器実測図

2) 18号遺構 (第93図)

B-8区で検出した遺構で、東南隅を古墳時代の19号遺構に切られる。規模は東西2.6m、南北3.4mで検出面から約10cmで平坦な床面に達する。床面には柱穴や炉跡等はなく、炭化材が2点出土したのみである。この他の遺物は土器の小破片が出土したのみである。

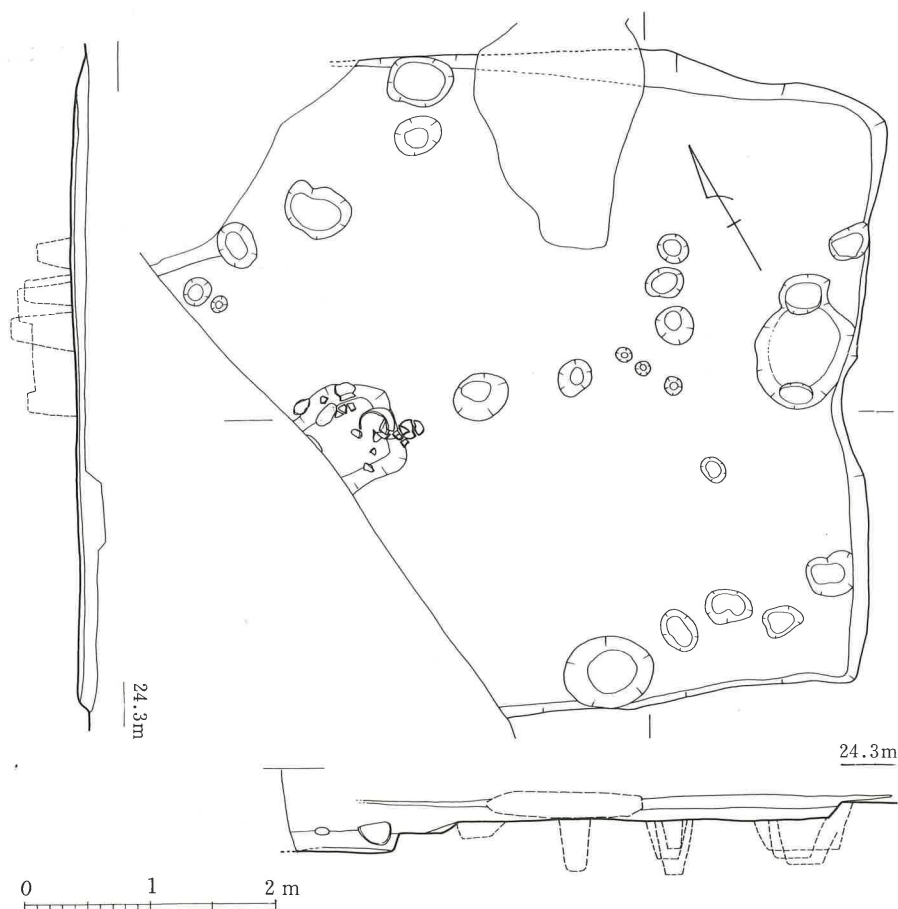


第93図 佐知遺跡18号遺構実測図

3) 28号遺構（第94図）

A-12区で検出した遺構で、27・28号遺構に切られている。このため西半分は遺構の残りが不明確である。確認できる遺構の規模は、南北5.2mであるが、東西は調査区外のため不明である。検出面から約20cmで床面に達するが、柱穴の位置などは複雑な切りあいのため不明である。しかし、東壁中央部からは1.2m×0.8m、深さ30cmの楕円形遺構が検出され、その両端に深さ40cmの柱穴がある。また床面の西寄りの調査区外にかかる所で土坑を検出し、その中から第95図の土器がまともに出土した。

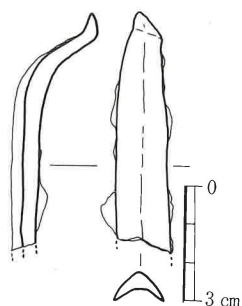
遺物は土器（第96図）のほか 鈚（第95図）も出土している。土器は甕形土器と鉢形土器が主体を占める。1は土坑外からの出土で、外面は口縁部が横撫で、胴部が刷毛目、内面は横方向の刷毛目のあと口縁部が撫で、胴部は縦方向の篋撫でである。明茶色で胎土に角閃石・斜長石を含む。2の鉢は外面が刷毛目で、内面は縦撫で仕上げである。3は球状に張る胴部をもつ甕で、器面は全面撫で仕上げで、内面には篋状工具によるキズが認められる。薄茶色を呈する。4は外面が刷毛目で口縁部から内面にかけては撫で仕上げで、赤茶色を呈する。2・3・4と



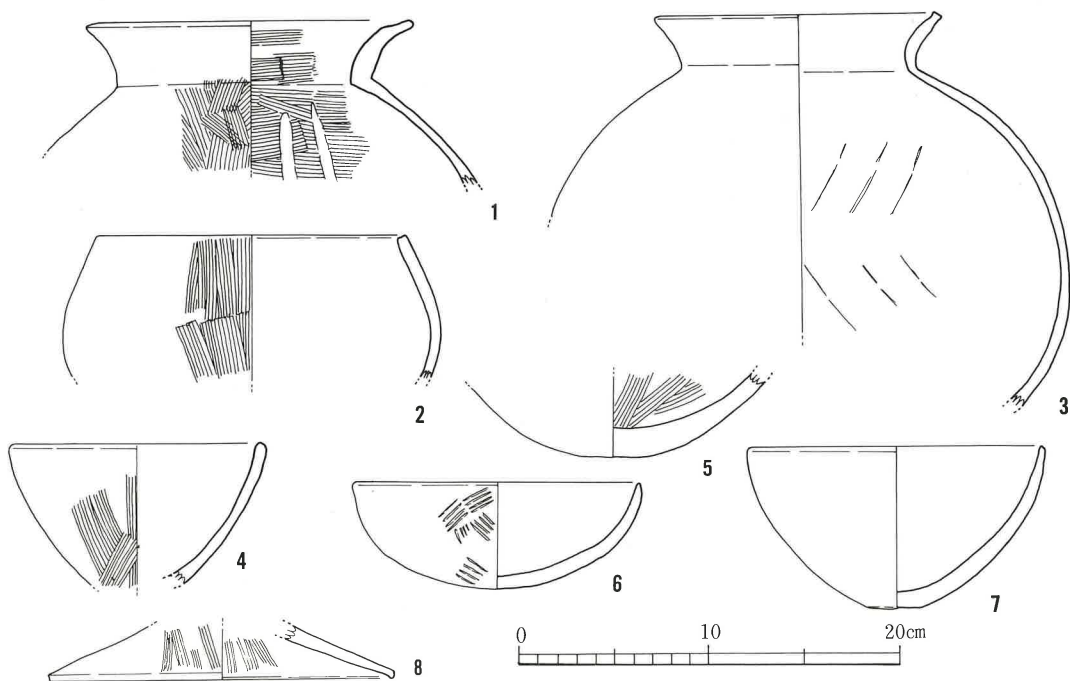
第94図 佐知遺跡28号遺構実測図

もに胎土に角閃石・斜長石を含む。5は平底の名残のある底部である。外面は篋研磨、内面は粗い刷毛目で器面調整され、赤茶色で胎土に角閃石・斜長石・石英を含む。6の鉢の外面は叩きのあと撫でて、一部にススが付着する。内面は撫で仕上げである。薄茶色で角閃石・斜長石を含む。7の平底の鉢は口縁部が横撫でて、それ以外は縦方向の粗い篋研磨仕上げである。明茶色で角閃石・斜長石・石英を含む。8は脚の端部で、器面は刷毛目のあと外面は篋研磨、内面は撫で仕上げである。茶色で角閃石・斜長石を含む。

鉢は長さ6.5cm、幅1.3cmの先端部で、切先は衝撃のため曲がっている。



第95図 佐知遺跡28号遺構出土鉄器実測図



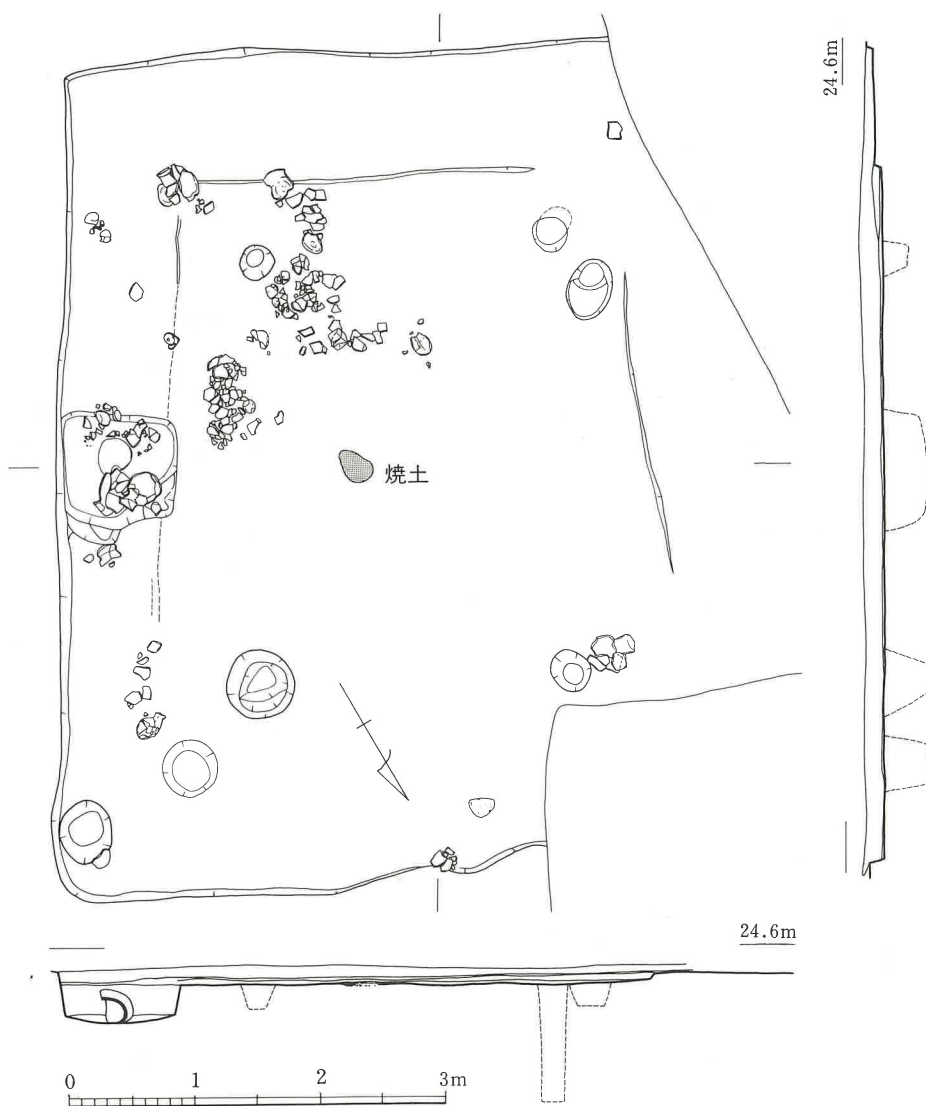
第96図 佐知遺跡28号遺構出土土器実測図

4) 29号遺構（第97図）

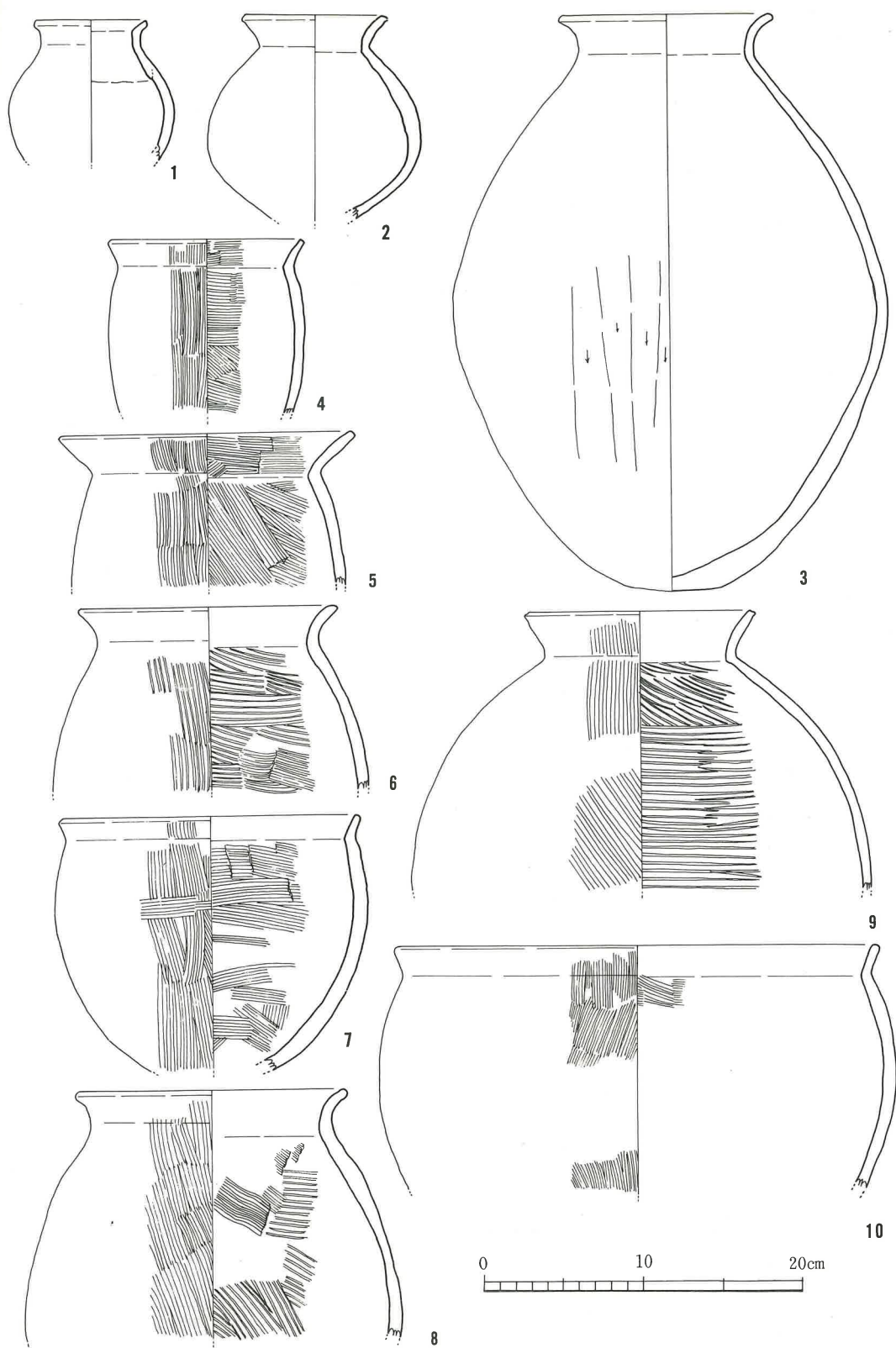
A-11～12区にかけて検出した遺構で、西壁は調査区外になる。規模は南北6.7m、東西約5.6mで、床面までの深さは約10cmである。床面での遺構は東・西・南の壁に沿って幅80～90cmのベツト状遺構が巡る。また、中央部には径20cmの炉跡と考えられる焼土があり、東壁中央部には90cm×90cm、深さ30cmの土坑が検出された。柱穴は4ヵ所で確認されたが、いずれも20cm前後と浅く、不揃いである。

遺物は東壁の土坑を中心に東南部の床面から投棄された状態で多量に出土した。器種も壺・甕・高坏・鉢・器台などあり多様である。

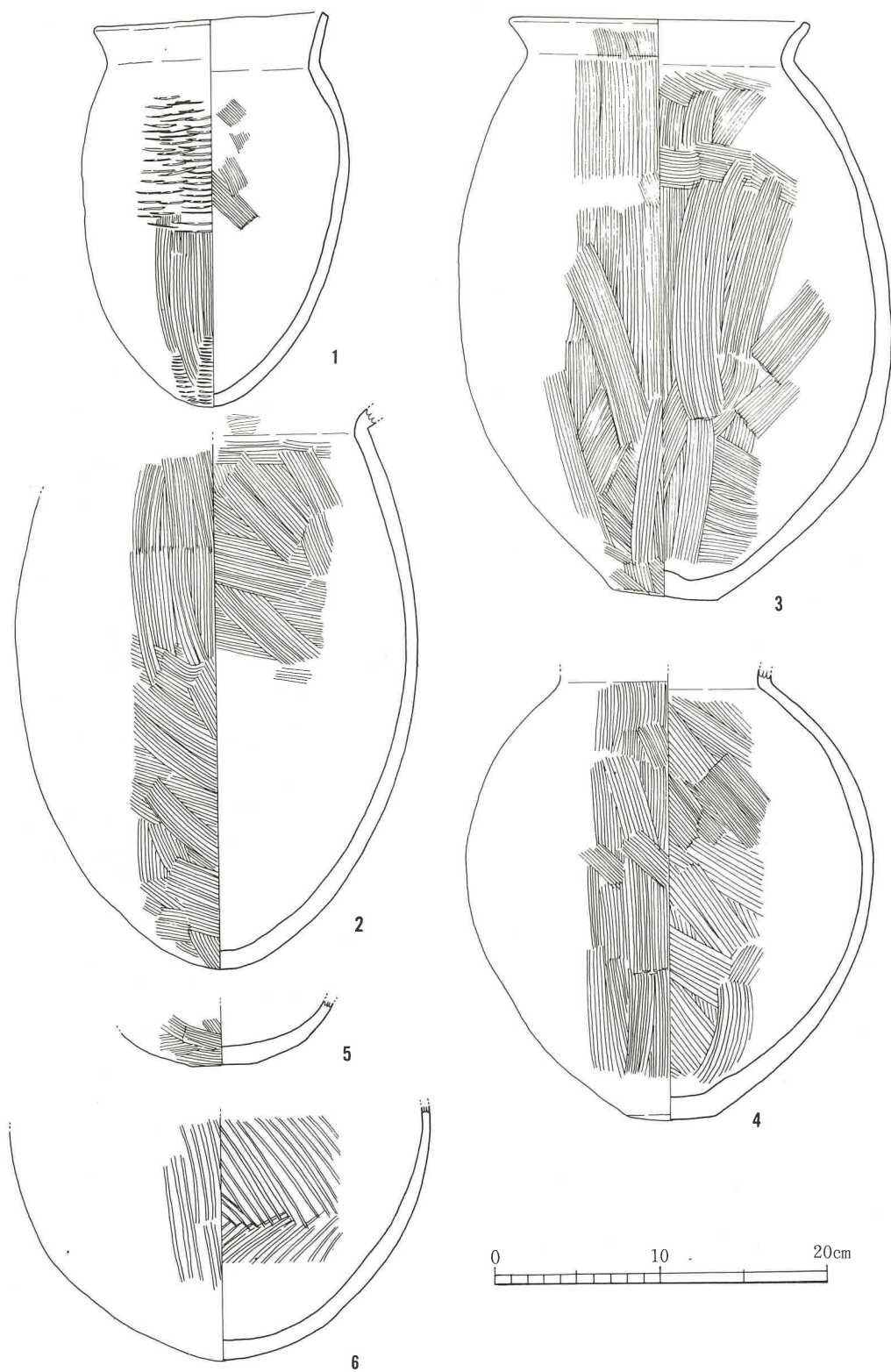
図示した遺物（第98・99・100図）は一時期に投棄されたような出土状態であるため、この



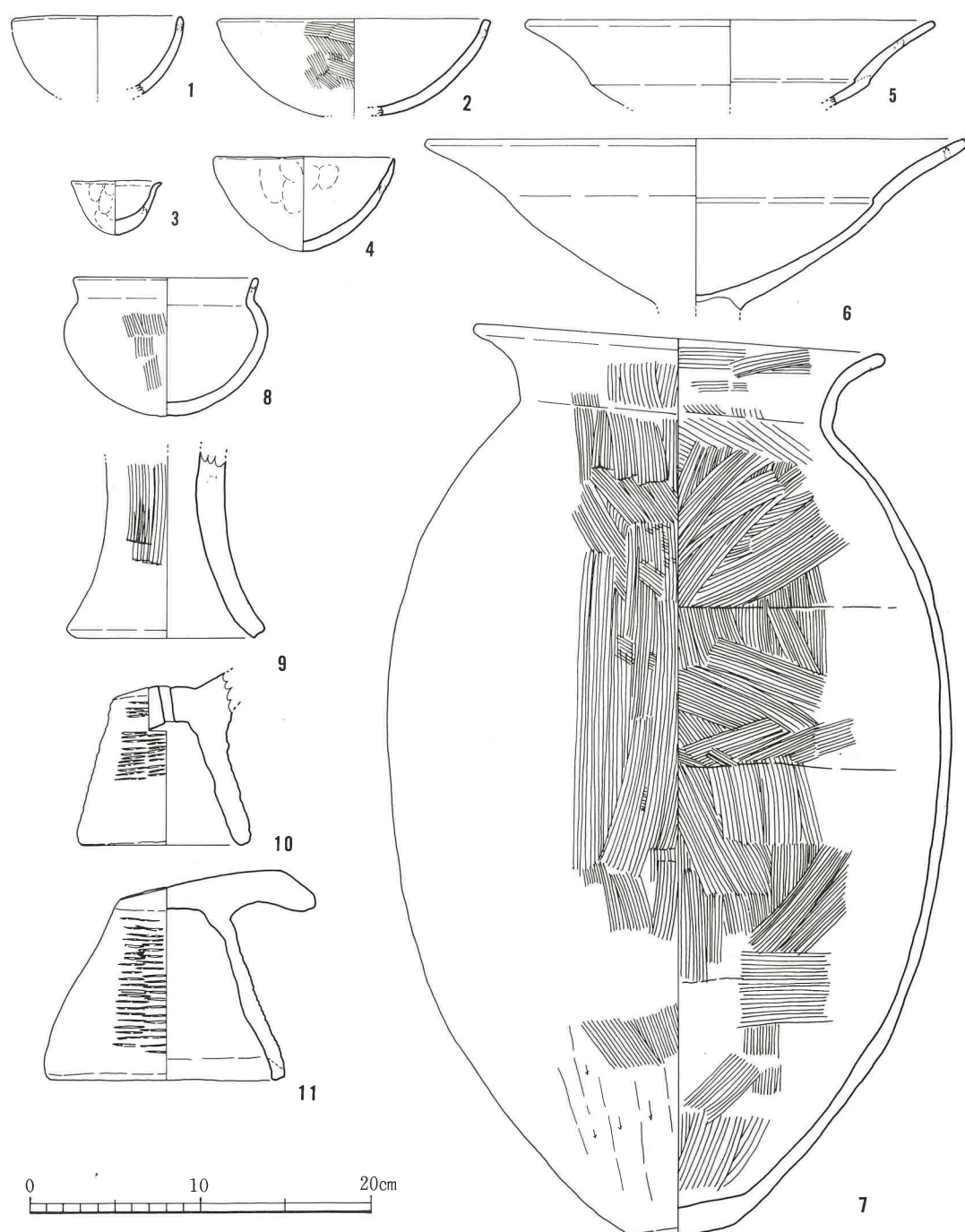
第97図 佐知遺跡29号遺構実測図



第98図 佐知遺跡29号遺構出土土器実測図(1)



第99図 佐知遺跡29号遺構出土土器実測図(2)

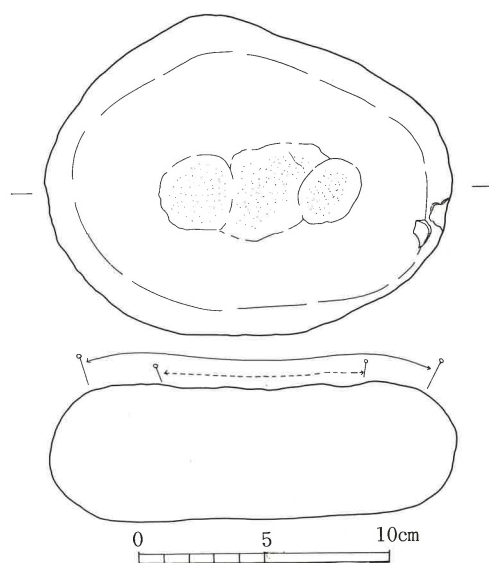


第100図 佐知遺跡29号遺構出土土器実測図(3)

時期の土器組成を理解するうえで重要である。第98図の1～3・9は壺形土器である。1～3の器面は撫で仕上げを基本としているが、3は上位と下位が縦方向の篋研磨で、中位は篋削り状の調整である。また底部は平底の名残がある。9は外面が粗い刷毛目、内面は条痕状の刷毛目で器面調整をしている。4点とも明茶色で胎土に角閃石・斜長石を含む。甕形土器である第98図4～8・10、第99図1～5、第100図7は器形が豊富で、多くは長胴であるが、第98図7・10は口縁部が短く、底が浅い鉢状である。底部は平底と丸底の両者がある。器面調整は刷毛目が基本となっているが、第98図の6・8、第99図の6は条痕状の刷毛目である。また、第99図の1は叩きのあと刷毛目、底部近くは再び叩き調整をしており、第100図の7は粗い刷毛目と細かい刷毛目の二種類を使い、外面底部近くは削り状の調整痕が認められる。色調は明茶色・赤茶色で胎土にはいずれも角閃石・斜長石を含むが、第98図の10には石英も認められる。外面のススは第98図の4・8、第99図の2・3、第100図の7に付着している。なお、第99図の4～6は壺の可能性が高い。

高坏は第100図の5・6に図示した2点がある。5は外面が縦方向、内面が横方向の篋研磨で仕上げており、6は口縁部の内外面が横方向、内面の坏底部が縦方向の篋研磨で調整しているが、外面の剥落が著しい。5は明茶色、6は暗茶色であり、いずれも胎土に角閃石・斜長石を含み、5には石英も認められる。鉢形土器は第100図の1～4・8がある。1・3・4は手づくね土器で3・4は指圧痕が残る。2の外面は粗い刷毛目で調整している。8は口縁部が屈曲しており、外面は粗い撫で仕上げである。茶色で、いずれも角閃石・斜長石を含むが、3・4には石英も含んでいる。器台は第100図の9～11である。9の脚端部は横撫でで、外面は縦方向の粗い刷毛目調整である。10・11の外面は撫でのあと叩きで調整をしており、11の上面突出部にも見られる。また、10の上面には焼成前の穿孔がある。明茶色で胎土に角閃石・斜長石を含む。

石器としては第102図の打面に3ヵ所のくぼみのある叩き石があり、石質は安山岩である。

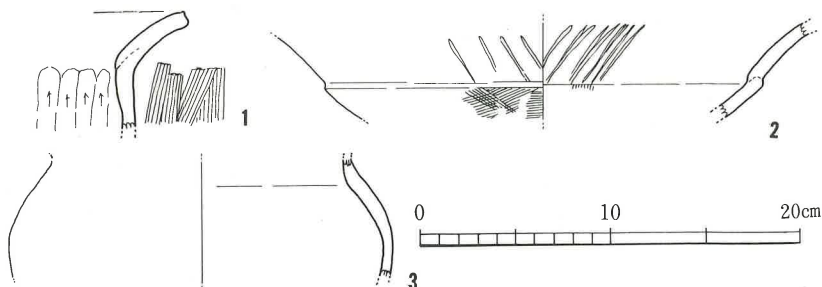


第101図 佐知遺跡29号遺構出土石器実測図

5) 30号遺構 (第104図)

B-11・12区にかけて検出した遺構で半分近くは調査区外のため未調査である。確認できた遺構の規模は、東西約5.5m、南北約6.0mで検出面から約10cmで平坦な床面に達する。内部の構造は、壁に沿って床面からの高さ約5cm、幅約80cmのベット状遺構がめぐる。柱穴は3ヵ所で確認したが深さが不揃いで、確証はもてない。

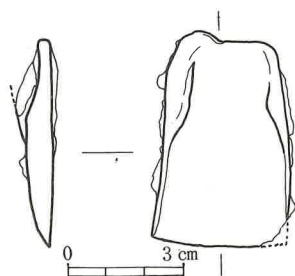
遺物の出土状態は、土器は小破片が多く時期を確定するのは困難であるが、注目される遺物として南隅から出土した鉄斧がある。



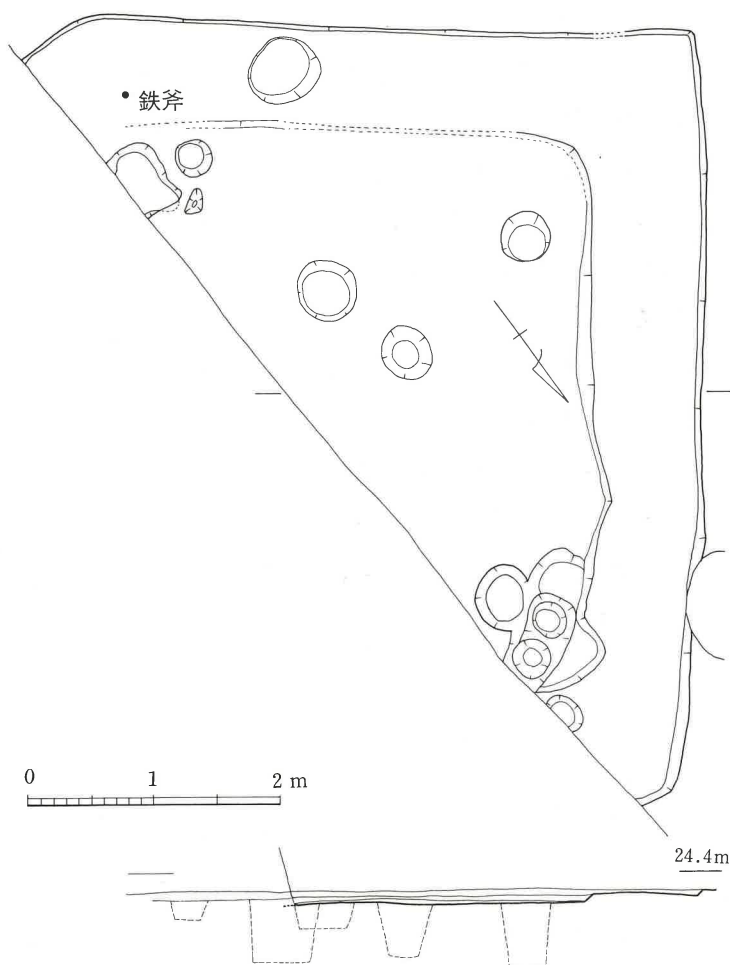
第102図 佐知遺跡30号遺構出土土器実測図

第102図に図示した

1は口縁部が横撫でで、胴部外面は刷毛目、内面は篋削りである。2は高坏で、外面と内面の上位は縦方向の暗文風の篋削り、下位の外面は刷毛目、内面は篋研磨で仕上げている。3は壺と思われる内外面撫で仕上げの土器片である。いずれも明茶色で胎土に角閃石・斜長石を含む。鉄斧(第103図)は長さ5.5cm、幅3.5cmで、袋部は破損している。



第103図 佐知遺跡30号遺構出土鉄器実測図

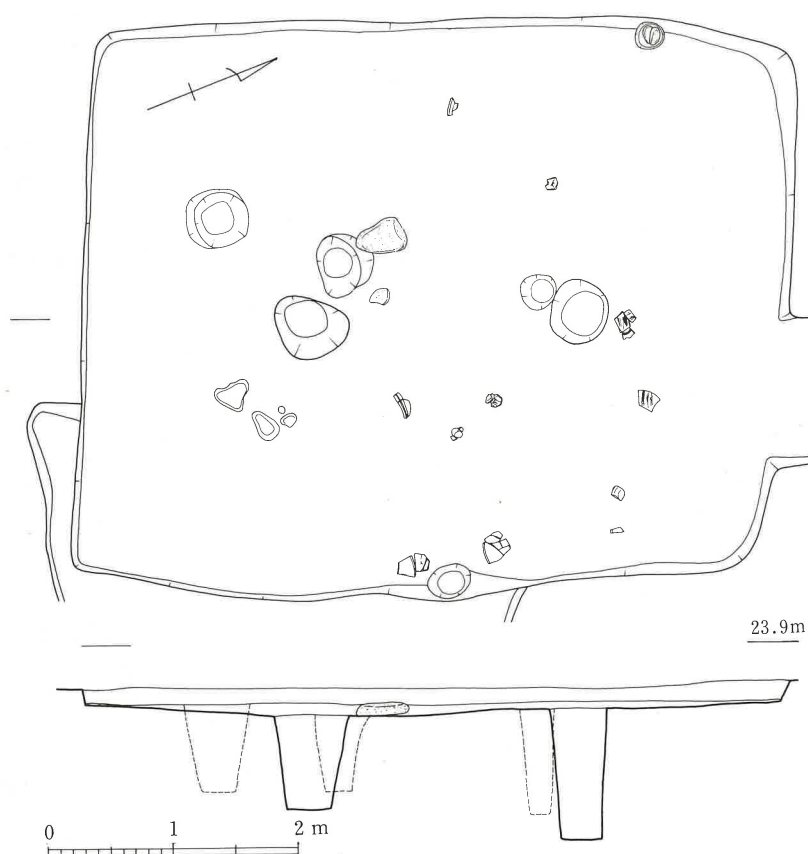


第104図 佐知遺跡30号遺構実測図

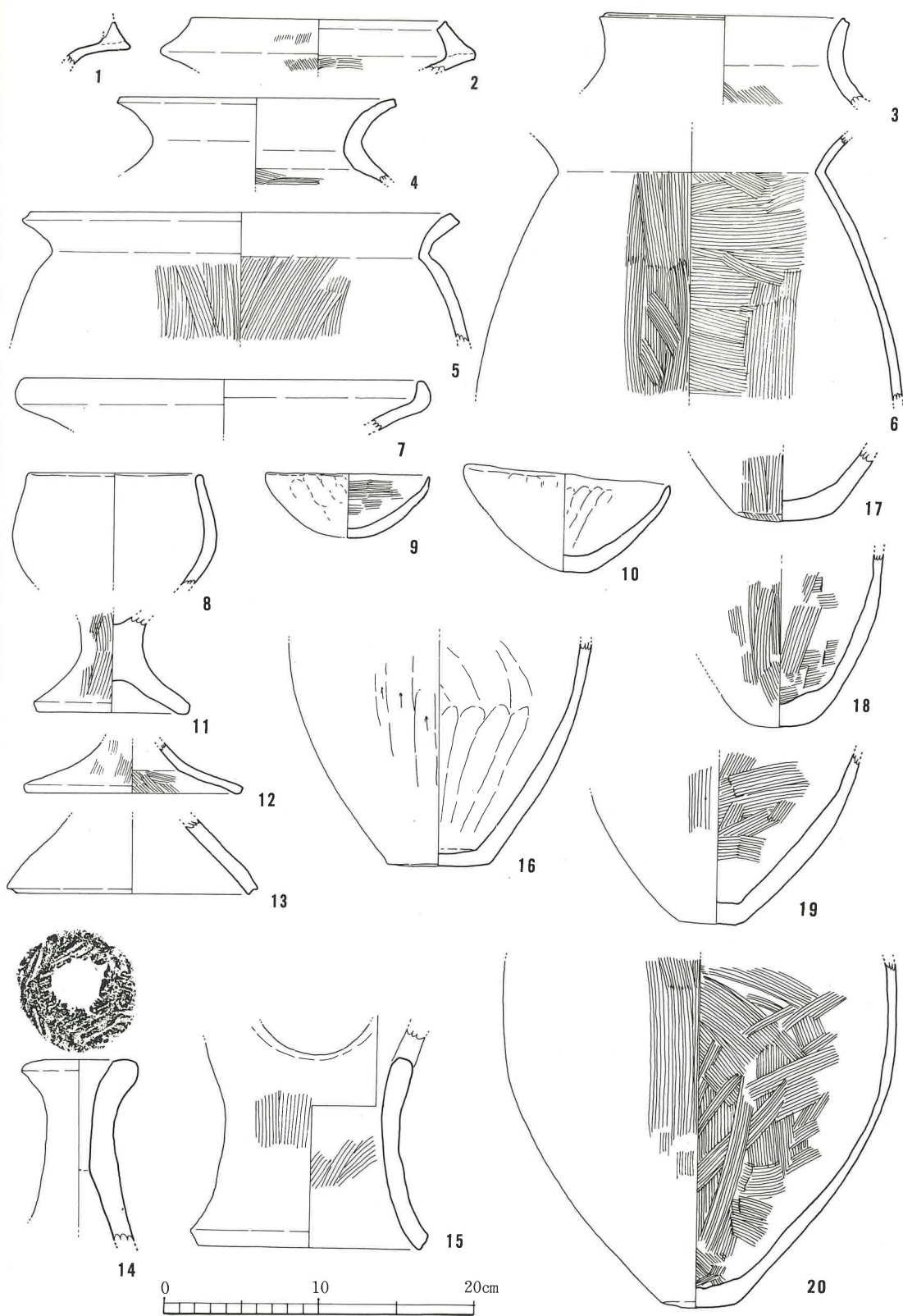
6) 39号遺構（第105図）

B・C-14区で検出した方形の遺構である。規模は東西4.5m、南北5.6mで北壁の一部に1.2m×0.7mの張り出しがあり検出面から約20cmで床面に達する。床面で検出した柱穴は2ヵ所で、両者の間隔は2.0m、深さは南が0.7m、北が1.0mである。遺物は流れ込みの状態で、多量の土器片が出土した。

第106図に図示した土器が出土した代表的なもので、壺・甕・高坏・鉢・器台などがある。1～3は壺形土器で1・2は複合口縁で1の外面には櫛描波状文があり、2は刷毛目のあと撫で仕上げである。3は単口縁と考えられるが撫で仕上げで、内面に刷毛目が残る。いずれも明茶色で、胎土に角閃石・斜長石を含み、3には石英も認められる。4～5・16～20は甕形土器で、



第105図 佐知遺跡39号遺構実測図



第106図 佐知遺跡39号遺構出土土器実測図

16を除き器面調整は刷毛目を基本とする。5の刷毛目は粗く、6の刷毛目は細かい。また、19は外面が粗く、内面は細かい刷毛目である。16は外面が縦方向の篋削り、内面は下位が縦、上位が斜目方向の撫で仕上げである。底部は全て不安定な平底で、色調は明茶色が多く、全ての胎土に角閃石・斜長石を含むが、底部には白色粒子が目立ち、17には石英もある。

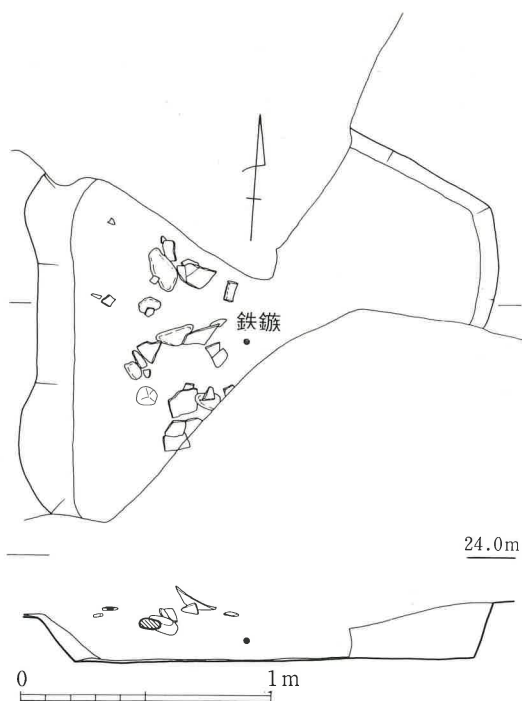
高坏は7の坏部と13・14の脚部がある。7は口縁部が内湾するタイプで、器面は横方向の篋撫でである。13は外面、縦方向の篋研磨、内面は横撫でである。14は上面に接合のための叩き痕があり、内外面は撫で仕上げである。いずれも赤茶色で角閃石・斜長石を含む。8～10は鉢で、8は口縁部が内湾するタイプで、器面は横撫で仕上げである。9・10は手づくねによるもので、指圧痕が残るが9は内面に横方向の刷毛目調整をしている。11・12は鉢の脚部と思われ、11は外面が粗い刷毛目調整であるほかは撫で仕上げで、12は外面が縦方向の篋研磨、内面は上位が撫で、下位が刷毛目仕上げである。いずれも茶色で角閃石・斜長石・白色粒子を含む。器台は15のみである。口縁部の一部が大きく抉れるタイプで、内外面ともに刷毛目のあと撫で調整である。明茶色で角閃石・斜長石を含む。

(2) 小竪穴遺構

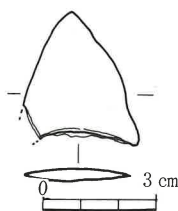
1) Y-8 遺構 (第107図)

A-13区で検出した遺構であるが東北隅は31号遺構に切られ、南西隅は未調査区のため不明である。残された規模は南北1.8mで検出面からの深さは約20cmである。遺構内からは壺形土器の大きな破片(第109図)と、鉄鏃(第108図)が出土した。

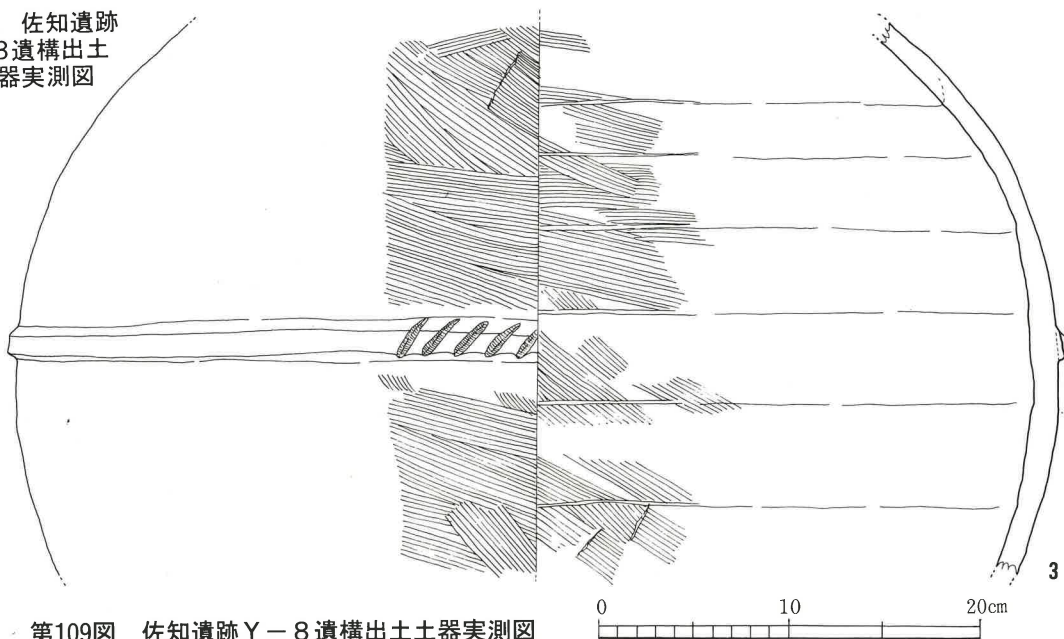
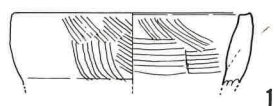
土器の1は口縁部で器面は粗い刷毛目調整である。2は底部であるが器形は不明である。3は壺の胴部であるが、器面は内外面粗い刷毛目調整で、外面の突帯は刷毛目原体による刻み目があり、内面は粘土の接合痕が残る。いずれも明茶色で角閃石・斜長石を含み、2・3には白色粒子も認められる。鉄鏃は三角形の茎のないタイプで長さ3.5cm、幅約3.5cmである。



第107図 佐知遺跡Y-8遺構実測図



第108図 佐知遺跡Y-8遺構出土鉄器実測図



第109図 佐知遺跡Y-8遺構出土土器実測図

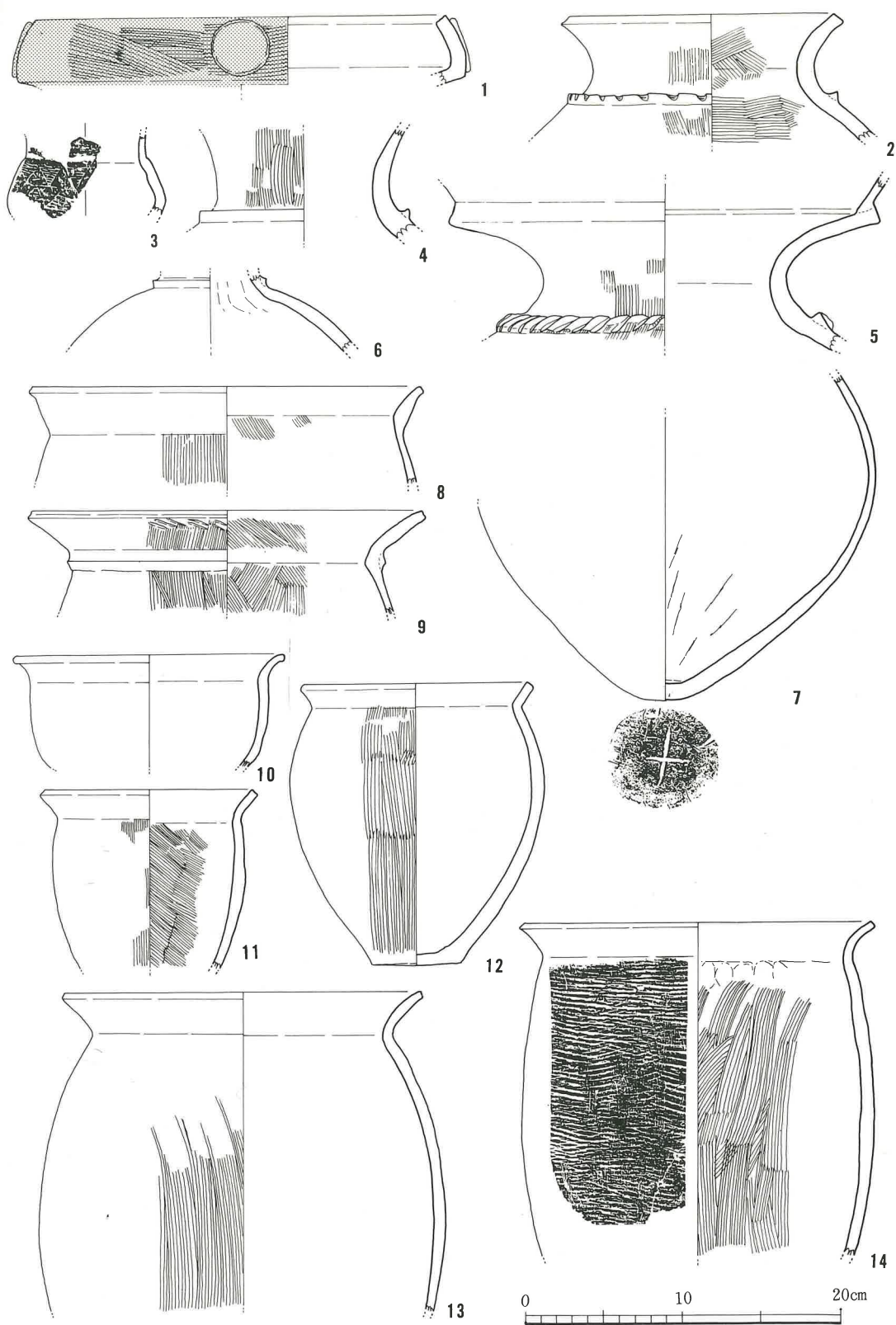
(3) 各地区出土の弥生後期遺物

1) 土器 (第110・111図)

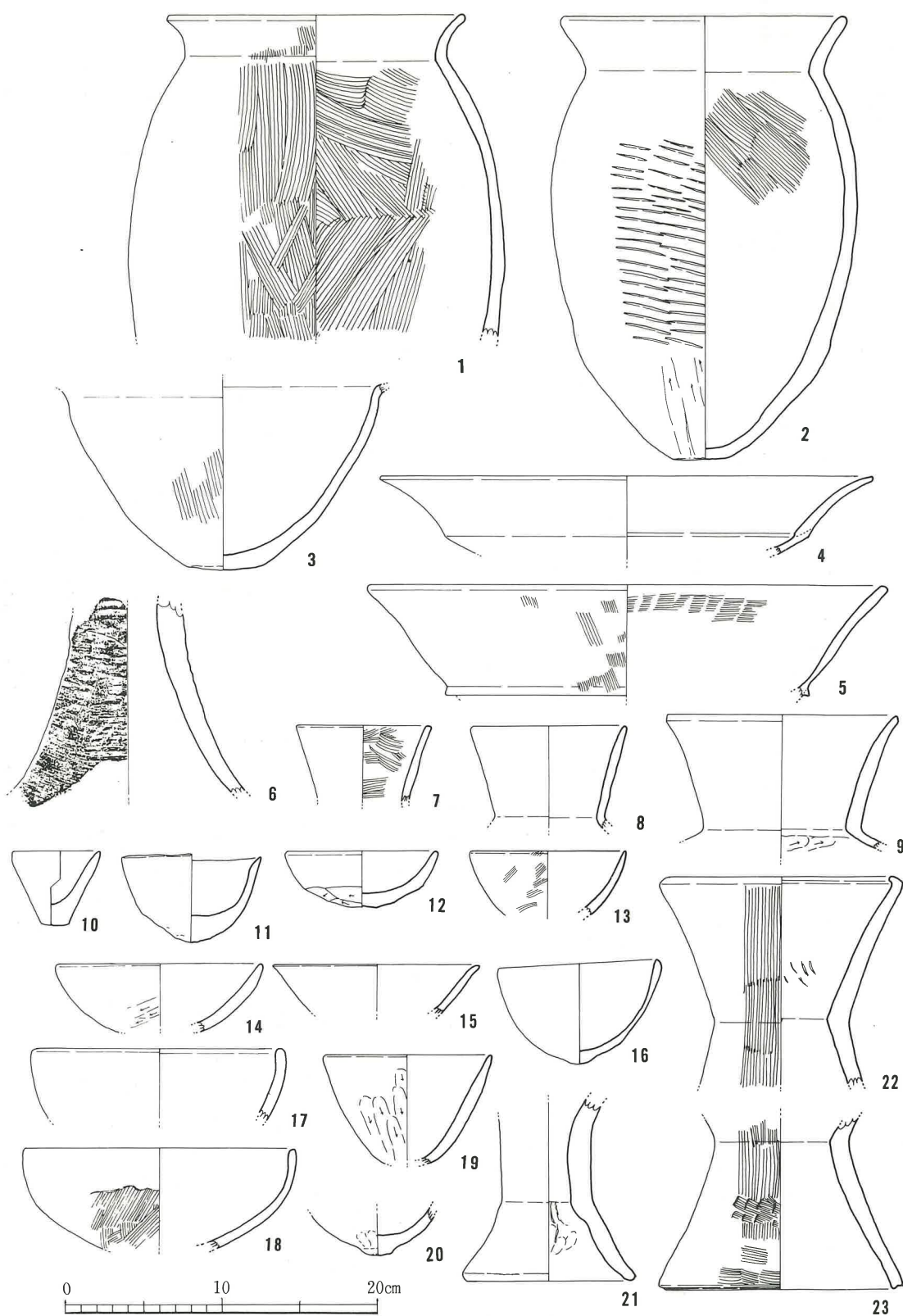
図示した遺物は新しい遺構や包含層から出土した特徴的なもので、器形は壺・甕・高坏・鉢・器台などが見られる。

第17表 佐知遺跡各地区出土弥生後期土器観察表

図版号	遺物 番号	出土 位置	器 種	文 様 の 特 徴 と 器 面 調 整 の 方 法		胎 土				備 考
				表	裏	角 閃 石	斜 長 石	石 英	その他	
110	1	A-6	壺	刷毛目のあと円形浮文さらに丹塗り	横ナデ	○	○			
	2	A-8	壺	刷毛目のあとナデ 茶色	刷毛目	○	○			
	3	A-10	壺	細い沈線による鋸歯文で笥研磨 茶色	ナデ	○	○			精製土器
	4	43号	壺	刷毛目 茶色	ナデ	○	○			
	5	A-17	壺	口縁はナデ 肩部は刷毛目 灰茶色	ナデ	○	○			
	6	A-10	壺	丹塗り研磨 淡茶色	横ナデ	○	○			
	7	B-10	壺	ナデ底部に×印 明茶色	ナデ	○	○		白色粒	黒色斑
	8	B-10	甕	口縁は縦ナデ 胴部は刷毛目 茶色	刷毛目のあとナデ	○	○			
	9	B-10	甕	口縁は叩きのあと細かい刷毛目 明茶色	細かい刷毛目	○	○			
	10	A-12	甕	横ナデ 明茶色	横ナデ	○	○			
	11	B-10	甕	刷毛目のあと縦ナデ 明茶色	細かい刷毛目	○	○			
	12	A-7	甕	口縁は横ナデ 胴部は刷毛目 淡茶色	ナデ	○	○			
	13	B-10	甕	口縁は横ナデ 胴部は刷毛目 茶色	口縁は横ナデ 胴部は縦ナデ	○	○			スス付着
	14	40号	甕	口縁はナデ 胴部は叩き 茶色	口縁はナデ 胴部は刷毛目	○	○			
111	1	B-11	甕	口縁は刷毛目のあとナデ 茶色	口縁は横ナデ	○	○			
	2	B-10	甕	口縁は横ナデ 胴部は叩き 底部は削り	口縁はナデ 胴部は刷毛目 明茶色	○	○			
	3	B-10	甕	粗い刷毛目のあとナデ 明茶色	ナデ 黒灰色	○	○			
	4	B-12	高坏	一部に刷毛目、全体は磨減 灰茶色	ナデ 磨減	○	○			
	5	A-6	高坏	刷毛目のあとナデ 灰茶色	横の刷毛目のあと粗い縦笥研磨	○	○			
	6	A-17	高坏	粗い叩き 赤茶色	ナデ	○	○			
	7	B-12	長頸壺	縦方向の笥研磨 明茶色	刷毛目	○	○			
	8	A-10	長頸壺	縦方向の笥研磨 明茶色	横方向の笥研磨	○	○			
	9	B-11	長頸壺	口縁以下ナデ 明茶色	口縁は横ナデ 胴部は削り	○	○			
	10	A-10	鉢	ナデ 淡茶色	ナデ	○	○			
	11	46号	鉢	ナデ 茶色	ナデ	○	○			
	12	B-11	鉢	口縁はナデ 胴、底部は笥削り 茶色	横ナデ	○	○			手づくね
	13	B-8	鉢	刷毛目のあとナデ 茶色	ナデ	○				
	14	B-8	鉢	口縁はナデ、底部は笥削り 茶色	ナデ	○	○		白色粒	
	15	47号	鉢	ナデ 茶色	ナデ	○	○			
	16	B-12	鉢	ナデ 灰茶色	ナデ	○	○			
	17	A-10	鉢	丹塗り研磨	ナデ	○	○			
	18	A-8	鉢	口縁はナデ 胴部は刷毛目 茶色	ナデ	○	○			
	19	40号	鉢	笥削りのあとナデ 茶色	ナデ	○	○			
	20	33号	鉢	ナデ 指圧痕 明茶色	ナデ	○	○			
	21	B-10	器台	横ナデ 明茶色	ナデ	○	○			
	22	B-12	器台	刷毛目 灰茶色	ナデ	○	○			同一個体
	23	B-12	器台	刷毛目、下位は横方向の刷毛目	ナデ	○	○			



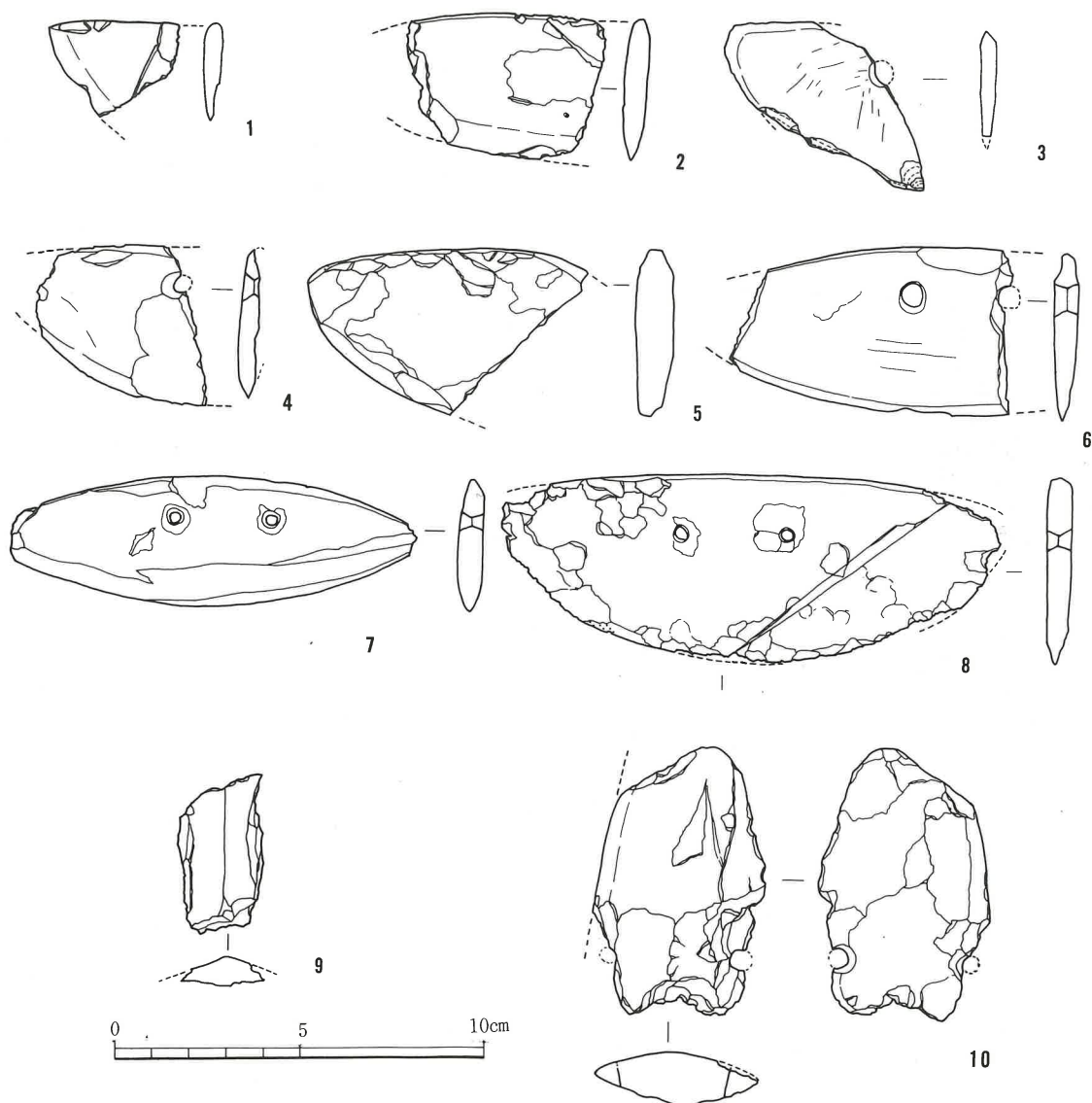
第110図 佐知遺跡各地区出土弥生後期土器実測図(1)



第111図 佐知遺跡各地区出土弥生後期土器実測図(2)

2) 石器 (第112図)

図示した遺物は新しい遺構や包含層から出土したものであるが、7・8の石包丁はB-11区P-13内から出土したもので、注目される。石包丁以外の器種としては、石剣・石戈の破片も出土している



第112図 佐知遺跡各地区出土磨製石器実測図

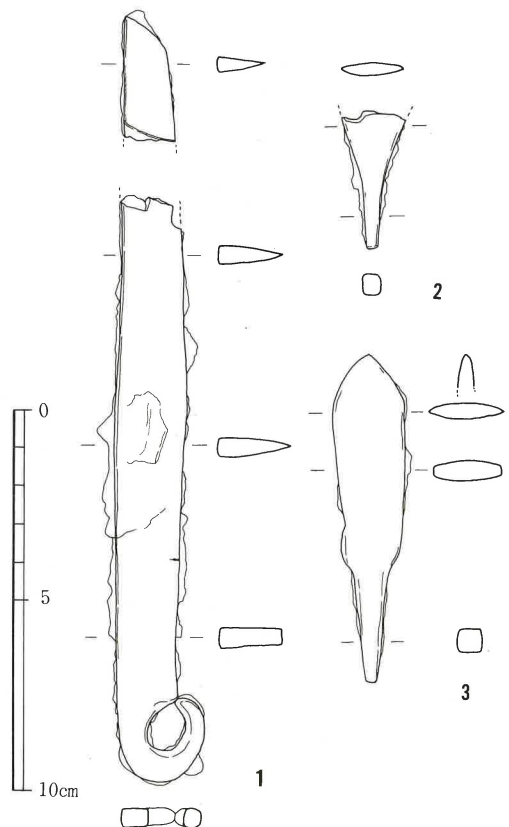
第18表 佐知遺跡各地区出土磨製石器観察表

図版名	遺物 番号	出土 位置	器 種	大 き さ (cm)			石 材	特 徴
				長 さ	幅	厚 さ		
112	1	19号	石包丁	3.6	2.5	0.5	貝岩	
	2	B-3	石包丁	5.5	4.0	0.6	貝岩	
	3	30号	石包丁	6.9	3.0	0.6	貝岩	
	4	21号	石包丁	4.5	4.2	0.5	貝岩	
	5	40号	石包丁	7.7	4.4	1.0	砂岩	未製品
	6	A-10	石包丁	7.5	4.5	0.7	貝岩	
	7	B-11	石包丁	11.0	3.5	0.7	貝岩	36g P-13の同一土坑内から出土
	8	B-11	石包丁	13.6	6.0	0.7	緑色片岩	59g 埋納の可能性もある
	9	A-10	石剣	4.0	2.2	0.8	貝岩	
	10		石戈?	7.3	4.8	1.5	貝岩	

3) 鉄器 (第113図)

図示した遺物は素環刀・鉄鏃2点である。

1の素環刀はA-7区の包含層出土で、切先が折れている。遺存している部分は、切先部が長さ3.3cm、幅1.3cmで峰部の厚さは0.4cmである。素環のある部分は長さ15.5cm、幅1.9cm、峰の厚さ0.5cmで、素環部の下端から1.9cmのところから刃部と茎部が別れる。2もA-7区出土であるが、刃部を欠く。遺存部は長さ3.5cm、幅1.7cmである。3は21号遺構出土で完形品である。長さ8.6cm、幅2.0cmで厚さは0.6cmである。



第113図 佐知遺跡各地区出土鉄器実測図

第4節 古墳時代の調査

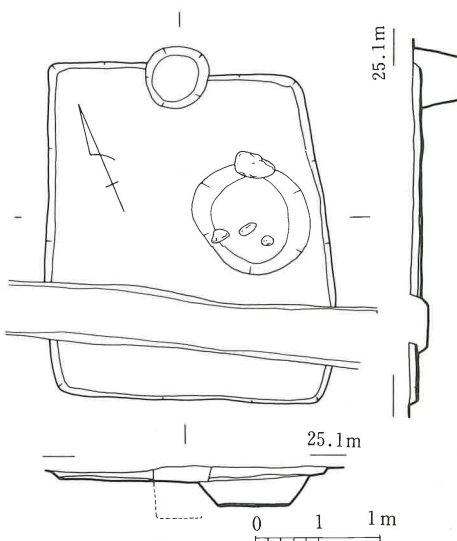
古墳時代の遺構で明確なものは住居跡と考えられる方形の竪穴遺構がある。これらの竪穴遺構は、壁にカマドが付き須恵器を伴うものと、それ以外に区別できる。これまでの研究によると、前者は5世紀中葉以降で、後者はそれ以前と考えられる。そこで、これを前期と後期に区分し説明する。

1 古墳時代前期

(1) 住居跡

1) 7号遺構(第114図)

A・B-4区で検出した遺構で、南部を新しい遺構に切られる。規模は南北2.6m、東西2.3mで、床面までの深さは10cmもない浅さである。平坦な床面の東部に径90cm、深さ20cmの土坑があり、上部からは礫が出土した。遺物は土器の小破片が出土したのみである。

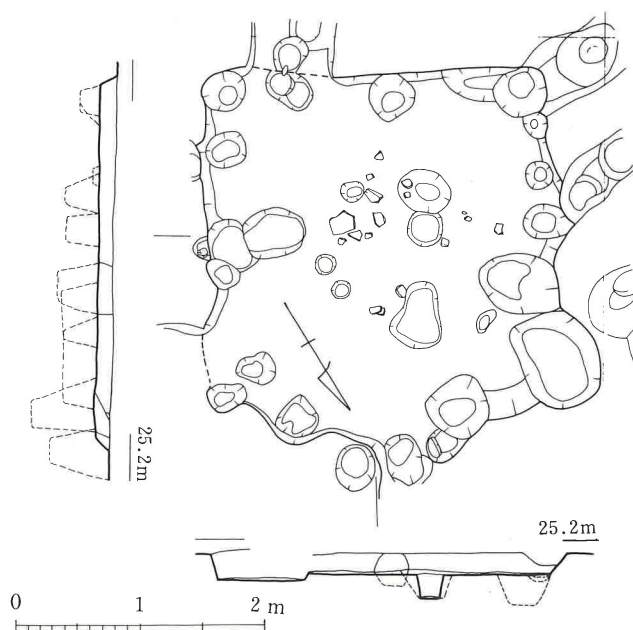


第114図 佐知遺跡 7号遺構実測図

2) 8号遺構(第115図)

A・B-5区で検出した遺構で、新しい溝やピットに切られる。規模は南北2.7m、東西2.8mで、床面までの深さは約15cmである。床面は平坦であるが、柱穴などの遺構は確認できなかった。遺物は遺構上面から壺形土器の破片がまとまって出土した。

第116図が出土土器であるが、外面は口縁部から胴部にかけては撫で仕上げ、胴部内面は篋削りで器面調整している。暗茶色で胎土に角閃石・白色粒子を含み、外面にはススが付着する。

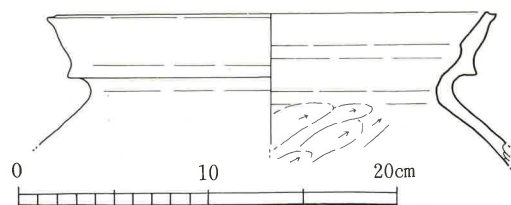


第115図 佐知遺跡 8号遺構実測図

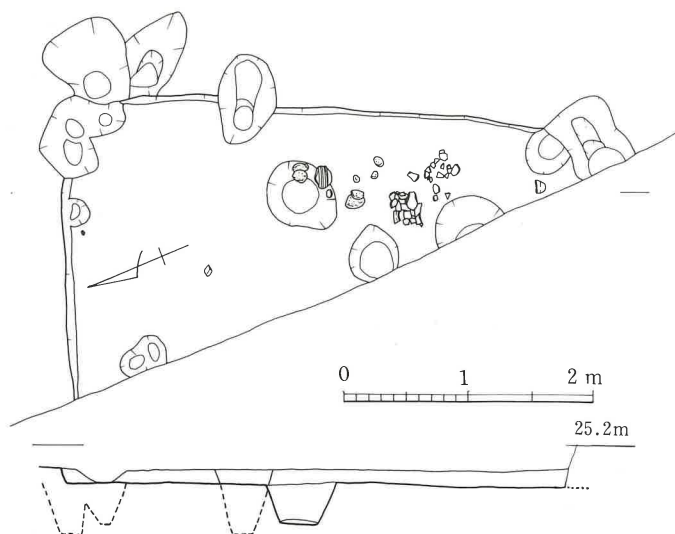
3) 10号遺構 (第117図)

A-5区の西隅で検出した遺構であるが、大部分は調査対象地外で遺構の3分の1程度を調査したにすぎない。規模は東壁が4.2mである以外は不明で、深さも、検出面から約10cmで平坦な床面に達する。柱穴や炉跡は調査した範囲内では確認できなかった。遺物は床面で甕形土器がまとまって出土した。

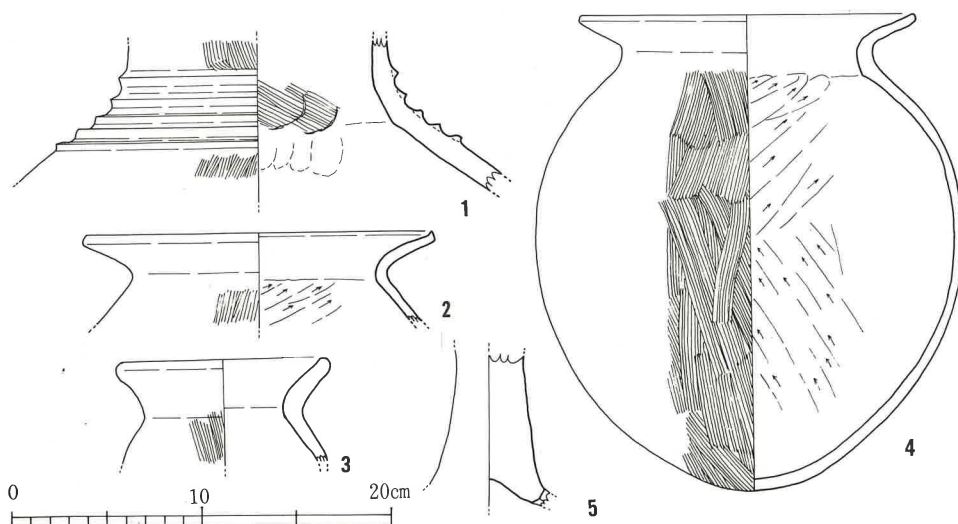
第118図の1は壺形土器の頸部で5条の三角突帯がめぐっている。器面調整は刷毛目を主体とし、内面には指圧痕が残る。明茶色で角閃石・斜長石を含む。2～4は甕形土器で3は器壁が厚手で、胴部外



第116図 佐知遺跡8号遺構出土土器実測図



第117図 佐知遺跡10号遺構実測図



第118図 佐知遺跡10号遺構出土土器実測図

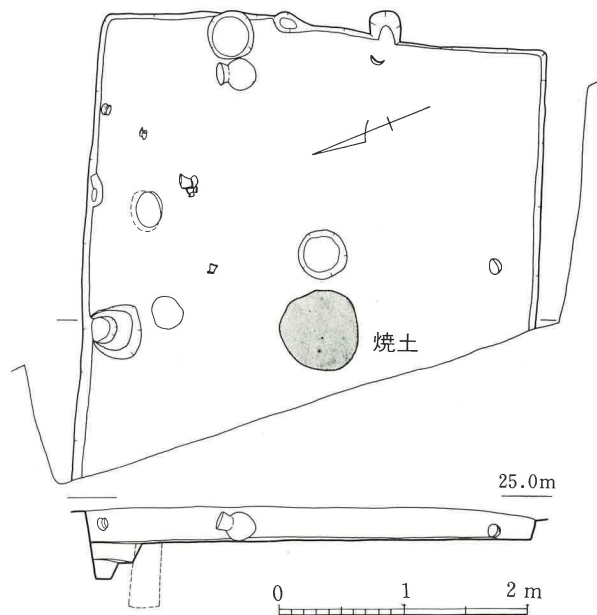
面が刷毛目である以外は撫で仕上げである。2・4の器面調整は、口縁部が横撫でで、胴部外面は刷毛目、内面は篋削りで仕上げています。また2の口縁端部は肥厚し、3の外面にはススが付着し、底部内面は煮こげが付いている。5は高坏の脚部で、下位には穿孔がある。器面調整は縦方向の篋研磨で仕上げています。明茶色で、胎土に角閃石・斜長石・白色粒子を含む。

4) 14号遺構 (第119図)

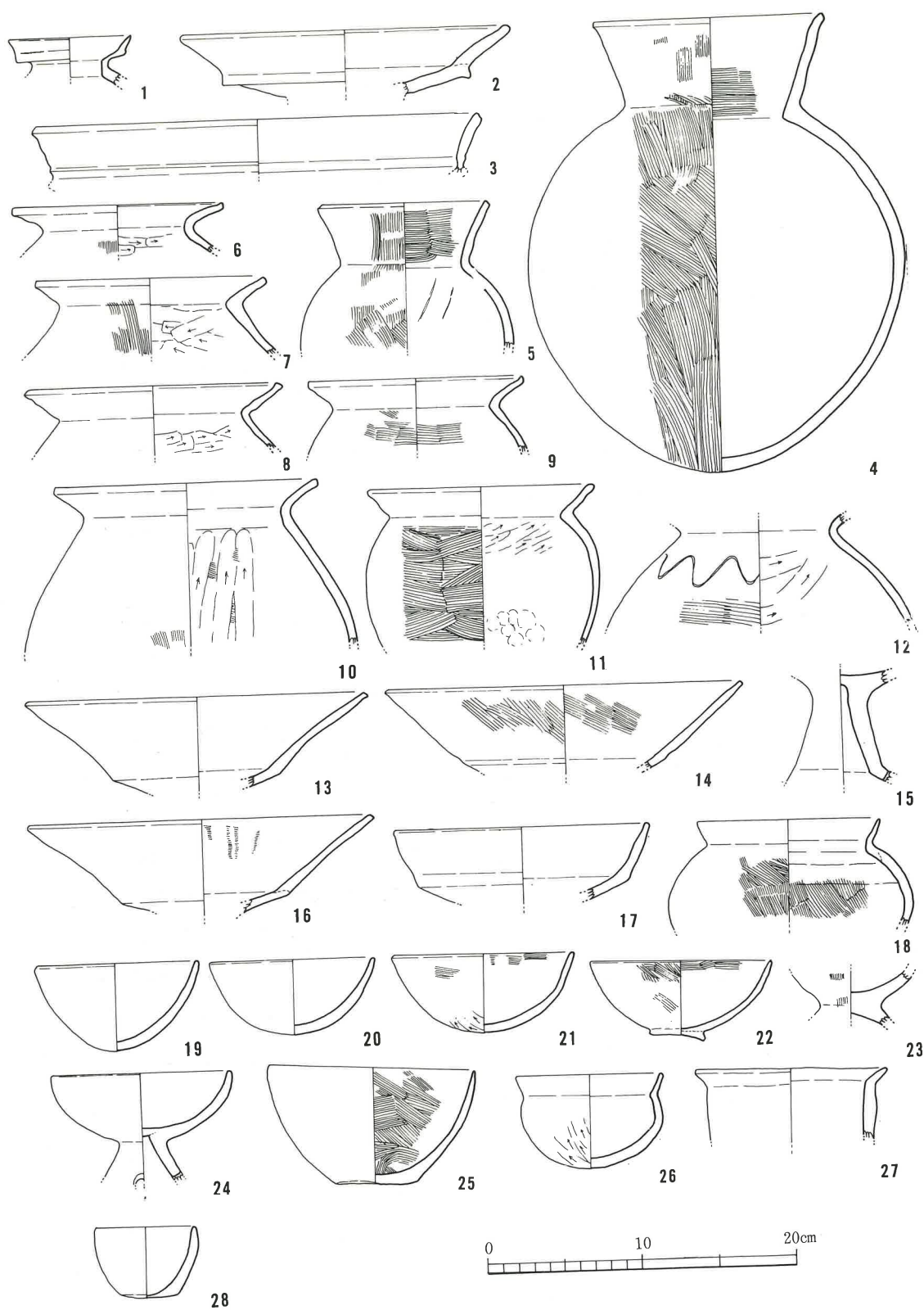
A-7区の西隅で検出した遺構であるが、西壁の部分は調査対象地外で調査できなかった。確認できた規模は東壁2.5mで、他の壁は不明である。しかし検出面から約30cm下の床面にある焼土を中央部の炉跡と考えるならば、3.5m×約5mの長方形の住居跡であることが想定できる。柱穴は検出できず、位置は不明である。遺物は覆土内から多量の土器片が出土したほか、床面近くから第120図4の壺、25の鉢、26の小型壺の完形品が出土した。特に4は口縁部を北にむけ、横倒しの状態であった。

第120図に図示した土器は壺・甕・高坏・鉢・小型壺等がある。壺は1～5で口縁部の形態は1～3が二重口縁で4・5は単口縁である。1の器面は横撫でで外面にはススが付着している。2は内外面とも横撫でであるが、内面はさらに縦方向の篋研磨で仕上げています。3の器形は明確でない。内外面横撫でで、外面にはススが付着している。1・2は明茶色で、3は黒色である。胎土には、いずれも角閃石・斜長石を含む。完形品の4の器面は刷毛目で仕上げられており、外面は胴部中位が斜め方向である以外は口縁部から丸底の底部にかけて縦方向につけられている。内面は口縁部に横方向につけられているほかは、撫で仕上げである。なお、口縁部は刷毛目調整のあと、さらに横撫でされている。5も4と同じ手法でつくられているが、外面の刷毛目が不明確である。両者とも薄茶色で、胎土に角閃石・斜長石・白色粒子を含む。

甕は6～12がある。口縁部は屈曲し、6・8・9の端部は内側に肥厚する。外面の器面調整は、刷毛目を基本とし6・7・10は縦方



第119図 佐知遺跡14号遺構実測図



第120図 佐知遺跡14号遺構出土土器実測図

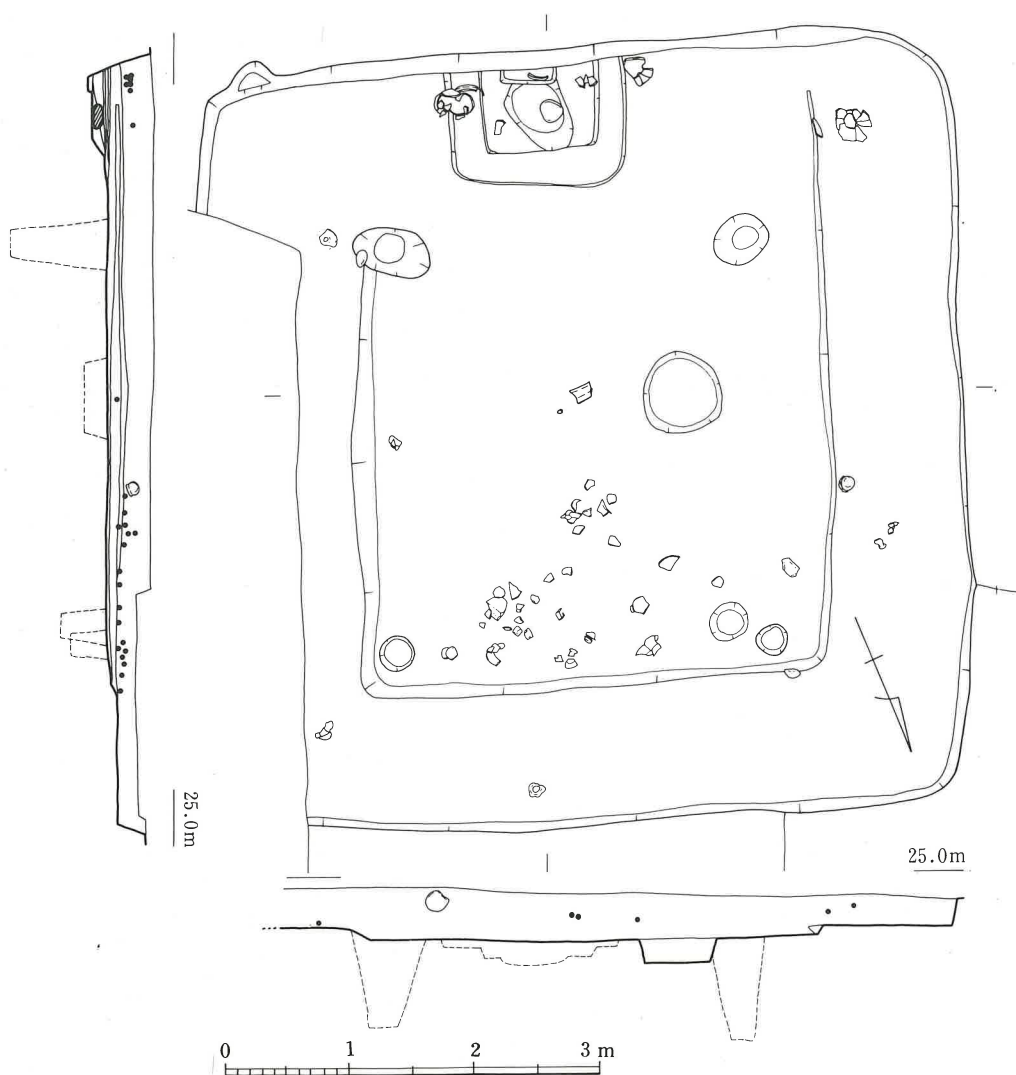
向、9・11・12は横方向であるが8は認められない。また、12には1条の篋描きの波状文がある。内面は篋削りを基本とするが、9は横方向の刷毛目調整である。6～8・11・12は横・斜目方向の篋削りであるが、10は横方向の刷毛目のあと縦方向の篋削りであり、11の底部近くは指圧痕が残る。色調は、6～11が明茶色、12が薄茶色で、胎土には、いずれも角閃石・斜長石を含むが6～8・10・12には金雲母も認められる。また9・11の外面にはススが付着している。

高坏は13～17の5点がある。坏部はいずれも屈曲部から口縁部にかけて直線的に延びるタイプのものである。器面調整は、いずれも最終的には篋研磨仕上げであるが、13は内面縦方向、外面は横方向の刷毛目のあと縦方向の篋研磨である。14は内外面とも斜目方向の刷毛目のあと黒色の彩文が施されている。16の外面は屈曲部から上位は縦方向、下位は横方向の、内面は横方向の刷毛目のあと縦方向の篋磨きである。17は内外面とも横撫で仕上げである。15は脚部で、外面は縦方向の篋研磨で、内面は撫で仕上げである。また、屈曲部から端部にかけての部分に4ヵ所円形透かしがある。色調は13・14・17が明茶色、15が暗茶色、16が灰茶色で、胎土には角閃石・斜長石を含み、16には白色粒子も認められる。鉢は18～28であるが、器形は変化に富む。基本的には口縁部が屈曲するものと、しないもので分類できる。前者は18・26・27で、18は口縁部が横撫で、刷毛目は内外面の胴部についている。また、内面には粘土の継目も観察できる。完形品の26は外面の底部から胴部にかけて篋削りであるが、ほかは横撫でである。27は手ずくね風で内面が削り状のほかは撫で仕上げである。18は赤茶色、26は明茶色、27は茶色で、いずれも胎土に角閃石・斜長石を含むが、18には白色粒子、26には白色粒子・石英も認められる。後者の典型的なものは19～21であるが、22は底部に粘土板を貼りつけており、23・24は脚がつく。また、25・28は平底である。器面は、19が全面撫で、20は内面が縦、外面が横の篋研磨で、底部は摩滅している。21は外面が刷毛目のあと撫で、底部近くは篋削りで、内面は刷毛目のあと底部は横、口縁部は縦の篋研磨である。22の外面は斜目の刷毛目のあと撫で、内面は刷毛目のあと斜目の篋磨きで仕上げている。23は刷毛目のあと撫で、24の鉢部は横、脚部は縦の篋磨きで、脚部には4ヵ所透かしが入る。完形品の25の外面には特別な器面調整は認められないが、内面は刷毛目で仕上げている。28は内面が横、外面が縦の篋研磨で、底部は撫で仕上げである。色調は明茶色を基調とするが、20～22には黒色斑が認められる。胎土にはいずれも角閃石・斜長石が含まれるが、25には白色粒子も目立つ。

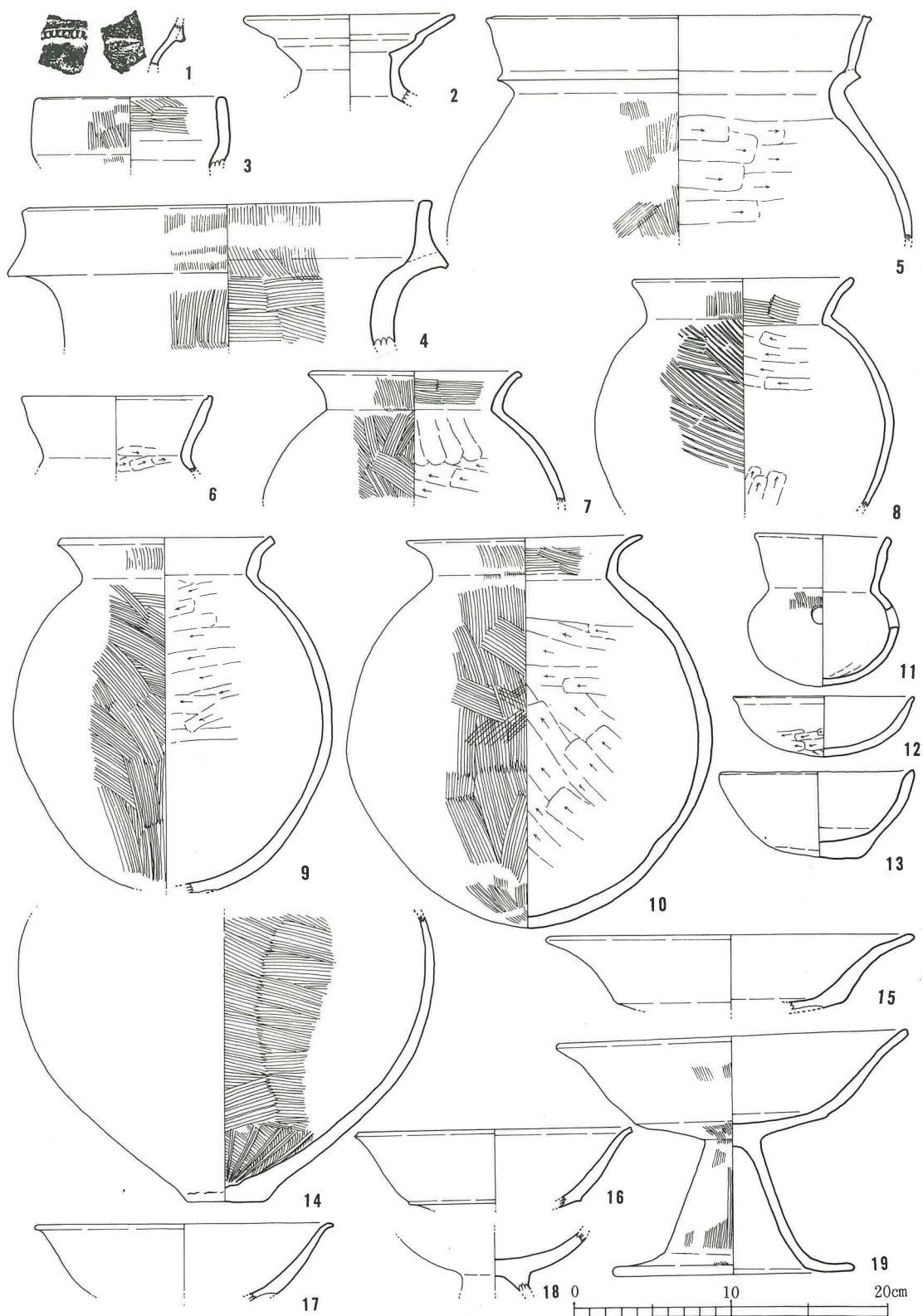
5) 19号遺構（第121図）

B-8・9区で検出した遺構で、住居跡の東北の一部は攪乱されている。遺構の規模は東西6.2m、南北6.2mの方形をなし、検出面から約40cmで床面に達する。床面には4ヵ所の柱穴のほか、東西北の壁沿いに幅約1m、高さ10cmのベット状遺構が造られている。また、南壁中央部には1.4m×1mの範囲を3段に掘り込み、底面の中央部に径20cmの扁平な礫を置いた遺構を検出した。

第122図が出土遺物であるがその出土状況は、9・10が南壁の掘り込みの上部、住居跡の検出面で出土し、11は西壁のベット状遺構の上面から出土した。それ以外の遺物は、遺構内に破片として流れ込んだ状態であった。



第121図 佐知遺跡19号遺構実測図



第122図 佐知遺跡19号遺構出土土器実測図

出土遺物（第122図）は、壺・甕・高坏・鉢がある。壺は二重口縁の1～5と単口縁の6、小型壺の11がある。1は端部に刻み目が付き撫で仕上げである。2は内外面ともに、口縁部は横撫で、頸部は横方向の篋磨きである。3は外面が縦、内面が横の刷毛目調整で、そのあと横撫でしている。4の器面調整は、外面が縦、内面は口縁部が縦、頸部は横の刷毛目で、そのあと横撫でしている。5の口縁部は内外面ともに横撫で、胴部は外面が細かい刷毛目のあと撫で、内面は篋削りである。6は胴部内面が篋削りである以外は横撫で仕上げである。完形品の11は口縁部が横撫で、胴部も撫で仕上げであるが、肩部に刷毛目、底部に削りの痕が残る。また胴部上位に径1.8cmの焼成前の穿孔がある。1・2・4～6は明茶色で、3は黄茶色、11は茶色である。胎土はいずれも角閃石・斜長石を含むほか4～6は金雲母を含む。この他14も壺と思われるが、外面は縦方向の篋研磨、内面は刷毛目調整である。灰茶色で黒色斑があり、胎土に角閃石・斜長石・金雲母を含む。

甕は7～10で、基本的な器面調整は、外面を縦方向の刷毛目、内面は口縁部が横方向の刷毛目で、胴部は篋削りである。7の胴部内面上位は指撫で、8の刷毛目は叩き状の粗いもので、胴部内面中位は縦方向の撫である。9の口縁部は刷毛目のあと強い横撫で、内面胴部下位も撫である。10の刷毛目は粗く、胴部内面上位は撫である。色調は7・8は茶色、9・10は明茶色で、胎土はいずれも角閃石・斜長石を含み、9には石英も認められる。7～9の外面にはススが付着する。

高坏は15～19の6例があるが、19は完形品に近い。器面調整は、15が口縁端部のみ横撫で、他は縦方向の篋磨きである。16・17は横撫で、18は外面が撫で、内面は横方向の篋磨きである。19の外面は縦方向の刷毛目のあと横撫で、内面は坏部が撫で、脚部は削り状の調整である。色調は明茶色が多く、胎土にはいずれも角閃石・斜長石を含む。

鉢は12・13で、12は底部外面が削りで、他は横撫である。13は横撫でのいびつな土器である。両者とも明茶色で、胎土に角閃石・斜長石を含む。

2 古墳時代後期

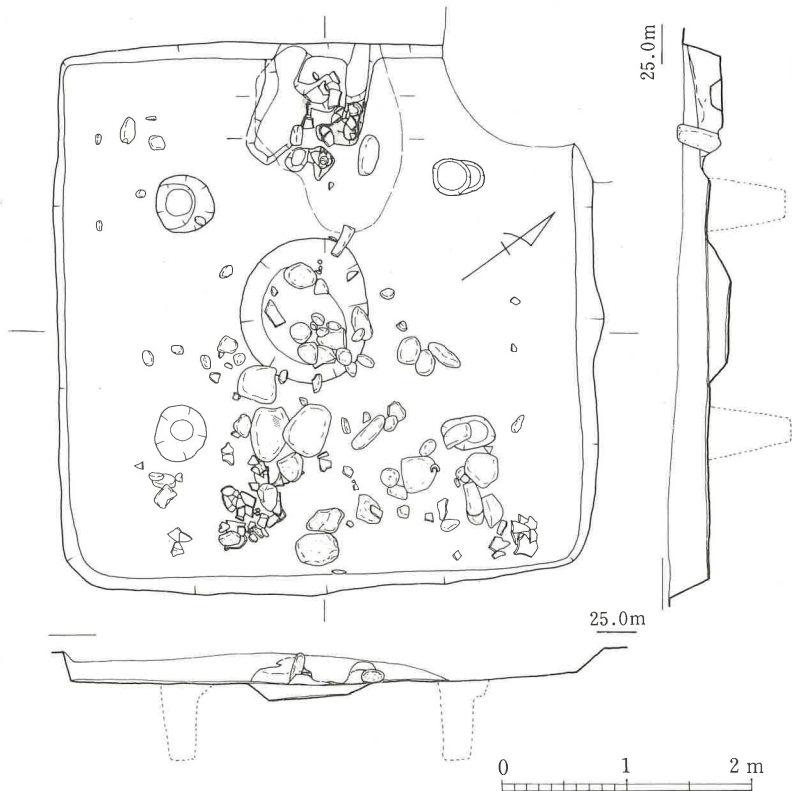
(1) 住居跡

1) 2号遺構(第123図)

調査区の北端部のB-2区で検出した東西4.1m、南北4.1mの遺構で、検出面から床面までの深さは約20cmである。住居跡内部には西壁にカマドが付けられているほか、中央部に上面径1m×1.2m、底面径0.6m×0.8mの土坑がある。また柱穴は4カ所で、深さはいずれも約50cmである。

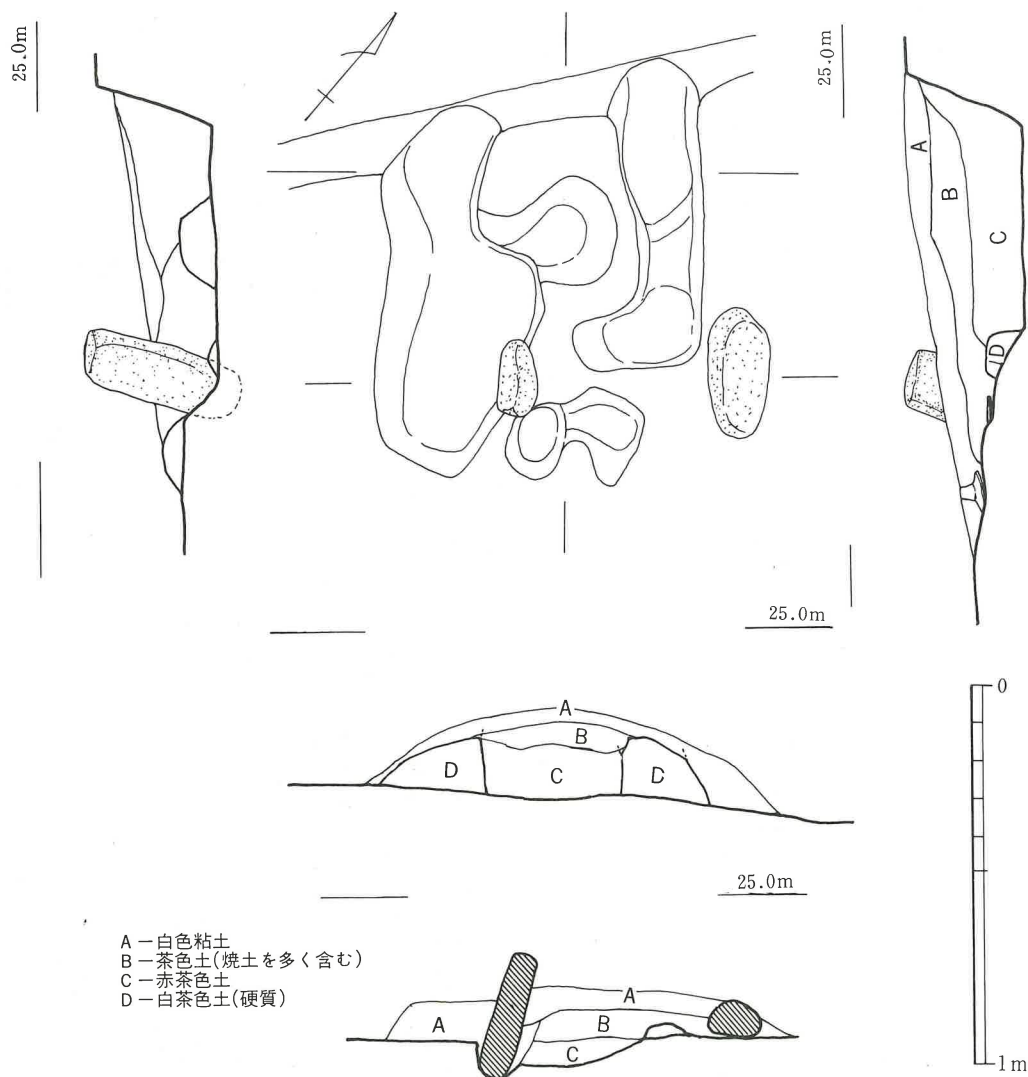
カマドは機能停止後の処理行為を行なっている。その方法は北側の袖石を倒してカマド本体を破壊し、上面に白色粘土をかぶせている。残された部分からその構造を推測すると、焚口の幅は約30cmで、そこから壁までの長さは80cmである。カマド本体は白色の硬質粘土で構築し、中央部に同じ粘土による高まりがあり、支脚にしている。焼成は焚口から中央部にかけてが激しく、煙道は検出できなかった。

遺物の出土状態は、住居跡内の南半分から検出された多量の円礫とともに第125図2～8の甕や碗が出土し、カマドを覆った白色粘土内から1の坏と9の高坏の脚が出土した。特に高坏は、焚口の外に据えられた状態であった。1は唯一の須恵器である。口径11.3cm、器高5.8cmで、外

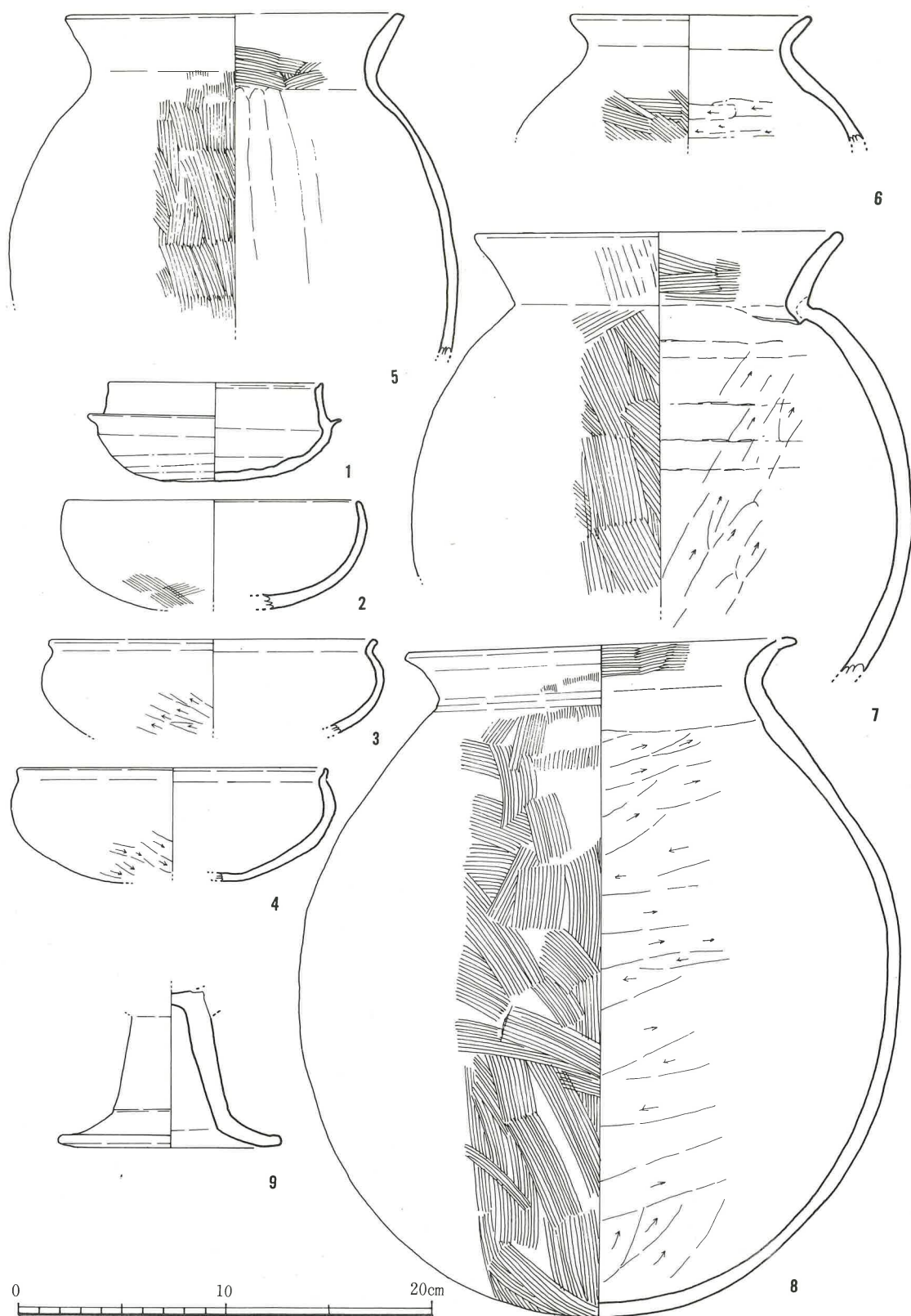


第123図 佐知遺跡2号遺構実測図

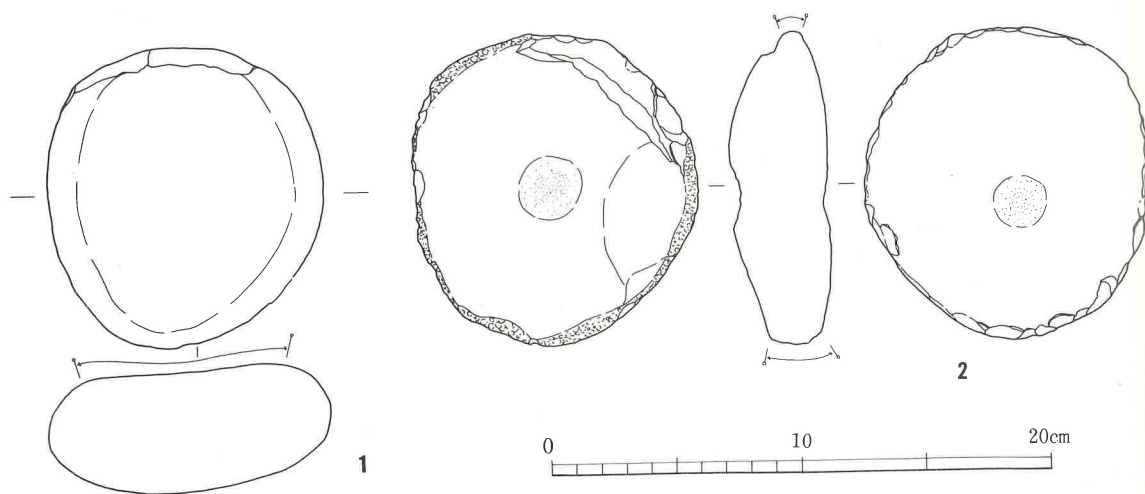
面底部は右回りの篋削りで仕上げ、胎土には石英が含まれる。2～4の碗は精製粘土を使ったもので、口縁部の形態により、2と3・4に分類できる。2は内湾する口縁部をもち、外面底部に刷毛目がある以外は横撫である。3・4は小さく外反する口縁部で、外面底部近くは篋削りで、あとは3が横撫で、4が横方向の篋削りである。いずれも赤茶色で、胎土に角閃石・斜長石を含み、3には細かい石英もみられる。5～8は甕で、器面調整はいずれも胴部内面以外は刷毛目である。5は口縁部は刷毛目のあと横撫で、胴部内面は縦撫である。6の口縁部は横方向の篋研磨で、胴部内面は横方向の篋削りである。7の口縁部は刷毛目のあと横撫で、胴部内面は粘土の積み跡を撫で、さらに篋削りしている。8は口縁部が刷毛目のあと横撫で、胴部内面は方向性のない篋削りである。4点とも外面にススが附着している。色調は6が赤茶色、5・7は灰茶色、8は黄茶色で、胎土にはいずれも角閃石・斜長石を含み、6には金雲母・



第124図 佐知遺跡2号遺構カマド実測図



第125図 佐知遺跡2号遺構出土土器実測図



第126図 佐知遺跡2号遺構出土石器実測図

石英も認められる。9は脚の屈曲部下位は横撫でで、上部内面は削り状、外面は縦方向篋研磨で器面調整している。暗茶色で角閃石・斜長石を含む。

石器は第126図の2点のみである。1は安山岩の円礫を利用した磨石で、1面のみ使っている。2も安山岩製で、周辺を敲打して円形に仕上げ、両面の中央部にくぼみがある。

2) 11号遺構（第127図）

B-6区で検出した東西4.1m、南北4.2mの方形遺構で、検出面から約15cmで床面に達する。住居内には、北壁中央にカマドが付けられ、4ヵ所にある深さ約60cmの柱穴に囲まれた中央部には上面径1m、深さ15cm、底面径0.9mの土坑が検出された。

カマドは、他の古墳時代後期の住居跡とは異なり、機能停止後の処理行為を行っていないかった。このため、遺構・遺物の遺存状態がよく、注目すべき事実が明らかになった。カマドの大きさは白色の硬質粘土で幅80cm、長さ80cm、高さ30～40cmに構築されていたと考えられ、焚口の幅は約40cmで、外には放射状に2本の薪と思われる炭化木材が残っていた。検出状況はこのカマドが西方向にずれながらつぶれた状態で、上面の一部はカマドの赤く変色した表面が残っている。

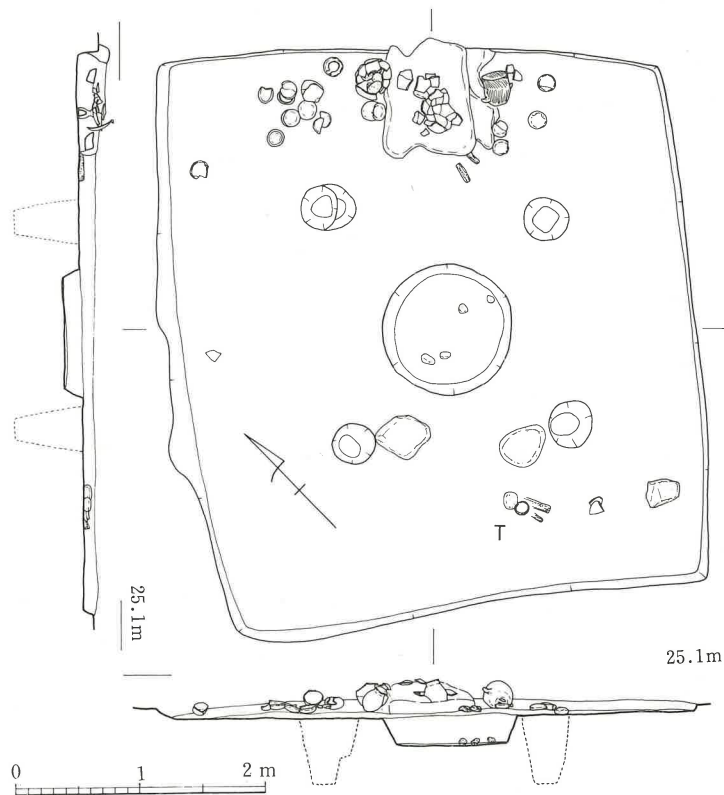
遺物は第128図のようにカマドを中心に出土した。この部分で出土した遺物は第131図の3～12・14・16・18の椀、19の支脚、第132図の2・4・5の甕、第133図の2・3の甗である。この中で注目されるのは第131図19、第132図2・5の出土状態である。第132図の2の甕は、カマドの西側で検出され、中からは第129図のように7個の拳大の礫が出土した。また第131図の19と第132図の5はカマドからの出土であった。すなわち、19は第130図に見るように、カマド内部のほぼ中央に支脚として置かれ、5はその上部にセットした状態であった。ちょうど、カマドに支脚を利用して甕をかけている状況である。また、第131図の7・8は重なって出土した。

この他、第131図2の完形品の須恵器の坏は住居跡の南壁寄りからの出土である。

次に遺物の観察であるが、第131図1は須恵器の坏蓋の小破片である。口径は13cmで、口縁部は直立し、端部はくぼむ。2は口径9.8cm、器高4.3cmの完形品で、直立する口縁部の端部はくぼんでいる。1・2とも身受け、蓋受けよりやや下位から右回りの篋削りで、他は横撫である。2の胎土に石英が含まれる。

椀はカマド周辺から出土した12点のほぼ完形品をはじめ、破片を図化した3点を加え15点を図示した。3～17がそれであるが、口縁部の形態で外反する3～13と内湾する14～16に2分類できる。器面調整は、大部分が口縁部の内外面から内面にかけては横撫で、外面の口縁部以下は篋削りである。3～5・8・10は削りのあと撫で、12の外面は磨滅、14は篋磨きしている。胎土は精選した粘土を使っているが、金雲母と石英が目立つ。色調は赤茶色を基調とし、3には黒色斑がある。なお、6の底部には一、7の底部には×のヘラ記号がある。また、以上とタイプの異なる17は内外面横撫でのあと、外面は粗い篋磨きで、胎土には角閃石・斜長石を含む。色調は暗茶色である。

18の鉢はカマドの西側の壁沿いで出土したものである。口縁部は割れ口を二次加工し成形している。外面は磨滅しており、上位にはススが付着している。内面は撫で仕上げであるが、上



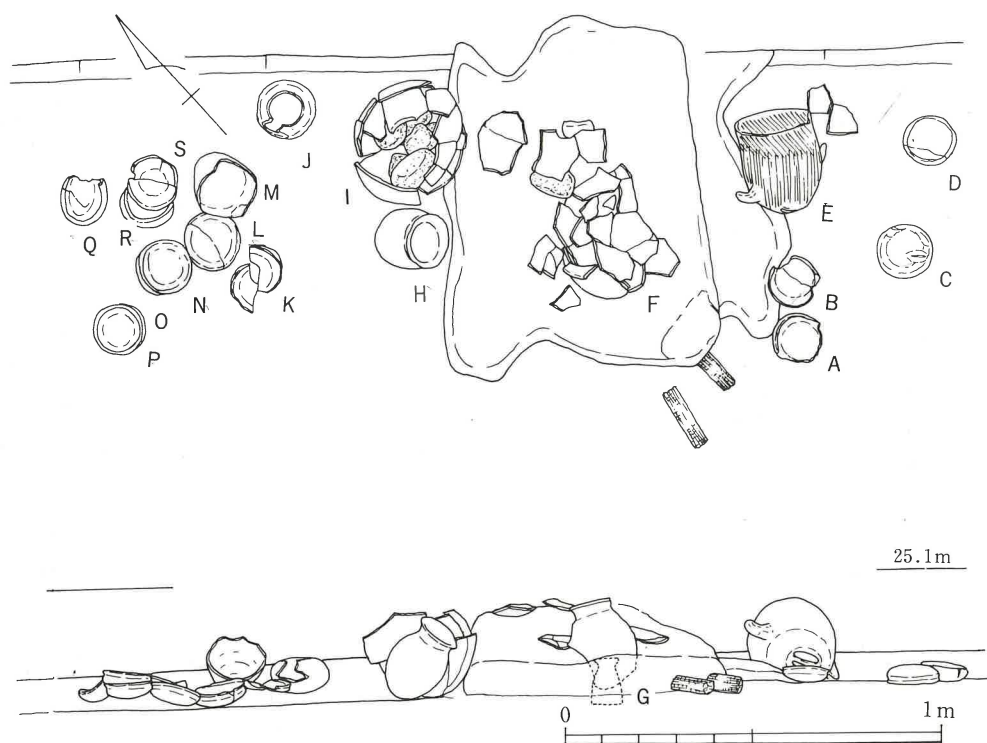
第127図 佐知遺跡11号遺構実測図

位に粘土の積みあとがある。胎土には角閃石・斜長石のほか石英を多く含む。

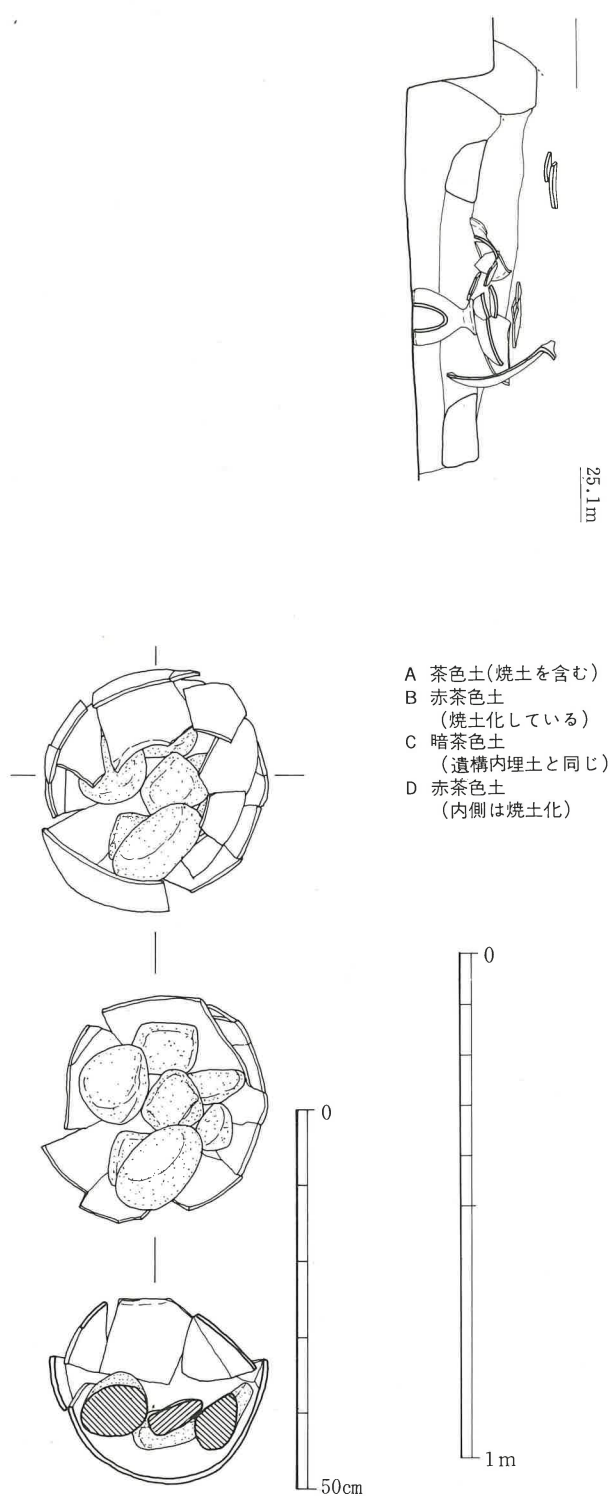
19の支脚はカマド内からの出土で、成形は手ずくね状で、全面撫で仕上げである。薄茶色で、角閃石・斜長石を含む。

甕は第132図2・4がカマドの西側、5がカマドの上位からの出土で、いずれも完形品かそれに近い。1・3・第133図1は破片である。いずれも口縁部内面は横方向、外面は口縁部から底部まで縦方向の刷毛目で、さらに口縁部は横撫でしている。胴部内面はへう削りによる器面調整である。5は胴部も丁寧に撫でており、内面も胴部中位が篋削りの他、上位は縦撫で、底部は強い指撫でで仕上げている。また第133図1の外面は横撫でで刷毛目は認められない。いずれも胎土に角閃石・斜長石を含み、色調は2～4が暗茶色、1・5は明茶色である。5の外面にススが付着する。

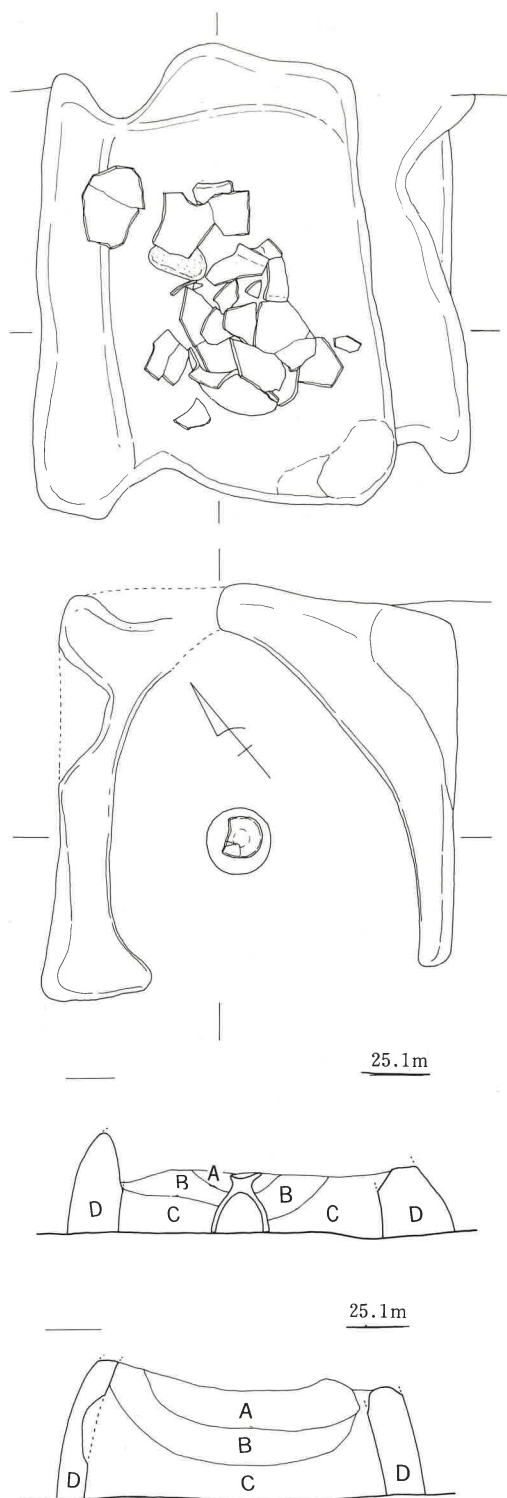
甗は第133図2・3の2点が出土している。いずれもカマドの周辺からの出土で完形品である。2はカマドの西側からの出土で、外面は粗い刷毛目のあと撫で、内面は縦方向の削り状である。3はカマドの東側に置かれた状態で出土した。外面と内面の口縁部は刷毛目調整で、それ以外は縦方向の篋削りである。2点とも外面にススが付着し、胎土には角閃石と斜長石を含む。



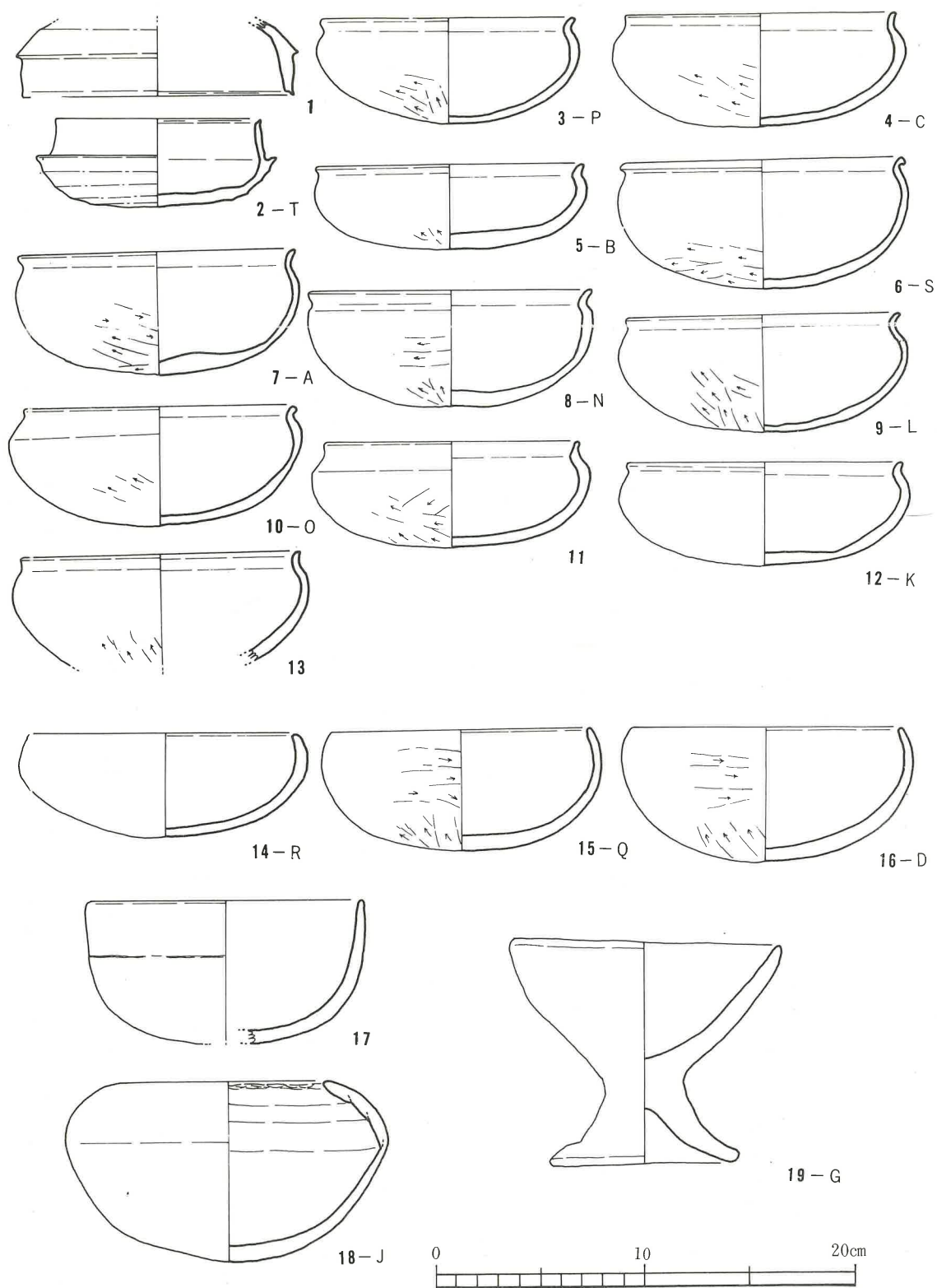
第128図 佐知遺跡11号遺構カマド周辺遺物出土状態実測図



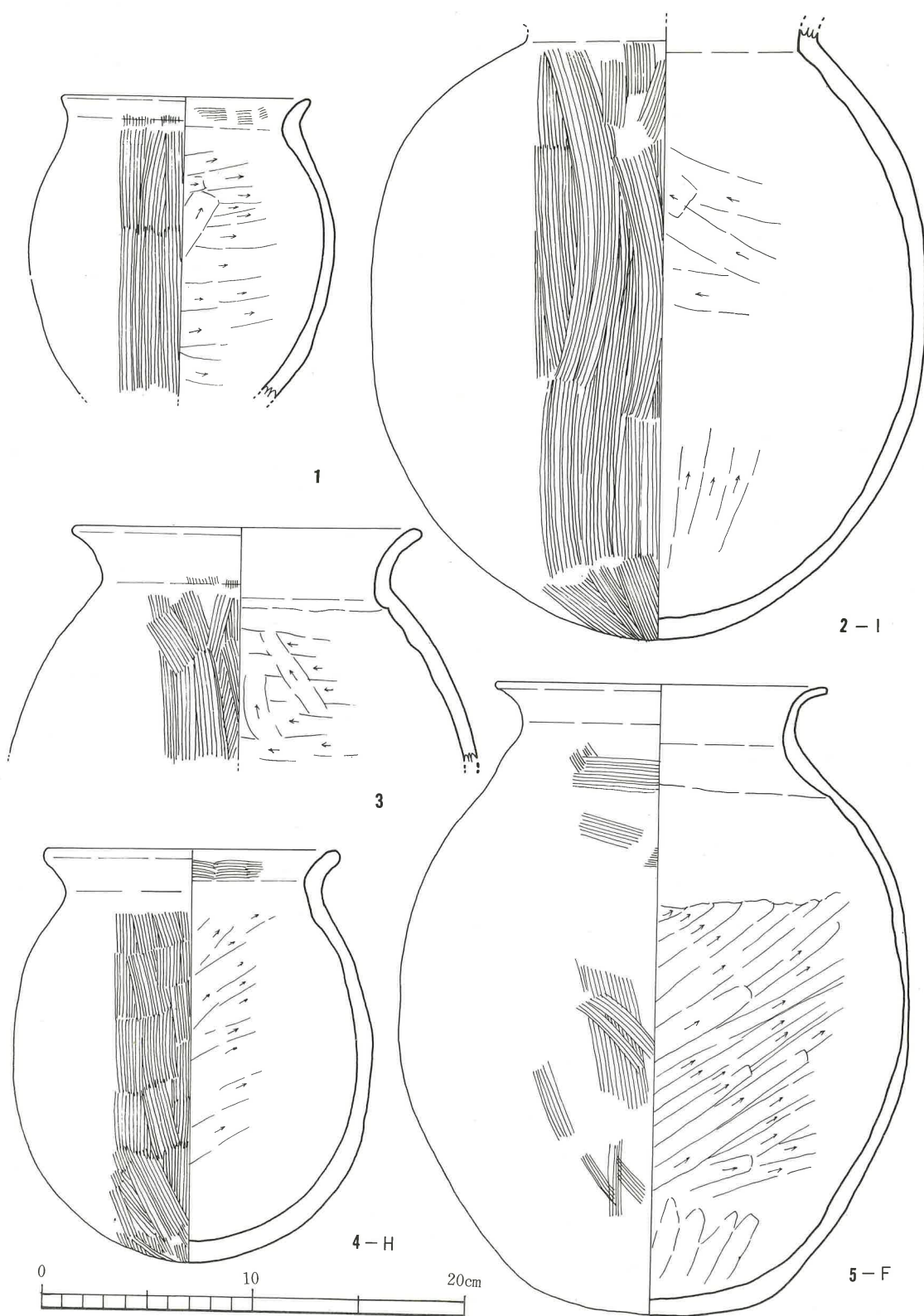
第129図 佐知遺跡11号遺構甕形土器
内礫出土状態実測図



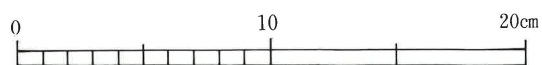
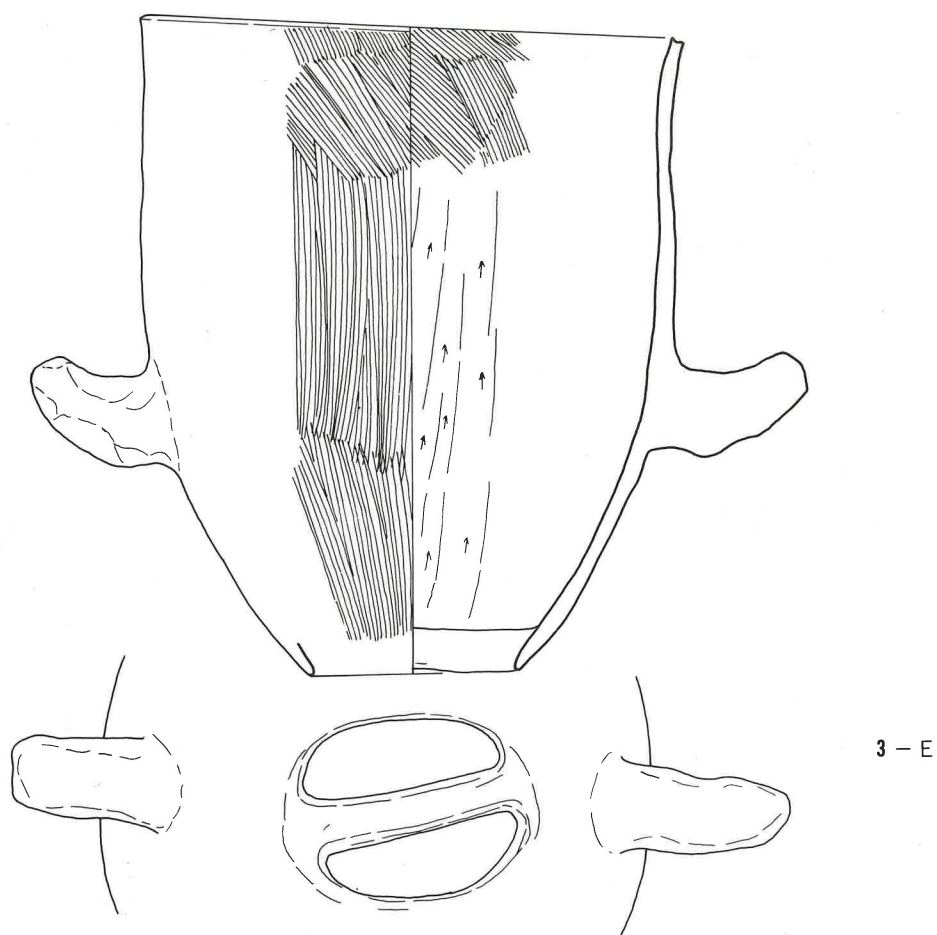
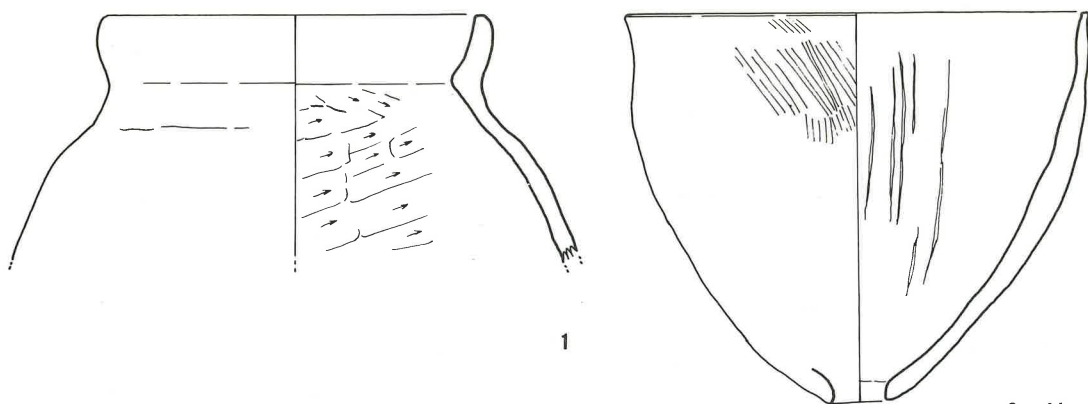
第130図 佐知遺跡11号遺構カマド実測図



第131図 佐知遺跡11号遺構出土土器実測図(1)



第132図 佐知遺跡11号遺構出土土器実測図(2)



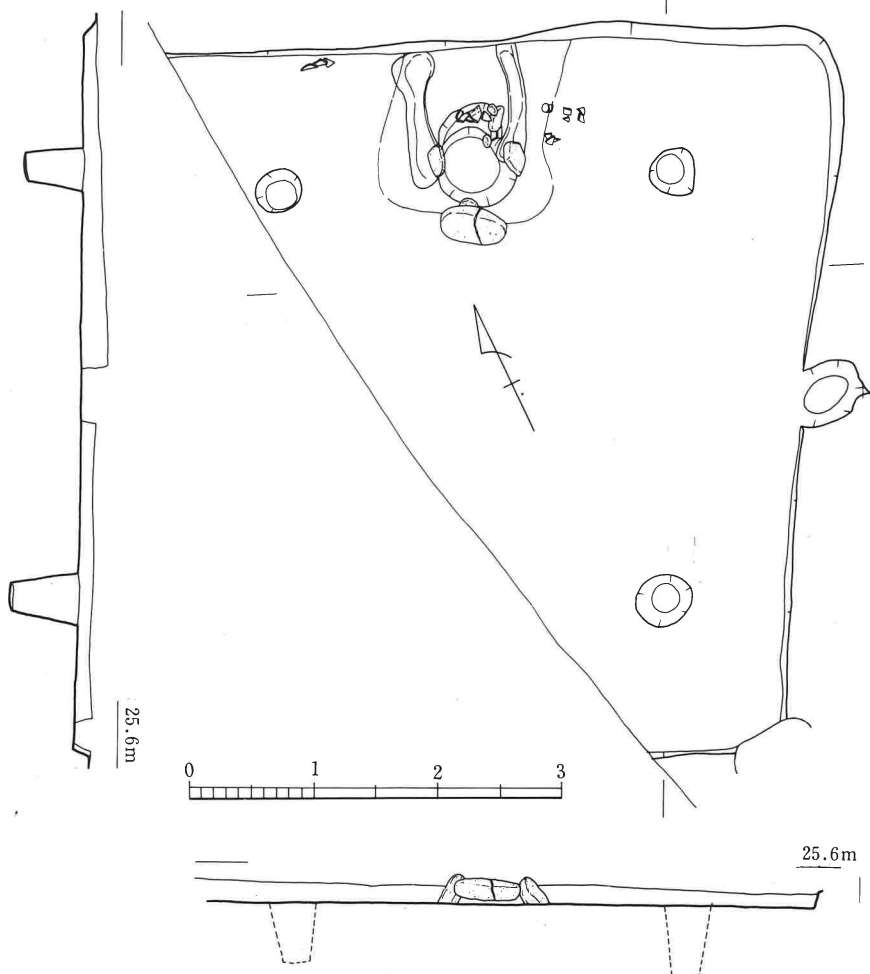
第133図 佐知遺跡11号遺構出土土器実測図(3)

3) 20号遺構 (第134図)

A-9区で検出した遺構で、西壁を含め約3分の1が調査対象地外になる。調査した部分から全体の規模を推測すると、南北5.8m、東西約6mで検出面から約15cmで床面に達する。住居跡内には北壁の中央部にカマドがあり、柱穴は3ヵ所を検出し、深さは約50cmであった。

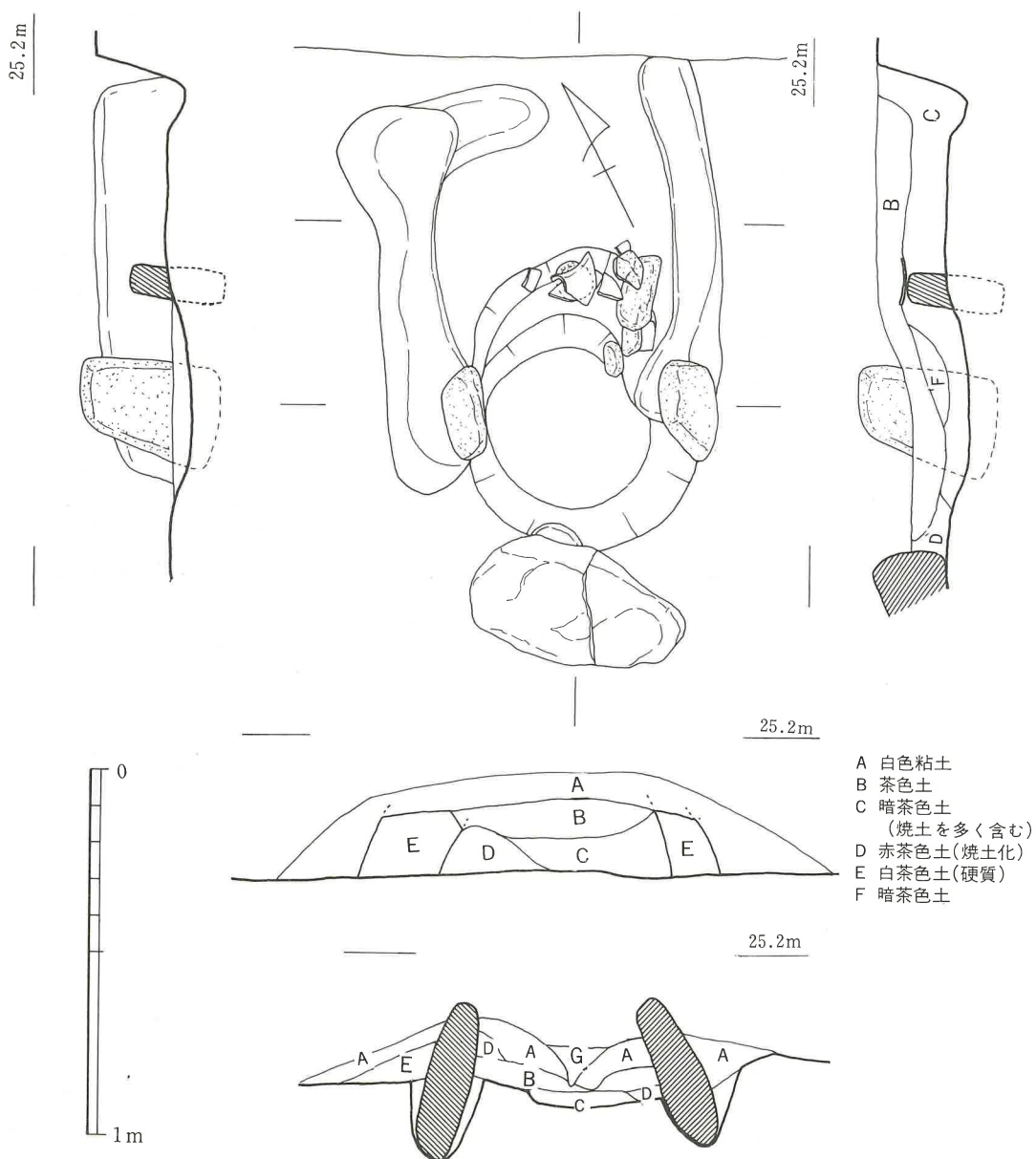
カマドは機能停止後の処理行為をしており、白色の粘土で覆われていた。残された部分からその構造を復元すると、焚口には2個の柱状の石を立て、その上に長い大きな石を乗せ、50cm×25cmの空間をつくっている。また、焚口の床面は径60cm、深さ5cmのくぼみを設けている。カマド本体は白色粘土で構築されており、焚口部から壁までは1.1m、幅1mの規模である。またカマド中央部には径10cm、長さ26cmの棒状の花崗岩を立て、支脚としている。

出土遺物は第136図に図示したが、1～3の須恵器はカマドの東側の埋土内からの出土で、4はカマドの白色粘土に覆われた中から出土したものである。1は口径15cm、器高4cmで、2は口径13.3cm、高さ3.8cmである。3は口径13.3cm、器高4cmである。いずれも底部を左回りの範

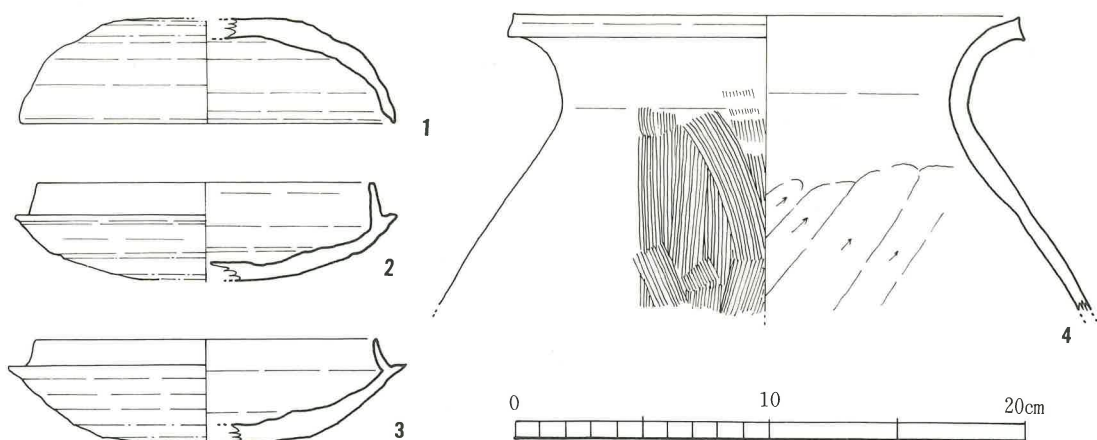


第134図 佐知遺跡20号遺構実測図

削りの他は、横撫でで仕上げている。胎土は1に角閃石、2に石英、3に斜長石が目立つ。4の口縁部は内外面横撫で、胴部外面は刷毛目、内面は篋削りである。明茶色で胎土に金雲母・斜長石を含む。



第135図 佐知遺跡20号遺構カマド実測図



第136図 佐知遺跡20号遺構出土土器実測図

4) 21号遺構 (第137図)

A・B-10区で検出した遺構で、縄文時代のJ-3遺構、弥生時代の22号遺構を切っている。しかし、この遺構は掘り込みが浅く、平面形の確認が困難であった。確認できた規模は、東西6.4m、南北7.5mで床面までの深さは数cmである。住居跡内の北壁中央にはカマドが付けられており、柱穴は4ヵ所で確認され、深さは60～80cmである。

カマドは白色粘土で広く覆われており、機能停止後の処理行為を行なっている。残された部分から構造を推測すると、「コ」の字形に白色粘土を回し、焚口部の内側に2ヵ所、径約10cm、深さ30cmの小土坑があり、両者の中心からの間隔は25cmである。この小土坑は焚口の構造にかかわるものと考えられる。焚口から壁までの長さは80cmで幅は70cmである。カマド機能停止後の処理行為は、第140図2の甑を埋め込んで、白色粘土を貼っている。

遺物のほとんどは、流れ込みによるものであるが、第139図2・3・5の椀と第142図の銅鈴は床面に密着した状態で出土した。

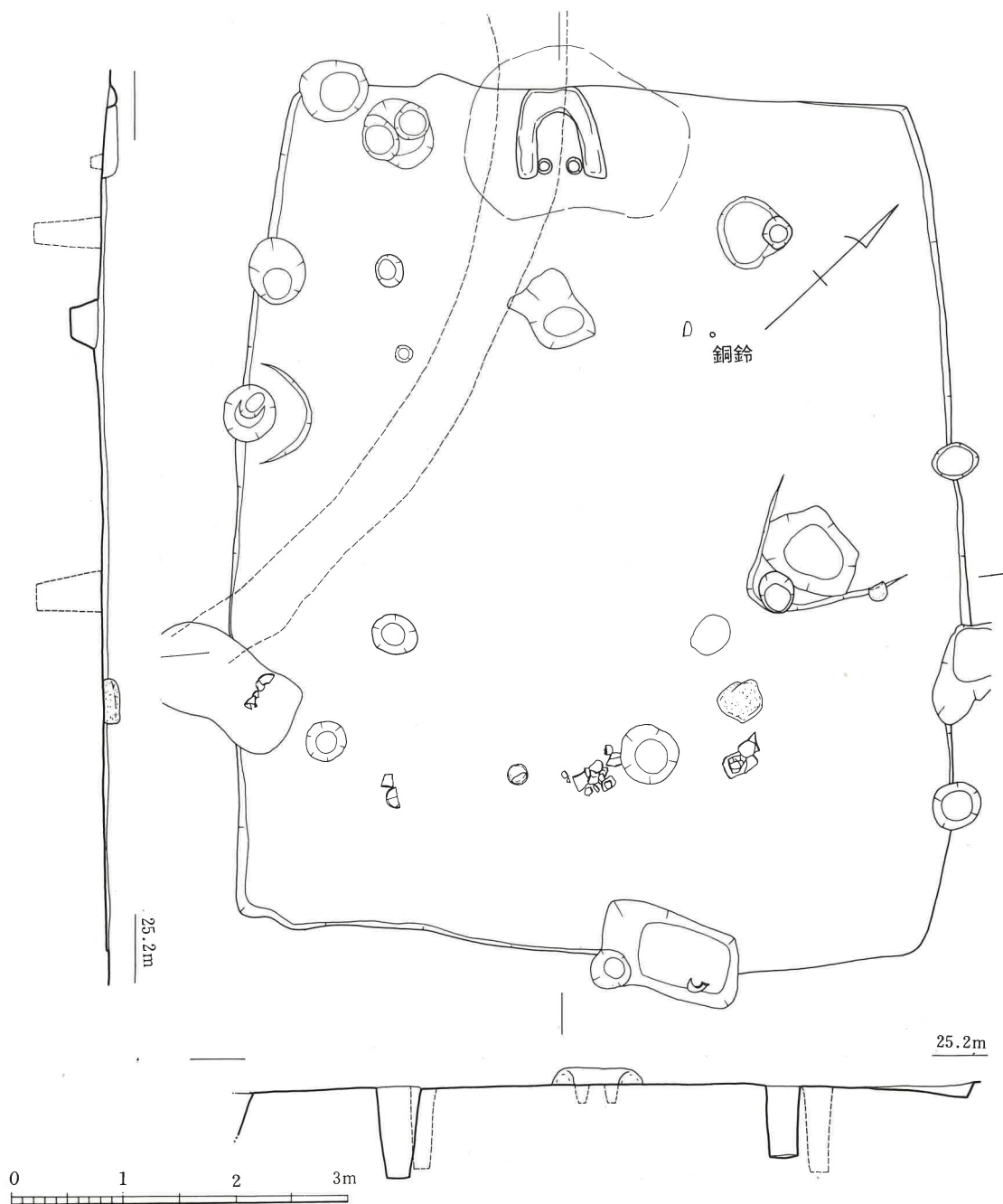
図示資料は第139～142図で、第139図の1は須恵器の坏蓋である。口径12.5cmで頂部の削りは左回転である。

2～8の椀は、口縁部が外反するタイプと内湾するタイプがある。これらの椀の器面調整は、外面下位が篋削りで、他の部分は横撫でである。3の外面は削りのあと横方向の篋磨きで、4は横撫でである。8は他と異なり身が深い。外面は刷毛目のあと篋削りで、内面は篋削りのあと、篋磨きで仕上げている。胎土には角閃石・斜長石が含まれる他、3には石英、6には金雲母・石英も認められる。色調は赤茶色を呈するものが多い。

9～11は壺の口縁部である。9の外面は縦方向の刷毛目のあと同じ方向の篋磨きで、内面は横撫でである。10の外面は縦方向の篋研磨で、口縁部から内面は横撫でである。11の外面は縦方向の篋削りのあと篋磨きで、口縁部から内面は横撫でである。色調は9が明茶色、10が赤茶色、11が黄茶色で、胎土はいずれも角閃石・斜長石を含む。

12の高坏は脚部であるが、外面は縦、内面は横方向の篋削りである。白茶色で角閃石・斜長石を含む。

甕は第139図13・第140図1の2点がある。前者は住居跡の南部でまとまって出土したもので、器面調整は口縁部内面から外面が刷毛目で、内面は篋削りである。後者は口縁部外面から内面は横撫で、外面は刷毛目で仕上げている。両者とも胎土に角閃石・斜長石を含む。

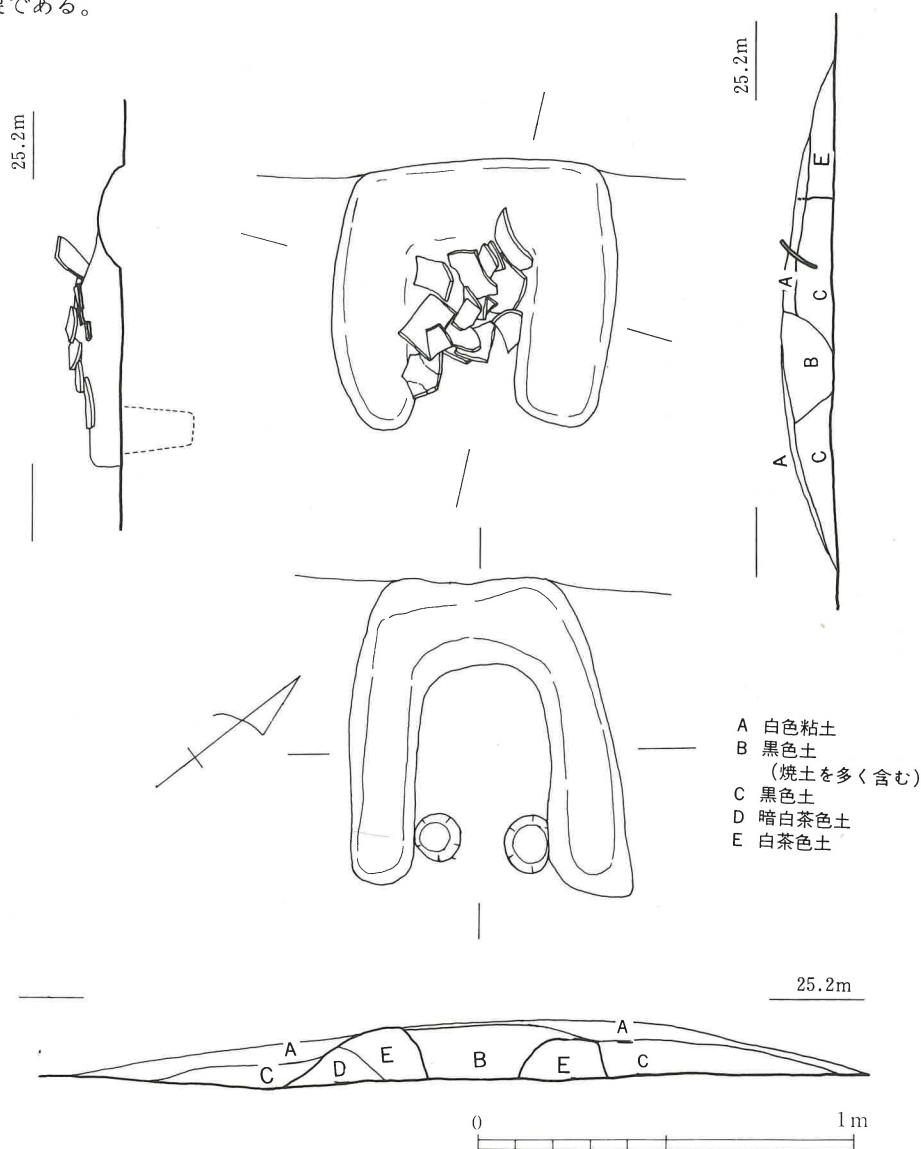


第137図 佐知遺跡21号遺構実測図

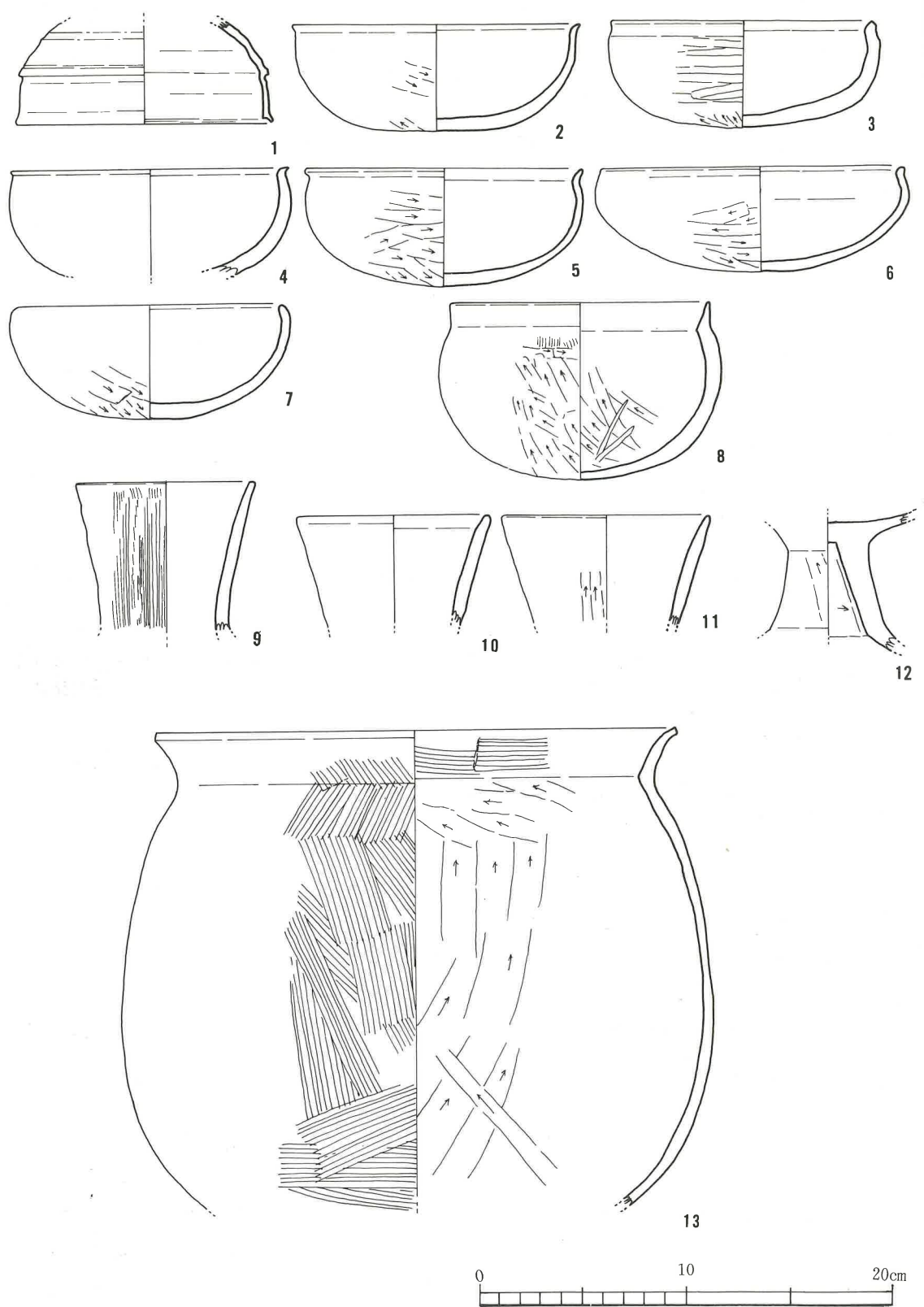
第140図 2・3はカマドの内部に埋め込まれた状態で出土したものである。器面調整は外面が刷毛目、内面が篋削りのあと撫でて仕上げており、茶色で胎土に角閃石・斜長石・石英を含む。

石器は縄文時代の遺物も多く出土しているため、住居跡に伴うものとは言えないが、第141図の敲打器が出土している。安山岩製で、長さ14.3cm、厚さ3.7cmで、稜線を潰し棒状にしている。重さは436gで使用痕は両端部に明確である。

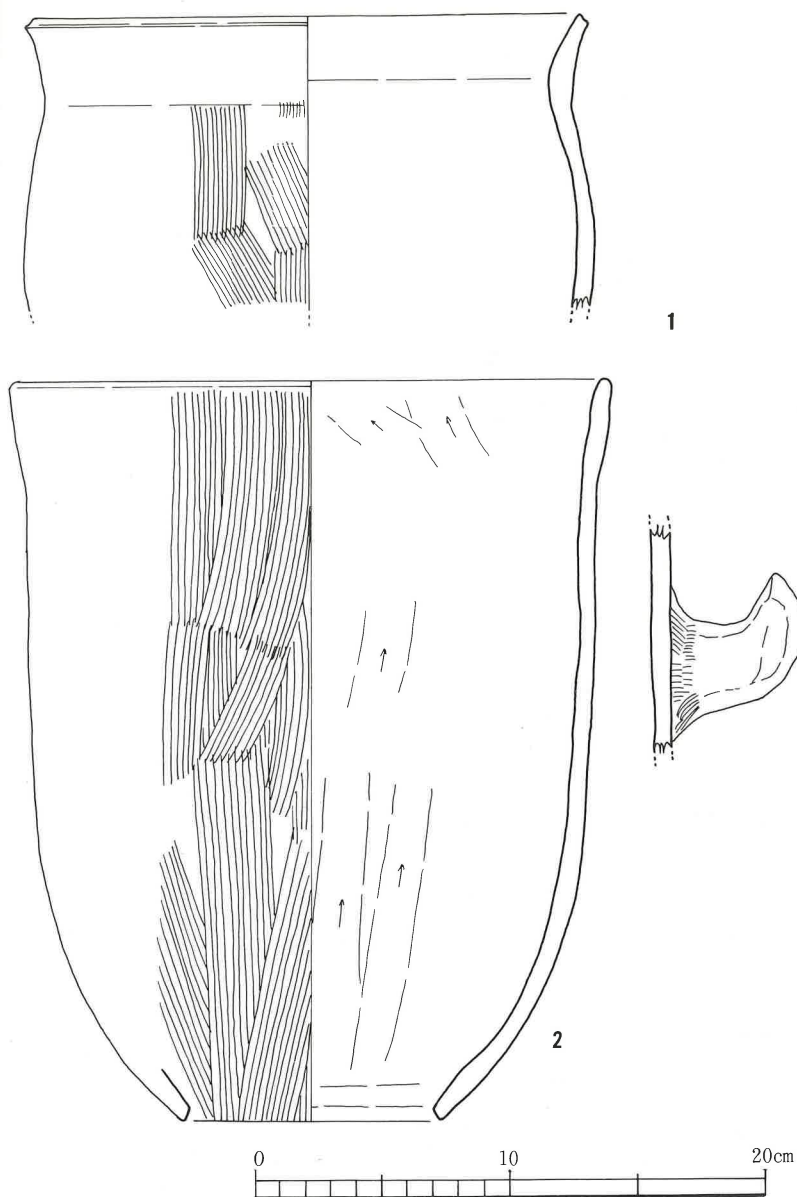
第142図に図示した銅鈴は住居跡の東北部からの出土で、径2.7cmで中央部に一条の沈線がめぐる。釣り下げ部の幅は6mm、穿孔の径は2.2mmであるが上部は欠けている。内部の玉は径7.5mmの鉄製である。



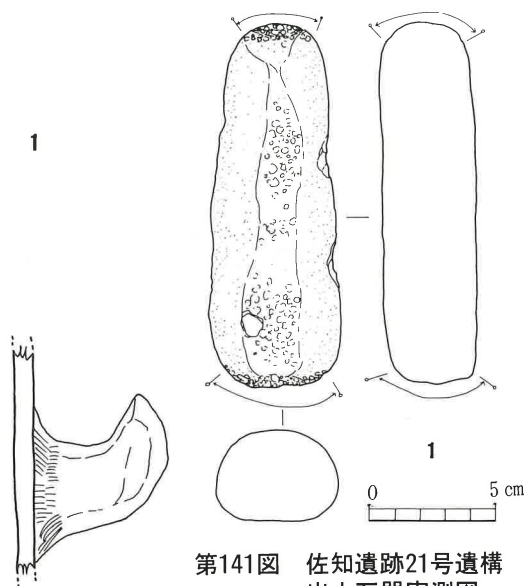
第138図 佐知遺跡21号遺構カマド実測図



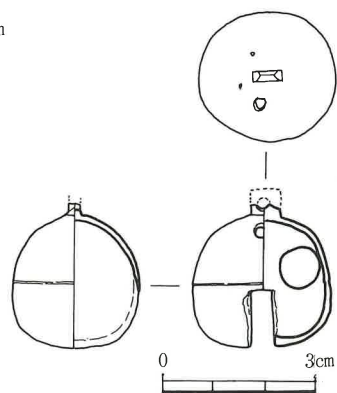
第139図 佐知遺跡21号遺構出土土器実測図(1)



第140図 佐知遺跡21号遺構出土土器実測図(2)



第141図 佐知遺跡21号遺構出土土器実測図

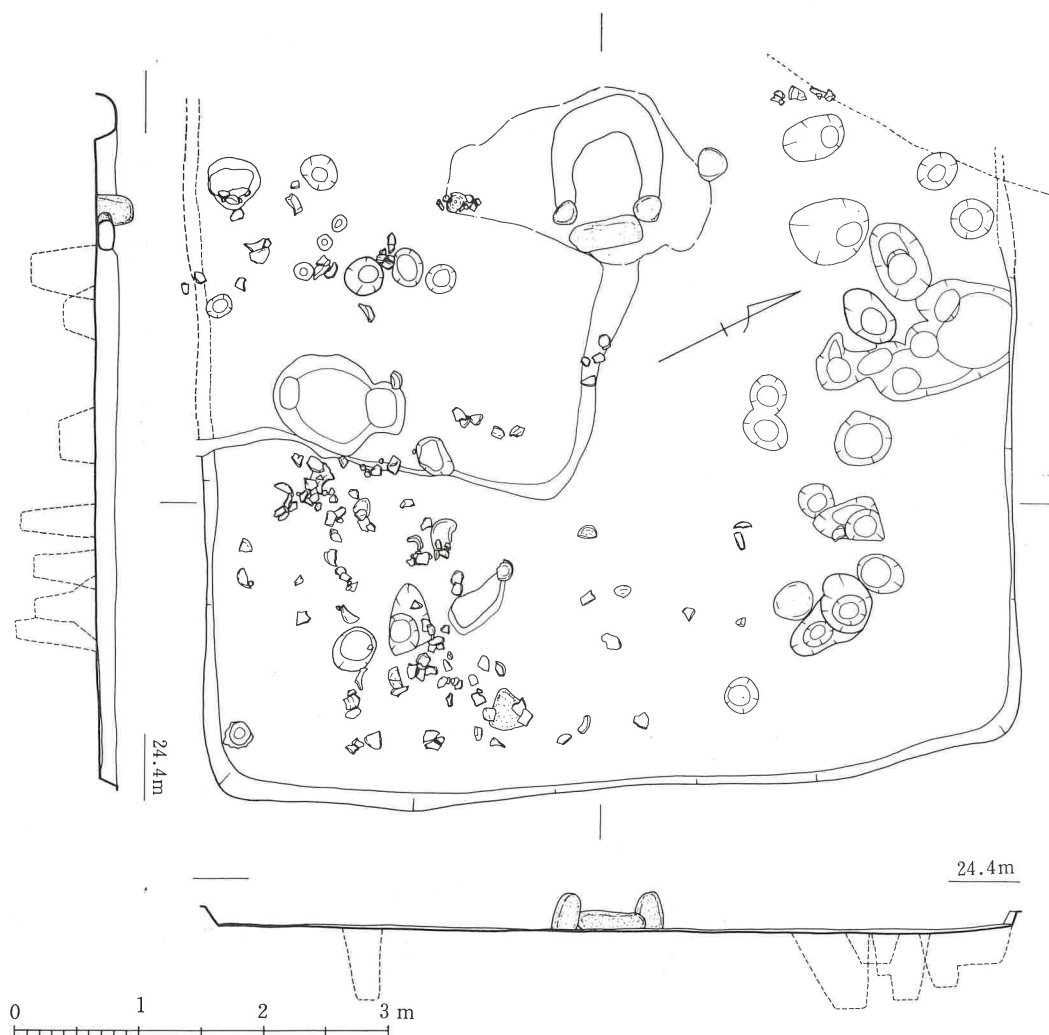


第142図 佐知遺跡21号遺構出土銅鈴実測図

5) 27号遺構 (第143図)

A-11区で検出した遺構で、弥生時代の遺構と複雑に切りあう。このため西壁を検出することができなかった。しかし西壁に付けられたと考えられるカマドが検出されたため、住居跡の規模の推測ができる。それによると東西約5.4m、南北6.3mの方形で、床面では4ヵ所で深さ約60cmの柱穴を検出した。

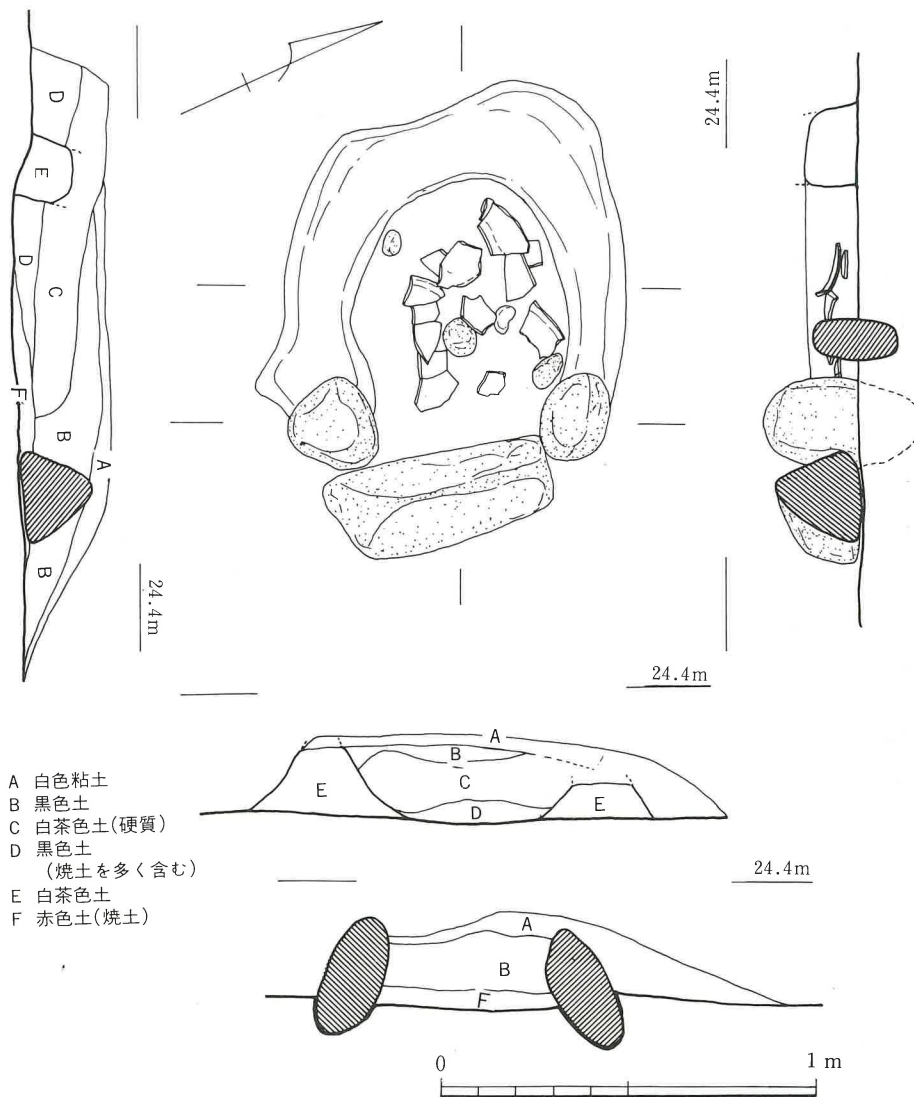
カマドは上面に白色の粘土を貼っており機能停止後の処理を行なっている。その方法は、焚口上部の石を外し、カマドの中に第147図2の甕を埋め込み、本体を破壊し、その上に白色の粘土を貼っている。残された部分からカマドの構造を想定すると、焚口の両脇に棒状の石を約50cmの間隔で立て、その上に長さ60cmの大きな棒状の石を置いて、50×25cmの空間をつくっている。本体は白色の粘土で構築し、その大きさは長さ1m、幅0.9mである。



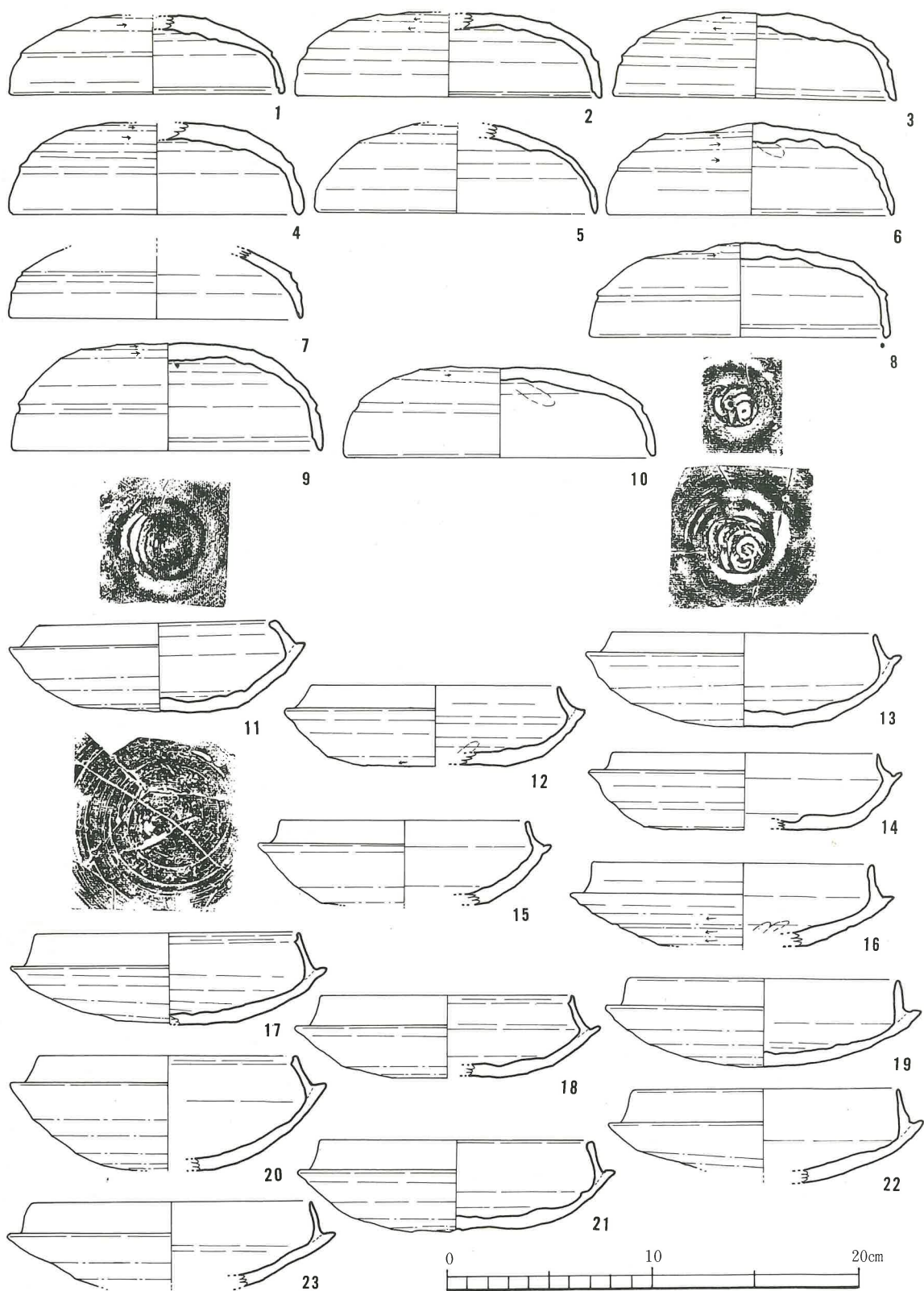
第143図 佐知遺跡27号遺構実測図

遺物はカマド内のほか、住居跡南東部を中心に多量の焼土と伴に須恵器や土師器の大きな破片が埋め込まれるように多く出土した。

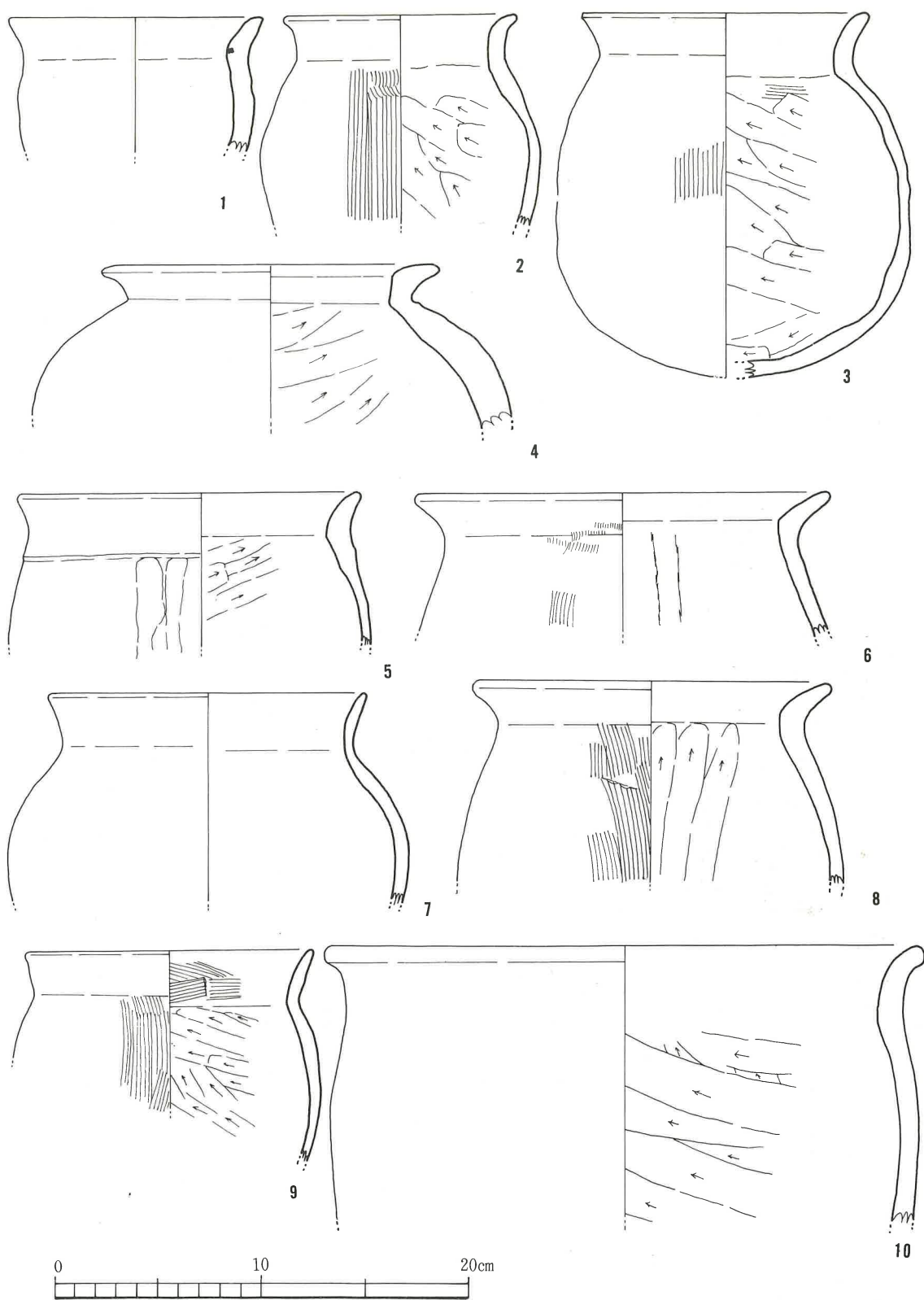
図示した遺物は第145～147図の土器と第148図の石器である。第145図は須恵器の蓋坏で、1～10の蓋の口径は最小で1の13.2cm、最大は9・10の15cmで、大部分は14cm前後である。器高は最小が1・3の4cm、最高が9の5.1cmである。4・5・7・10以外の口縁部の内側には小さな段がつく。器面は天井部が篋削りのほかは撫で、6と10の内面には不定方向の撫でがあり、8・9の内面には同心円叩きの痕がある。1～4・6・9の胎土には石英が目立つ。11～23の坏身は底部が左回転の篋削りで他の部分は撫で仕上げである。この他目立つ器面調整は12・16の内面に不定方向の撫でがあり、13の内面には同心円叩きの痕がある。また11の底部にはへラ



第144図 佐知遺跡27号遺構カマド実測図



第145図 佐知遺跡27号遺構出土土器実測図(1)



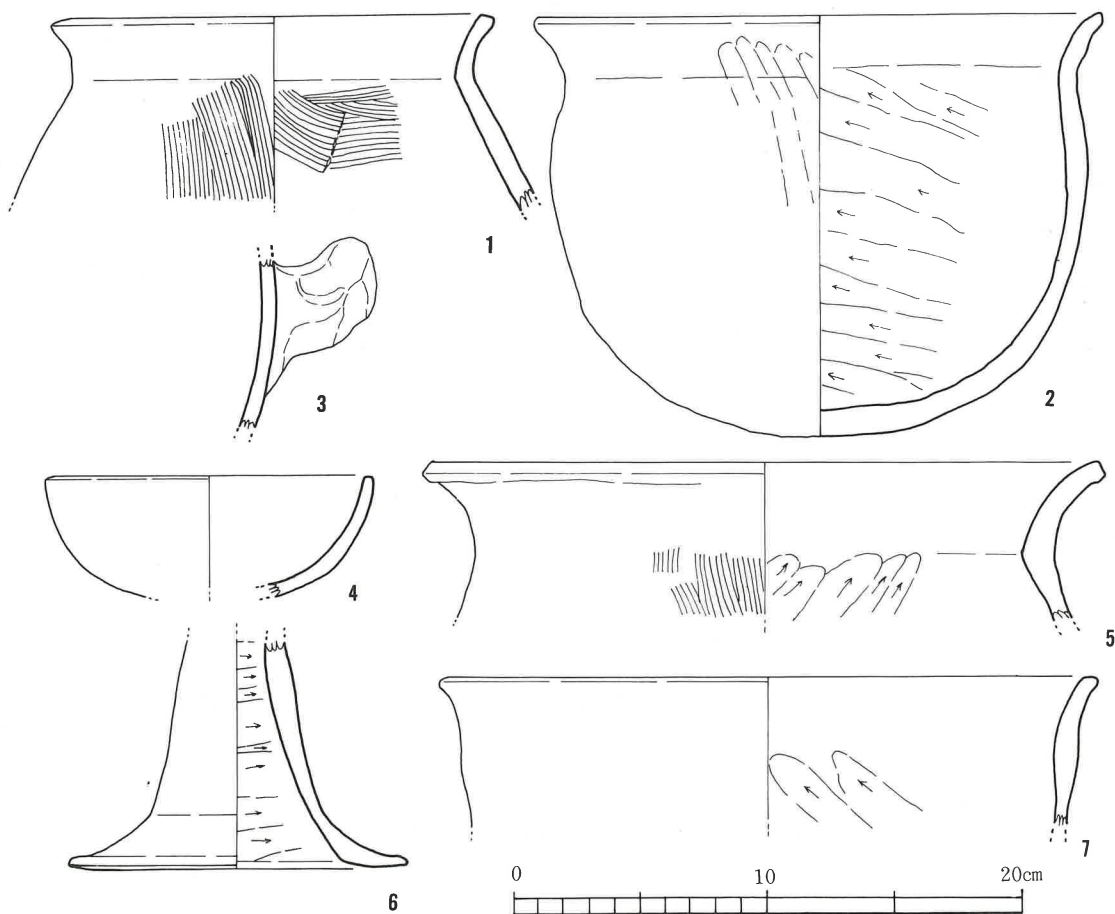
第146図 佐知遺跡27号遺構出土土器実測図(2)

記号も認められる。胎土は11・13に石英が含まれる。

甕は第146図と第147図の1・2・5・7を図示したが、第146図の1・7は内外面撫で、第146図の2・3・8・第147図5の口縁部は横撫で、胴部の外面は刷毛目、内面は篋削りである。第146図の4・5・10・第147図2・7の口縁部は横撫で、胴部の外面は縦撫で、内面は篋削りである。第146図6の口縁部から外面は刷毛目のあと撫で、内面は撫で仕上げである。また、第146図9の外面は口縁部が横撫で、胴部が刷毛目で、内面は口縁部が刷毛目、胴部は篋削りである。第147図1の口縁部は横撫で、胴部は内外面とも刷毛目調整である。胎土はいずれも角閃石・斜長石を含む他、第146図の2・3・10・第147図の5には石英も認められる。色調は熱を受けているためか、赤茶色が多く、器面の剥落したものが目立つ。

第147図の3は甗の把手である。内面は縦方向の篋削りのあと、同じ方向の篋研磨である。茶色で胎土に角閃石・斜長石を含む。

第147図4の椀は全面横撫で、胴部内外面は粗い縦方向の篋磨きである。茶色で角閃石・斜

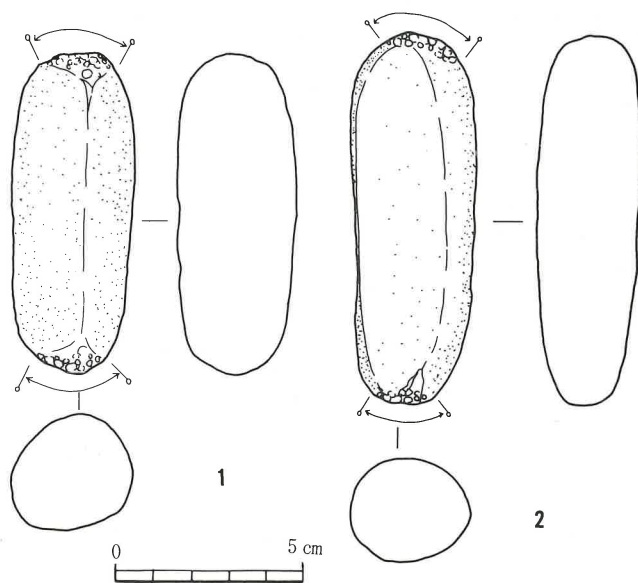


第147図 佐知遺跡27号遺構出土土器実測図(3)

長石を含む。

第147図の6は高坏の脚で外面は撫で、内面は削りである。明茶色で、胎土に石英が多く含まれ、内面に目立つ。

石器は第148図の2点の安山岩製の敲打器がある。1は長さ8.5cm、厚さ3cm、重さ112gで、2は長さ9.7cm、厚さ2.6cm、重さ130gである。2点とも棒状の自然礫を利用し、両端部に使用痕が認められる。



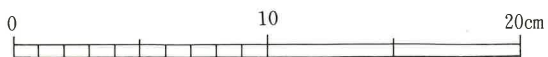
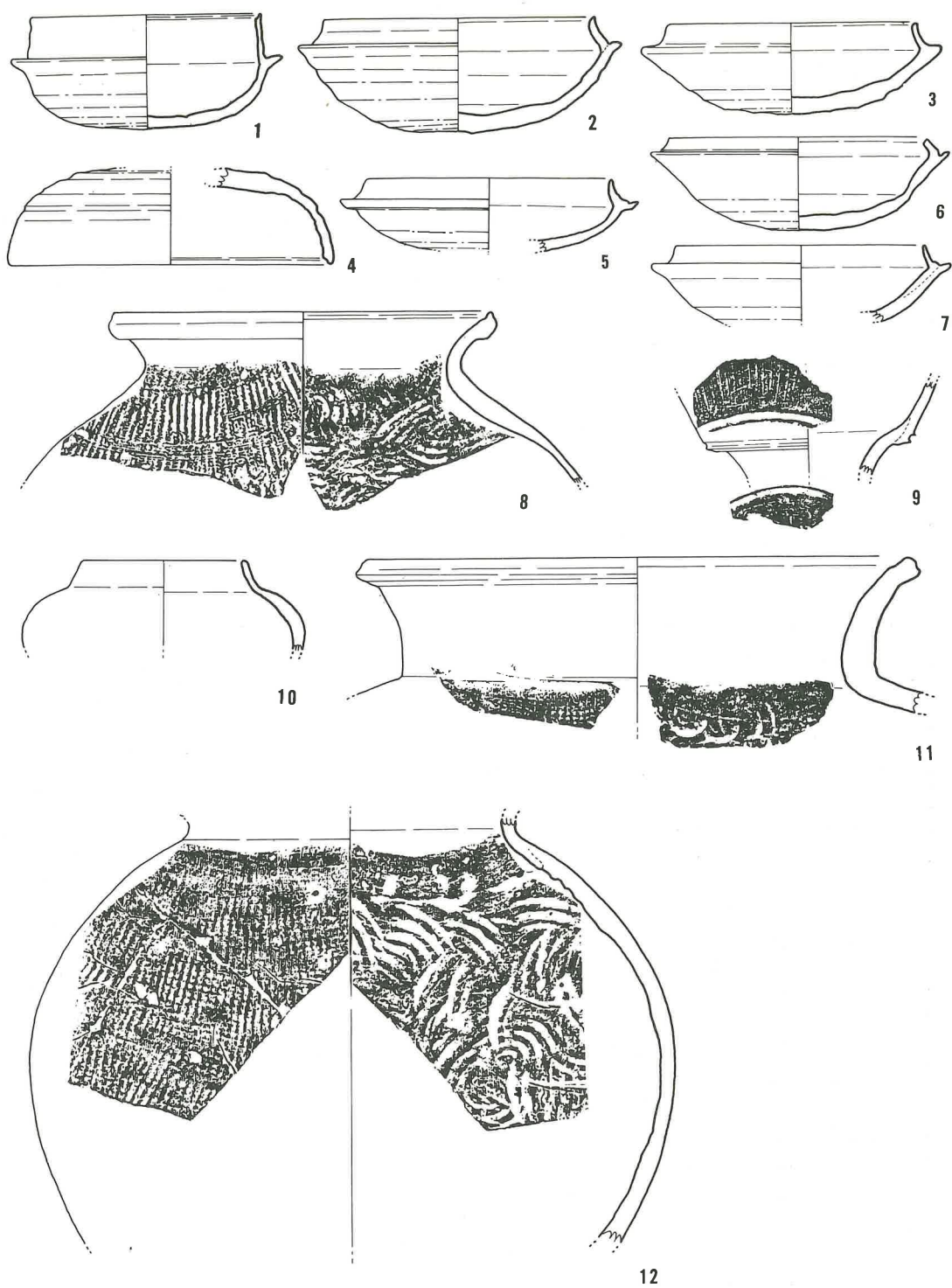
第148図 佐知遺跡27号遺構出土石器実測図

(2) 各地区出土の古墳時代後期土器

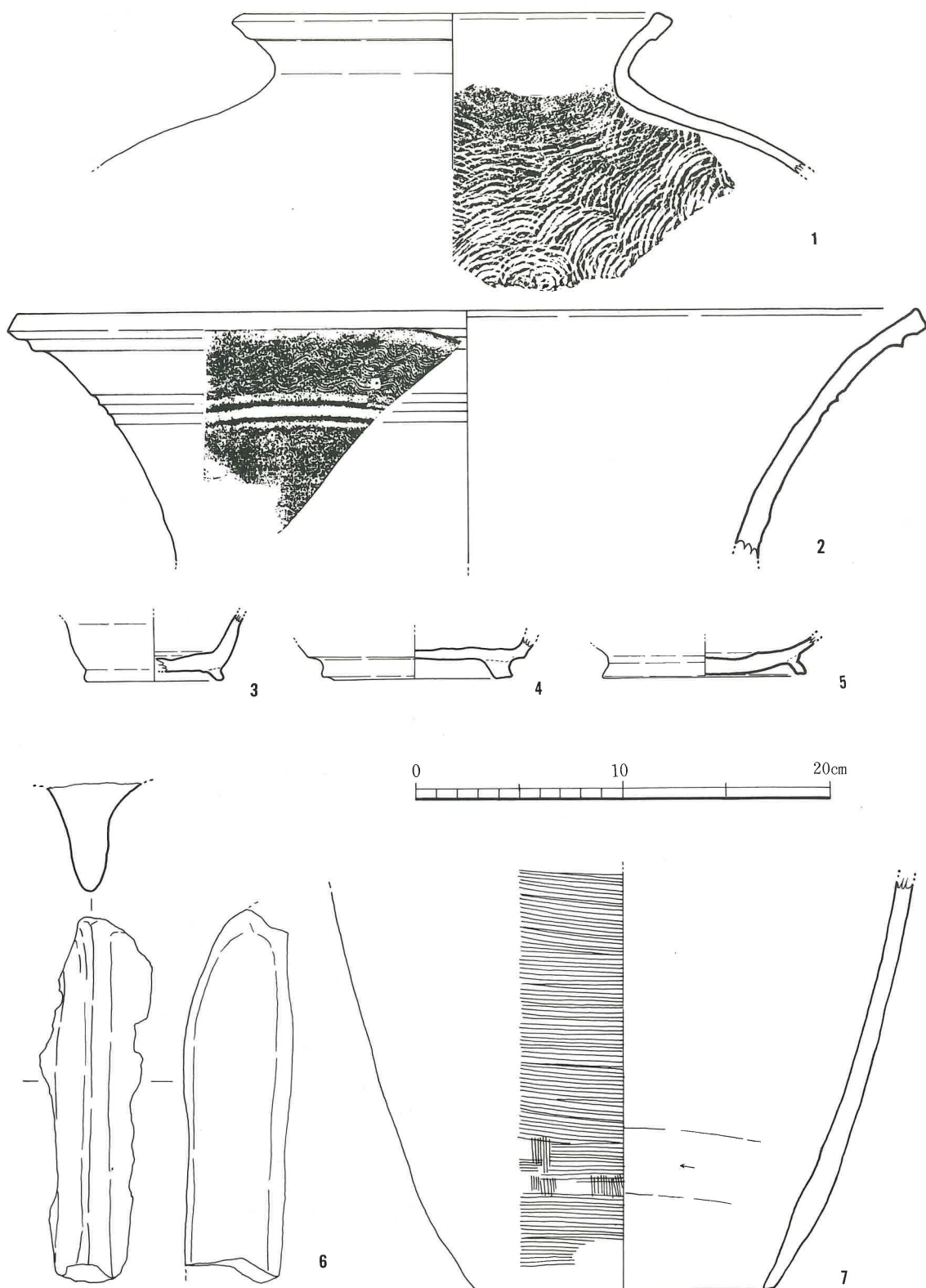
第149図・第150図に図示した遺物は、全て包含層からの出土で、遺構に伴うものでない。しかし遺構からは出土しなかった器種があるため、それらを中心に図示した。なお、第150図の3～5は8世紀のものであるが、ここに図示した。

第19表 佐知遺跡各地区出土古墳時代後期土器観察表

図版名	遺物番号	出土位置	器種	文 様 の 特 徴 と 器 面 調 整 の 方 法		胎 土				備 考
				表	裏	角閃石	斜長石	石英	その他	
149	1	B-3	坏身	口縁はナデ 底部は篋削り	口縁の内面に段がつく、体部ナデ	○		◎		
	2	A-6	坏身	底部近くのみ篋削り あとはナデ 灰色	ナデ	○	○			
	3	A-6	坏身	体部は横ナデ 底部は篋削り	横ナデ	○	○	○	白色粒	
	4	A-6	坏蓋	天井部外面は篋削り 口縁はナデ	口縁に段がある ナデ 灰色	○	○			
	5	A-7	坏身	ナデ 底部は削り	灰色 ナデ	○				
	6	A-5	坏身	底部は削り 他はナデ 灰色	ナデ	○	○	○		
	7	A-7	坏身	底部は削り 他はナデ 灰色	ナデ	○	○			
	8	A-10	壺	口縁はナデ 胴部は叩き	灰色 同心円叩きのあとナデ	○	○			
	9	B-10	甗	口縁は縦の刷毛状	灰色 横ナデ	○	○			
	10	A-6	埴	ナデ	ナデ	○	○			
	11	B-6	甗	口縁ナデ 肩部は格子叩き 灰色	口縁は横ナデ 胴部は同心円叩き	○	○			
	12	B-6	甗	格子叩きのあとナデ 灰茶色	同心円叩きのあとナデ	○	○			
150	1	B-10	甗	灰かぶりで調整不明 灰色	同心円叩き	○	○			
	2	B-6	甗	櫛描波状文 灰色	ナデ	○				
	3	B-9	坏	横ナデ 灰色	横ナデ	○	○			
	4	A-6	坏	横ナデ 灰茶色	横ナデ	○	○			
	5	A-5	坏	横ナデ 灰色	横ナデ	○			白色粒	
	6	A-7	カマド	ナデ	ナデ	○	○			移動式
	7	B-3	甗	縦方向の刷毛目のあと全面横方向の刷毛目	横方向の削り	○	○	○		



第149図 佐知遺跡各地区出土古墳時代後期土器実測図(1)



第150図 佐知遺跡各地区出土古墳時代後期土器実測図(2)

第5節 古代・中世の調査

1 遺構

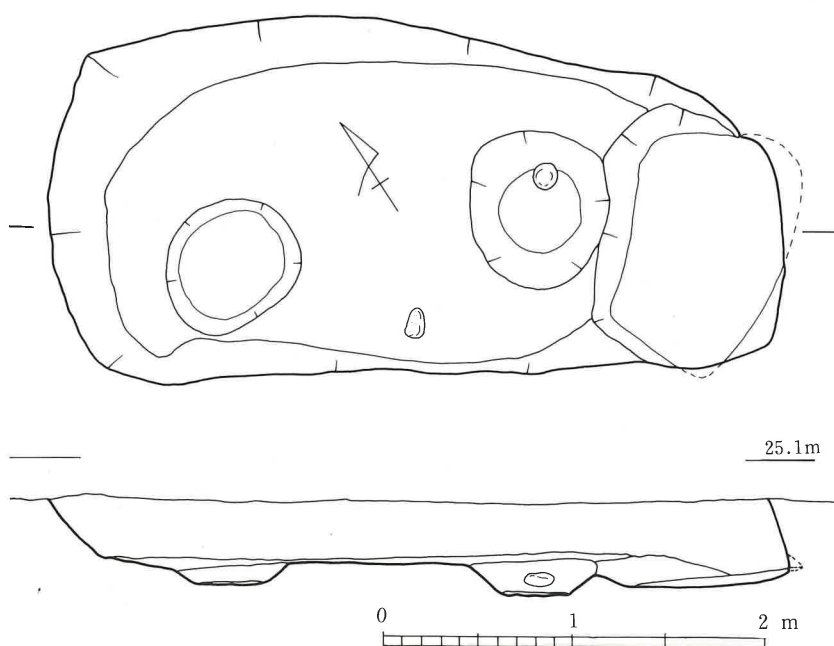
佐知遺跡の古代・中世の遺構はA・B-3区からA・B-10区にかけて検出された。遺構は形状から竖穴遺構と溝状遺構に分類できる。

(1) 竖穴遺構

1) 1号遺構(第151図)

A-3区からB-3区にかけて検出した遺構で、東端部に新しい掘り込みがある。規模は、それを含めて長さ4m、幅1.8m、深さ約30cmある。床面はほぼ平坦で、西側に径70cm、深さ10cm、その南に径80cm、深さ20cmの土坑がある。新しい掘り込みは1.3m×1.0mで、東側は決るように掘り込まれている。

遺物は土師質土器の破片が数点出土したため、この時期と判断した。

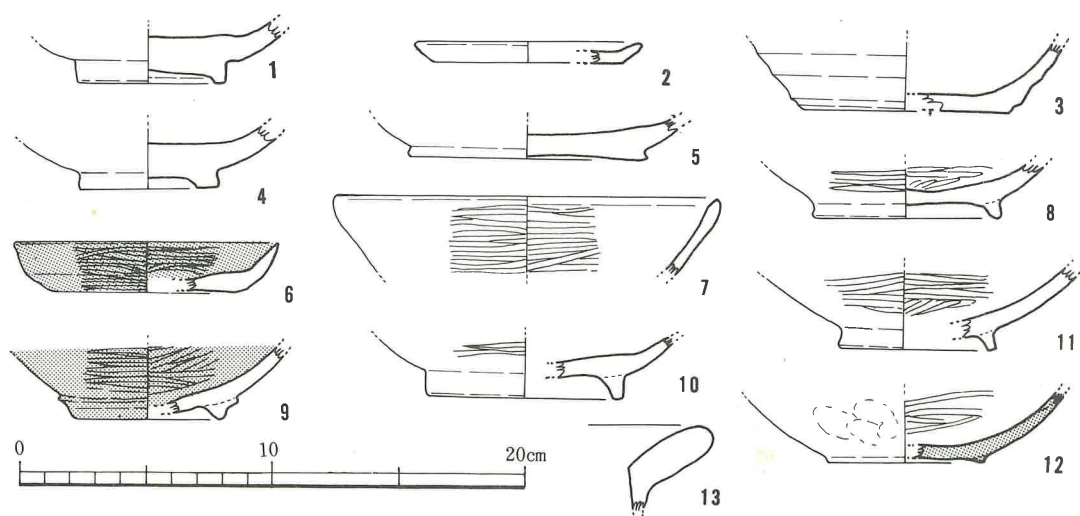


第151図 佐知遺跡1号遺構実測図

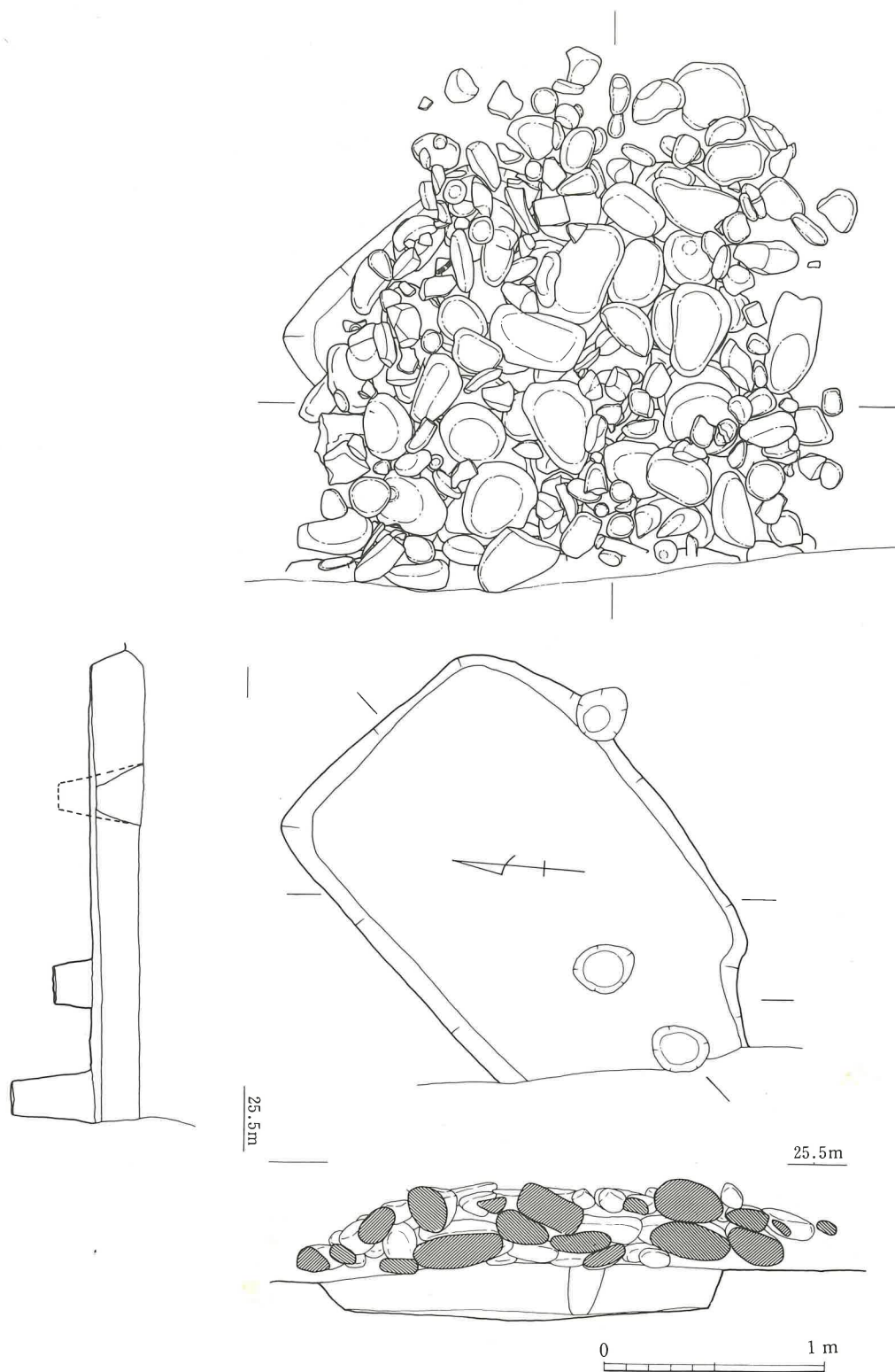
2) 9号遺構（第153図）

A-6区の調査区西端で検出した遺構で、調査区外に一部は広がる。この遺構は、表土を除去する際に、多量の川原石が出土したため、その存在を確認することができた。調査の結果、東西約3m、南北2.5mの範囲に厚さ約40cmの規模でひとかかえ大から拳大の川原石が積まれていることが判明した。さらにそれを取り除くと、下には東西約2m、南北1.4m、深さ20cmの竪穴が掘り込まれていた。床面は平坦で、深さ20cmと35cmのともに径20cmの柱穴状の土坑が検出された。

遺物は、上部の集石の間や下部の竪穴内から土師質土器・黒色土器・輸入陶磁器・瓦器などが出土したが、全て破片である。第152図の1・4は青磁碗の底部で、畳付き部から内側以外は釉がかかっている。2は土師質土器の小皿である。口径9.2cm、器高0.9cmで糸切り底である。3・5は土師質土器の坏の底部で糸切り底である。3には板目状圧痕も付いている。7・8・10・11は土師質土器の碗で、器面調整は高台部が横撫でである以外は、横方向の篋磨きである。6・9は全面黒色の黒色土器B類である。6は皿、9は碗であるが全面横方向の篋磨きである。12は瓦器碗で、高台は断面三角形で低い。器面は内面が粗い篋磨きで、外面は指圧痕が残る。13は鍋の口縁部である。横撫でで、外面にススが付く。これらの土器には角閃石・斜長石を含み、土師質土器は白茶色・明茶色で瓦器は灰色である。



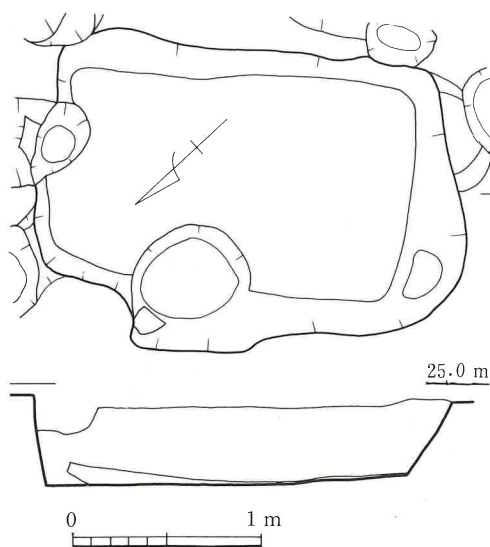
第152図 佐知遺跡9号遺構出土土器実測図



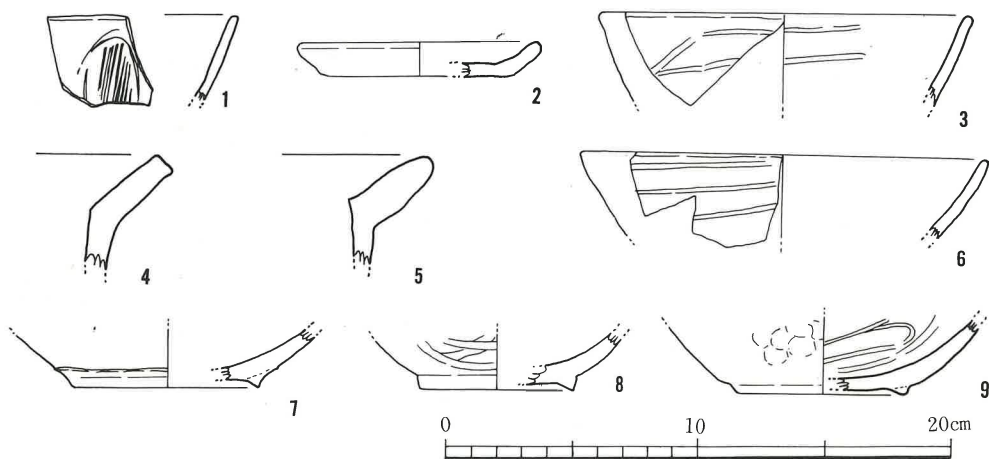
第153図 佐知遺跡9号遺構実測図

3) 12号遺構 (第154図)

A-6区で検出した方形の竪穴遺構で、規模は東西2.2m、南北1.5m、深さ0.5mである。床面は平坦で、壁沿いに柱穴状の掘り込みがあるが、直接な関係は考えられない。遺物は小さい破片が多く、第155図に図示したのがその代表である。1は蓮弁に刷毛目のある青磁の口縁部である。2は土師質土器の小皿で口径9.8cm、器高1.3cmである。底部は糸切りで、体部は撫で仕上げである。4・5は鍋で横撫での口縁部にはススが付着している。3・6～9は瓦器碗である。口縁部は径15cmと16.2cmで、底部は断面三角形の低い高台がめぐる。器面調整は横撫でのあと粗い篋磨きで、9の体部には指圧痕が残る。これらの土器の胎土には角閃石・斜長石を含む。



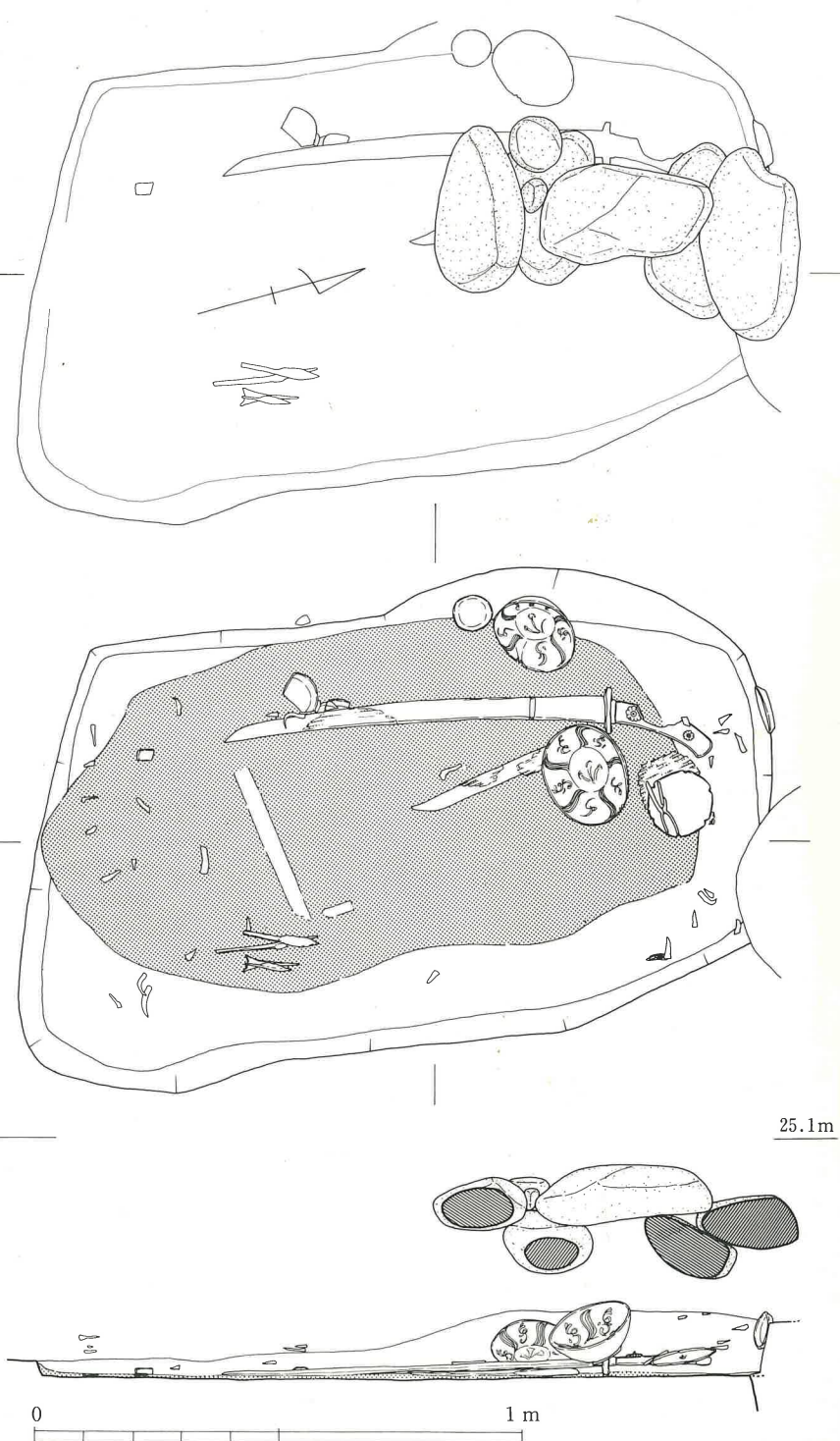
第154図 佐知遺跡12号遺構実測図



第155図 佐知遺跡12号遺構出土土器実測図

4) 17号遺構（第156図）

A-8区で検出した遺構である。調査開始後、表土の除去作業を行っていた際、多量の川原石がA・B-7区からA・B-9区にかけて広がっていることが判明した。調査の結果この集石は第158図のように、A-9区ではほぼ直角に曲がる石列であることが判った。石列を構成する川原石は径50cm大から拳大で、浅い掘り込みの中に敷き詰めるように並べられ、コーナーの部分が幅が広く約3.5mで両端にいくほど狭くなり、B-9区の端では調査区外にある現存の石垣と繋がっている。17号遺構はこの石列の内側で検出されたもので、石列の検出面では長さ40cm大の枕状の川原石が5個積み重ねられた状態であった。遺構はこの下から検出された。

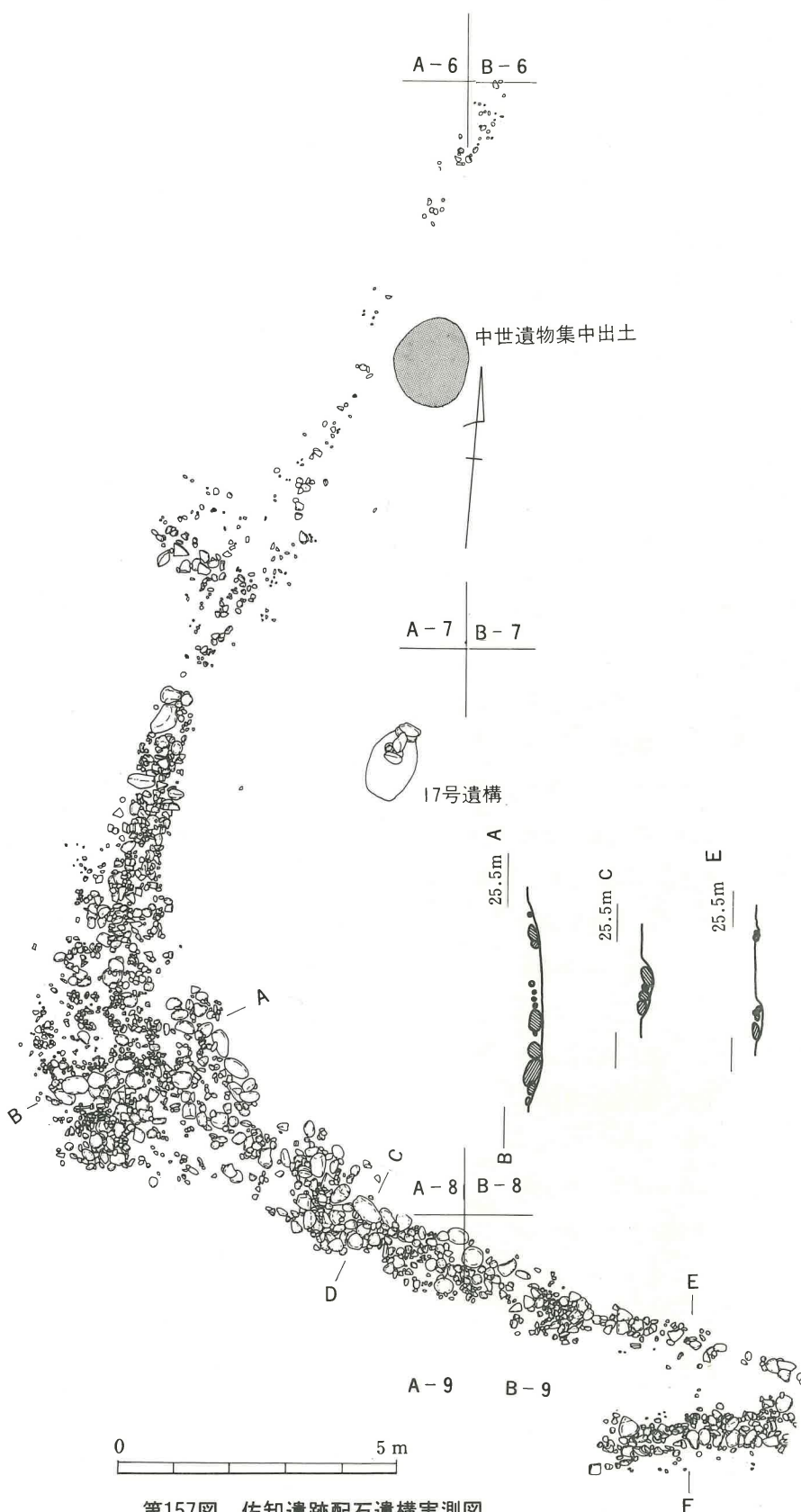


第156図 佐知遺跡17号遺構実測図

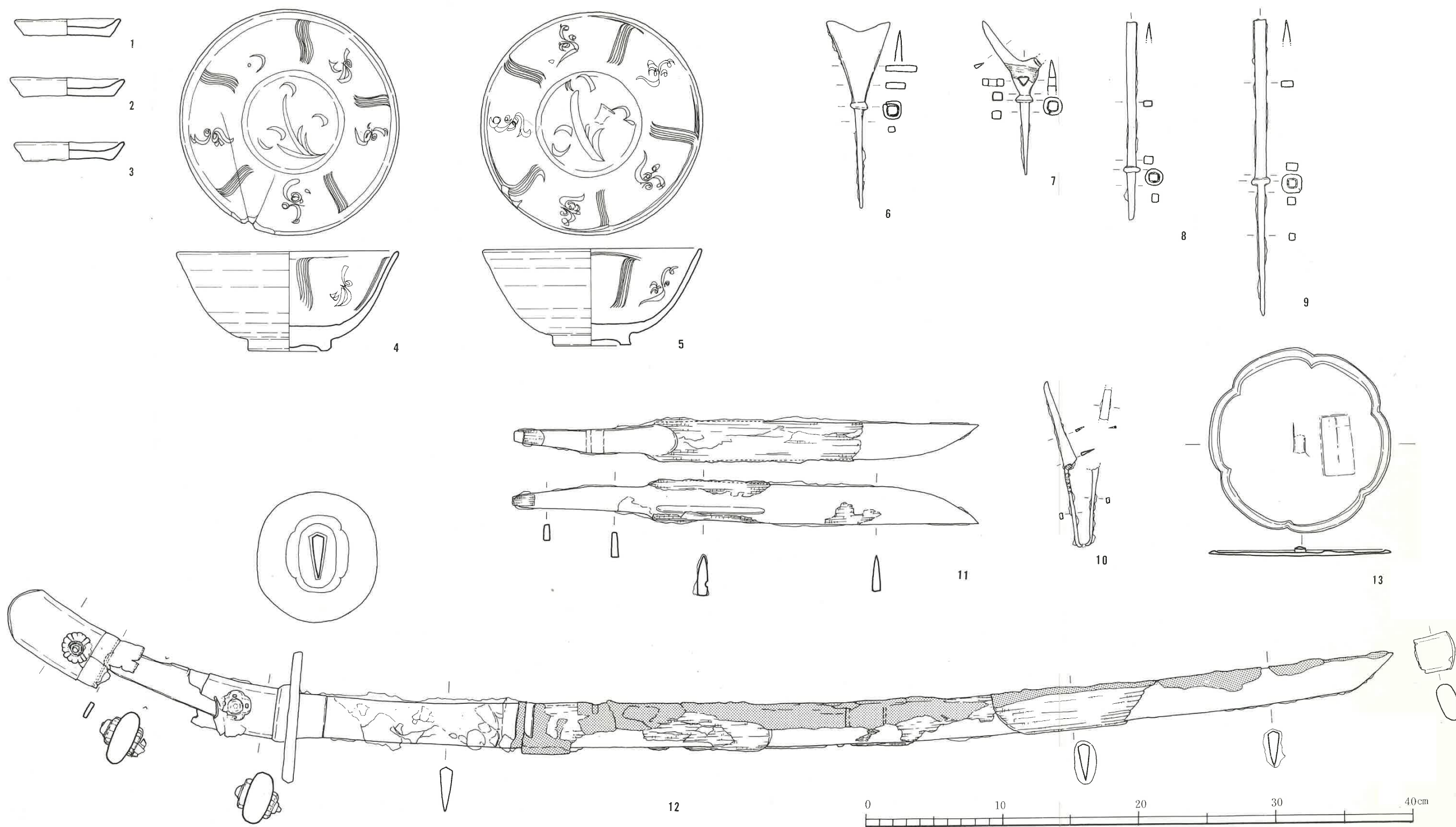
遺構の規模は、主軸をほぼ南北にとり1.5m、東西0.9mの方形の掘り込みで、平坦な床面には木炭を敷きつめていた。主体部は鉄釘が出土していることから木棺であることが推測できる。その大きさは鉄釘の分布から南北1.3m、東西0.6mと考えられる。副葬品は龍泉窯系の青磁碗2点、土師質土器3点、16cm抜身にした太刀、短刀、鉄鏃3点、和紙に包み漆塗り？の木箱に納めた湖州鏡と鉞が出土した。これを釘の分布と出土状態から考えると、青磁碗と土師質土器は棺外副葬で、あとは棺内副葬の可能性が高い。

遺体の姿勢は湖州鏡の上から頭骨が、南寄りで脛骨・大腿骨が出土したことから、頭位は北であることが判る。

以上のことから、



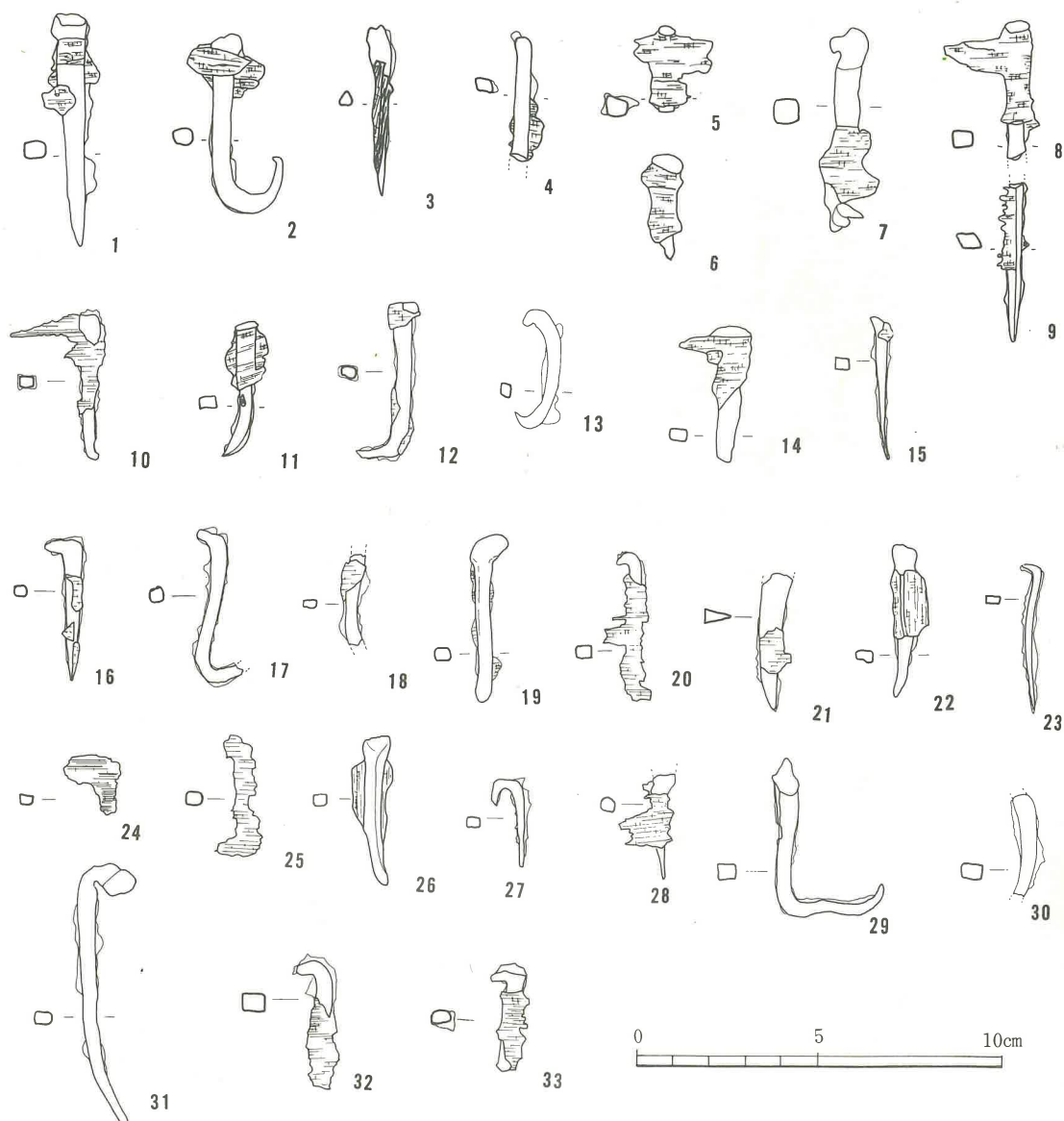
第157図 佐知遺跡配石遺構実測図



第158図 佐知遺跡17号遺構出土遺物実測図

この中世墓の埋葬状況を復元すると、まず木棺が納められる程度の土壌を掘り、床面に木炭を敷きつめる。木棺の中の遺体は湖州鏡・銚子を入れた木箱を北に置き、それを枕にしている。そして遺体に添って拔身にした太刀と短刀、鉄鍬を納め、棺外には使用停止の打欠きを加えた青磁碗2点と土師質土器3点を置き埋めている。さらに、その上部には大きな川原石を並べ、墓を完成させている。

次に遺物の観察であるが、1～3は土師質土器の小皿である。底部は糸切りで板目状圧痕が付いている。体部は横撫で、坏底部は直線的な撫でが付いている。口径は7.8cm～8.3cmで器高は1.3cmである。明茶色で胎土に角閃石・斜長石を含む。



第159図 佐知遺跡17号遺構出土鉄釘実測図

4・5は龍泉窯系の青磁碗で、2点とも同じ形式のものである。口径16.4cm、器高7.1cmで、輪状高台の畳付部から内面以外は全面青緑色の釉がかかっている。文様は内面のみで体部に5分割された劃花文があり、見込み部にも花文がある。口縁部には使用停止の打欠きがある。

6～9は鉄鏃である。6は変形斧箭式で、全長14cmである。7は雁股式で全長は111.6cmで、鏃身部には三角形の透かしがあり、繊維質のものが付着している。8・9は斧箭式で、全長は8は茎部が欠け9.2cmで、完形の9は21.4cmである。4点とも箆被は径4mmの金具を巻き付けて造っている。

10は和鋏である。全長12.2cmで刃部の長さは6cmあり、持手部には細い紐状のものが巻き付けられている。

11は呑口式の腰刀で、10cmある茎部は直線的で茎尻に向けて順次細くなり、目釘穴は認められない。平造りで丸棟の刀身部は24cmで、片面に8cmの丸留の樋が通る。また刀身部には鞘の木質が付いている。

12は太刀で、柄部・鞘部には刀装具が付けられている。柄部の刀装具は冑金・縁金物・眼・目貫は青銅製で下に革状のものをしきこんでいる。ある。腕貫緒を留める眼は16弁を4分割した菊花文で、さらにこの金具を両側から留めるため、縁に細かい刻み目のある半球形の金具で押さえている。目貫は左右異なり、一方は眼の金具と同じであるが、図示した方は、四弁で透かしのある花文である。鞘は鮫革黒漆塗りで、口金物・石突金物は青銅製で足金物は遺存していないが、その部分は締め付けた痕が残っている。特に石突に近いほうは2.7cmの間隔で二条認められる。また鐔は鉄製の丸形で切羽台の上には四弁の花文の切羽が付き、はばきにつながっている。

刀身の茎部は長さ15cmで反り、茎尻に向かうほど細くなる。刀身部は平造りで、棟は1cmの幅で中央部に稜のある行の棟である。全長は82cmで反りの中心は刀身の中頃にあり、切先は張らない。また、抜き味になった部分には布が付着している。

13は湖州鏡である。径113.5cmの六花鏡で、縁の断面はカマボコ状になり、低い鈕が付く。2.2cm×4.4cmの銘帯は縦半分に分けて区別していることは判るが、銘文は判読できない。

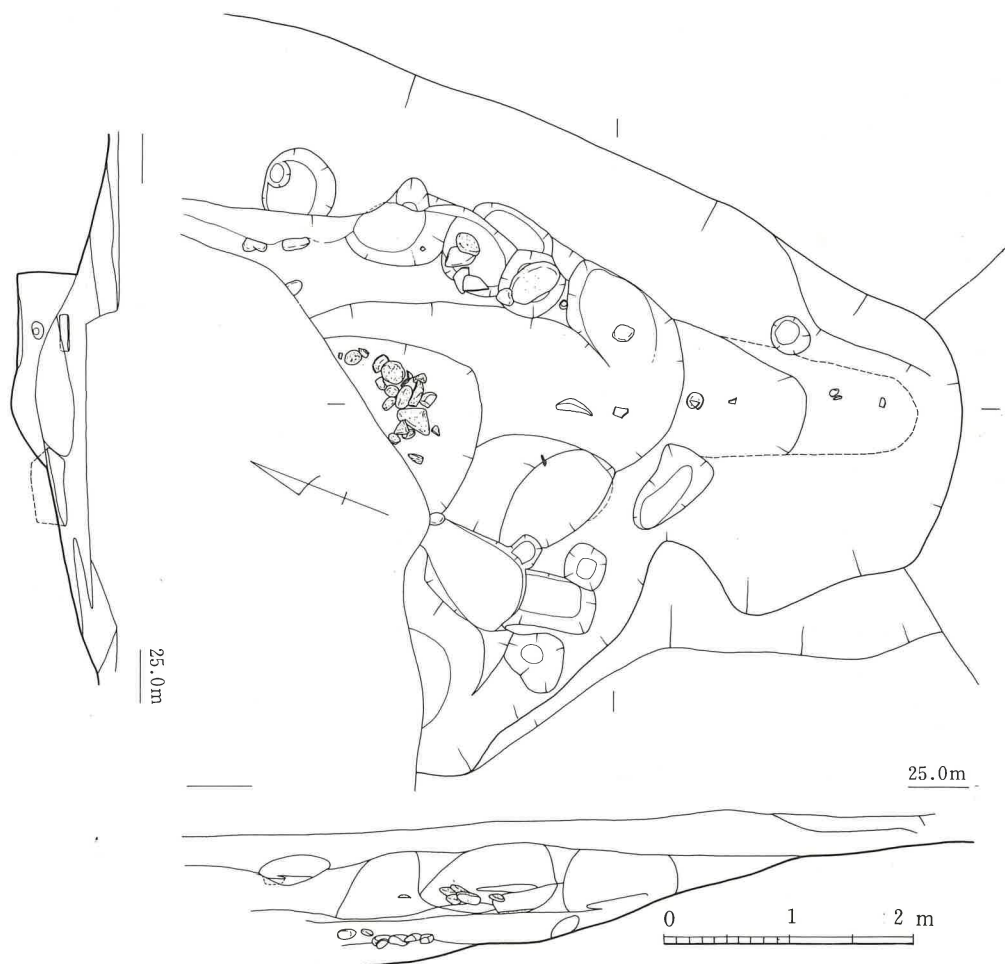
第159図は鉄釘である。棒状で木質の付着したものが多く、釣り針のように曲がっているのが目立つ。

(2) 溝状遺構

1) 3号遺構(第160図)

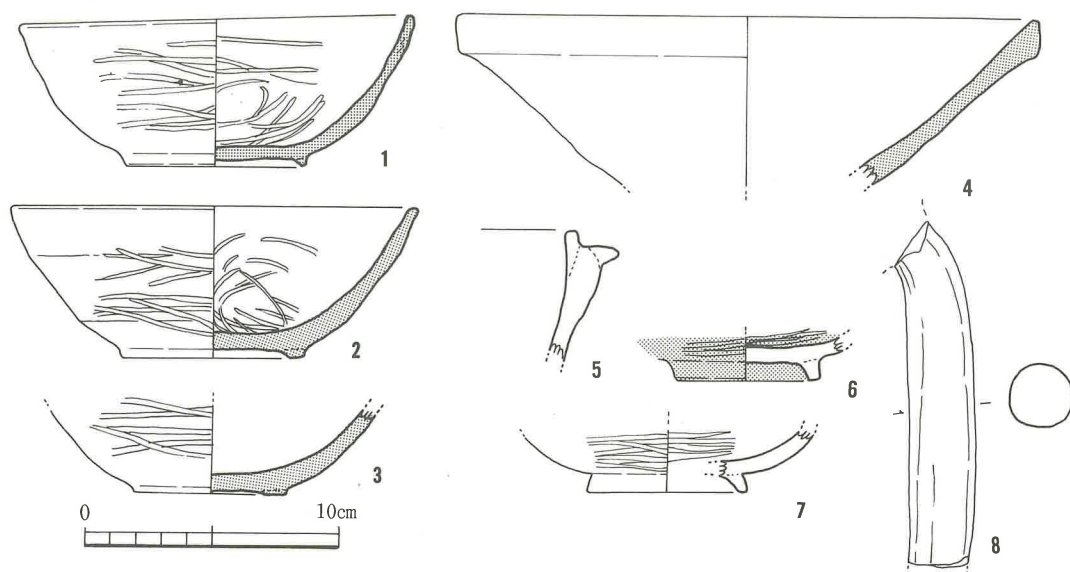
調査区の北端、B-2区で検出した遺構であるが、自然地形を見ると、この部分は西を流れる山国川に続く窪地となっている。遺構も極端な変化は認められず、人為的なものではない可能性もある。しかし、遺構内からは多量の遺物が出土している。形状と規模は、南から徐々に深くなり、北端では地表面から2m近くなる。遺物は全て流れ込んだ様な様相であるが、1点のみ瓦器碗が完形品に近い状態で出土した。

第161図がその代表的なものである。1～4は瓦器で器形は1～3が碗、4は鉢である。碗は低い高台が付き、高台の端部は板目状圧痕が見られる。1は口径15.5cm、器高5.8cm、2は口径16cm、器高5.9cmである。器面は3点とも横撫でのあと粗い篋磨きで仕上げている。4は口縁部



第160図 佐知遺跡3号遺構実測図

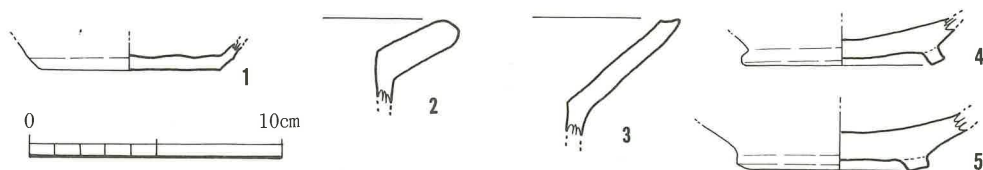
を肥厚し、断面三角形に整え、全面撫で仕上げである。色調は1・2の口縁部が灰黒色である以外は灰色で、胎土はいずれも角閃石・斜長石を含み、4には石英も認められる。5は鏝の付く鍋の口縁部で、横撫で仕上げのあとにススが付着している。6は全面黒色の黒色土器B類で高台付き椀の底部である。器面は横撫でのと横方向の丁寧な篋磨きで仕上げられている。7は土師質土器の椀の底部の破片で、横方向の篋磨きである。8は鍋の脚で、断面は径2.5cmの円形で体部との接合部内側にはススが付いている。6が精製粘土を使っている以外は、胎土に角閃石・斜長石を含む。



第161図 佐知遺跡3号遺構出土土器実測図

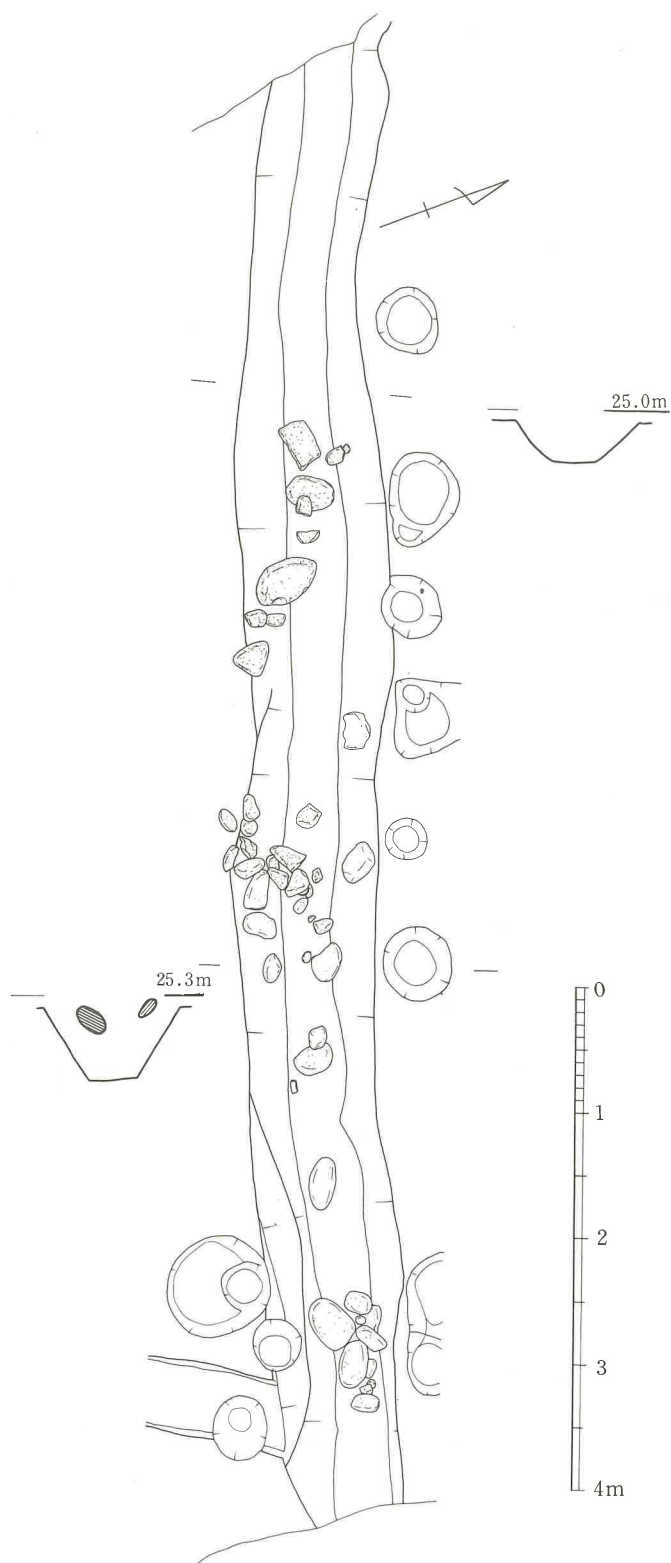
2) 5号遺構 (第163図)

A-4区からB-4区にかけて調査区を横断するように検出された溝で、東端で6号遺構の溝と交差する。規模は、検出面で幅1.1mで、断面はU字形になり、深さは約50cmである。検出面からは溝の中に投棄されたような状態で、大きな川原石が出土した。遺物は土師質土器の小皿がわずかに出土したのみで、安定した状態のものはなかった。



第162図 佐知遺跡5号遺構出土土器実測図

第162図がそれである。
 1は底部の径から土師質土器の坏と考えられる。底部は糸切りで、体部は横撫である。2・3は口縁部を横撫で仕上げした鍋で、外面にはスガが付着している。4・5は土師質土器の椀の底部である。高台部は横撫で、4の底部には糸切り、5には削りの痕がある。体部は内外面とも篋磨きである。これらの土器は鍋が暗茶色である他は薄茶色・明茶色を呈し、胎土には角閃石・斜長石を含む。

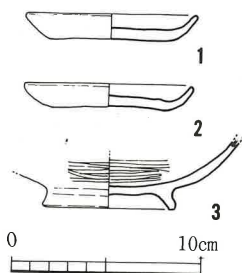


第163図 佐知遺跡5号遺構実測図

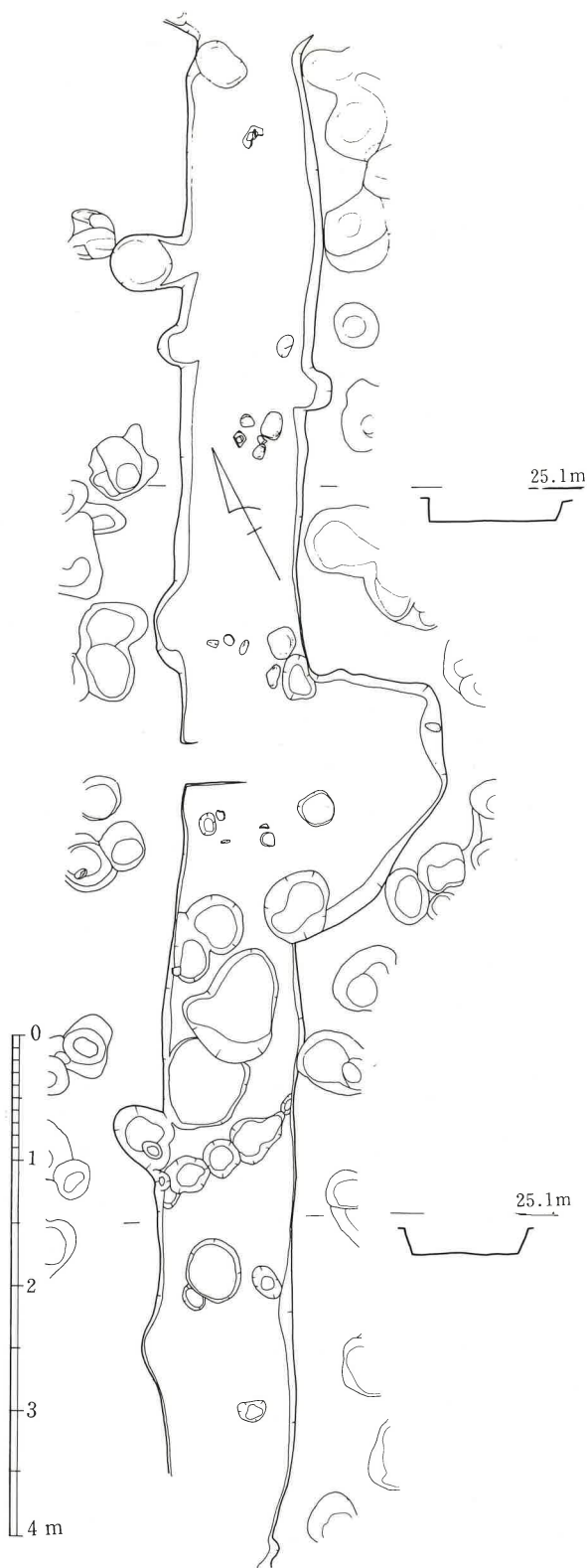
3) 6号遺構(第165図)

A-6区からB-4区にかけて、5号遺構と直交するように延び、北端で切り合う。6号遺構が新しい。南端は浅くなり、他の土坑と切り合うため不明である。検出面の幅は1.1mで、断面は深さ約10cmの浅い皿状になる。この遺構も出土遺物が少なく、土師質土器がわずかに出土したのみである。

第164図がそれである。1・2は土師質土器の小皿で、口径は1が8.2cm、2は8cm、器高は2点とも1.3cmである。底部は糸切り底で、体部は横撫でである。色調は白茶色を呈する。3は全面黒色の黒色土器B類の高台付き椀である。高台部は横撫でで、体部は横方向の丁寧な篋磨きである。これらの土器の胎土には角閃石・斜長石を含み、1・3には金雲母も含まれる。



第164図 佐知遺跡 6号遺構
出土土器実測図



第165図 佐知遺跡 6号遺構実測図

2 遺物

佐知遺跡は表土下に黒色の厚い遺物包含層が形成されている。特に第58図に図示した配石遺構周辺のA・B-6区からA・B-10区にかけては顕著で、多量の古代・中世の遺物が出土した。とりわけA-7区の一部からは集中的に中世の土師質土器・瓦器・輸入陶磁器が出土し、遺構としては検出することはできなかったが同時に廃棄した様子がうかがわれる。そこでこのA-7区と他の地区の包含層から出土した遺物を区別して報告する。

(1) A-7区(166図)

配石遺構の内側で中世の土師質土器・瓦器・輸入陶磁器が折り重なるように出土する部分(第157図)を検出した。その範囲は1.3m×1.6mの楕円形で、掘り込みなどの遺構としては黒色土内のため判別することができなかった。しかし、出土状態から一時期に廃棄されたことが想像され、器種の組成を考えるうえで、良好な資料といえる。

1) 輸入陶磁器(1~3)

1・2は体部外面に蓮弁のある青磁碗である。1は口径15.9cm、器高6.2cmで輪状高台の皿付部から内側以外はオリブ色の釉がかかっている。蓮弁は立体感に欠ける。2は口径14cmで、釉は1より青味が強い。蓮弁も丁寧な造りである。3は高台径5.8cmの青磁碗の底部である。釉は底部周辺には無く、体部の下位から上にかかっている。

2) 土師質土器(4~34)

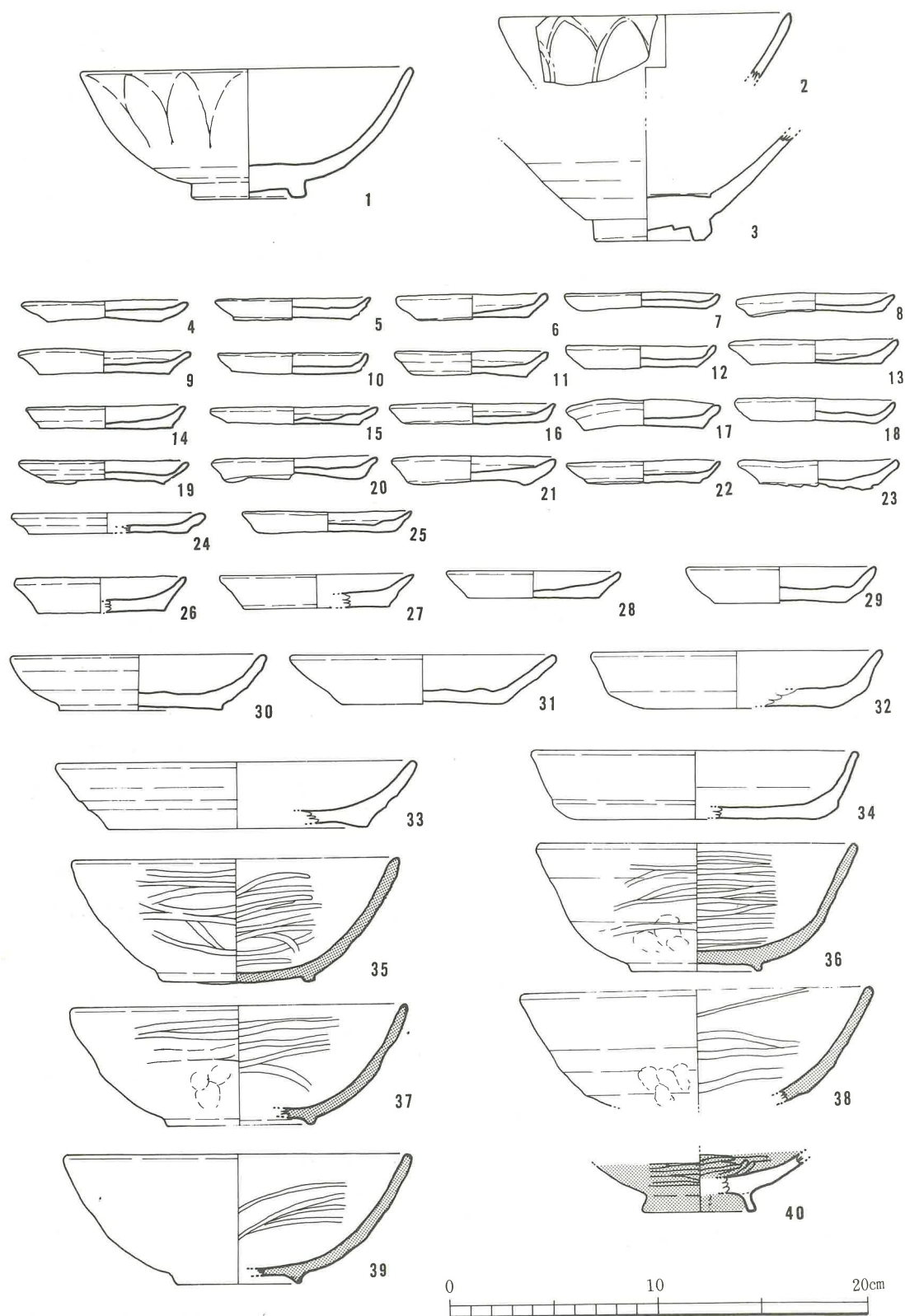
土師質土器の器種は小皿・坏・碗があるが、A-7区の遺物集中部分から碗は出土しなかった。

小皿(4~29) 口径は7.5cmから9.2cm、器高は1cmから1.5cmであるが、完形品あるいはそれに近いものは口径8cm前後、器高1cm強が多い。器面は底部が全て糸切りでさらに板目状圧痕が付くものが多い。特に23には簀子状の圧痕がついている。体部は回転を利用した横撫で、内底部は直線的な撫でで仕上げている。21にはススが付着し、10は口縁部に直角に筋状のススが付き灯明皿として使われた可能性がある。色調は薄茶色・明茶色・白茶色などが多く、胎土には角閃石・斜長石を含む。

坏(30~34) 小皿に比較すると点数は少ない。口径は12.2cmから17.2cmであるが、完形品に近い30・31は12~13cmで、器高は2.4cmから3cmである。坏は小皿と同じ製作方法で造られ、底部は糸切りで、板目状圧痕が付き、体部は回転を利用した横撫で、坏底部は直線的な撫で仕上げである。色調は薄茶色・明茶色で胎土には角閃石・斜長石を含み、41には金雲母も認められる。

3) 瓦器(35~39)

瓦器の器種は碗のみで、口径は15.4cmから16.8cmで、器高は5.7cmから6.2cmで土師質土器に比較すると規格化している。底部には低い高台が付き、36の底部には板目状圧痕が認められる。



第166図 佐知遺跡A—7区出土土器実測図

体部は横方向の撫でのあと、粗い篋みがきで、外面の下位には指圧痕が残されている。38・39の外面には篋磨きは認められない。色調は口縁部が灰色である以外は黒灰色で、胎土には角閃石・斜長石を含む。

4) 黒色土器 (40)

黒色土器はこれまでの研究で、内面のみ黒色のA類と内外面黒色のB類に分類されている。

黒色土器B類 高台付きの椀で、高台径8.2cmである。高台部が横撫での他は丁寧な篋磨きで、仕上げている。胎土に角閃石・斜長石を含む。

(2) 各地区出土の古代・中世遺物

佐知遺跡の厚い包含層からは多量の土器はもちろんのこと輸入陶磁器・土錘・鉄器などが出土している。

1) 土 器

ここで報告する土器は各種の土師質土器・瓦器・黒色土器・土鍋で釉のかけられていない焼き物であるが、同じ機能の石鍋も加える。

①土師質土器 土師質土器の器種には小皿・坏・椀がある。

小皿 (第169図1～40) 製作方法は底部が糸切り底で、37のように明瞭に板目状圧痕が付くものや撫でられているものもある。体部は回転を利用した横撫で、内底部は直線的な撫で仕上げられている。口径は1～10・21・23は小さく6.6cmから8cm、器高も1cmから1.5cmであるが、これを除く11から40は口径8cmから10.5cmで9cm前後のものが多い。器高は全て1.5cm前後である。色調は白茶色・明茶色・薄茶色・赤茶色の明るいものが多く、胎土には角閃石または斜長石、白色粒子を含む。

坏 (第169図41～53) 製作方法や胎土・色調は小皿と同じであるが、口径・器高が異なる。口径は13cmから16.3cmで器高は2.8cmから3.5cmであるが、52は器高が4.2cmあり、体部も内湾気味で他とは雰囲気異なる。50にはススが付着し、46は胎土に金雲母も含まれる。

椀 (第168図) 土師質土器でも椀は小皿・坏とは製作方法も器形も大きく異なる。器形は内湾する口縁部をもつ体部に高台が付く。器面調整は口縁部から高台の付く底部まで内外面とも横方向の丁寧な篋磨きで、高台部のみ横撫でである。また13の底部には板目状圧痕が見られる。口径は15.3cmから19cmで器高は5.2cmから6.2cmである。色調は白茶色・薄茶色が多く、胎土には角閃石・斜長石を含むが、小皿・坏に較べると精選された粘土を使っている。なお、高台に形態差が見られることから、いくつかの時期が含まれる。

②黒色土器 黒色土器はこれまでの研究で、内面のみ黒色の黒色土器A類、内外面とも黒色の黒色土器B類に分類されている。

黒色土器A類 (第167図5～9) 器種は椀のみで、器形は内湾気味の口縁部をもつ体部に高台が付くものである。器面調整は土師質土器の椀と同じで、体部は内外面とも丁寧な横方向の

篋磨きで、高台部は横撫でである。唯一の完形品は口径が16.5cm、器高6.1cmである。内面は黒色、外面は白茶色・明茶色で胎土には角閃石や斜長石を含む。

黒色土器B類(第167図1～4) 黒色土器B類の器種は小皿と椀がある。1の小皿は口径11.7cm、器高2cmで、器面は内外面の丁寧な篋磨きで、底部まで磨いている。

椀は内湾気味の口縁部をもつ体部に外に広がる高台が付く。器面は口縁端部と高台部が横撫で、体部は内外面ともに横方向の丁寧な磨きである。完形品の3は、口径10.2cm、器高5.9cmである。胎土には角閃石・斜長石を含む。

③瓦器(第167図10～17) 瓦器の器種は椀のみである。器形は内湾する口縁部をもつ体部に低い高台が付く。器面調整は口縁部から高台部にかけて横撫でし、体部はさらに横方向の粗い篋磨きをしているが、体部下位には指圧痕が残る。14・16の完形品は口径が16.6cmと16cm、器高は5.9cmと16.1cmである。色調は灰色・暗灰色で胎土には角閃石や斜長石を含む。

④土鍋・石鍋 鍋は口縁部の形態でA・B・C、さらに素材で1類加え、4類に分類できる。

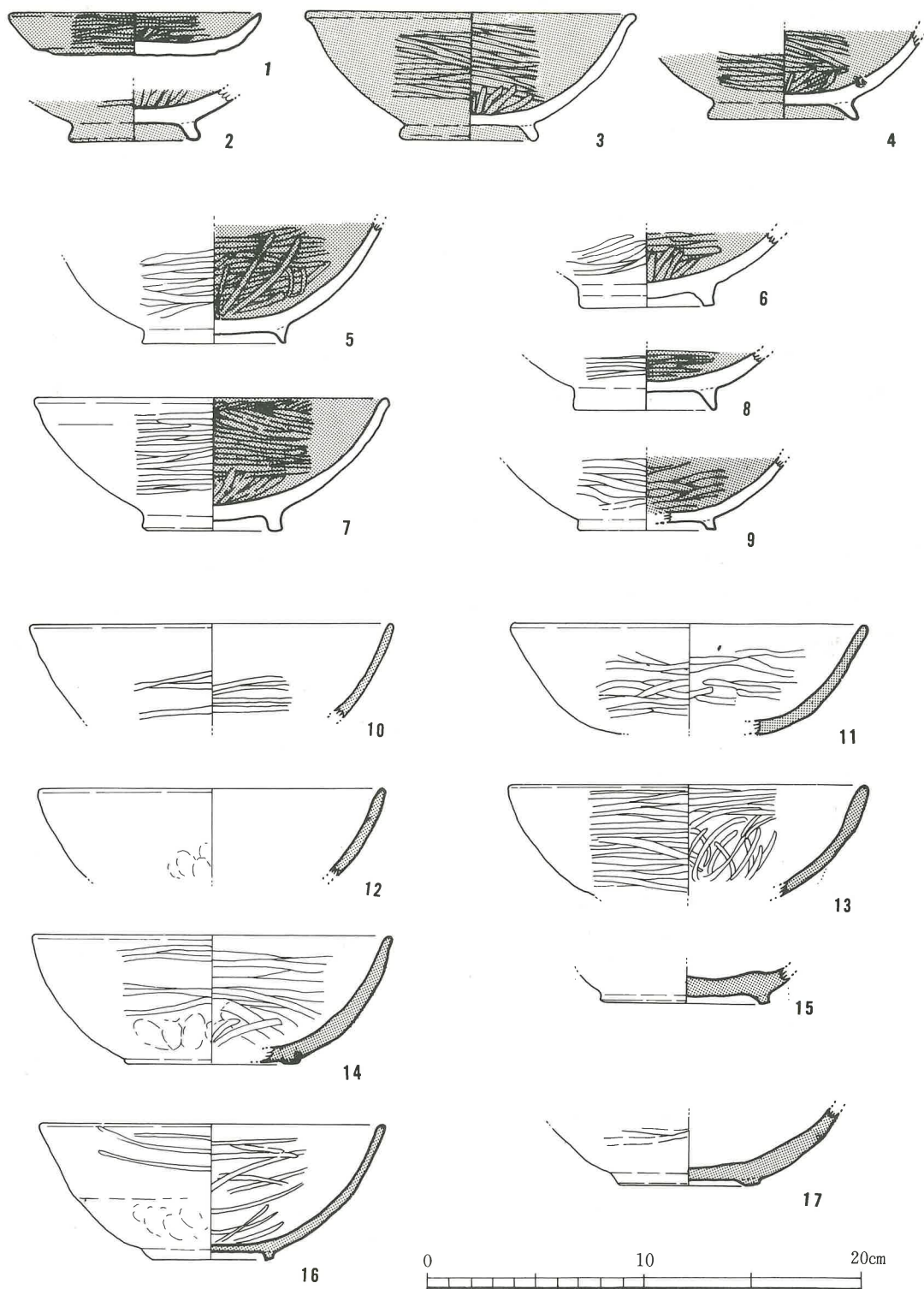
土鍋A類(第170図1～6) 直口または外傾する口縁部の外面に鏝が廻るもので、器面は横撫で仕上げであるが、5の内面の一部には刷毛目がつく。外面にはススが付着するが、鏝から下に目立つ。色調は茶色・暗茶色で、胎土には角閃石や斜長石のほか細かい砂粒も含まれる。

土鍋B類(第170図7・8第171図1～3) 直口または外傾する胴部に屈曲する口縁部が付く。7の胴部内面は篋削りであるが、他は口縁部内外面から胴部内面は横撫で、胴部外面は縦撫でである。ススは胴部外面に多く付いている。色調は茶色・黒茶色で胎土には角閃石や斜長石の他、砂粒も目立つ。

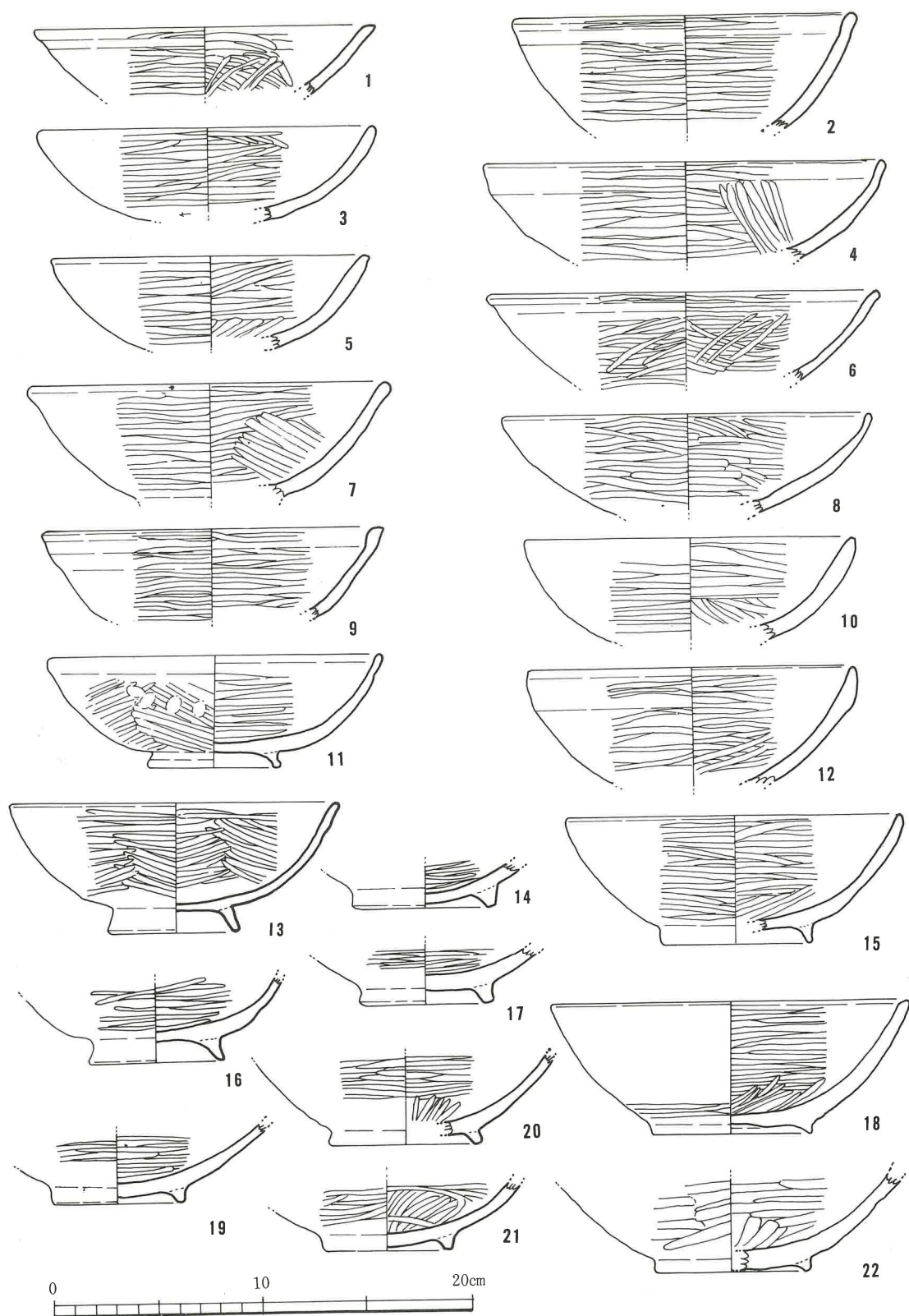
土鍋C類(第171図4) 直口する口縁部の土器で口縁部と胴部外面は横撫で、胴部内面は横方向の削り状の調整痕が付く。外面にはススが付着しており鍋としての機能が想定できる。色調は茶色で胎土には角閃石・斜長石を含む。

以上の土器のいずれかに第171図6の脚が付く。この脚の断面は、径2.7cmで外面には指圧痕が残る。明茶色で胎土に角閃石・斜長石を含む。

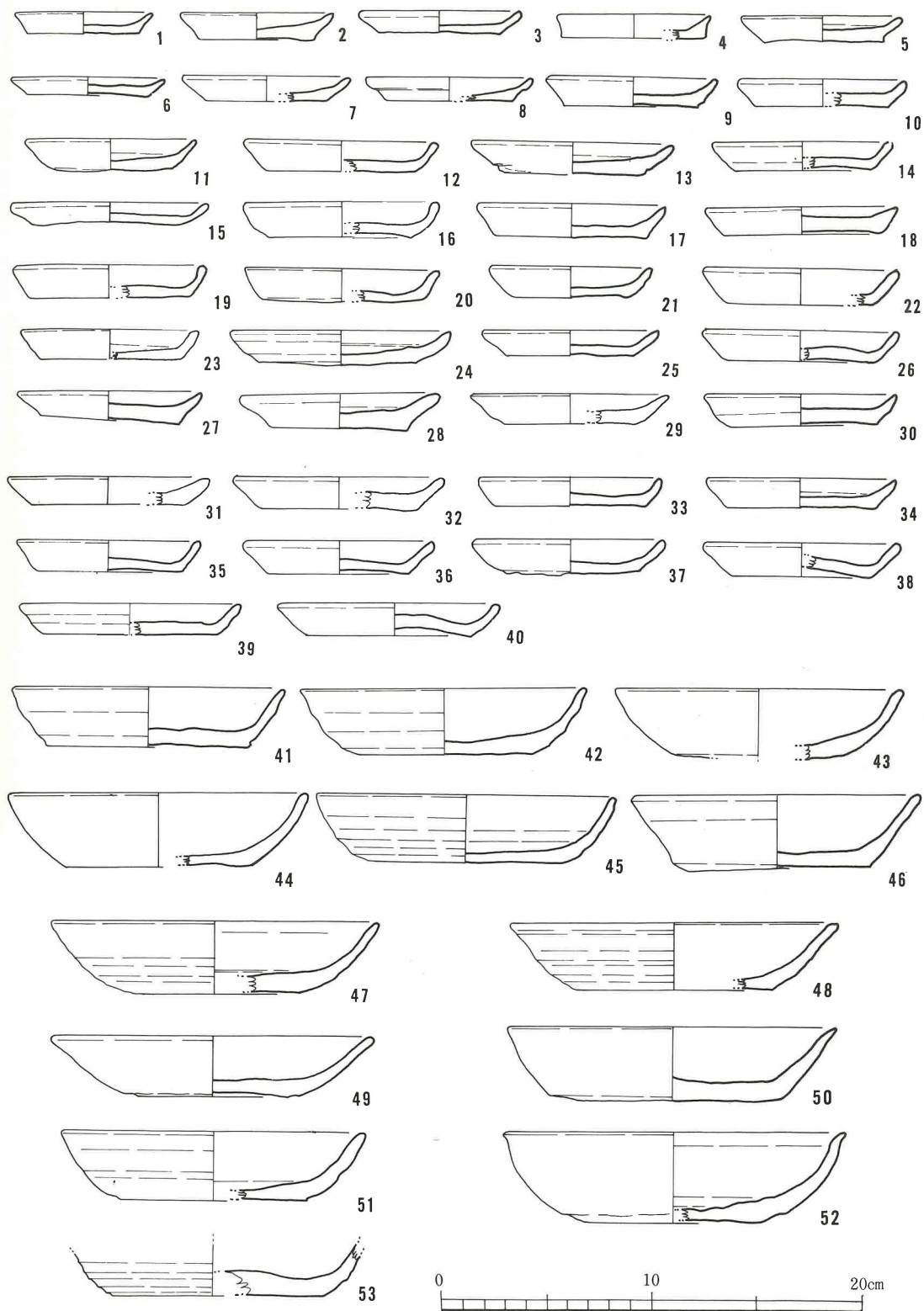
石鍋(第171図5) 口径20cmの滑石製の石鍋で、内面は平坦に仕上げられているが、外面は縦に約2cmの間隔で削り、形を整えている。



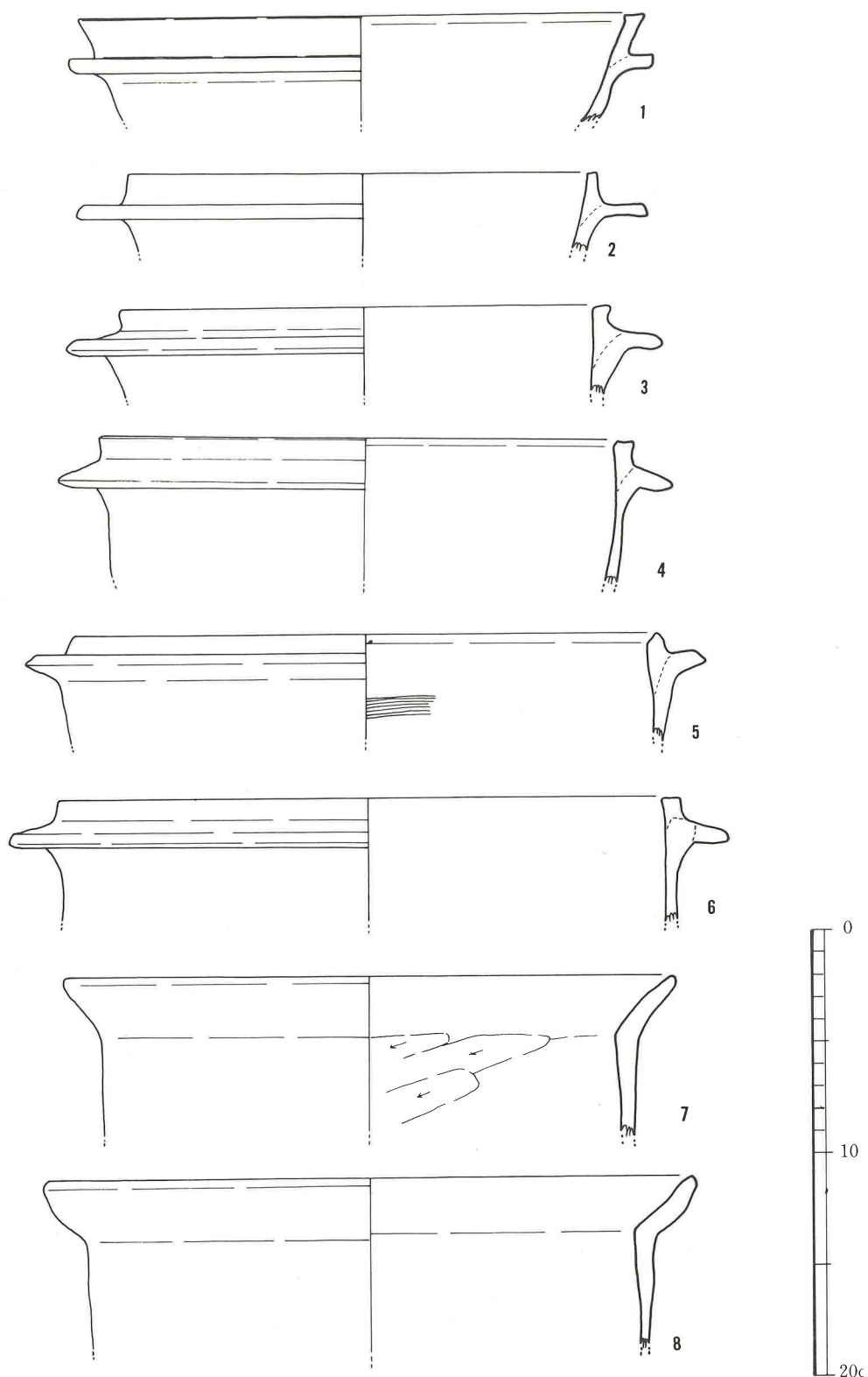
第167図 佐知遺跡出土中世土器実測図(1)



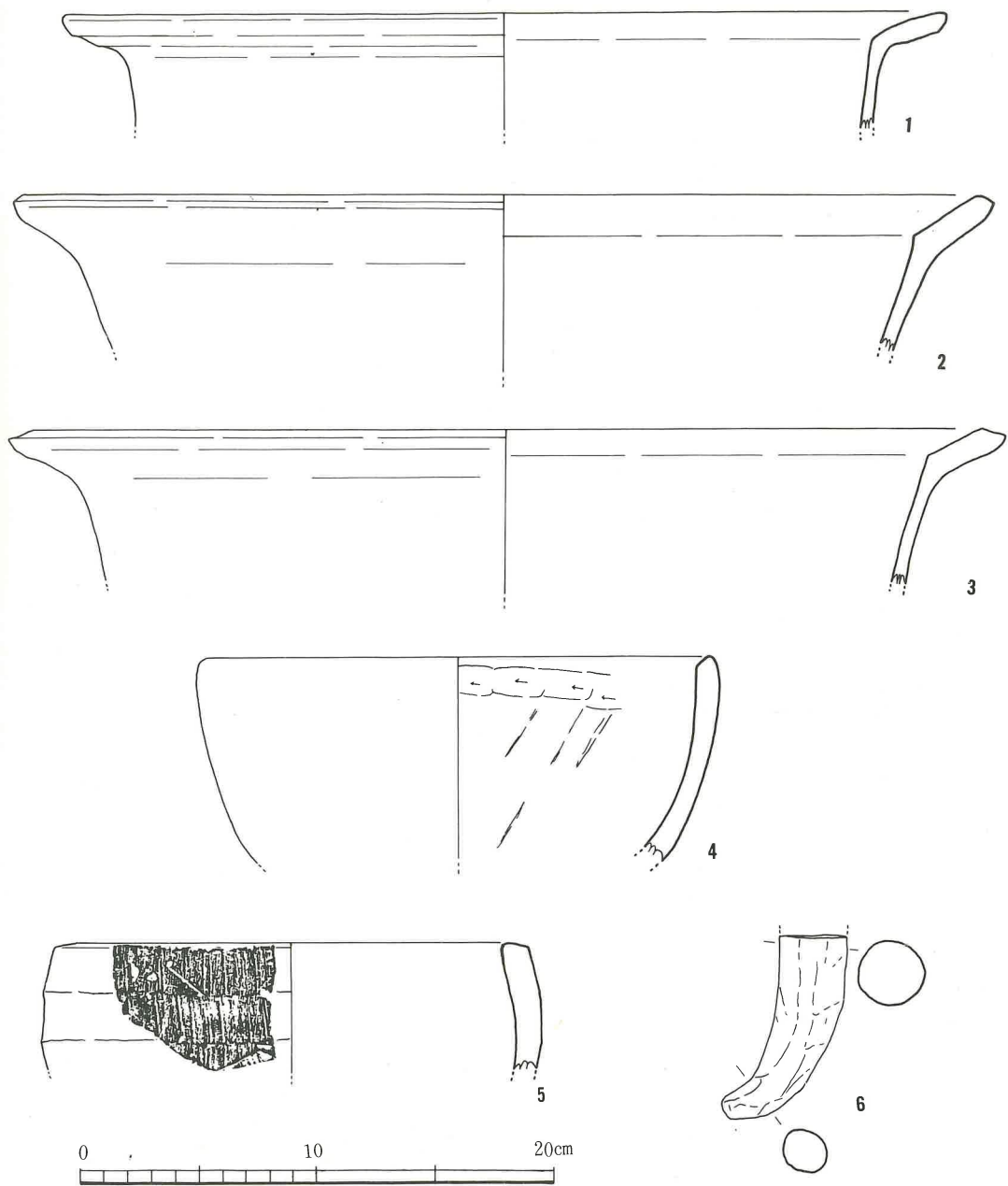
第168図 佐知遺跡出土中世土器実測図(2)



第169図 佐知遺跡出土中世土器実測図(3)



第170図 佐知遺跡出土中世土器実測図(4)



第171図 佐知遺跡出土中世土器実測図(5)

2) 輸入陶磁器

佐知遺跡からは古代・中世の遺物が大量に出土したが、この時期に中国からもたらされた陶磁器も多く出土した。包含層からの出土のため、破片ばかりで時期的な組合せ等は明確でない。そこでこれらの遺物は白磁と青磁に分け、さらに器種や口縁部の形態で分類し報告をする

①白磁（第172図・第173図1～17）

白磁の器種は碗と皿がある。そこで碗を口縁部の形態でA～Dの4類に分け、これに皿を加えた5分類とする。

白磁A類（第172図1～10） 内湾気味に外傾する口縁部の碗で、口縁部の外端部がわずかに肥厚する。小さな破片ばかりであるが、10の口径は12cmである。

白磁B類（第172図11～25） 直線的に外傾する口縁部の先端を外側に折り曲げ玉縁を形成している。白磁A類に比較すると器壁も厚く、口径も13.6cmから19cmと大きい。釉は外面の底部周辺まではかかっていない。

白磁C類（第172図26～37） 内湾気味または直線的に外傾する口縁部は先端に向かうほど細くなる。32の口縁部には輪花が認められる。口径は12.2cmから17.5cmであるが、A・B類に比較すると器形を含め、バラエティがある。器高は37によると5.5cmである。

白磁D類（第173図1～5） 白磁の皿である。口径は1が9.4cm、2は10cmで器高は2.5cmである。3～5はこの皿の底部である。釉は体部外面下位にはない。

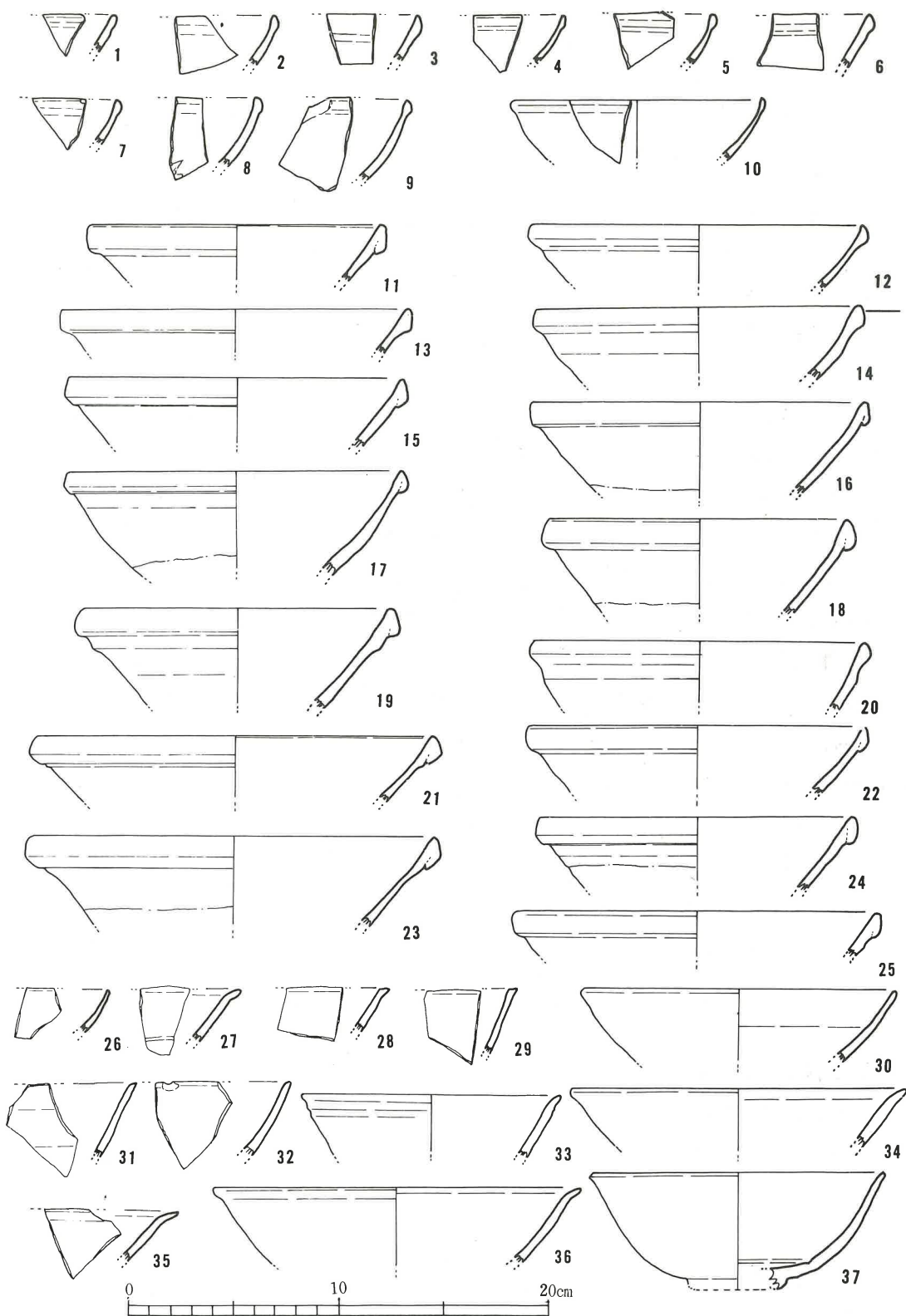
白磁E類（第173図6・7） 6は胴部で屈曲し、7は口縁部が外反する碗である。両者とも口縁内端部には釉のない部分がある「口ハゲ」である。

第173図8～17は白磁の碗の底部である。器壁の厚さや、釉の発色などから8・9はA類そのほかはB類の可能性が強い。また第173図18は器壁の薄い小破片であるが、内面に細い沈線で文様を描き、黄白色の釉がかけられている。

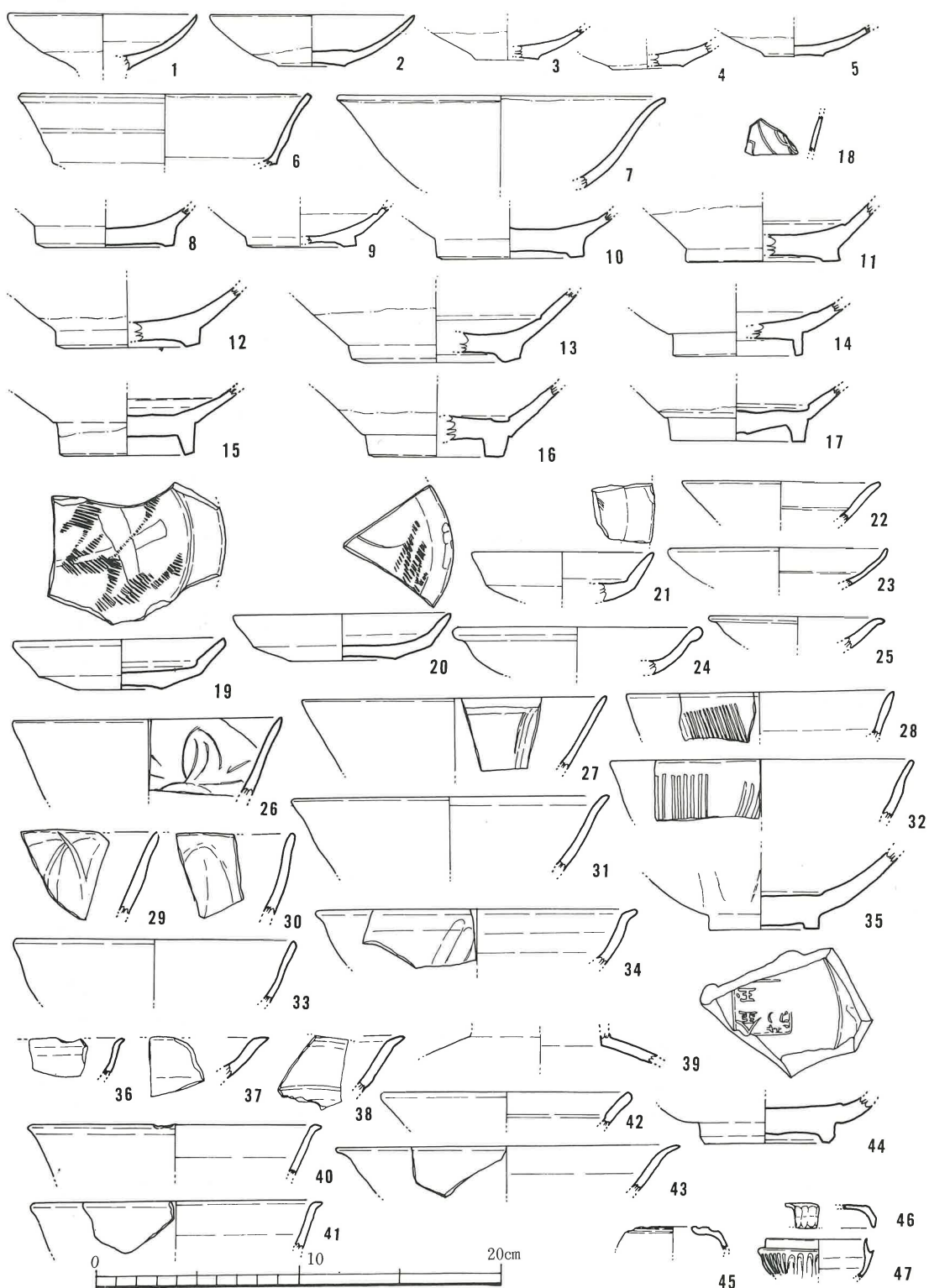
②青磁（第173図19～47）

青磁も白磁と同様小破片が多く全体を知るのには容易ではない。器種は皿と碗・壺・合子があり、これを中心に分類する。

青磁A類（第173図19～25） 青磁の皿である。19～21は同じ形式の皿で、見込み部に削りによる文様のあと櫛目文のある同安窯系青磁である。22から25は口径の小さい皿で、24は玉縁状の口縁部で23の釉は薄くザラついている。



第172図 佐知遺跡出土輸入陶磁器実測図(1)



第173図 佐知遺跡出土輸入陶磁器実測図(2)

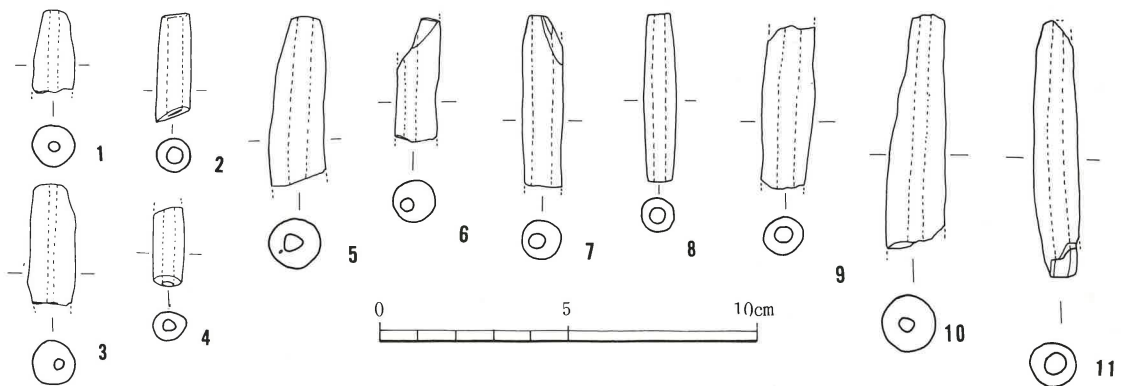
青磁B類（第173図26～38・40～44） 口縁部が直線的に外傾する椀で、口縁端部が外反するものもある。27・31は外面に楕目のある椀で、緑色味のある青色の同安窯系青磁である。これに対し、26・27は内面に蓮華文・劃花文があり、28・29・35の外面には鎬蓮弁がある。釉は青色やオリーブ色で龍泉窯系青磁である。また第173図36・40の口縁部には輪花があり、44の見込み部には「金玉満堂」のスタンプ文がある。これらの遺物の釉は白青色・薄緑青色で龍泉窯系と考えられる。

青磁C類（第173図39） 小破片であるが、内面に稜があり壺の肩部と考えられる。釉は薄青色である。

青磁D類（第173図45～47） 45の器種はわからないが、上面に径1.6cmの穿孔があり、そこを中心同心円状に凹線が廻る。釉は外面に薄くかかっている。46・47は合子の蓋と身である。体部には蓮弁状の文様が付き、釉は水色で身の蓋受け部と底部以外に釉がかかっている。

3) 土錘（第174図）

土錘はA・B-2・3区など調査区の北端部で出土したものが目立つ。完形品は少ないが、破片から想定すると、形態は同じであるが小型と大型に分類できそうである。具体的には図の2・4・8が前者で、完形品の8は長さ4.5cm、最大径0.9cm、重さ7gである。後者は残りであるが、完形品に近い11は長さ6.9cm、最大径1.2cm、重さ23gであり、さらに大きい5や10は30gを超えるものと考えられる。これらは漁網錘であろう。



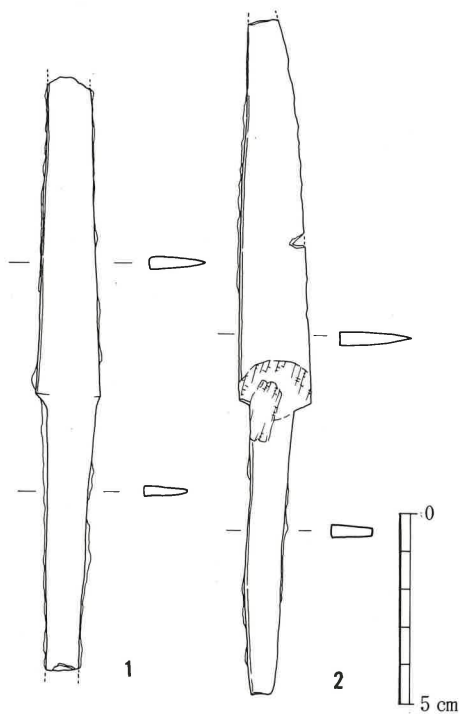
第174図 佐知遺跡出土土錘実測図

4) 鉄 器 (第175図)

A-7区から出土した2点の短刀は、近くに中世墓である17号遺構があり、これに関連する可能性もある。

1は径尻と刀身の先端を欠く。残された径部は長さ7cmで、平造り、丸棟の刀身の長さは8.5cmである。

2は刀身の切先を欠く呑口式の短刀である。径部は長く7.7cmで、関部は明瞭で木質が付く。刀身は平造りで棟は平らである。残された長さは10cmである。



第175図 佐知遺跡出土鉄刀実測図

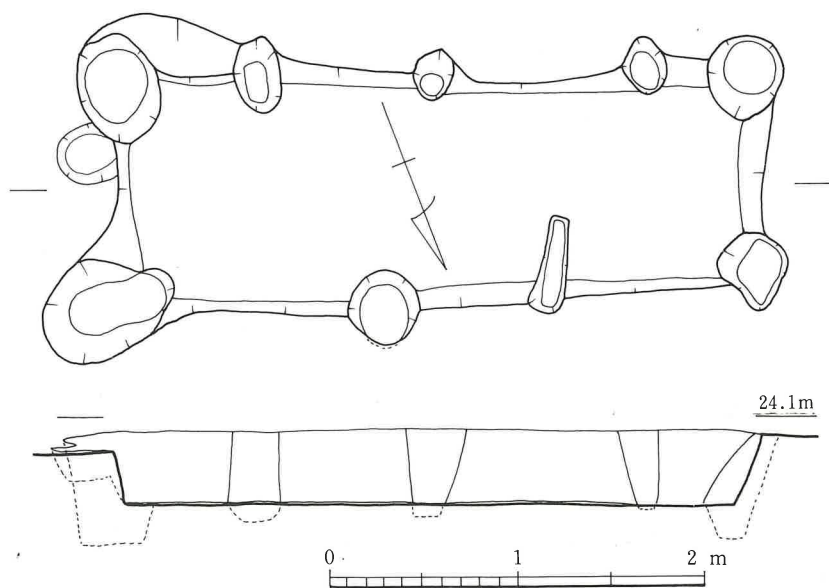
第6節 近代の調査

佐知遺跡の調査中に比較的新しい大型のふたつの竪穴遺構を検出した。完掘した結果両者とも形態が類似していることがわかった。しかし、覆土の状態から新しい時期のものであることは予想できたが、遺物が出土しないため時期の決め手が無かった。そこで周辺の住民や年配者に聞き込みをした結果、太平洋戦争時の防空壕であることがわかった。

1 遺構

1) K-1 遺構 (第176図)

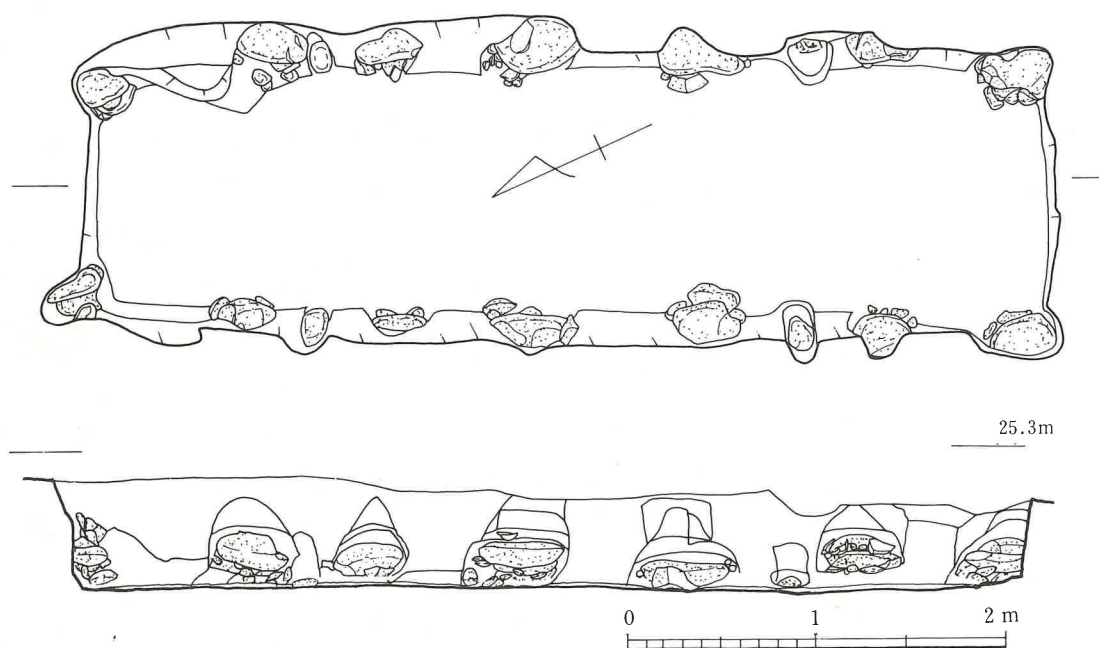
B-15区で検出した遺構で、検出面での規模は東西3.44 m、南北1.2 mで、深さ約40 cmで平坦な床面に達する。柱穴は壁の四隅を挟り込むように掘られ、さらに南壁に三ヵ所、北壁に二ヵ所、柱穴が壁に掘り込まれている。これらの柱穴は古い時代のそれに比較すると浅く、四隅の柱穴でも床面から20 cm、他の柱穴でも10 cmである。



第176図 佐知遺跡K-1 遺構実測図

2) K-2 遺構 (第177図)

A-12からA-13にかけて検出した遺構で、検出面での規模は東西1.6m、南北5.1mである。その面から約50cmの深さで平坦な床面に達する。柱を据える部分は、人頭大の扁平な川原石を壁に挟りこんで置き、その下には拳大の小石を根じめのために埋め込み、安定させている。配置はまず四隅に据え、東壁・西壁に一部乱れはあるものの、90cm間隔でそれぞれ四カ所に東西対称になるように置いている。さらに、柱を支える礎石とは異なる構造の石も四カ所で認められる。それは東西両壁の両端からそれぞれ1.3mの位置にあるもので、礎石の石は小さく拳大である。



第177図 佐知遺跡K-2遺構実測図

第3章 ま と め

第1節 各時代の遺構の時期

1 縄文時代

(1) 縄文時代後期

九州の縄文時代後期の土器編年は肥後平野の遺跡を中心に小林久雄により基礎作りがなされ⁽¹⁾、以後賀川光夫⁽²⁾・前川威洋⁽³⁾により検討や肉づけがされ、最近では後期前半については田中良之・松永幸男⁽⁴⁾、後半については富田紘一⁽⁵⁾・高橋信武⁽⁶⁾・宮内克己⁽⁷⁾により細分が試みられている。佐知遺跡のある東九州でもこうした編年研究の流れのなかで、賀川光夫⁽⁸⁾・坂本嘉弘⁽⁹⁾・後藤一重⁽¹⁰⁾により検討されている。

こうした研究の結果、後期初頭の土器としては中期系の西和田式土器・瀬戸内系の中津式土器・福田KⅡ式土器、前葉の土器は小池原上層式土器・鐘崎式土器、中葉は北久根山式系土器・西平式土器、後葉は三万田式土器、末葉は御領式土器と大枠で設定されている。佐知遺跡からはこれらの型式のうち、御領式土器以外は全て出土している。しかし遺構から出土したものはまとまりのあるもので、時期が限定される。そこでこの成果をもとに佐知遺跡の縄文後期の遺構の時期を考える。

1) 4号遺構

4号遺構出土の土器は口縁部と胴部に文様帯が分かれ、頸部は広い無文帯となっているものが主体を占める。文様は第6～11図のように、巻貝条痕の器面調整の上に縄文・疑似縄文を施文し、その上に沈線で直線的な文様を描いている。こうした土器は北久根山式土器に多く見られる特徴で、この型式に先行する小池原上層式土器・鐘崎式土器は口縁部文様帯と胴部文様帯が未分化で、文様も磨消縄文が多く沈線も太い。また後続する西平式土器は頸部の文様帯がさらに拡大し、磨消が顕著になり、器壁は薄くなる。このため4号遺構は後期中葉と考える。

2) 16号遺構

16号遺構の出土遺物は4号遺構に比較すると少ない。しかし土器の文様は明らかに異なる様相を見せる。すなわち第22～24図の太い沈線のみで描く土器や磨消縄文土器は4号遺構には見られず、形式的には先行するもので小池原上層式土器に該当する。このため16号遺構は後期前葉に属する。

3) 40号遺構

40号遺構からの出土土器は複雑で多様である。土器型式も第29図1～3の小池原上層式土器、第30図5～10・第31図1～9の鐘崎式土器、第29図4～16の北久根山式系土器・第33・34図の西平式土器、第35図1～7の三万田式土器など数型式が含まれる。このうち数量的に多いのは鐘崎式土器と西平式土器である。しかし新しい型式が含まれるため遺構の時期は明確にできな

い。

4) 小竪穴遺構

落し穴と考えられる J-1～6 遺構は出土遺物も少なく、出土した遺物も流れ込みによるもので遺構と直接的に関係するものはない。しかし弥生時代・古墳時代の遺構と切り合う J-4 遺構は明らかにそれより古く、出土遺物も縄文後期に限られることから、この時期に機能していたと考えて間違いはなかろう。そこで遺物の出土した J-5～8 の 4 つの遺構を見ると、J-5 遺構は鐘崎式土器が出土しており後期前葉と考えられ、J-6 遺構は条痕文土器が 1 点出土したのみで、後期前葉から中葉と考えられる。J-7 遺構は小破片が数点出土しているが第 44 図 4 は小池原上層式土器であり、これも後期前葉と考えられる。J-8 遺構はほぼ完形品で口縁部と胴部の文様帯が分離し、文様も疑似縄文を磨消縄文風にしている。型式的には北久根山式系土器にあたり後期中葉である。

2 弥生時代

弥生時代の遺物は前・中・後期と全時期出土している。しかし、遺構として検出できたのは中期と後期である。

(1) 弥生時代中期

弥生時代中期の土器編年は 1972 年に小田富士雄が研究史を総括して以後、片岡宏二・田崎博之・武末純一により内容の再検討や細分化・地域性の研究が試みられている。大分県でも宇佐平野で調査した弥生中期の墓地群の小児甕棺や祭祀用竪穴出土土器を基に土器の編年や地域性の研究が行なわれている。⁽¹⁵⁾ここでは、その成果を基に時期の検討をする。

1) 22号遺構

22号遺構から出土したものは流れ込みによる土器ばかりで、比較的安定した状態で出土したのは第 75 図 6 の長頸壺である。この他甕形土器やその底部も出土しており、これらから時期を想定すると、甕形土器の口縁部は跳ね上がり状になり、胴部は一部を除き張る。また口縁部下に一条断面三角形の突帯が廻るものもある。さらに底部の厚さは薄くなっている。特に 6 の土器は遠賀川以東の弥生中期の特徴的なものである。以上の土器は須玖式土器にあたり弥生中期中頃から後葉と考えられる。

2) 小竪穴遺構

佐知遺跡では貯蔵穴と考えられる弥生中期の小竪穴遺構がいくつか検出された。

Y-1 遺構からは甕形土器が出土している。口縁部は跳ね上がり状になり、胴部は張る。底部は 22 号遺構のものに比較するとさらに薄くなっており、須玖式土器でも新しい傾向が見え、中期後半でも新しくなると考えられる。

Y-2 遺構の出土土器も甕形土器ばかりで、口縁部の形態も跳ね上がり口縁であるが、底部

の形態はY-1 遺構より古い傾向が認められる。このため型式的には須玖式土器であるが、中期中頃と考える。

Y-3 遺構からは甕形土器と高坏が出土している。甕形土器は口縁部が如意状の端部を跳ね上がり状にしたもので、底部は中期初頭の城ノ越式土器の影響を残し厚い。このため中期前半と考える。

Y-4 遺構の出土遺物も甕形土器のみであるが、口縁部は跳ね上がり状で、底部はY-2 遺構の土器に類似する。このため時期もほぼ同じで中期中頃と考える。

Y-5 遺構の土器は甕形土器の口縁部のみである。2点出土しているが、同一固体の可能性もある。その形態は口縁部下に三角突帯が廻るものの、Y-1・2 遺構出土のものと類似し、中期中頃から後半と考えられる。

Y-6 遺構は出土土器に良好なものは少ない。遺構中程から出土した甕形土器は他の小竪穴遺構のものとは異なり丹塗りの「T」の字口縁である。口縁部下に「M」字突帯の廻る甕形土器は須玖式土器の典型で中期中頃にあたる。

Y-7 遺構の出土土器も小破片が多く良好なものはない。図化できたのは甕形土器の口縁部と壺形土器の胴部である。甕形土器の口縁部は緩い跳ね上がり状で、壺形土器の胴部には断面「コ」の字の突帯が廻る。このような土器は中期前半に見られるものである。

(2) 弥生時代後期

大分県での弥生時代後期の土器編年は最近の調査の増加に伴い多くの資料が蓄積され、豊後地域を中心に研究されている。⁽¹⁶⁾ 佐知遺跡のある豊前地域も宇佐平野を中心に資料がふえ、福岡県側でも細分化や新しい土器型式の設定がされている。⁽¹⁷⁾ そこで、弥生時代後期の時期については、これまでの研究史と最近の北部九州や豊後側での成果を参考にしながら考える。

1) 13号遺構

13号遺構からの出土土器は少ないが比較的大きな破片がある。器種は甕形土器と鉢形土器で、器面調整に削りが見られるなど新しい時代の要素も認められる。しかし器形は甕形土器2点とも長胴で底部には不安定な平底が残る。このため時期は後期後葉と考える。

2) 18号遺構

出土土器はほとんどなく、わずかに胴部の小破片が見られるのみである。このため、時期を決定できる積極的な資料に欠ける。わずかな土器を見ると後期の甕形土器のようである。

3) 28号遺構

第94図の土器は28号遺構内の土坑からまとまって出土したものである。器種は球状に胴部の張る甕形土器と鉢形土器である。5や7の底部は平底が残るが、1・3の胴部の張りは新しい傾向が見られ、6の器面には叩き痕もある。そこでこの遺構の時期は後期後葉から終末と考える。

4) 29号遺構

29号遺構は佐知遺跡の弥生後期のなかでもまとまった土器を出土した遺構である。器種も第98～100図のように壺形土器・甕形土器・高坏・鉢形土器・器台と揃っている。甕形土器の胴部はまるみを帯びるものの長胴気味で、底部は不安定な平底と丸底が見られる。また甕形土器の一部と器台には叩き痕もある。また高坏も屈曲部から口縁端部までが短い。しかし、つぎに新しい様相である内面を篋削りで仕上げるものではなく、これらの土器は後期終末に位置づけられる。

5) 30号遺構

遺構の残りが悪いので遺物は小破片が出土したのみで、図化できたのは第102図の3点のみである。このうち高坏は29号遺構のものに近く、時期もほとんど同じと考え後期終末に位置づける。

6) 39号遺構

39号遺構からは多量の土器片が出土した。器種も豊富で第106図の複合口縁の壺形土器や甕形土器・高坏・鉢形土器・器台などがある。複合口縁は短く、高坏は口縁端が内湾するタイプである。また甕形土器の底部は不安定ながらもはっきりした平底である。このような土器の組成は後期中葉と考える。

7) 小竪穴遺構

弥生時代後期の小竪穴遺構はY-8遺構のみである。この遺構からは胴部に刷毛目原体による刻み目の付く断面「コ」の字の突帯が廻る壺形土器が出土している。この土器は豊前地方では後期後葉から見られるもので、この遺構からは平底の土器も出土しており、時期もその頃と考える。

3 古墳時代

古墳時代の遺構は10軒の住居跡と考えられる竪穴遺構がある。第2章第4節で述べたようにこれらの遺構は須恵器・カマド出現以前と以後で前期と後期に分けた。

(1) 古墳時代前期

古墳時代前期の北部九州での近年の土器編年は畿内地方の庄内式土器の伝播との関係で古墳時代開始が位置付けられている。以後、須恵器出現までの土器編年は武末純一⁽¹⁸⁾・柳田康雄⁽¹⁹⁾などにより試案が出され、大分県でもこの案をもとに小柳和宏が編年を試みている。それによると、古墳時代の開始からⅠ・Ⅱ・Ⅲ期に分け、さらに各期をA・BあるいはCに細分している。そして実年代はⅠ期の開始の時期を3世紀末から4世紀初頭とし、Ⅲ期の終わりを5世紀の後葉まで下らない時期と考えている。

1) 7号遺構

この遺構からは遺物の出土はなく、明確には時期を決めることはできない。あるいは18号遺

構のように弥生時代後期に属する可能性もある。

2) 8号遺構

二重口縁の壺形土器の口縁部のみが出土している。この壺形土器はいわゆる山陰系と言われるもので、口縁部の外反するこのタイプは山陰では古墳時代前期でも後出するもので後半に位置付けられている。⁽²¹⁾

3) 10号遺構

遺構の大半が調査区外に延びるため調査面積が狭い。このため出土遺物も少ないが、甕形土器の破片がまとまって出土した。この土器は球状にふくらむ胴部の内面が篋削りであり、他に出土した同じ器形になる甕形土器の口縁部の端部は肥厚する。このような特徴は古段階の布留式土器に見られるもので、古墳時代前期前半と考える。

4) 14号遺構

遺構の一部が調査区外に広がるため完掘はできなかったが、多くの土器片と第120図の完形品の壺形土器・鉢形土器・小型丸底壺が床面直上から出土した。それによると小型丸底壺の口縁部は外傾し、壺形土器の胴部は球状に張る。また流れ込みの甕形土器の中には口縁端部が肥厚するものや肩部に波状文のあるものがある。これらの特徴は10号遺構と同じで古段階の布留式土器と考えられ古墳時代前期前半と考える。

5) 19号遺構

完掘した古墳時代の住居跡で、完形品の甕形土器・高坏・小型丸底壺をはじめ、多くの土器片が出土した。第122図がそれであるが、この中には5の山陰系の土器も含まれる。時期は甕形土器の口縁部が外反するが端部が肥厚しない点、小型丸底壺の口縁部が直口気味になる点、高坏の形態などから新段階の布留式土器と考えられ、古墳時代前期後半の5世紀前半から中頃と考える。

(2) 古墳時代後期

古墳時代後期の時期はほとんどが須恵器の編年で決められている。九州での須恵器の編年は小田富士雄により本格的に編年研究が開始された。⁽²²⁾ その一方畿内陶邑の調査が進み、その編年研究も完成度の高いものになっている。⁽²³⁾ 先ごろ刊行された佐知遺跡と係わりの深い遺跡と考えられる上ノ原横穴墓群の報告書ではこれを整理しており、ここではその案に従い時期を考える。⁽²⁴⁾

1) 2号遺構

この遺構からは、破碎された状態で土師器の甕形土器と須恵器が出土した。須恵器は坏身であるが古い様相を呈し、陶邑のTK47に類似し5世紀末と考えられる。

2) 11号遺構

この遺構の遺物の出土状態は特異で、置き忘れられたように土師器の坏・甕形土器・甗・椀などの各器種がカマド周辺から、住居跡の南から須恵器の坏が出土した。須恵器はこの坏身1

点のみであるが、2号遺構の坏と類似し、5世紀末と考える。

3) 20号遺構

20号遺構の約半分は調査区外になる。また、遺構内からの出土土器も少なく、須恵器が数個体出土したのみである。須恵器は坏身であるが、口縁部の形態から6世紀後半から末と考える。

4) 21号遺構

21号遺構から出土した土器は第139図である。2～9が床面直上で出土したが、他は流れ込みによる破片である。2～7は11号遺構出土のものと類似し、破片であるが須恵器の坏身の古いタイプのものである。このため時期もほぼ同と考えられ、5世紀末と考える。

5) 27号遺構

遺構内からは焼土塊が出土し、それと一緒に多量の須恵器の坏身と坏蓋、土師器の甕形土器が出土した。須恵器の坏身は口径が約12cmのものが多く、坏蓋の口縁部と天井部の境に小さな段が認められることから21号遺構より古く6世紀中頃に位置づけることができる。

4 古代・中世

豊前地方の古代・中世の土器の編年は近年の調査の増加に伴い資料が蓄積され、その研究も急激に進んでいる。大分県でも宇佐平野や中津平野を中心に編年研究が進行しており、最近では宇佐神宮境内の「弥勒寺」の報告書で8世紀から16世紀にわたる土器編年案が提示されている。⁽²⁵⁾ここではこれらの成果を基に時期を考える。⁽²⁶⁾

(1) 古代

1) 5号遺構

遺構が深いわりには出土遺物は少ない。しかも全て流れ込みで破片ばかりである。しかし高台の付く土師質土器の碗が出土していることから11世紀と考える。

2) 6号遺構

形態の判る出土土器は土師質土器の皿が2点ある。時期を決める資料としては質量に欠けるが黒色土器B類も出土していることから5号遺構と同じ11世紀代と考える。

(2) 中世

1) 1号遺構

出土遺物は小破片のみで時期を決めることはできない。

2) 3号遺構

先に述べたように、人為的な遺構ではない可能性もある。しかし、出土土器は瓦器など安定した出土状態のものもあり、それによると13世紀前半と考えられる。

3) 9号遺構

上部構造とも言える石積みの中を中心に遺物が出土した。出土遺物は小破片ばかりで多時期にわたるが、高台の退化した瓦器碗が含まれることから13世紀と考える。

4) 12号遺構

小破片が多く、図化できるものは少ない。しかし、5点の瓦器椀がありこの内3点の底部には12号遺構と同じ退化した高台が付く。このためこの遺構も13世紀と考える。

5) 17号遺構

この遺構の時期の決め手となる資料は土師質土器の小皿・青磁椀など考古学の編年研究の対象となっているものがある。また、日本刀・太刀の年代研究もされている。土師質土器の小皿は口径が8cm前後で宇佐平野の編年によると、13世紀前半にあたる⁽²⁷⁾。また劃花文のある青磁椀は太宰府での研究によると12世紀代とされている⁽²⁸⁾。一方太刀は、切っ先の張りや柄と刀身の角度など南北朝期の様相が見られる⁽²⁹⁾。

このように、遺物により推定年代が異なるためそれぞれの遺物を検討する。まず輸入陶磁器は貴重品のため伝世の可能性がある、太刀の年代は奉納品や伝世品によるものが多く、出土品の類例は少ない。また刀身24cmの吞口式の短刀は鎌倉時代から出現するものである。さらにこの遺構と係わりの深い遺構である石組列や近くで検出した遺物集中出土部からの土器は13世紀前半に位置付けられている。このことから17号遺構は13世紀代と考える。

6) A-7区遺物集中部

出土土器は土師質土器の小皿・坏・瓦器椀・輸入陶磁器が出土しているが、土師質土器の椀は認められない。また、黒色土器B類の小破片も出土しているが混入の可能性が高い。このような様相ををみせる遺構は宇佐神宮弥勒寺のSE-3遺構があり13世紀に位置付けられている。

以上、遺構出土の遺物のほか、多量の古代・中世土器や輸入陶磁器が出土している。これらは弥勒寺や太宰府の編年によると11～13世紀によるものが主体を占める。

註(1) 小林久雄「九州の縄文土器」人類先史学講座第11巻4号 1939

(2) 賀川光夫「九州」日本考古学講座3 縄文時代 1956

(3) 乙益重隆・前川威洋「縄文後期 九州」新版考古学講座3 先史文化 1969

(4) 田中良之・松永幸男「広域土器分布圏の諸相—縄文時代後期西日本における類似様式の並立—」
古文化談叢第14集 1984

(5) 富田紘一「三万田式土器」縄文文化の研究4 1981

(6) 高橋信武「片粕系土器の細分に向けて」赤れんが 創刊号 1981

(7) 宮内克己「三万田式土器の研究」古文化談叢第8集 1981

(8) 賀川光夫「九州東西部」日本の考古学II 縄文時代 1965

(9) 坂本嘉弘ほか「石原貝塚・西和田貝塚」宇佐市教育委員会・大分県教育委員会 1979

(10) 後藤一重「内河野遺跡」野津川流域の遺跡VI 野津町教育委員会 1985

(11) 小田富士雄「入門講座 弥生土器 九州」考古学ジャーナル76・77・79・82・83・84 1973～1974

(12) 片岡宏二「大板井遺跡II」小郡市教育委員会 1982

(13) 田崎博之「須玖式土器の再検討」史淵 第122輯 1985

(14) 武末純一「須玖式土器」弥生文化の研究4 弥生土器II 1987

(15) 小倉正五・佐藤良二郎「駅館川流域遺跡群発掘調査報告I」宇佐市教育委員会 1986

- (16) 玉永光洋「東九州における弥生式土器研究Ⅰ—安国寺式土器の再検討—」古文化談叢第5集 1978
以降主として大野川流域の集落跡の調査により細分化が進んでいる。
- (17) 小田富士雄ほか「福岡県北九州市小倉南区・高島遺跡」古文化談叢第3集 1976
柳田康雄「高三瀨と西新町土器」弥生文化の研究4 弥生土器Ⅱ 1987
- (18) 武末純一「福岡県・早良平野の古式土師器」古文化談叢第5集 1978
- (19) 柳田康雄「三・四世紀の土器と鏡」古文化論集 森貞次郎博士古稀記念 1982
- (20) 小柳和宏「土器の編年—古式土師器を中心にして—」『楠野』大分県文化調査報告第63輯所収 大分県教育委員会 1983
- (21) 原宗寿雄「『山陰地域』における古墳形成期の様相」島根県考古学会誌第1集 1984
- (22) 小田富士雄「九州の須恵器」世界陶磁全集2 日本古代 1979
- (23) 田辺昭三「須恵器大成」 1981
- (24) 村上久和「上ノ原横穴墓群Ⅰ」大分県教育委員会 1989.3
- (25) 小倉正五「宇佐地方の瓦器碗について—型式・編年に関する試案—」古文化談叢第14集 1984
- (26) 宮内克己「出土土器の編年」『弥勒寺』所収 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館 1989
- (27) 註(25)に同じ
- (28) 横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について—型式分類と編年を中心にして—」九州歴史資料館研究論集4 1978
- (29) 常石英明「日本刀の鑑定と鑑賞」 1967

第2節 佐知遺跡をめぐる諸問題

佐知遺跡はすでに何度も述べたとおり縄文時代後期から中世までの遺構・遺物をほとんど途絶えることなく出土する大分県でも希有な遺跡である。また、遺跡のある三光村はもとより周辺の中津市、山国川村岸の福岡県太平村などでは古代の新羅系・百済系の古瓦を出土する九州初期寺院跡の点在する地域として知られていたが、近年さらに重要な遺跡の調査が相次いでいる。ここではそれらの遺跡と佐知遺跡の係わりなど、時代ごとに問題点を考えまとめとする。

1 縄文時代

(1) 後期

1970年代までの周防灘に面する豊前地方の縄文時代後期の遺跡は宇佐平野や中津市周辺の貝塚遺跡と幾つかの遺跡が知られているだけであった。⁽¹⁾しかし、1980年代になって圃場整備事業や国道建設など大規模な開発が相次ぐと、これまでこの地域で不明であった住居跡が次々に検出され縄文時代後期の遺跡が集落として捉えられるようになった。佐知遺跡でも時期がそれぞれ異なるが、3基の住居跡を確認した。

そこで、周防灘に面する豊前地域とその周辺の縄文時代後期前半の遺跡の立地を第178図の図上に落としてみると、北九州市では下吉田遺跡・菊水町遺跡、荏田町浄土院遺跡、豊津町節丸西遺跡、築城町松丸遺跡、椎田町山崎・石丸遺跡、豊前市吉木遺跡・中村石丸遺跡、新吉富村垂水遺跡、大平村原井三ツ江遺跡・下唐原遺跡・土佐井遺跡などがある。これら全ての遺跡で住居跡が検出されているわけではないが、集落の存在は想像に難くない。また、遺跡の立地する地形は求菩提山と周辺の山々や平尾台などから周防灘に向かって延びる尾根と尾根の間を流れる河川沿いの沖積地という共通点をもつ。

このことは、地形のやや異なる大分県側も同じで、山国川沿いの三光村佐知遺跡、犬丸川流域には中津市棒垣貝塚・植野貝塚があり、棒垣貝塚では住居跡も検出されている。宇佐市では五十石川流域の西和田貝塚、伊呂波川流域の尾畑遺跡、寄藻川流域の石原貝塚、田笛川流域の立石貝塚がある。さらに宇佐平野を貫流する駅館川上流の安心院町には飯田二反田遺跡があり、東に隣接する豊後高田市の桂川沿いには森貝塚・来縄貝塚・上野遺跡が点在している。

こうしてみると、縄文時代後期前半のこの地域は河川を中心に幾つかの領域形成が成立しているかのように見える。しかも各遺跡で検出された住居跡の時期は土器型式で小池原上層式土器から西平式土器までの間に納まる。

周防灘沿岸のこの地域は、これまで縄文時代中期の遺跡は見つかっておらず、それ以後は古く遡っても縄文時代後期初頭の瀬戸内系土器である中津式土器・福田KⅡ式土器までである。九州ではこれらの土器に象徴される東日本的な文化の伝播により縄文時代後期が始まると理解されている。その受容がある程度咀嚼した段階で、北部九州の地域的特色の土器である小池原

上層式土器・鐘崎式土器が成立する。この時期は豊前地域の縄文時代後期の形成時期と同時期であり、これらは無関係とは考えられず、新しい生活様式や文化体系の受容による安定的な社会の形成が、これらの集落や象徴的な土器の成立に関わったものと考ええる。

今後の研究はこれらの集落間の土器を含めた遺物の比較、自然遺物の分析による生業の復元、海岸部にある小規模貝塚との関係、他地域との交流問題などこの地域の縄文時代後期社会の実態を明らかにしてゆかなければならないと考える。

(2) 晩期

縄文時代晩期の遺物の主体は土器である。しかし明瞭な遺構はなく、全て包含層や新しい遺構からの出土である。時期は晩期前半はなく、中葉から後半である。この時期は北部九州に本格的な稲作が伝播する頃であるが、周防灘沿岸ではこれまで、九州の内陸部に較べると遺跡の数は少なく不明な部分が多かった。しかし近年北九州市長行遺跡・貫川遺跡など低地性遺跡が調査され、縄文時代晩期の遺跡が注目されている。大分県でも宇佐市尾畑遺跡で縄文時代後期後半から晩期にかけての遺物が多量に出土しており、これまで縄文時代晩期の資料の貧弱だったこの地域の空白を埋めることができると考える。佐知遺跡の資料もこれらを補足するものと言える。

2 弥生時代

(1) 前期

佐知遺跡から出土した弥生時代前期の遺物は極めて少ない。しかし、B-9区の包含層中から出土した細形銅剣の一部は注目される。この資料は、国内出土の同類のものに比較しても身幅の増大傾向が認められず、同じタイプの類例は知られてない。時期は銅剣の変遷からみても最古式のものに近く、弥生時代前期から中期初頭まで遡る可能性が強い。そこで、その時期の出土土器を見ると前期の後半から末のものが多く、Y-3遺構のような中期初頭の貯蔵穴も検出されている。細形銅剣もこの時期と考える。

次に青銅祭祀武器の出土分布からみた位置を考えると、山国川の沖積地周辺の大分県中津市や三光村、福岡県豊前市・大平村・吉富町・新吉富町の範囲では大平村東友枝から中広銅矛が1口出土しているのみであった。⁽¹⁾佐知遺跡の細形銅剣はこれにさらに新資料を加えるわけであるが、銅剣はこれまで周防灘沿岸から出土しておらず、伝播のルートなど興味深い問題が含まれる。

(2) 中期

弥生時代中期の佐知遺跡の遺構と遺物は円形住居跡1基、貯蔵穴と考えられる土坑6基、方形竪穴1基とそれに伴う遺物が出土した。弥生時代中期の円形住居跡は北部九州を中心に広範囲に見られるもので、宇佐市台ノ原遺跡、中津市森山遺跡などでも調査されている。しかし、住居跡の壁に沿って柱穴のある佐知遺跡例は、行橋市の下稗田遺跡の例に類似している。また、

貯蔵穴は弥生時代前期末から中期初頭にかけて北部九州で爆発的に出現する断面フラスコ状のタイプがある。豊前地域でも福岡県行橋市の下稗田遺跡・前田山遺跡、大分県宇佐市台ノ原遺跡、安心院町宮ノ原遺跡などが知られている。しかし、このタイプの貯蔵穴は弥生時代中期になると北部九州では急激に姿を消す。佐知遺跡に近い宇佐平野やその周辺はより顕著で中期中葉以降のフラスコ型貯蔵穴は知られてない。Y-1～3遺構の小型円形堅穴、小型隅丸の平面観のY-5遺構などは形態変化を遂げた末期の貯蔵穴と考えられる。

遺物のなかで、数は少ないが「T」字口縁の須玖式土器の甕形土器の胴部に三条のM字突帯が巡るものが出土した。この土器はこれまで宇佐平野の野口遺跡や樋尻道遺跡などで出土しており、この地域の特徴的なものとして認識されていた。佐知遺跡からの出土で、このタイプの分布が宇佐平野のみでなく中津市のある沖代平野周辺まで及ぶ可能性が強くなった。

(3) 後期

佐知遺跡の弥生時代後期の遺構は住居跡4基と小堅穴1基である。時期は後期でも後半から終末にかけてで、形態は全て方形である。この時期は集落の拡大時期にあたるためか大分・福岡県の各地で多くの集落跡が調査されている。佐知遺跡の周辺でも山国川の対岸の大平村上唐原遺跡、下流の上万田遺跡、宇佐平野では朝鮮式の銅鐸を出土した宇佐市別府遺跡や青銅製鋤先を出土した上浦遺跡、葛原遺跡などが代表的な遺跡である。佐知遺跡の第74図13の無文土器とした遺物は古いタイプというよりも後期無文土器に類するものであり、その関係が注目される。⁽²⁾

周防灘沿岸で検出される堅穴住居跡は全て方形で、中期の大型の円形堅穴住居跡とは形態を異にする。また、佐知遺跡の4基の住居跡は13・39号遺構の2本柱の小型のものと、29・30号遺構の壁沿いにベット状遺構の巡る大型のものがあり、中期の住居跡に較べると分化傾向が認められる。

遺物は土器・石器・鉄器があるが、土器は壺・甕・高杯・鉢・器台で構成され、甕の一部と沓形器台には新しい器面調整である叩き目が認められる。鉄器は鉄鍬・鉈・鉄斧が遺構から出土したもので、包含層からであるが、素環刀・茎のある鉄鍬がある。これらのうち、鉄斧・鉈など加工具の出土は、この地域の石器から鉄器への置換の問題に係わるものと考えられる。

なお、佐知遺跡ではこの時期以降、中世までほとんど途切れることなく生活が営まれていくものと考えられる。

3 古墳時代

(1) 前期

古墳時代の佐知遺跡は須恵器やカマド付き住居が出現する5世紀後半を境に前期と後期に時期区分をして報告した。

前期の時期のわかる遺構は4基の住居跡と考えられる堅穴遺構であるが、10・14号遺構が古

く、8・19号遺構は5世紀代に下るものである。しかし、住居跡の形態は弥生時代後期に主体を占めるようになった方形で中央に炉跡のある竪穴住居の伝統を受け継ぐもので、19号遺構にはベット状遺構も見られる。また、土器の器面調整には弥生時代後期後半から見られるようになった叩きのほか、ほとんどの甕の内面にへら削りがみられるようになる。さらに5世紀代の住居跡から出土した山陰系の土器はこの時期の地域間の情報や文物の交流の範囲を考えるうえで重要である。

この時期から注目されることとして、北に約1km離れた標高35mの上ノ原台地が墓地として使われ始める。1981年と1983年に調査した勘助野地遺跡では方形周溝墓2基・石蓋土壙墓や土壙墓が約40基が検出された。⁽³⁾この他、2基遺存していた幣旗邸古墳群もこの時期と考えられる。1989年に福岡県教育委員会が調査した山国川対岸の大平村上唐原遺跡でも集落に隣接して方形周溝墓が検出されている。このような状況下で考えると、佐知遺跡と上ノ原台地の墓地遺跡は密接な関係があるものと考えられる。

(2) 後期

この時期の佐知遺跡では5基の住居跡が確認された。このうち2・11・21号遺構は5世紀末、27号遺構が6世紀中葉、20号遺構が6世紀後半であり継続する集落であることがわかる。これら時期の違う住居跡であるが、北または西壁の中央にカマドが付き、これまでの竪穴住居とは構造が異なる。このカマド付きの住居跡が豊前・豊後地方に出現する時期は5世紀後半と考えられる。宇佐市別府遺跡では5世紀後半の住居跡に粘土を使わず焚口奥の両側と奥壁に補強用の扁平な川原石を立てたカマドが造られており、大分市植田市遺跡では東壁に粘土によるカマドが造られている。⁽⁴⁾佐知遺跡の5世紀末の3基の住居跡はこれらと同じ時期でカマドをもつ最古のものに近い。しかも11号遺構を除く4基には共通するカマドの機能停止後の処理がされておりカマドの導入にはそれをめぐって新しい祭祀行為も伝播したものと考えられる。

また、このカマドをめぐる最終的な祭祀をなんらかの理由で行っていない11号遺構からは、当時のままの土器が多量に出土した。その組成は甕がカマドにかかったものを含め3点、タイプの異なる甗が1点ずつ、碗が12点、鉢が1点、須恵器の坏が1点であった。この資料は古墳時代の土器組成はもちろん、出土状態は住居跡内の空間利用の問題にも役立つものであろう。

この時期も、上ノ原台地は周辺の集落にとって墓地として重要な位置を占めている。特に1981年から1984年にかけて約80基を調査した上ノ原横穴墓群は、台地の斜面に造られたもので、佐知遺跡の古墳時代後期と対応する。すなわち、上ノ原横穴墓群で最初に造られた横穴墓は5世紀後半で佐知遺跡のカマドを持つ住居跡の最古式のものとほぼ同時期である。そして最も新しい時期に横穴墓に埋葬されたのは7世紀前半である。佐知遺跡も6世紀後半の住居跡を検出しており、遺跡の状況から7世紀まで集落が存続している可能性は強い。

一方、山国川の対岸でも、沖積地に面した尾根の東側斜面に百留横穴群やそれに連なる横穴

墓群が知られており、これに関連する集落跡の存在は弥生時代後期から古墳時代前期の遺跡である上唐原遺跡の調査からも想像できる。

このような状況から、佐知遺跡に面し距離的にも近い上ノ原横穴墓群は密接に係わるものであることは間違いないものとする。

4 古 代

佐知遺跡の奈良・平安時代の遺構・遺物は多くない。奈良時代の遺構は確認できなかったが、遺物は第4図13と第150図3～5の高台付きの須恵器の坏が出土している程度である。しかし、佐知遺跡の周辺では上ノ原台地を挟んで北の中津市には相原廃寺、対岸の山国川沿いの新吉富村には垂水廃寺、東に約5km離れたところには三光村塔ノ熊廃寺⁽⁶⁾がある。これらの寺院は新羅系・百済系の古瓦を出土し、いずれも8世紀代に創建されたものと考えられている。このように、山国川の沖積地周辺は朝鮮系の古瓦を出土する九州の初期寺院の密集地として、豊前地域のなかで特異な位置を占めていたことがわかる。

さらに、上ノ原台地では8世紀の火葬墓が4基検出された。これは墓域として古墳時代の始めから使われてきた上ノ原台地の最後のものである。

平安時代の遺構は、ほぼ直角に交わる11世紀の5・6号遺構の二条の溝がある。両者には前後関係が認められ、しかも形状が異なる。調査は道路工事に伴うため、広い遺跡に対し狭いトレンチを1本入れたに等しい。このため、わずか10数mしか検出できなかった溝状遺構の性格を知ることはできない。

遺物は第167図の1～9の黒色土器A・B類、第168図11・13・16のような高台のしっかりした、内外面丁寧にへう磨きした土師質土器の椀、第172図の玉縁口縁の白磁の輸入陶磁器などがあり、奈良時代に較べると充実している。特に輸入陶磁器がまとまった状態で出土する遺跡は県内に少なく注目に値する。

5 中 世

佐知遺跡の中世の遺構・遺物は比較的まとまりのあるものである。時期は13世紀の鎌倉時代が中心で、14世紀代の遺物は少ない。この時期の重要な成果は17号遺構の中世墓である。

この墓は、第157図のように副葬品は太刀・腰刀・鉄鏃・湖州鏡・和鋏・青磁碗・土師質土器の小皿などである。これに対し、ほぼ同時期の太宰府朝日宮ノ原遺跡の土壙墓からは湖州鏡・青白磁合子・鉛の紅皿・和鋏・竹箆・水晶念珠などが出土した⁽⁷⁾。両中世墓の副葬品には共通するものもあるが、佐知遺跡には武器の副葬品が目立ち、朝日宮ノ原遺跡では鉛の紅皿が目目される。この副葬品の内容の差は被葬者の性別を表すものと考えられ、佐知遺跡は男性、朝日宮ノ原遺跡は女性と考えられる。

次に検出状況から見た17号遺構の性格であるが、先に述べたとおり表土を取り除いたあとに、第158図のように川原石で区画する遺構を検出した。この遺構の川原石の大きさは不揃いで、し

かも積み上げたものが壊れたようにも見えない。しかし、その一方でこの石列は東端で現存の石垣と繋がる。また石列は黒色土の中で検出されたため掘り込みの確認が困難であったが、出土状況から見ると浅い窪みも考えられる。

そこで、この石列を積極的に評価をして、屋敷を取り巻く溝や石積みの壊れたものと考えたと、17号遺構は南西隅に位置する。そうすると、この中世墓は屋敷内の墓ということになる。中世墓の研究によると、この時期には居住する地域の開発に最初にあたった人を屋敷内に埋葬し、屋敷墓として祭ることがあるという。佐知遺跡の例は、被葬者が男性の可能性が強いことから屋敷墓と考える。

なお、古代から中世にかけての佐知地区は宇佐宮とかかわりが深いことがうかがわれる。まず正和3年(1313)に編修された「宇佐託宣集」巻14には欽明天皇の項の宇佐宮の成立に関する説話として下毛郡薩知翁伝説があり、正長元年(1428)の永弘文書によると佐知大膳の屋敷地の北西すみの畠地を貴船敷地として宇佐宮番長職の永弘光世が知行している。また「下毛郡誌」の佐知氏の項には佐知氏は宇佐公池守を祖とし、佐知の翁屋敷が、中津市大貞の薦神社の三角池の池守の館跡であると説明している。

今回の調査で得た13世紀代の遺構や遺物はこうした居館と関連する可能性がある。

6 近代

近代の遺構は2基の防空壕である。K-1遺構とK-2遺構は構造は同じであるが、後者のほうが規模も大きく、川原石なども使い丈夫そうに見える。防空壕にはこのような縦穴タイプと崖面に掘り込んだ横穴タイプそして規模の大きいトンネルタイプがあるが、個人や家族の労働力によるものは前の2者であろう。昭和19年宇佐市柳ヶ浦の宇佐航空隊がはじめて空襲を受けて以来、三光村八面山は進入のための目標となり、しばしば宇佐航空隊や中津市大貞の神戸製鋼所が爆撃や機銃掃射を受けたという。このため進入路にあたる三光村の人々は各家庭で防空壕を掘り万に備え、先祖の位牌や必需品を入れたそうである⁽⁸⁾。

このような近代の戦跡ともいえる遺構も、最近の開発で姿を消しつつある。イギリスやドイツではこうした第2次世界大戦の跡も調査を行なっているという⁽⁹⁾。土地に刻まれた歴史を研究するのが考古学であるならば、こうした遺構も開発に際しては記録として残す必要がある。

註 (1) 岩永省三「青銅の武器—日本金属文化の黎明」九州歴史資料館 1980

(2) 武末純一「慶尚道の『瓦質土器』と『古式陶質土器』—三韓土器の提唱—」古文化談叢第15集 1985
西谷正(九州大学文学部教授)氏より教示

(3) 村上久和ほか「勸助野地遺跡」一般国道10号線中津バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書(1) 大分県教育委員会 1988

(4) 小倉正五・佐藤良二郎「駅館川流域遺跡群発掘調査報告書II」宇佐市教育委員会 1987

(5) 吉田 寛「植田市遺跡II」大分県教育委員会 1989

(6) 1989年・1990年 三光村教育委員会調査

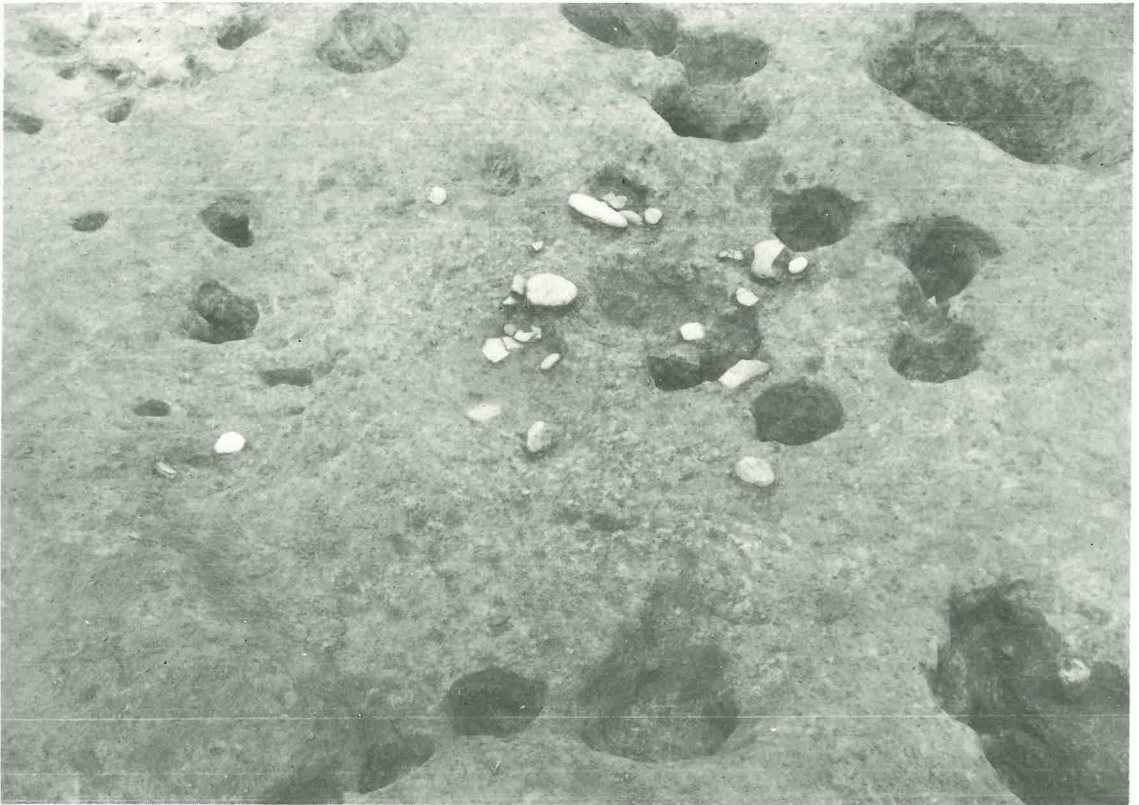
(7) 土居和幸・友岡信彦「日田市朝日宮ノ原遺跡の中世土壇」おおいた考古2 1989

(8) 「三光村誌」三光村 1988

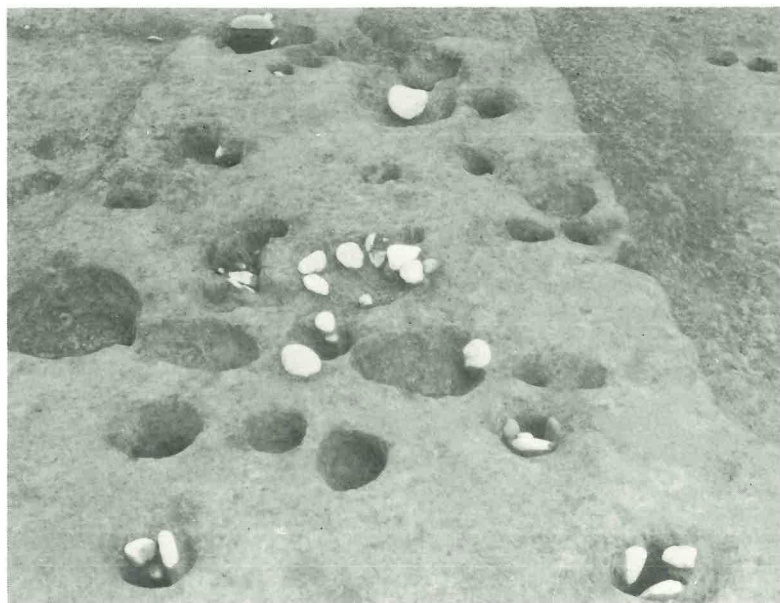
(9) 溝口孝司(ケンブリッジ大学大学院)氏の教示によると追体験もひとつの目的にするという。



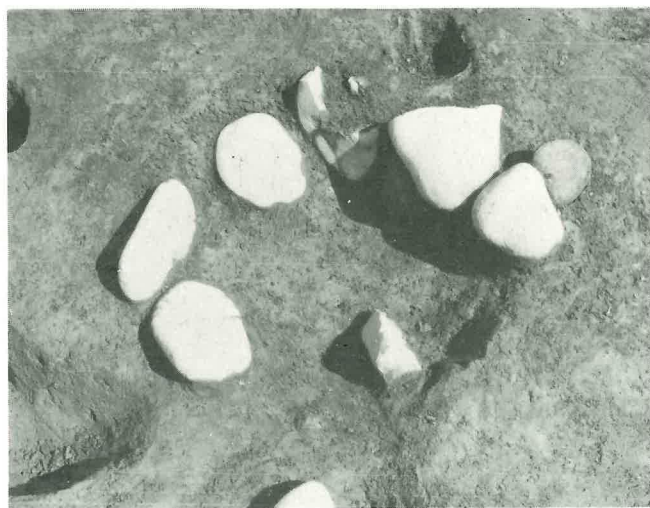
佐知遺跡 4 号遺構遺物出土状態



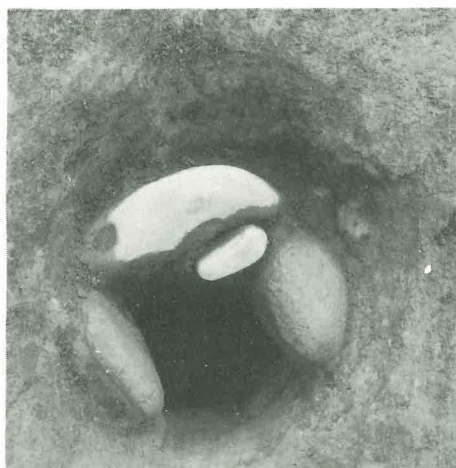
佐知遺跡 4 号遺構



佐知遺跡16号遺構



佐知遺跡16号遺構炉跡



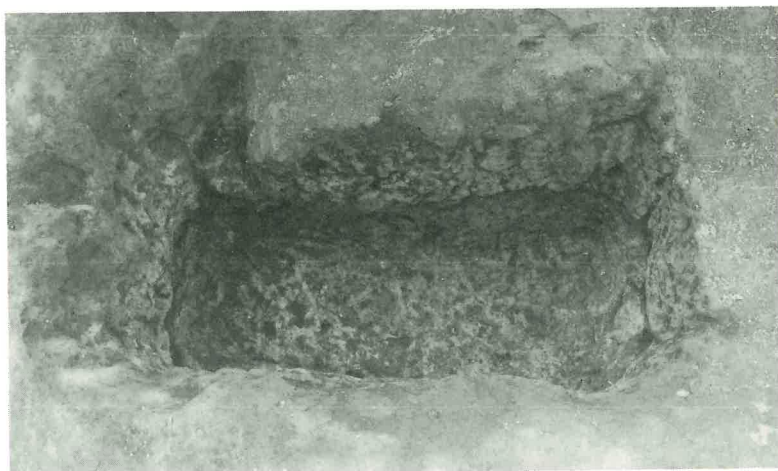
佐知遺跡16号遺構柱穴の根じめ



佐知遺跡40号遺構遺物出土状態



佐知遺跡40号遺構



J-6 遺構



J-5 遺構

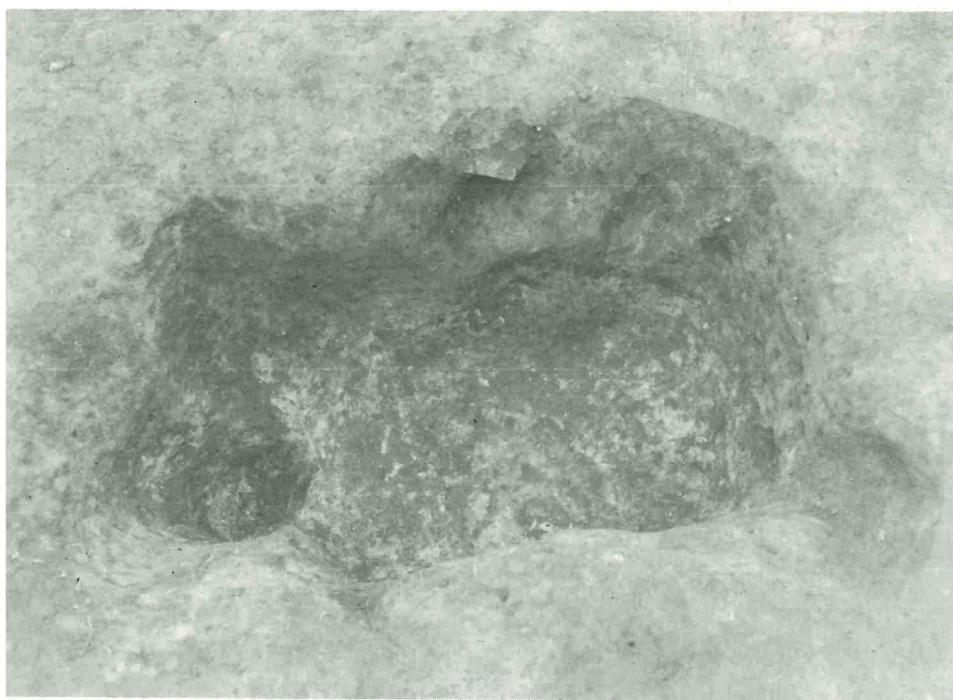


J-3 遺構

佐知遺跡縄文時代小竪穴遺構



佐知遺跡 J-8 遺構遺物出土状態



佐知遺跡縄文時代小竪穴 J-1 遺構



佐知遺跡22号遺構



佐知遺跡Y—5遺構



Y-1 遺構



Y-2 遺構

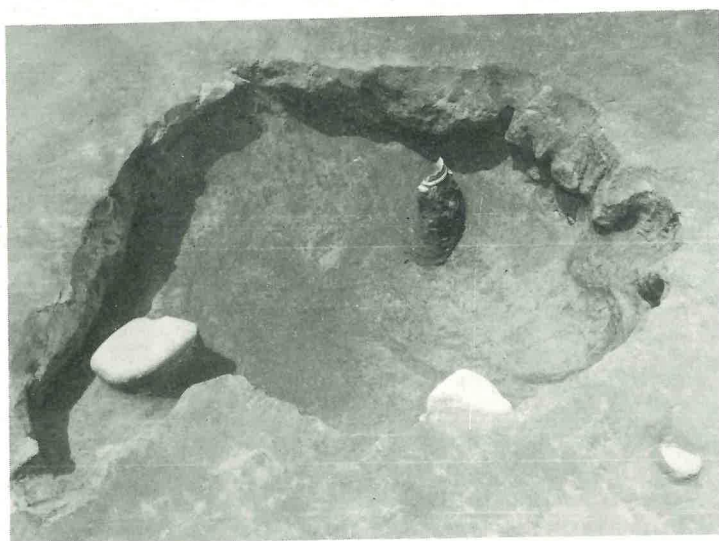


Y-3 遺構

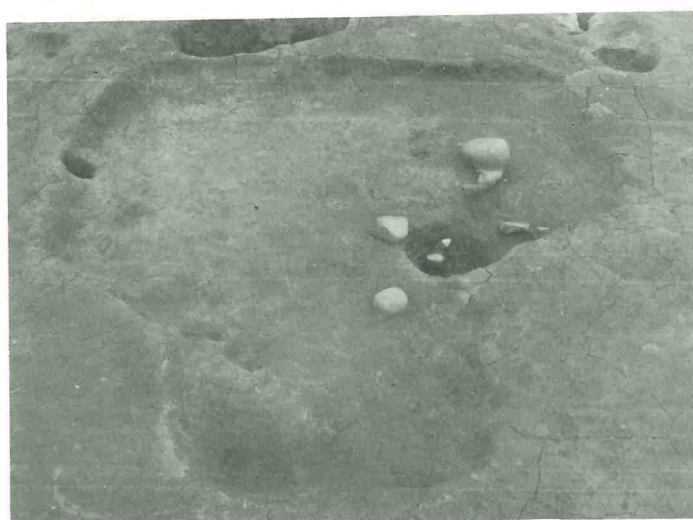
佐知遺跡弥生時代小竪穴遺構(1)



Y-4 遺構

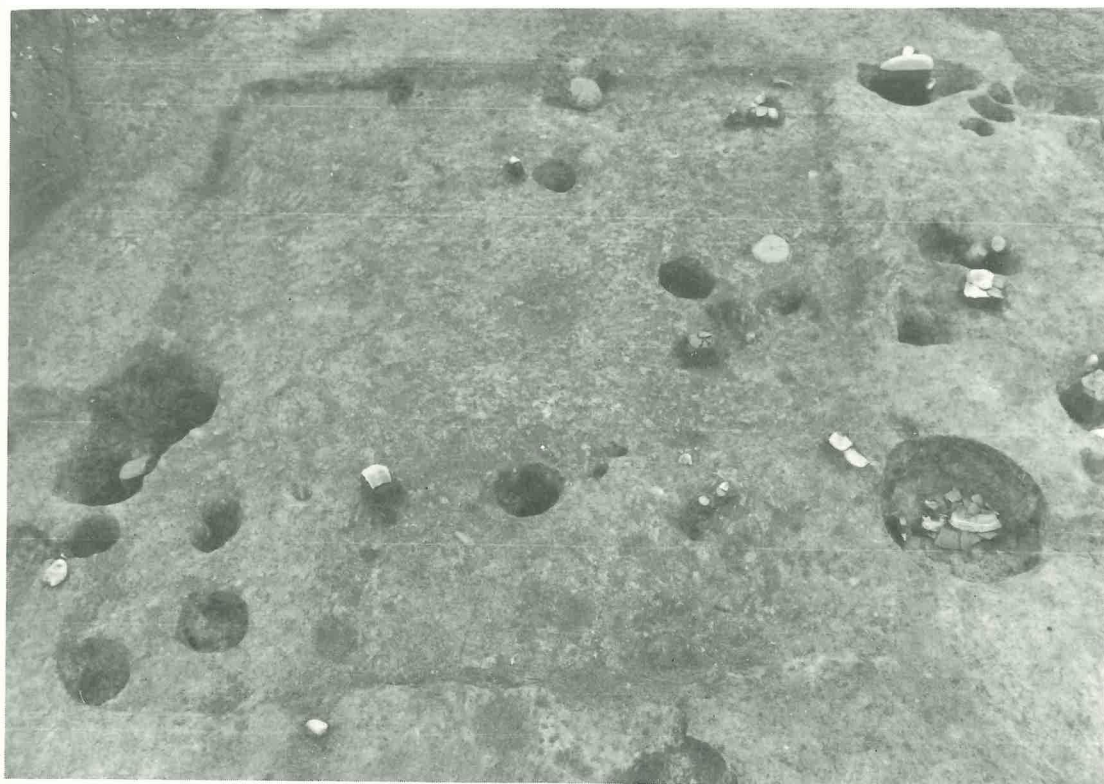


Y-6 遺構



Y-7 遺構

佐知遺跡弥生時代小竪穴遺構(2)



佐知遺跡13号遺構



佐知遺跡18号遺構



佐知遺跡29号遺構



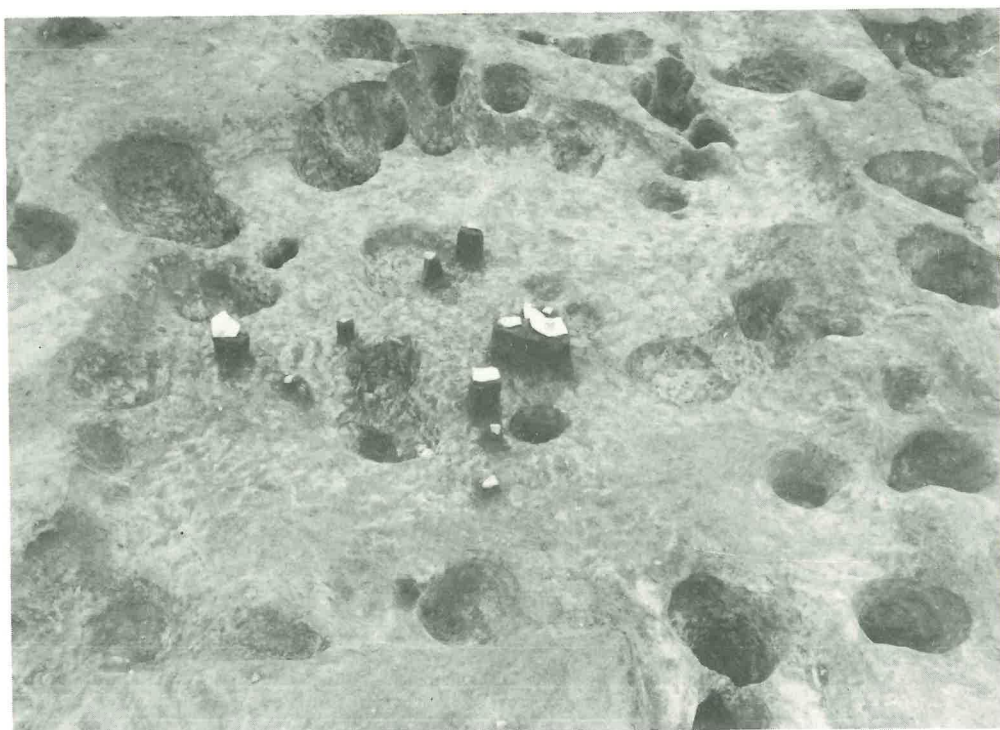
佐知遺跡39号遺構



佐知遺跡Y—8遺構



佐知遺跡28号遺構



佐知遺跡 8号遺構



佐知遺跡 14号遺構



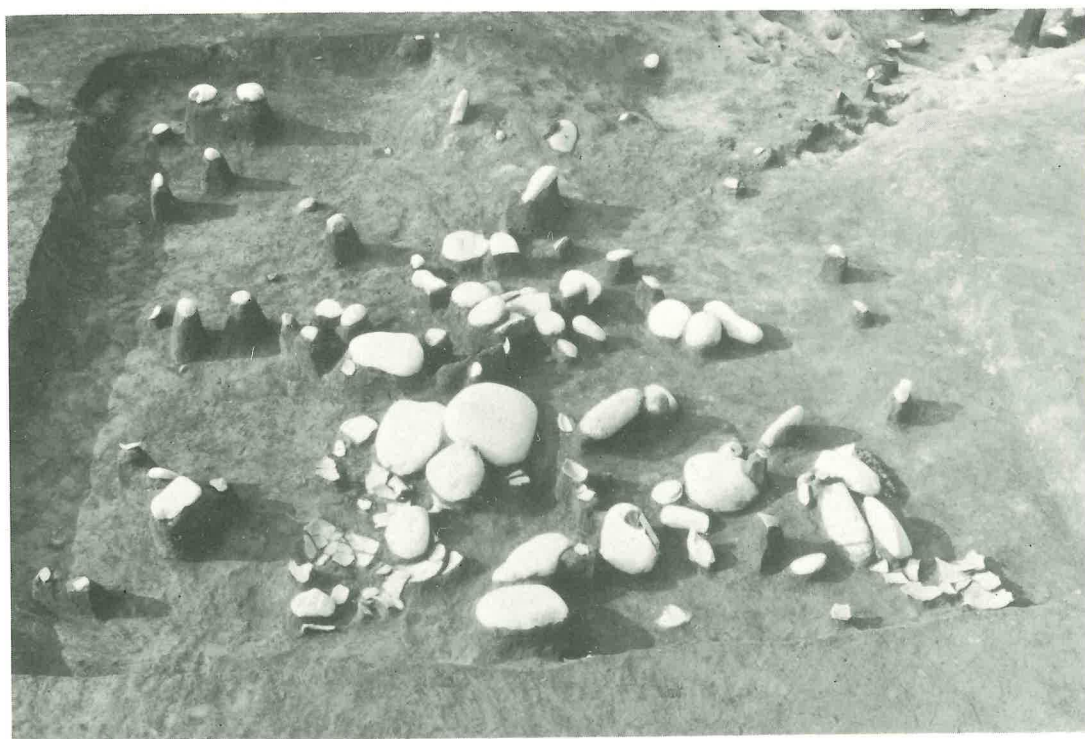
佐知遺跡19号遺構



佐知遺跡19号遺構南壁沿い掘り込み



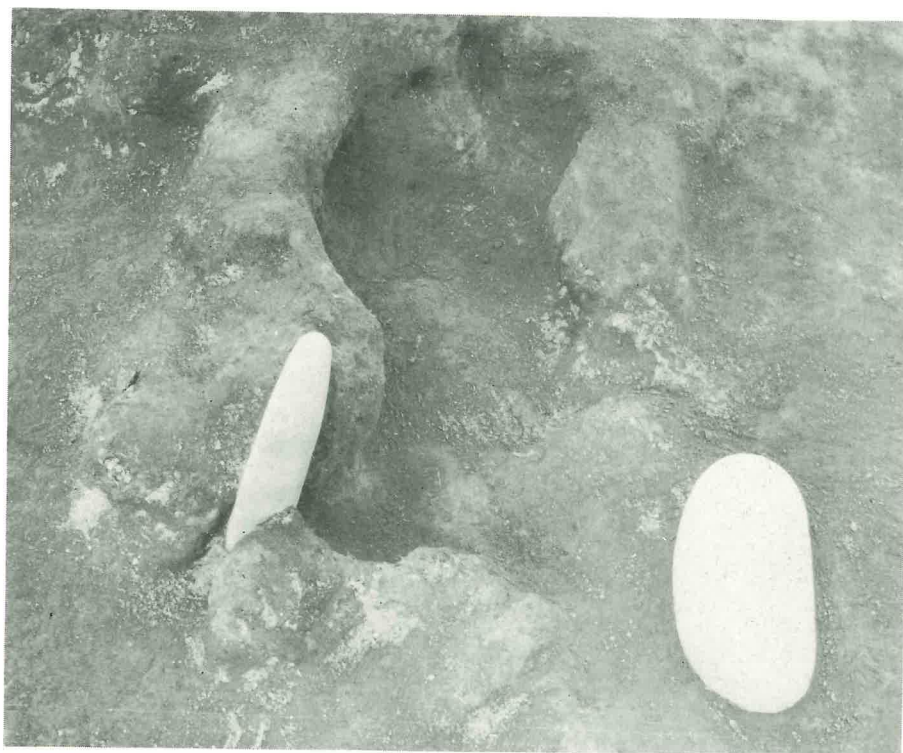
佐知遺跡 2 号遺構(1)



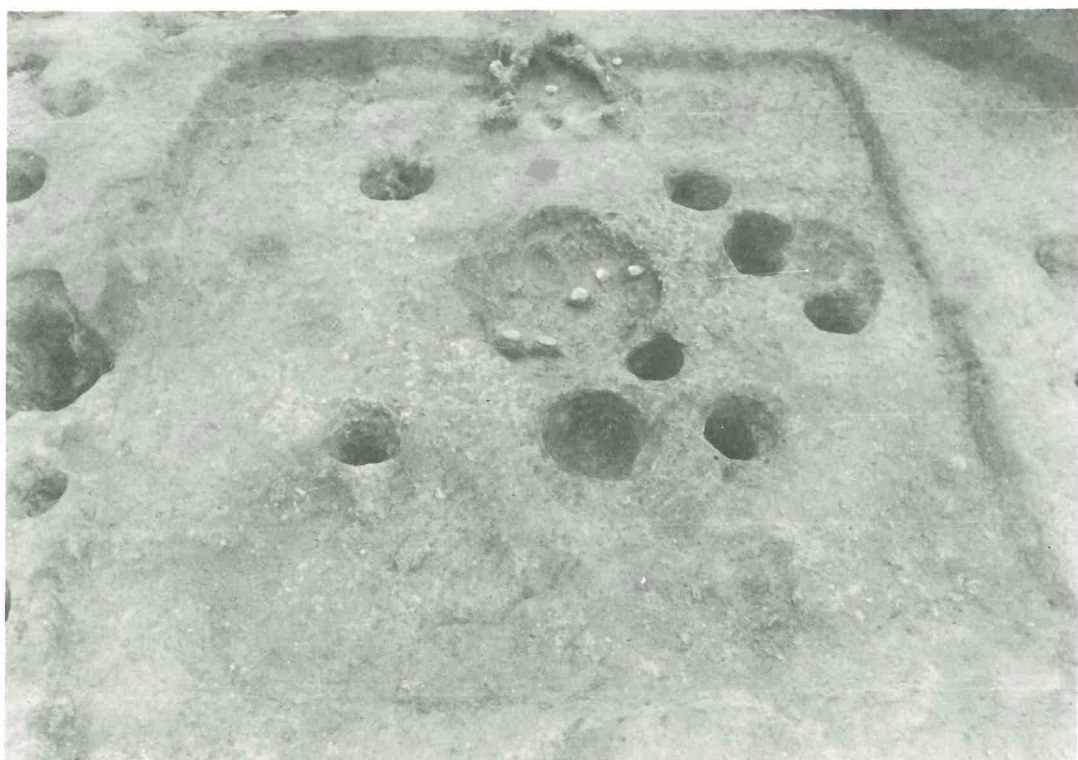
佐知遺跡 2 号遺構(2)



佐知遺跡 2号遺構カマド調査状況



佐知遺跡 2号遺構カマド



佐知遺跡11号遺構(1)



佐知遺跡11号遺構(2)



佐知遺跡11号遺構カマド周辺遺物出土状況(1)



佐知遺跡11号遺構カマド周辺遺物 出土状況(2)



佐知遺跡11号遺構カマド



佐知遺跡11号遺構カマド調査状況



佐知遺跡20号遺構(1)



佐知遺跡20号遺構(2)



佐知遺跡21号遺構

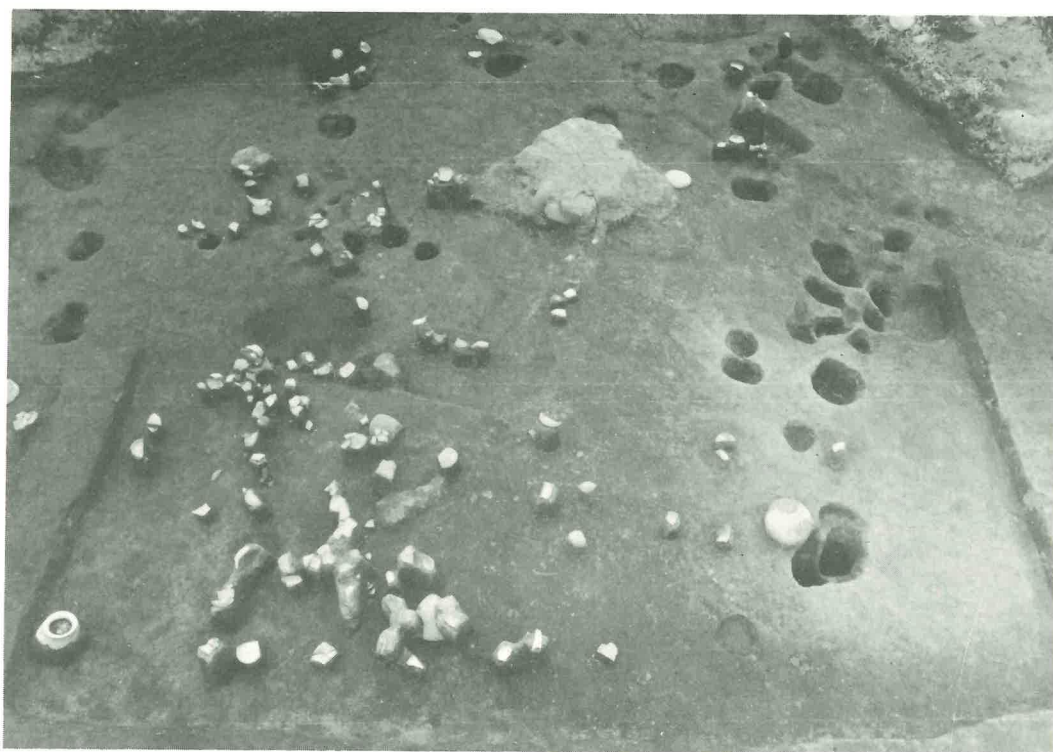


カマド内のコシキ

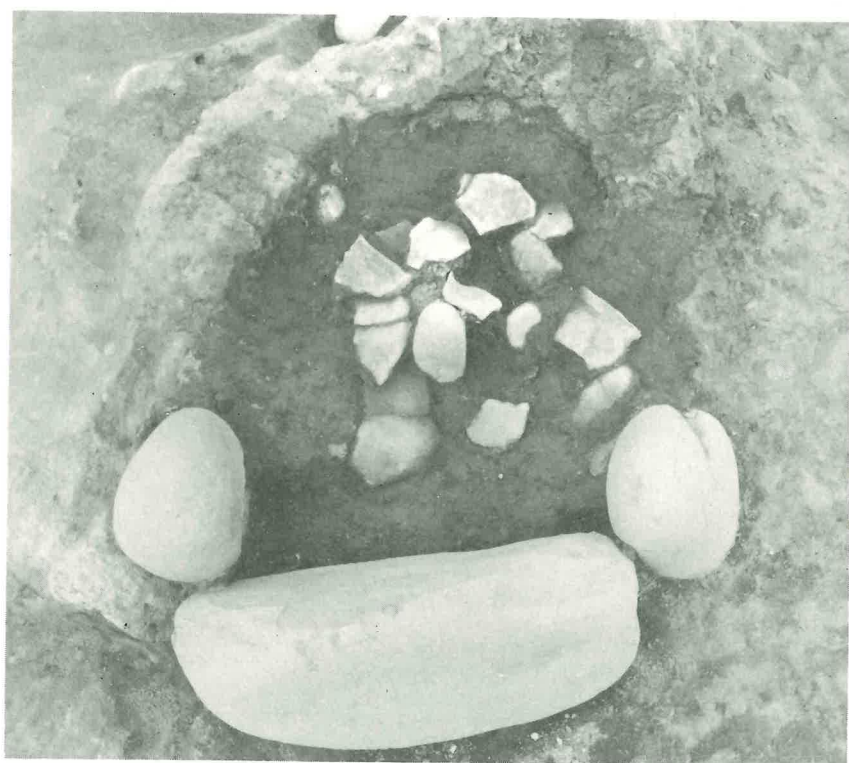


銅 鈴

佐知遺跡21号遺構遺物出土状態



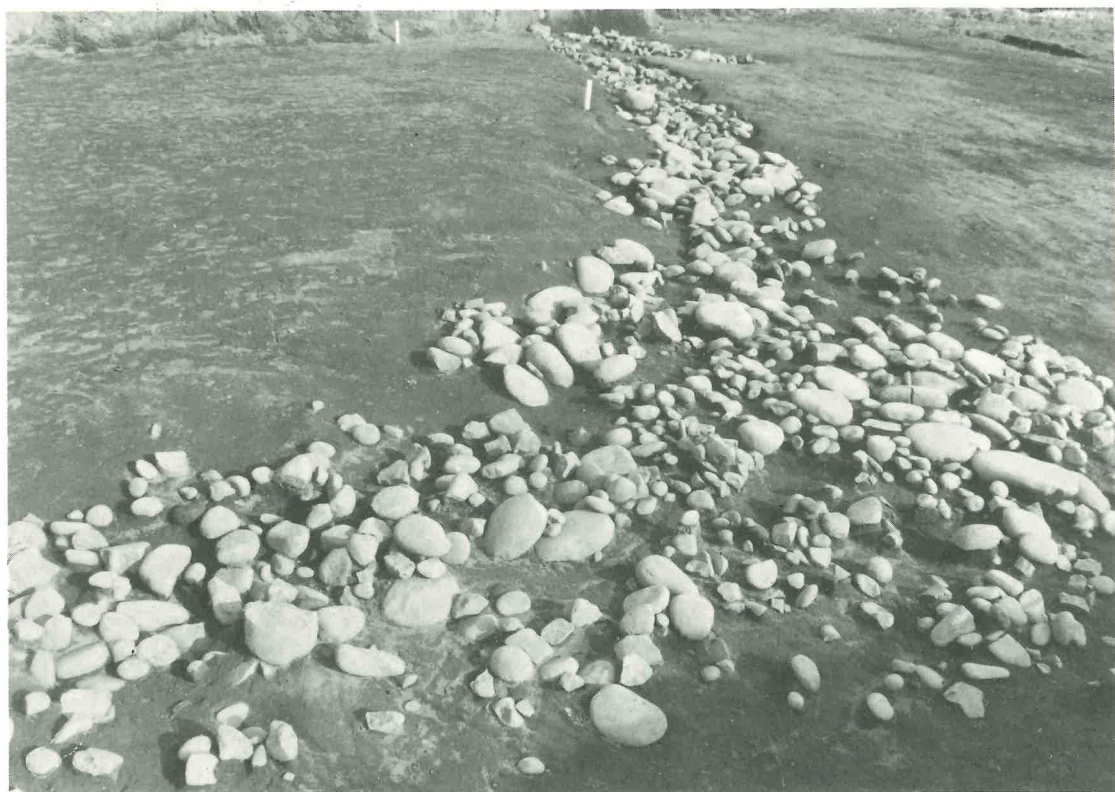
佐知遺跡27号遺構



佐知遺跡27号遺構カマド及び遺物出土状態



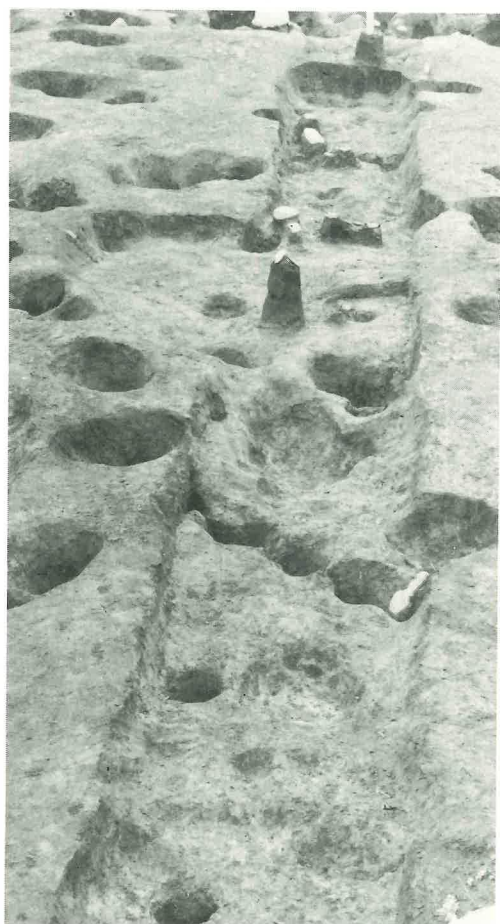
佐知遺跡配石遺構(1)



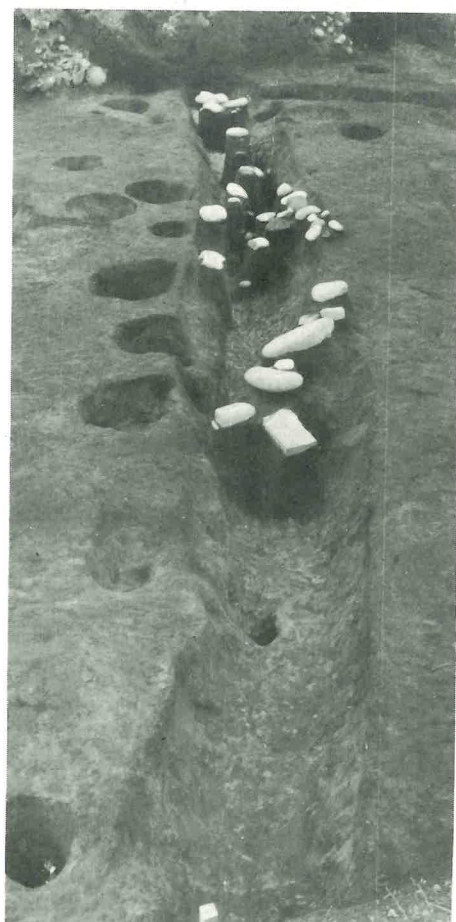
佐知遺跡配石遺構(2)



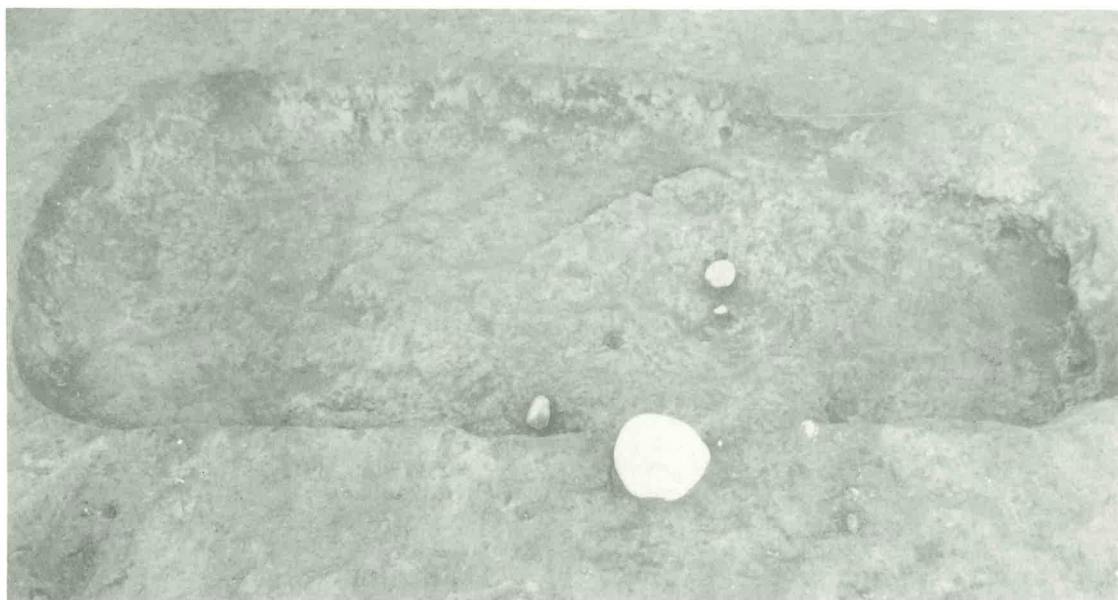
佐知遺跡 5・6号遺構



佐知遺跡 6号遺構



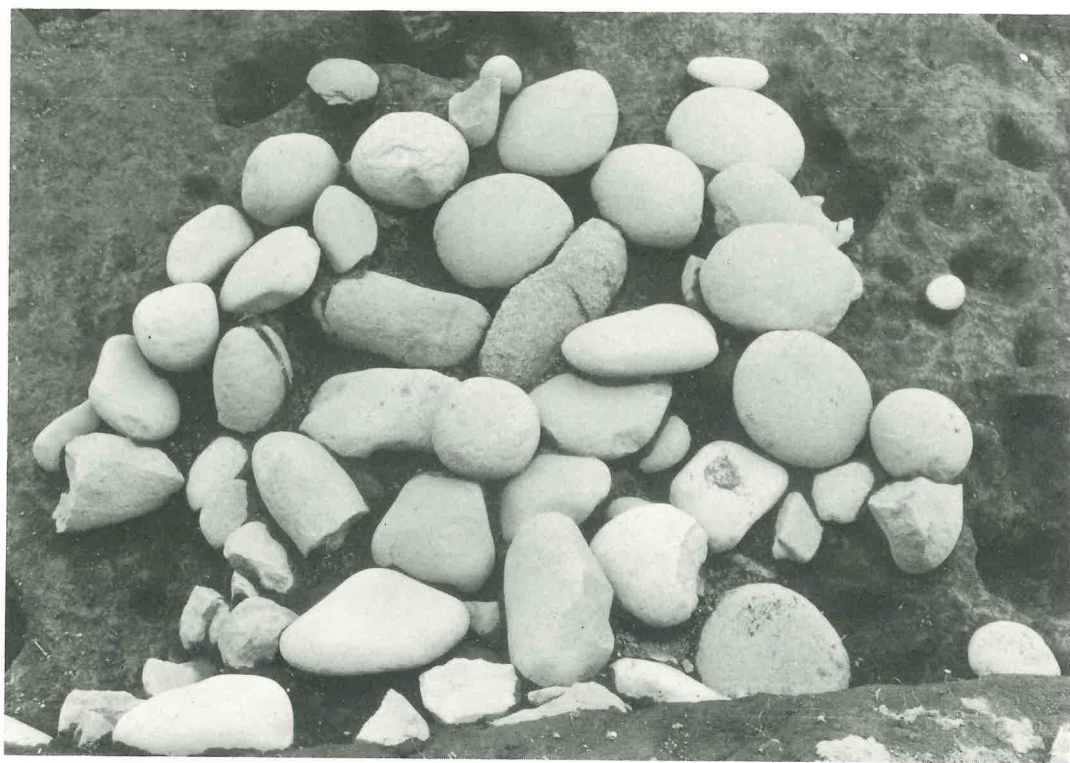
佐知遺跡 5号遺構



佐知遺跡 1 号遺構



佐知遺跡 3 号遺構



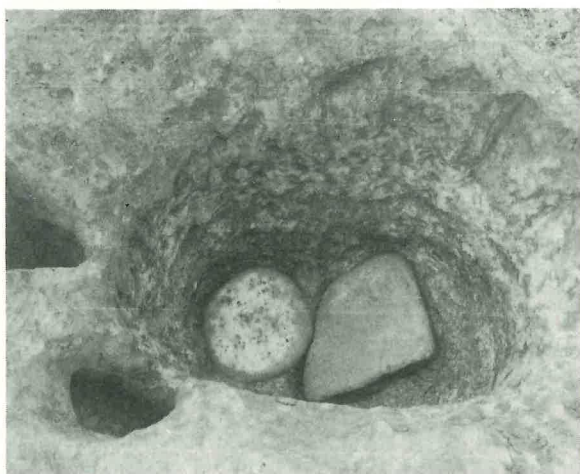
佐知遺跡 9 号遺構上部集石



佐知遺跡 9 号遺構下部竪穴



12号遺構

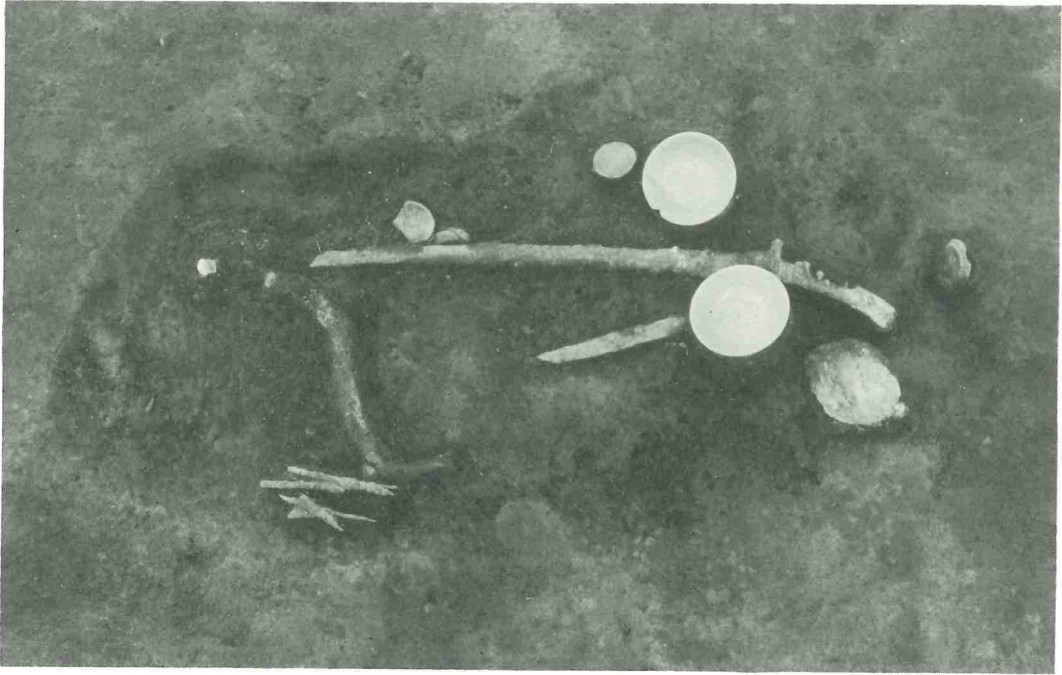


C-1 遺構

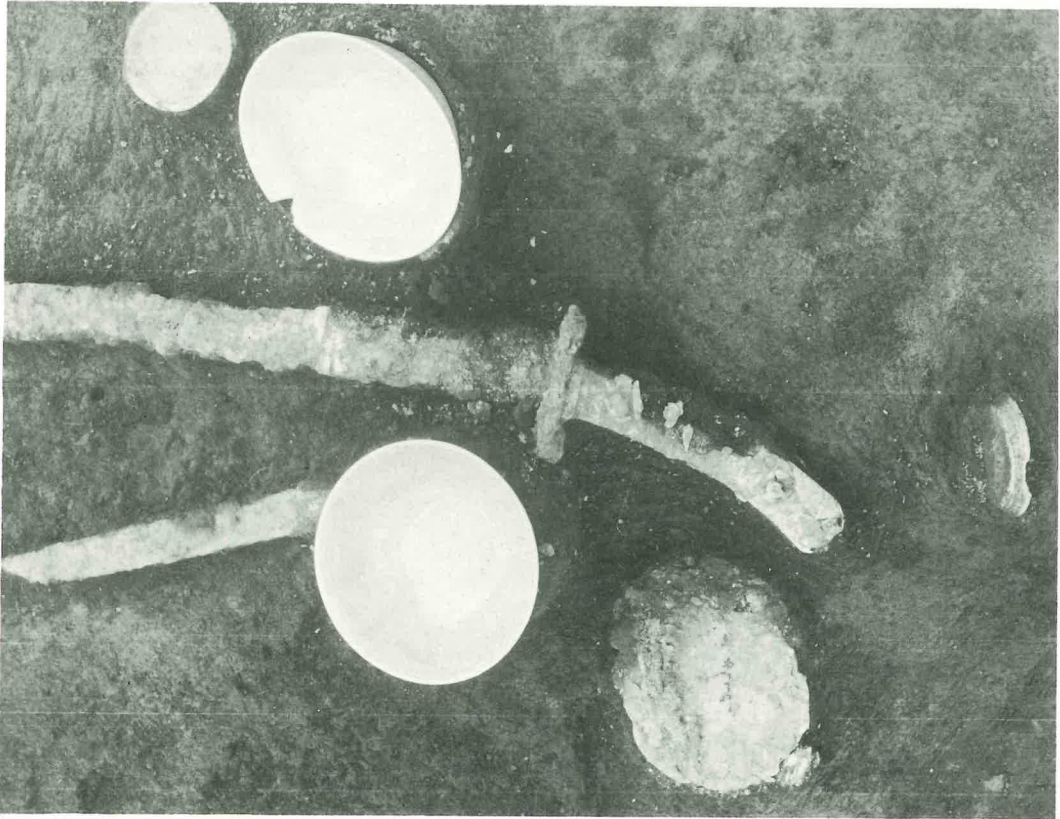


C-2 遺構

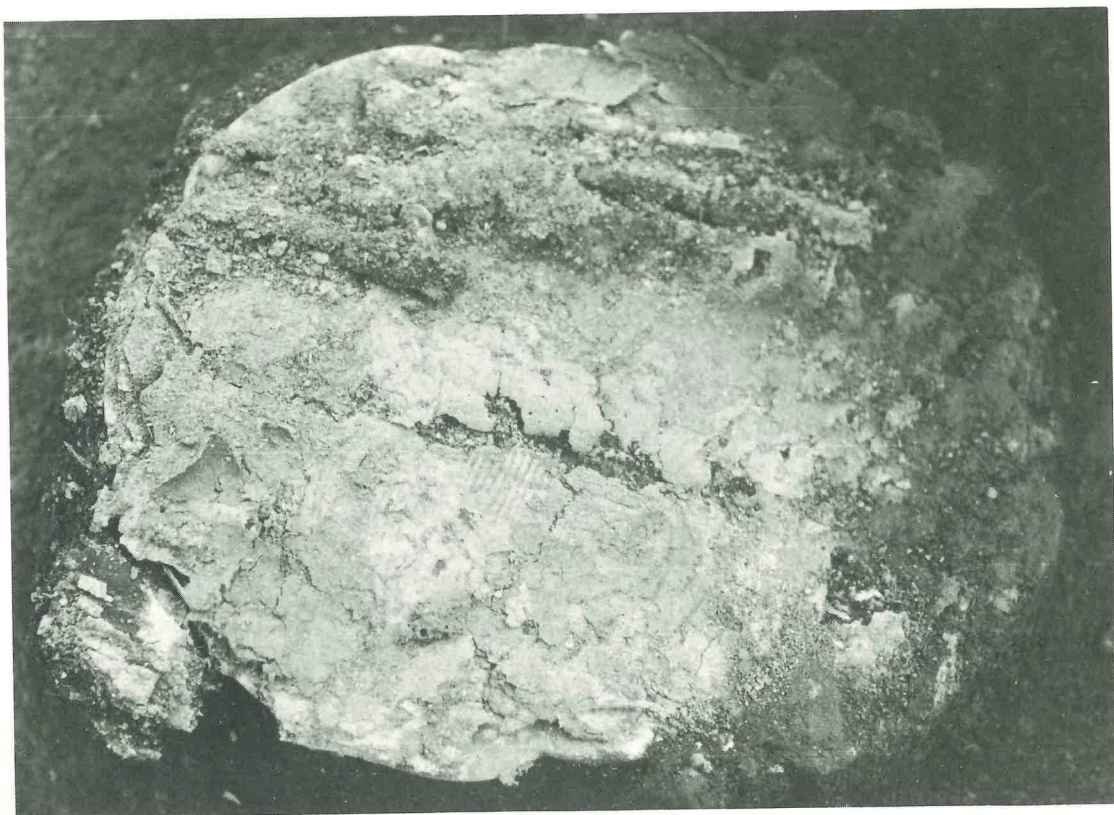
佐知遺跡中世竪穴遺構



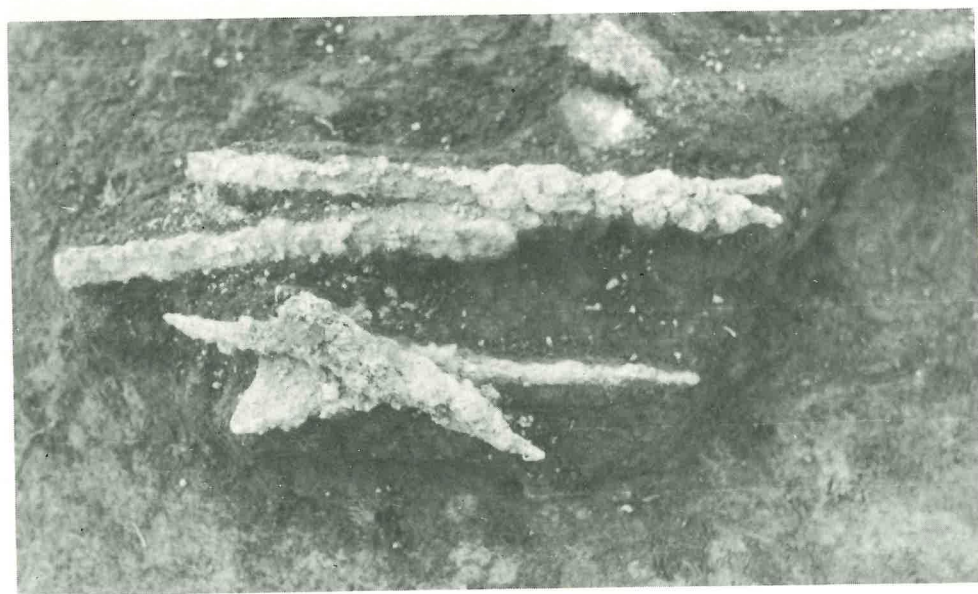
佐知遺跡17号遺構(1)



佐知遺跡17号遺構太刀出土状況



佐知遺跡17号遺構湖州鏡出土状態



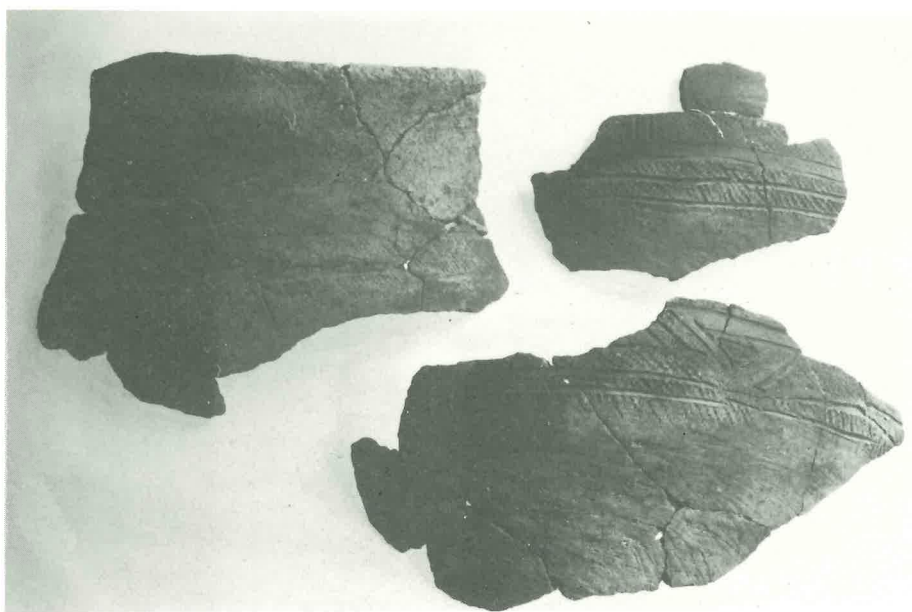
佐知遺跡17号遺構鉄鏃出土状態



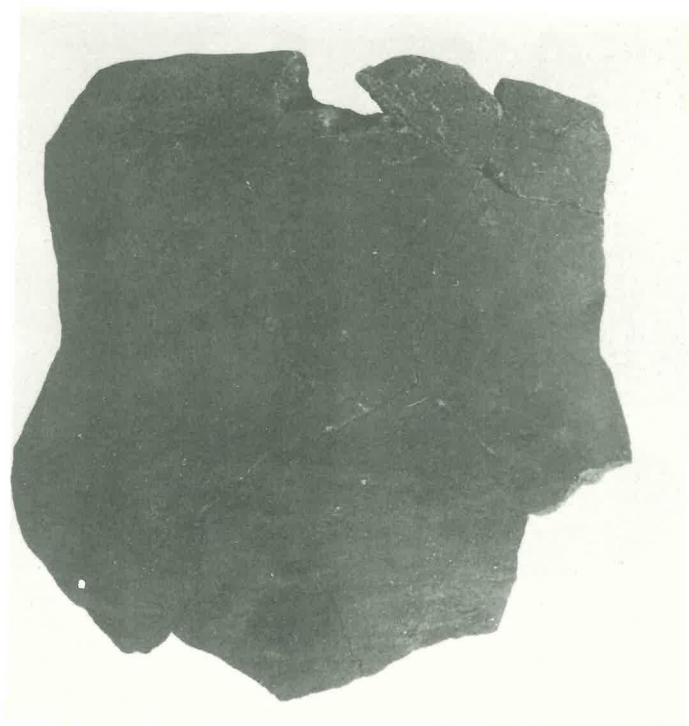
佐知遺跡K-2遺構



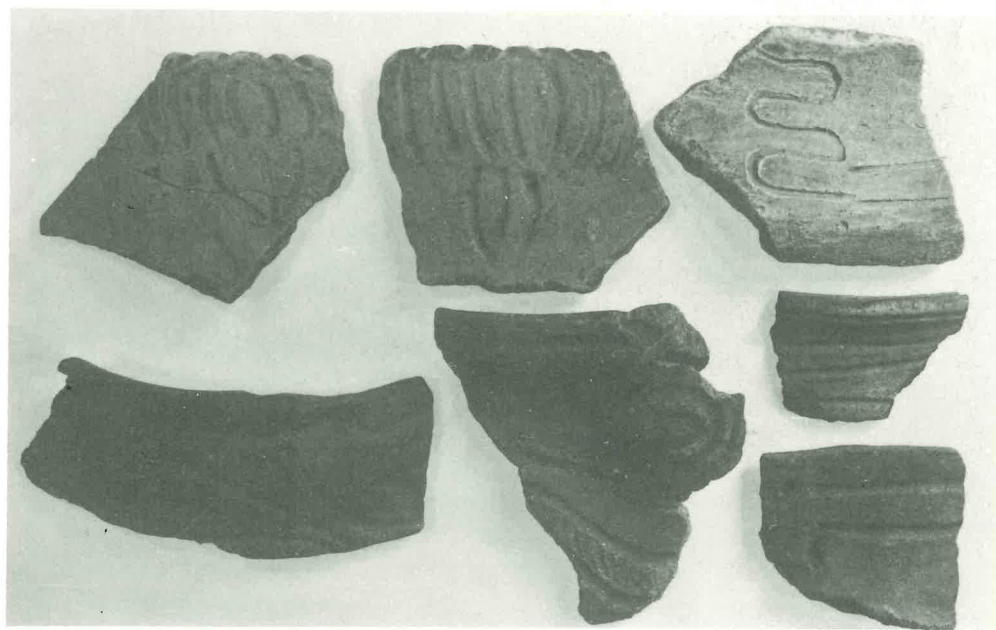
佐知遺跡調査区全景



佐知遺跡 4 号遺構出土縄文土器

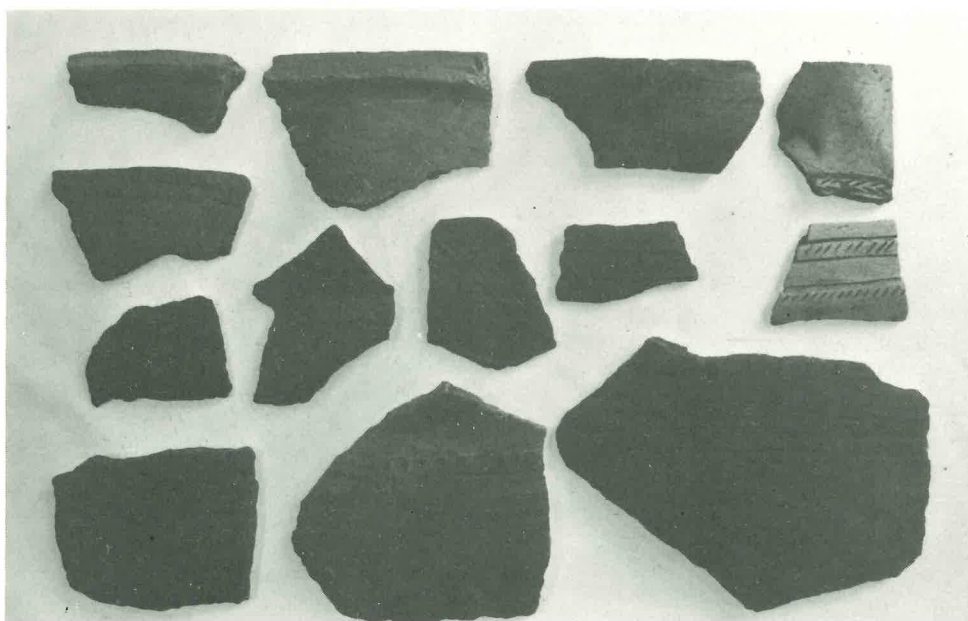


4号遺構

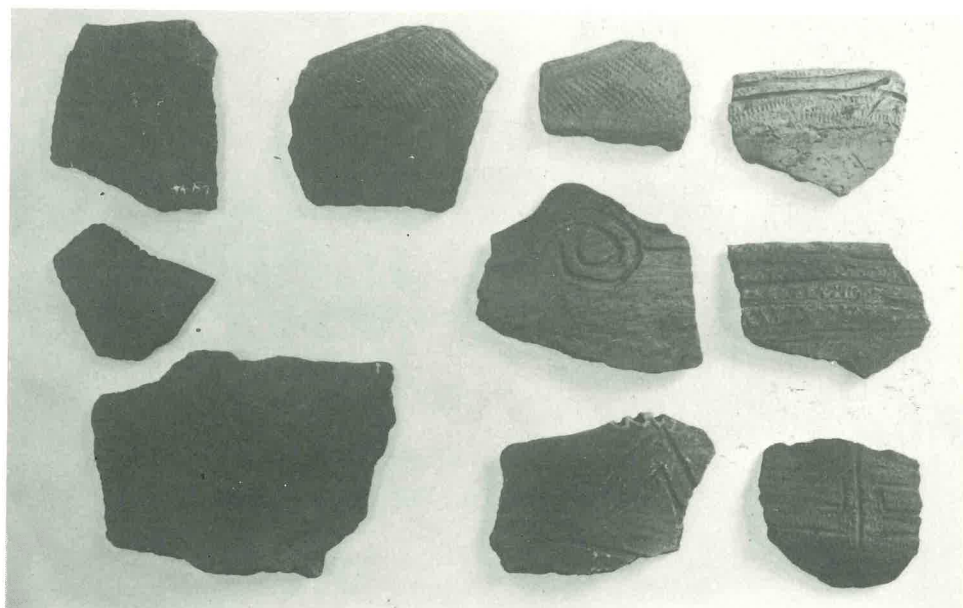
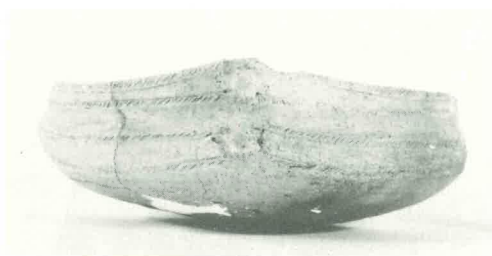
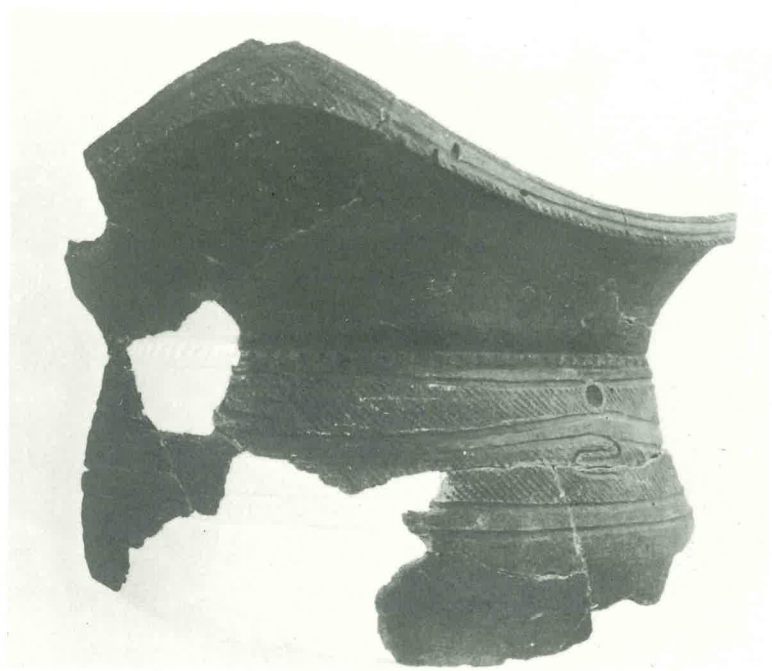


16号遺構

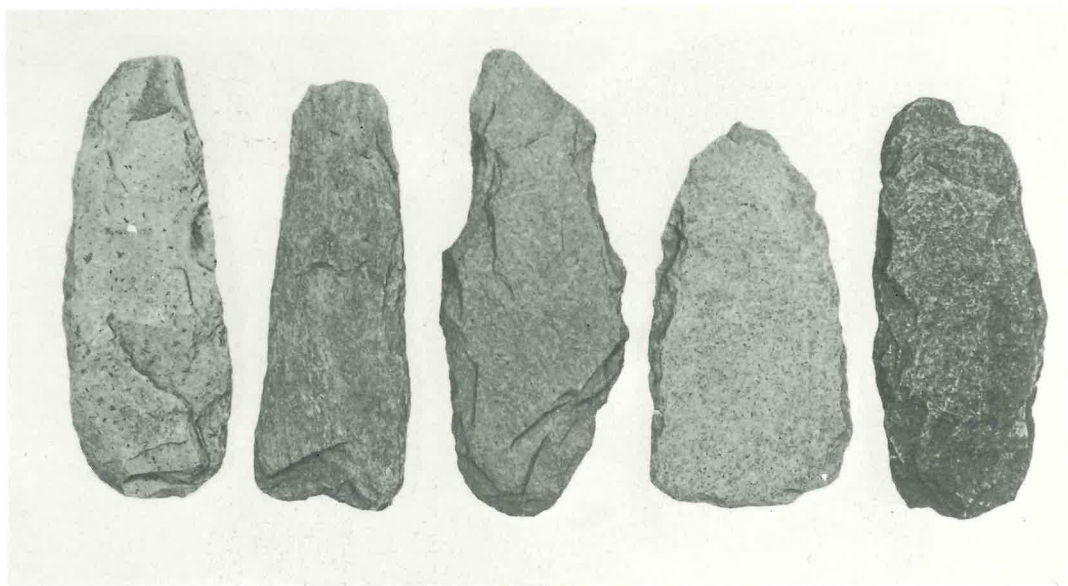
佐知遺跡4・16号遺構出土縄文土器



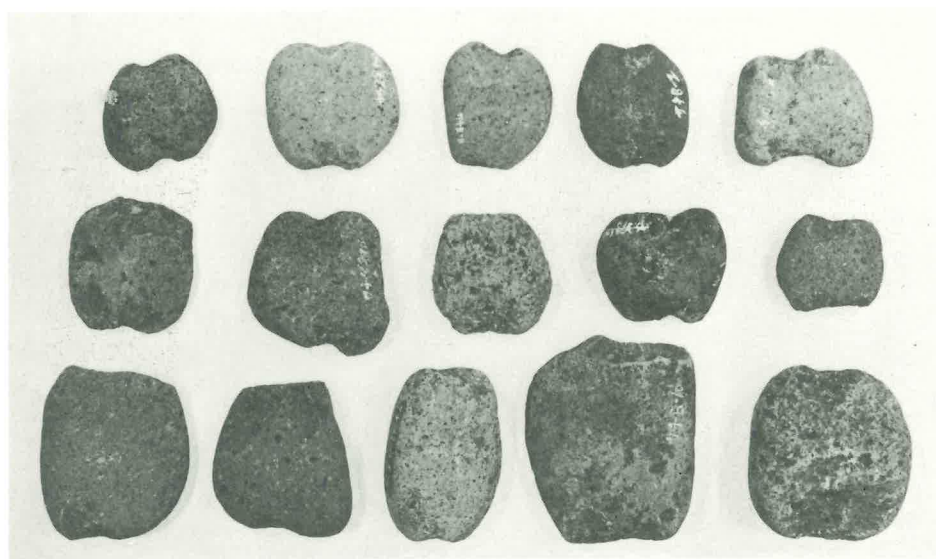
佐知遺跡出土縄文土器(1)



佐知遺跡40号遺構出土縄文土器(2)

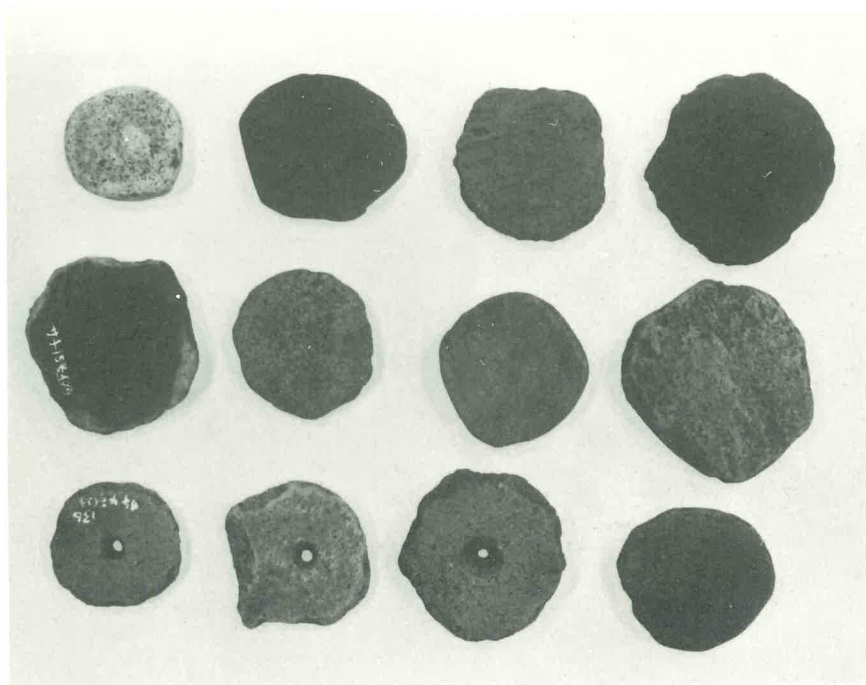


偏平打製石斧



石 錘

佐知遺跡出土縄文時代石器



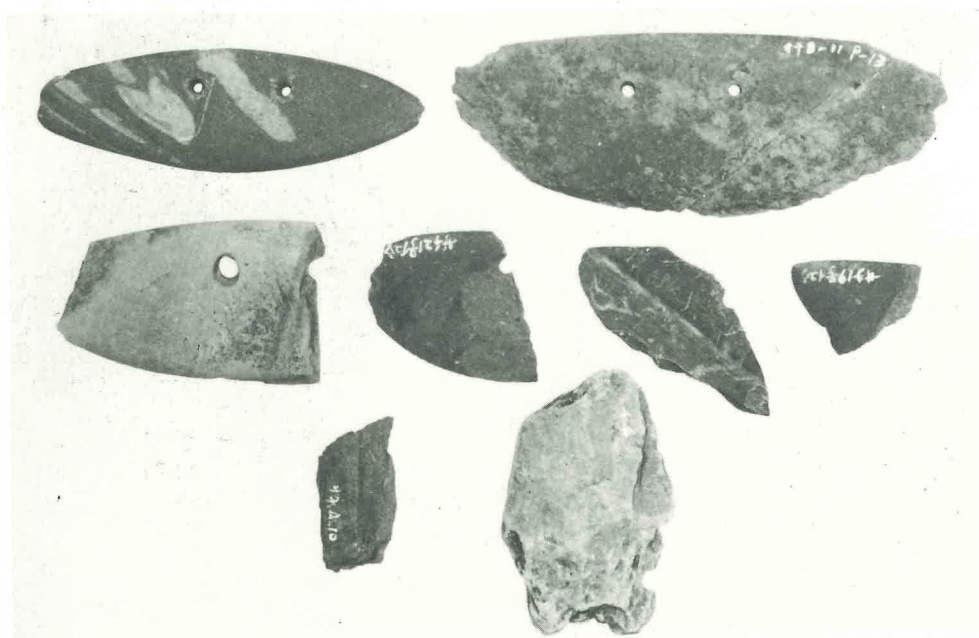
佐知遺跡出土土器片加工品



佐知遺跡出土土偶



佐知遺跡出土弥生中期土器



佐知遺跡出土土器弥生時代石器



佐知遺跡29号遺構出土土器



佐知遺跡14号遺構出土土器



佐知遺跡19号遺構出土土器



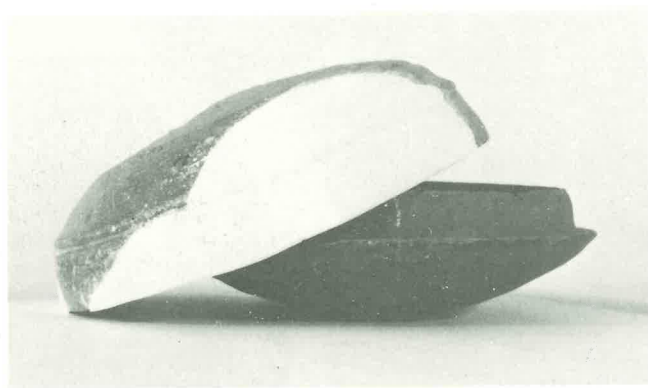
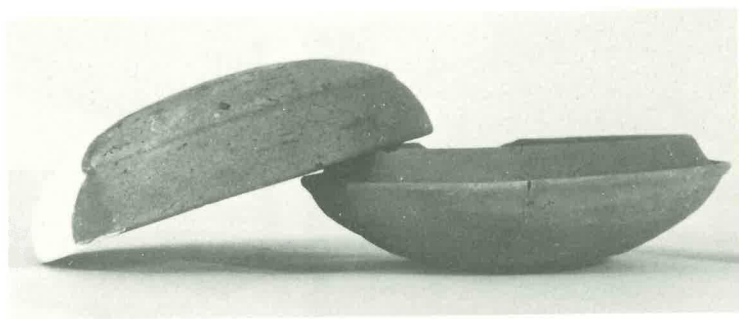
佐知遺跡 2 号遺構出土土器



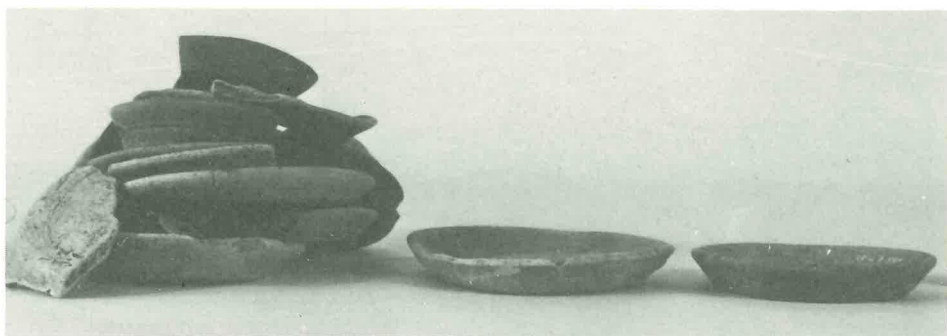
佐知遺跡11号遺構出土土器(1)



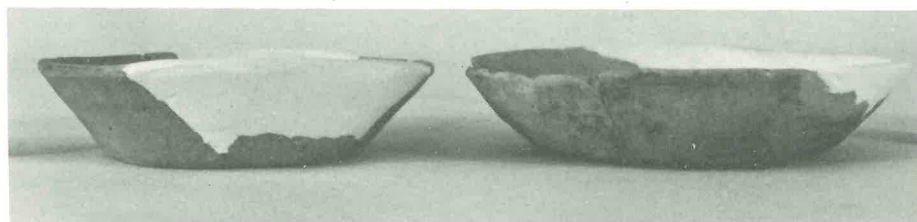
佐知遺跡11号遺構出土土器(2)



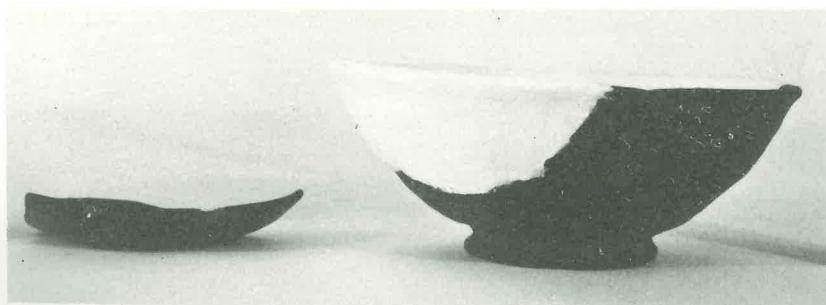
佐知遺跡27号遺構出土土器



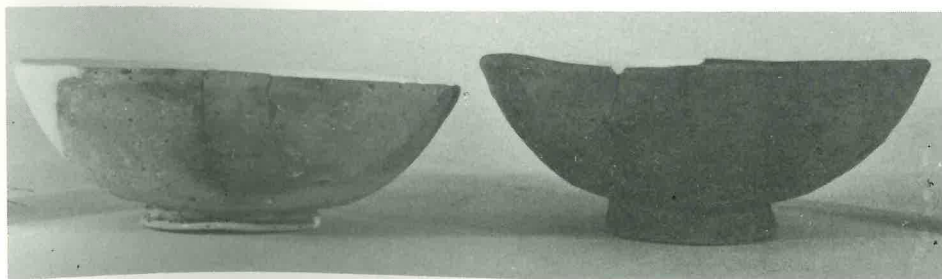
土師質土器 小皿



土師質土器 坏

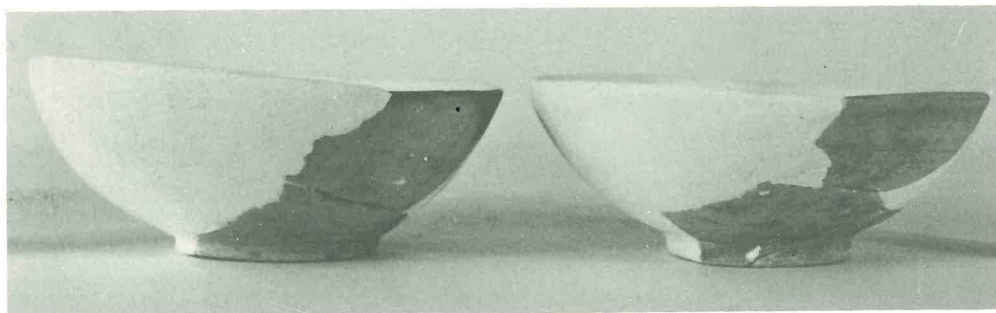


黒色土器 B類



土師質土器 碗

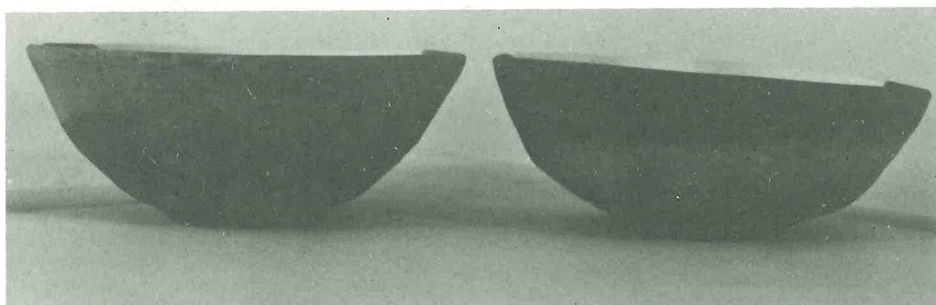
佐知遺跡出土古代・中世土器(1)



黒色土器A類

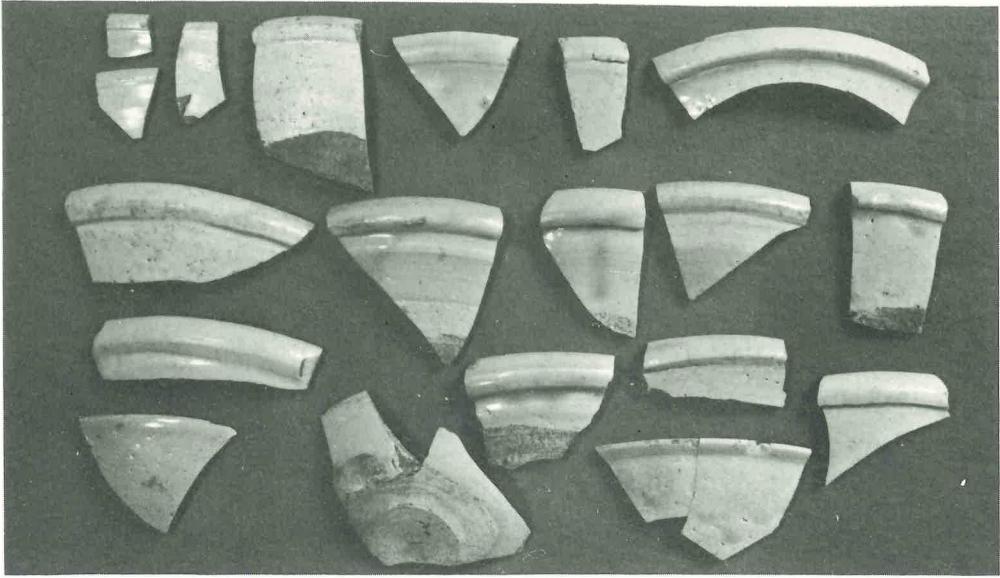


瓦器碗

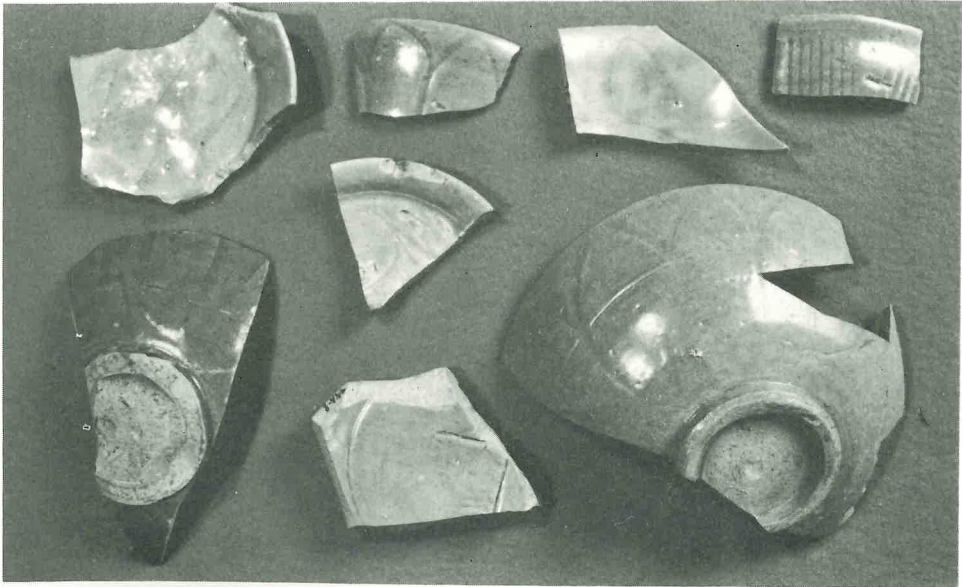


瓦器碗

佐知遺跡出土古代・中世土器(2)



白 磁



青 磁

佐知遺跡出土輸入陶磁器

佐 知 遺 跡

一般国道212号佐知バイパス建設に伴う
埋 蔵 文 化 財 発 掘 調 査 報 告 書

大分県文化財調査報告書 第81輯

1 9 8 9 . 1 1

発 行 大分県教育委員会

印 刷 明治印刷株式会社

